九月一日發行

女學世界

第十一巻第十一號





朝にレート白粉
夕にレート粉白粉
絶えず用ゐた
此美しい
お顔の主は
誰でせう
そして
化粧直しや
汗おさへに
レート打白粉を
お忘れなきは
飽くまで
行屆いた
お心がけの方
御懐中用
レート打白粉
SANPEI HIRAO ET CIE
TOKYO JAPAN
大日本東京
平尾賛平發賣

女學世界 第拾壹巻第拾壹號 九月號目次


牛乳で洗ふと
美しくなるといふのは
昔の事！
御料洗粉
初夏の新緑に映えて
美しい素顔を
いとゞ美しくなすのは。
牛乳浴にも増した
この御料洗粉ばかりです。

造花術ハ近來長足ノ進歩ヲナシ造花ハ將來益〻流行セントス

造花

術の蘊奥を極めんとする人又は自宅にて造花術を完全に獨習せられんとする人は

實用造花自在 正價壹圓廿錢 郵税八錢

實用造花圖譜 正價壹圓 郵税六錢

ノ二著

出でたることを記憶せられよ

▲本書を繙く事一日早ければ一日早く其蘊奥を極め得べし造花自在は其理論及び實施製作法等を詳述し造花圖譜は瓣葉萼等の切形並に其着色組立等を圖示し何れも親切叮嚀を極めたるものなり其内容の詳細に至りては茲に贅せず宜しく内容見本を請求し其眞價を知らるべし

◎本書内容見本御入用の方は實費として郵券五錢造花原料營業目錄御入用の方は郵券二錢封入東京九段吉住商店宛申込まるべし

發行兼發賣所 東京九段坂 造花原料商 **吉住商店** 特長電話番町二〇五六 振替東京六六七九

大賣捌所◎東京神田表神保町東京堂◎東京日本橋本石町 至誠堂

眞に美容を希ひ美髪を望む者は先づ

衛生化粧 **最新美髪法** を讀め

本書の内容は

◎しらが、赤毛染の話◎毛のなき所に毛の生える話

◎ちゞれ毛くせ直しの話◎毛髪の洗ひやうの話

◎拔毛どめふけとりの話 其他毛髪化粧に關する秘法

にて郵券貳錢封入御申込なれば直ちに無代贈呈

次ぎに

理想的 **ちゞれ毛くせ直しレベンド** を用ひよ

最新製劑

本劑は一度之れを使用すれば如何なるちゞれ毛くせ毛も立處に直伸し永く使用すれば殆んど根本的に全治す

定價十二個入九十錢六個入四十七錢 送料東京市内四錢 地方八錢

また

内務省免許

生毛強壯 **ヱフ、トニック**

本劑は最も進歩したる毛髪劑にして根本的に毛髪を美化するにあり、されば本劑を服用せば、身體を强健にし、血行を良行ならしむ、皮脂線の分泌を盛んにし、毛根の營養を能くし、毛髪の發育を補くるを以て、薄毛、細毛、赤毛、白髪等に連用せば奇効あり。

十日分金壹圓 小包料金八錢

卅日分金貳圓五拾錢 小包料金拾六錢

發賣元 東京本所區外手町八七 **深澤國華堂** 振替東京二〇八二五

女(いの一)



女へいの二


スミレ黒香油
水の滴たるゝ如な
黒髪となるのには
今流行の
スミレ黒香油を
お使ひ遊ばせ
定價　小三十錢　中五十錢
東京市日本橋區横山町三
パール煉香油
スミレ香水
呉竹
本舗
平尾銑也商店
電話浪花百十番
振替東京百十番

女(いの四)

谿流



田中製版所三色版

最モ進歩セル子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦みなく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して療治を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不妊娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡易に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺陷なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接に病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進步は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて療治の目的を遂するなり

獨逸の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は此等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は是非一度使用して病氣を根治し給ふべし

尚ほ梅毒消渴の疑ある人は唯一丸を併用せば其効最も大なり

◎全國至る所の有名なる藥店にて販賣す

定價 八球入五拾錢
○拾八球入壹圓
○四拾球入貳圓
○特製百拾個入五圓
○內地遞送無料

東京市本鄉區湯島天神表門中坂上

發行所 中西葆光堂藥局

電話下谷(五四七番)振替貯金口座東京(千五百番)

女(ろの二)

懸賞課題 お友達の數を問ふ

(詳細は本誌にあり)

誰様にもお友達が御座いませう其中で同年齢のお友達が何人お有りですかと云ふのが此問題の意で御座います‖用紙は葉書‖御友達の住所姓名と自分の住所姓名を書いて送ればよいのです

一等五圓

婦

九月號 要目

一冊十五錢 六冊九十錢 十二冊一圓七十錢

東京神田表神保町

同

女界

一冊 十五錢

◎見合ひ結婚より起りし悲慘の實例　宮田脩

◎愛情的結婚と人格的結婚　高島平三郎

▲職業なき婦人は寂寞なり　辻村やす子

▲自分は是程家を大切にす　佐治實然

▲親に對する娘の希望（懸賞一等）

▲茶話會と旅行に要する食料品

▲似合ふ着物の選方

▲犬は放ち飼では育たぬ

▲抹茶はこうすれば甘い

▲懸賞新題當選發表

◎産褥熱と産時の注意……醫學士　大瀬貴明

◎小兒のはしかとくさ……醫學士　豐福環

◎小說　こみくじ……内田魯庵

△文藝其月々……沼波文學士

△英詩と婦人……若月文學士

△名畫解說……瀧村文學士

△九月の料理……吉村里子

△初秋の流行品……婦人記者

△海外婦女界……

△家庭の日記……

△家庭の實驗……

△和歌（懸賞披露）……

△俳句（懸賞披露）……

◎衣服と色との關係　安藤秋三郎

◎重寶なる家具のいろ〳〵

文館　振替東京一三五一番

懸賞　和歌 俳句 繪畫 習字　一等三圓　以下數等

女（ろの三）





開業貳百六拾七年
内外國金銀名譽賞受領
米國太平洋博覽會
日英大博覽會に於て
最高名譽大賞受領
最上醤油
元祖
宮内省御用達
千葉縣銚子町
濱口合名會社
電話銚子一二一番　振替口座五〇二一一番

女(はの二)

●● 九月の巻發行 ●●

新婦人

第一年第六號

定價一冊二十八錢 郵稅二錢五厘 半年一圓七十錢郵稅共

七月號八月號賣切となり高需に背くの罪實に萬謝の外なく候 本月號は十分の刷增をなしたれば前二號賣切の失態は切に御高恕あらん事を冀ふ◎

睡鴿（油繪極彩色）……川村清雄筆

香汗淋漓 四美相擁して書中嬌聲あり（石版極彩色）……鰭崎英朋筆

臙脂の匂 佳人浴を出て涼風肌か甜む……コロタイプ實寫眞

英京に於ける伏見若宮妃殿下●二條公爵夫人●小笠原伯爵令孃●大隈伯爵夫人●毛利子爵令孃●北村巴女史●堀内すま子孃

吉村千枝子孃●東鄉男爵令孃●太田書記官長令孃●名倉けい子女史●高間惣七氏令孃●宮中女官●尾村鐵子孃●閨秀書家中山彩畝女史●書家の室裡●葉室光子孃●書家上村松園女史

●閨秀音樂家鈴木のぶ子孃 女優不成功の原因 田中勝代孃 婦人百態

當選寫眞披露 其他例により百花絢爛紅紫拉雜……

讀むもの ▬ 虚榮心強き兩性の玩具（尺博士）巴里婦人の虚榮（山崎直三）貞操を蹂躙する男子の責任（平出辯護士）男心の解剖（北原末子）其他數十篇

恐るべき同性の愛……婦女通信社長 松本順造

妾の良人たる者なきか……小島ふみ子

附錄 家庭日記 九月分 溫度表、晴雨表、献立表、來客簿並に九星舊暦附

新婦人見本 郵券卅錢五厘 賣捌所全國著名の書林雜誌店

女（はの三）

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 聚精堂 電話下谷四〇七九番 電話下谷一六七二番



父「今年の残暑は例年より酷しいし水害流行病の恐はあるので生水は實に危險だ
母「シトロンは蒸餾水で調製してありますから安心して飲めます
姉「シトロンは私しおしくてヨ
弟「僕も大賛成ダ

女（はの四）

きぬた



竹久夢二筆

消夏最良の讀物

寺西綠子著 ■最新刊■ 石版着色圖 寫眞版木版繪入

女子手藝 九重編造花法

和装美製 全一冊
前編 七十五錢
後編 七十五錢
各郵税 八錢

九重編造花は在來の編物に一生面を開き之を應用して女子手藝界に清新の趣味を供給する者にして而も能く眞を模し一見生氣あらしむ本書は石版着色數十度刷卅三と外に多くの圖解を挿入し周到懇切に其手法を說き獨修を以て自由に製作し得る女子必讀の最良圖書なれば一日も速に御求めあれ

森本義子著 ■■

家庭編物全書（七版）

和装美製全一冊
正價金八拾錢
郵税金八錢

共立女子職業學校敎師 木村淡香著

編物圖案集（天の巻）

洋装全一冊
正價五十五錢
郵税六錢

本圖案集は編物用としての外猶カンバス採繡、紹刺、毛出編、南京玉綴附、ヘンム、バテレンレース織物等の諸術にも應用して最も斬新華麗なる模樣を現し得べし

本圖案集は各技藝學校實科女學校の敎科用として最も適當なり本圖案集は斯道諸術に經驗ある書家が一々實驗の上編輯せるものなれば之を實技に施して少も誤謬なきことを保證するものとす

■◎◎◎……圖書總目錄萬年筆目錄無代進呈……◎◎◎■

東京日本橋角 大倉書店發行 振替貯金口座東京二三八番

女（にの二）

婦人世界

九月一日發行 第六卷第十一號 一册金拾五錢

九月號

郵税一錢五厘 半年分郵税共前金一圓五錢

女（にの三）

發行所 東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 振替貯金口座參貳六番 賣捌各地書店

宮内省御用達

ヒゲタ醤油

伊國皇室御用

千葉縣銚子港

田中玄蕃醸造

奥様の心懸…家庭の平和

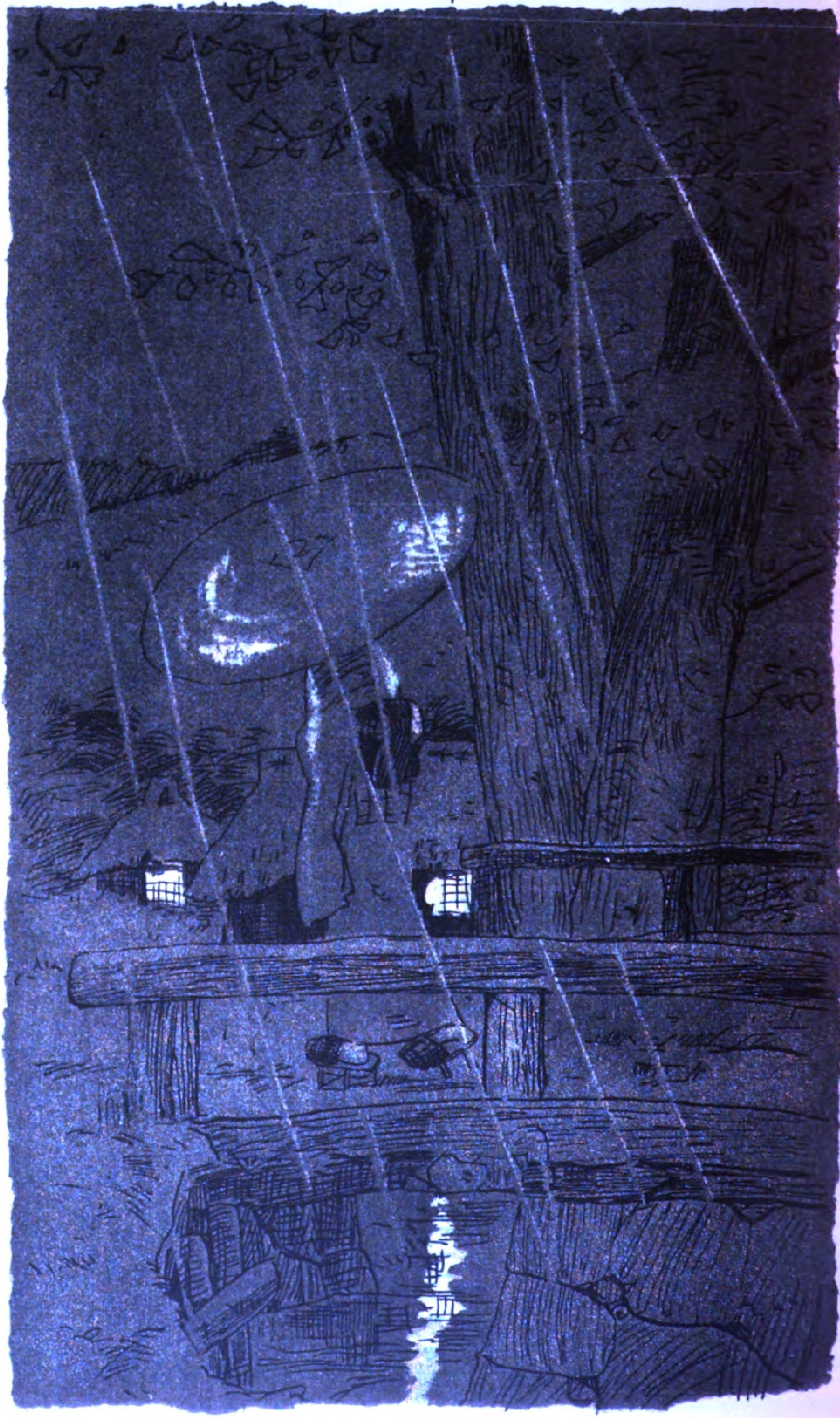
花嫁

主人は宅の料理は不味い〳〵と申ます。妾も此内へ参りますまでは料理なんか致した事は有りませんがドーシタラ主人が喜ぶでせうか心配で成りません

料理通

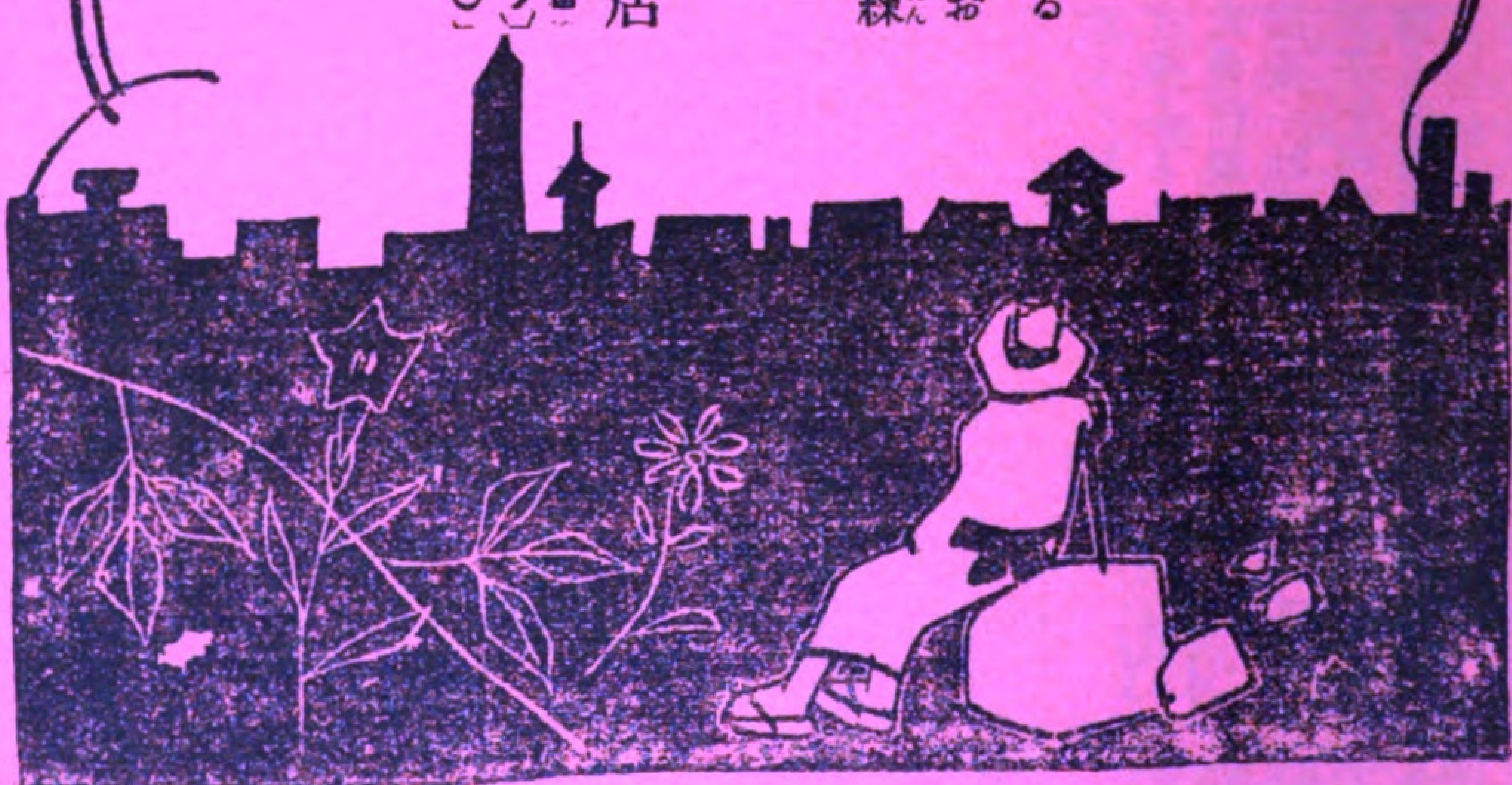
素人の家庭では御料理を成さるに大抵主に砂糖をお用ゐでせう牛鍋や鳥鍋を成さるにしても砂糖は鍋に(こげつき)ますが其代用に味淋を使へば其心配がなくて第一、味は牛屋や鳥屋でお喰べになると同様においしく戴けます魚肉や其他總てのお菜を煮るにしても味淋を使へば味は料理屋の様に甘味たべられます上等味淋は流山の**万上味淋**に限ります瓶詰、樽詰も有りますから是非御試めしなさい御主人も必ず御喜びになる事請合です。

淋しき光



芙蓉





女（ほの一）

醋酸需要の好季



醋酸は食酢製造業者に缺くべからざる最も有益なる理想的好資料なり。

醋酸は在來の釀造酢に比し極めて廉價且清新の風味を有する純良品也。

醋酸は醫藥用食酢用に適する純良品の外染色用製革用の工業品もあり。

醋酸は日本醋酸製造株式會社製品にて品質佳良今や輸入品全く杜絶す。

醋酸手引草と題する小冊子を刊行し需要者各位の申込に應じて贈呈す。

日本醋酸製造株式會社
一手特約發賣元

醫療藥品工業藥品問屋
(博) 合資會社 **博愛堂**
東京日本橋區本町三丁目
電話本局二八六番　振替口座東京八一三八

禿(はげ)、脱毛(ぬけげ)、薄毛(うすげ)、生際(はえぎは)惡(あし)き人(ひと)試(こゝろ)みよ……

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液(モウセイエキ)



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舗 東京市日本橋區馬喰町二丁目 **山崎愛國堂**

●親(おや)、兄弟(きやうだい)にも云(い)はれぬ病(やまひ)とは

りん病　しやうかち　局部(きよくぶ)の疾病(しつぺい)であります

斯(か)る病(やまひ)を患(わづら)ひたりとせんか醫師(いし)の治療(ぢれう)を受くるにすら甚(はなはだ)しく羞恥(はぢ)を感(かん)ずるが一般(はん)なるを以て婦人(ふじん)に於(お)ては元(もと)より男子(だんし)に於(お)ても之(これ)を厭(いと)ひ其病(そのやまひ)を秘(ひ)し遂(つひ)に不治(ふぢ)又(また)は慢性(まんせい)となる此等(これら)恐(おそ)るべき疾病(しつぺい)を誰(たれ)にも知(し)れぬ様治療(やうぢれう)の出來(でき)る最新(さいしん)自宅療法(たくれうはふ)を詳記(しやうき)せる通俗花柳病新編(つうぞくくわりうびやうしんぺん)を無代(むだい)施本(せほん)す同病者(どうびやうしや)は送料貳錢切手封入(そうれうにせんきつてふうにふ)●東京市本郷區富士前町十七大垣至誠堂宛申込(あてもをしこみ)あれ直(たゞち)に送本(そうほん)す

女（ほの二）

婦人画報

九月一日發行　九月の巻　一冊廿五錢　郵税二錢　六冊税共壹円五拾錢　十二冊税共二圓八拾八錢

（書報）

□攝子女王殿下御昇校

□湘南に於ける閑院宮御別邸

□李王妃殿下の御養蠶

□歸省中の女學生 □握手

□輕井澤に於ける江木欣々女史

□檣頭の月 □村井孃の結婚

□西洋料理の食べ方……

揮毫中の中澤書伯……
西洋婦人の表情……
小笠原子爵の家庭……
扇子のこしらへ方……
嚴妃殿下の葬儀……
美神の糸口初秋の子供
盆栽と盆石口令孃と書
鳥料理とむきもの……
大隈伯別邸と清浦氏邸……
十數名家の令孃……
少年少女の東京見物……
盲啞生の體操とマッサージ……
避暑寮に於ける女子大學生……
東西の女流聲樂家の握手……

優美なる寫眞八十有餘

最優艶にして而も家庭的なるは本誌の特色なり

（讀物）

子供と自然物……倉橋學士
昔の婦人の髪……齋藤學士
女記者の訪問を受けて……某若夫人
彈正と呼んだ鳩……野上彌生子
髪の毛の養生……北原十三男
秋の蟲いろいろ……西村醉夢
小兒と果物……榊博士
家事の整理……井上秀子
古今の女歌人……佐々木博士
美神の祭……菅原學士
夏の山と海……女記者
輕便なおしめおさへ……夫子
この頃の料理……吉村里

□婦人が毎日一時間だけ經濟的に働かば……中島博士

□日本人より見た歐洲婦人……岡村博士

□艶麗な不具婦人……上杉博士

□大切な娘時代……下田歌子

□家庭と書生……鳩山春子

□其日其日……三宅花圃

□飯阪から東山へ……與謝野晶子
つなみの後……長谷川時雨

芙蓉　高村眞夫筆三色版

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九番　振替口座一八一八番

（女ほの三）


寫眞機は眞景に優れる撮影を得るとあるも僅かに十歩
大學白粉と
大學化粧水とは
美人の眞價を千倍ならしむる特効を有す。

玉の御影



閑院宮第二王女茂子殿下

萩の下露



曾禰子爵夫人ます子（陸軍々醫總監菊池常三郎氏令孃）

○子宮病自宅療法と姙娠法

子宮病の一般の容態は、手足が冷え惡寒がする、逆上や頭痛がする、肩凝り眩暈もする、そして内股や腰の邊りに索張る樣な疼痛を覺え、勿論子宮も多少の痛を感じ、下腹が重苦しく條張り、小便に度々行き、或は便通が惡くなり、局部の周圍が痛痒く不潔で惡臭がある、斯くて間もなく（或は初めより俄に）稀薄な水樣の物、又は濃い粘りある膿の樣な下物（白帶下）がする、斯うなると月經は多量になつて、經行前には疼痛を覺え、且月經時で無い時も出血し、白帶下は續いて有つたり無かつたり、而して腰部が何時も痛い、これが永く續くと一生涯不姙となり、辛い淋しい月日を送るばかりか、段々身體が衰弱して、取返へしの附かぬ重症を惹起し、遂には命迄失ふ樣になるのです。

▲子寶を得る最も良法　斯樣に子宮病は恐るべき疾病ですから、一旦本病に罹ると、どんなに輕症のものでも、全く根治しない間は何うしても、子供が出來ません、世間には子寶がないと、自分等夫婦には子種がないのだと、斷念めて居る方も尠くない樣ですが、決してそんな道理はない、中には其罪が良人にある事も御座いますが、十中の九迄は婦人方が、本病に犯されて居るのが多いのです、又子宮病の治療は多く手術をいたしますが、手術をすると治りが早い代りに再發し易く、殊に全快した後でも姙娠する事が極て稀で御座います、それに手術を受くるには、身體の餘程強壯な方でないと到底堪へられません、然らば

▲何うするのが一番よろしいかと云に、それは婦人科專門の大家醫學士北畠佐藤兩先生の御書になりました『婦人病者心得』を讀んで其通りに養生なさるのが、最も安全で最も確實な療法で御座います、此方法によると大槪の子宮病血の道は、自宅で容易に根治せられ、御希望通り姙娠が出來ます、皆樣　理窟では病氣は治りません、物は試しと云へば、現に身體に異狀ある方は勿論、何んともなくて、是迄一度も姙娠した事のない方、又は流産難産の癖ある方は、兎も角婦人病者心得を御覽になつて、成程と得心が出來たら、速かに本療法を試みなさい、後悔は先に立たずです。

記者曰く婦人病者心得はハガキにて東京京橋新榮町
笹岡省三氏宛申込めば無代送附せらる

女（への一）

竹柏會

竹柏會は文學博士佐佐木信綱氏主幹にして東京の會員には講義及び歌文を敎授し地方の會員には學者の爲に通信にて懇篤に添削指導す又雜誌『心の花』を發行す規則書は郵券二錢、心の花見本は十二錢を送られなば發送すべし

東京神田小川町一 電話本局一一一四 竹柏會

蹄鐵印 シャトーリヨン 白赤 葡萄酒

は藥用飲料並に食卓用として御進物に最も妙なり
●至る處に取次店あり
本品は從來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粹にして善良なる白葡萄酒をも輸入發賣仕り候に付御愛飲の上御稱贊あらんことを乞ふ



東京市本町三丁目 電本局長一四三五

鈴木洋酒店

男女 ちゞれ くせ 毛 赤毛

は何程の難毛も直に根本的矯正黑化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に敎授し誓て美髮に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

毛ぬき 新劑

從來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘールビンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘールビン
定價壹圓
特製參圓
內地送料十五錢
海外三十五錢

飲んで色白

くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黑き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し內服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ビオール錠は極て强度の淸血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を淸淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ビオール錠
壹劑壹圓
參劑半參圓
內地送費十五錢

東京市牛込區北山伏町壹番地

百合園製藥所

女(への三)

令嬢かゞみ



右、齋藤とみ子（新潟）、中、白井美代子（牛込）、左、橋本政子（埼玉）

蟲の音





櫂のさばき

にせ藥

近來處々に類似、模造、無効の

多し御注意

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一劑●一圓半●濃厚二圓●三圓半●送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓二十錢●送費十錢



◀にせ物あり乞御注意▶

らい病 根治新藥 レプラ丸

本劑は獨逸國醫學博士ボルマルセイ氏が癩病の病源より探究し多年の辛苦と數萬の患者に施藥實驗を經て終に成功したる靈藥にして如何なる難症と雖も本劑に依て全治するを得る一大奇藥也●にせ物注意あれ

價一劑廿五日用三圓二劑五圓五十錢四劑十圓小包料八錢

(全快禮狀店内に保存す)　新宮藥館　(東京本郷三丁目 振替一二五八四)

電話下谷二二一九番

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒症 りん病 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人病 わきが ぢ

中央醫院

東京淺草瓦町 廿八淺草橋通 瓦町停留場横

ぢ病 諸病

梅毒 横根 下疳 全身梅毒等

りん病 消渇

子宮病 血の道 月やくとまりたる病 子なき婦人

生殖器諸病 神經衰弱症

記憶力思考力減衰症等

生殖器病 萎縮 遺精 早漏 夢精 發育不充分症等

わきが

色の黒き人

にきび ふきでもの

そばかす あれ性 皮膚諸疾患 いんきんた蟲等症

▲病狀記し郵券四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地 淺草橋通瓦町電車停留場横

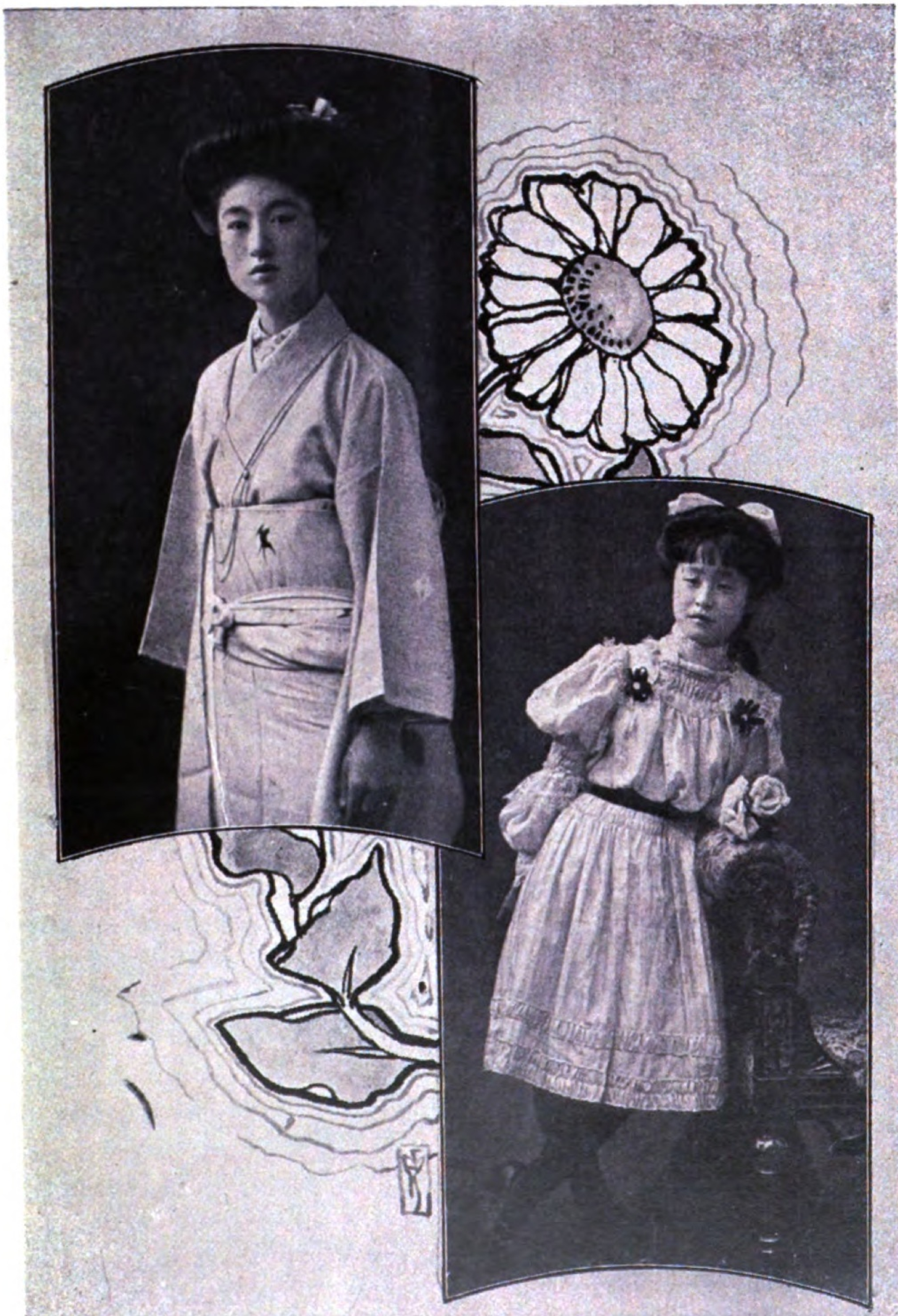
中央藥院

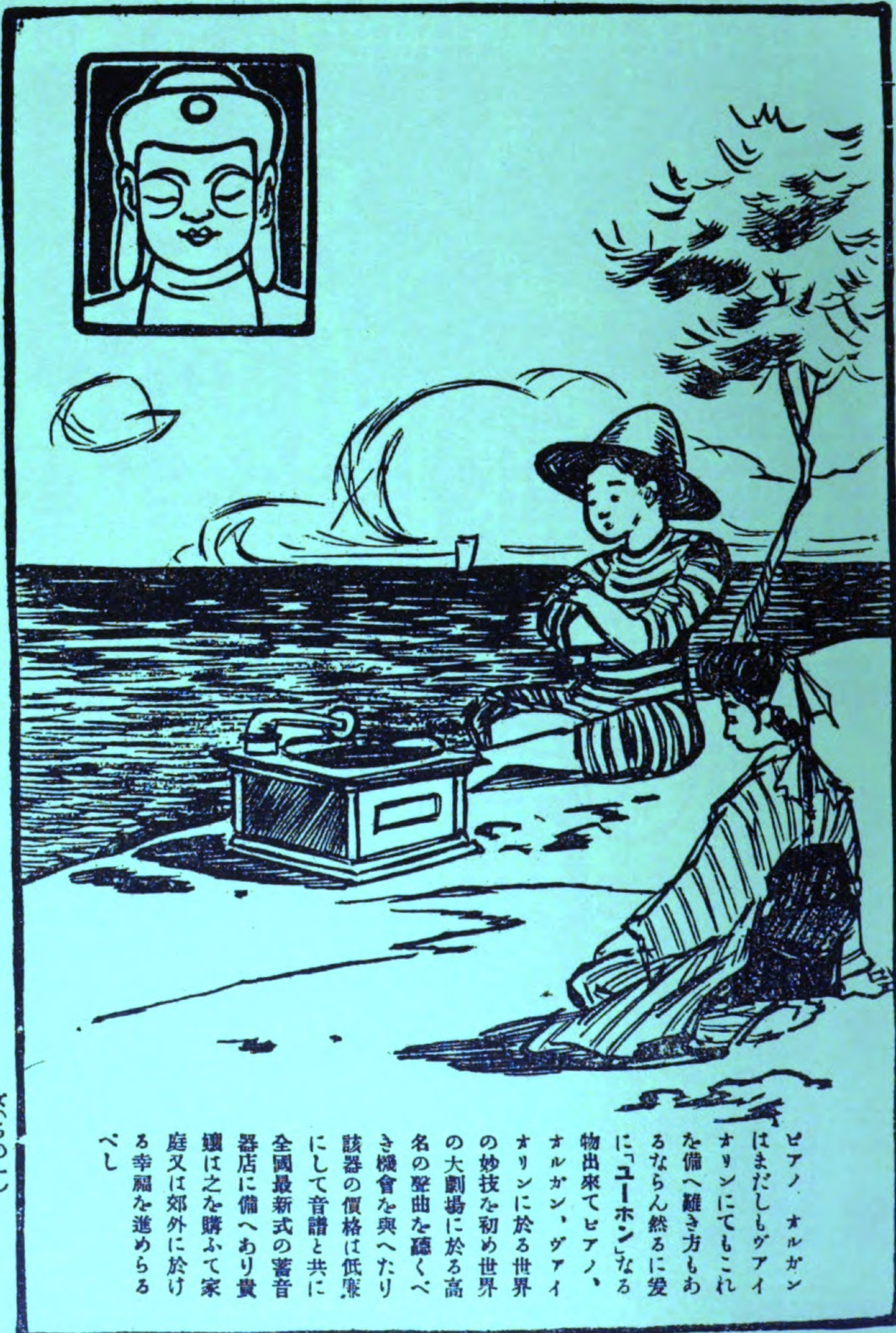
瑞西山中の絶景



瑞西エンゲルベルクの避暑地

向日葵




ピアノ、オルガンはまだしもヴアイオリンにてもこれを備へ難き方もあるならん然るに爰に「ユーホン」なる物出來てピアノ、オルガン、ヴアイオリンに於る世界の妙技を初め世界の大劇場に於る高名の聖曲を聽くべき機會を與へたり該器の價格は低廉にして音譜と共に全國最新式の蓄音器店に備へあり貴孃は之を購ふて家庭又は郊外に於ける幸福を進めらるべし

女(ちの一)

何故に本書は必讀すべき良書なりや

よき結婚は人間一生の最大幸福なればなり

通俗衛生 結婚前後

全一册六寸大
紙數百十數頁
定價 送料共 金卅四錢
振替は 卅五錢
切手は 卅八錢

本書は如何に面白く如何に有益なるか乞ふ目次を見よ

●目次●夫又は妻を選ぶ注意●財産と學問●血統の善惡●近親結婚●自由結婚●無理結婚●早婚の弊害●晩婚の弊害●夫婦年齡の差●美人ならぬ妻如何●妻の學問の利害●夫婦の相性●夫婦將來の和不和を前知する方法●如何なる結婚の最幸福なりや…………結婚の習慣●法律と結婚●媒妁●見合の方法●結納の贈答●結婚と衣裳●結婚式の順序●結婚當夜の心得●結婚後の心得●結婚届…………●夫婦身體上の差異●結婚後夫の衛生上の注意十二件●結婚後妻の衛生上の注意十五件●月經とは如何●月經時の注意其他頗面白し……●子のある法●子のない法●子を持つ月のくり方●姙娠せし事を如何にして知るか●姙娠中の心得●姙娠中の惡食物●姙娠中各月の變化●出産した時の子の大きさ●出産の日を前知する法●子を生む時の注意●如何せば安産するか●生れたる子の取扱法●授乳の注意●出産屆：●子宮病の話●梅毒の話●淋病の話●女子淋病の話●梅毒淋病の傳染を豫防する方法●夫婦の圓滿を害する種々の病氣の原因及療法：：●こえる法●やせる法●二ヶ月内に必色白くキメ細かになる確實の方法●顏の吹出物ニキビそばかす等の簡易療法●ちゞれ毛くせ毛矯正法●はえぎは惡きをなほす法●毛はひ藥と植毛術●確實特許鼻高くなる器械●あざホクロいぼ等を去る法●わきがの妙藥●齒を白くする法等●ある若き女のザンゲ談●或花よめの自白●ある夫人の出産失敗談●ある女の三十日の實際日記等皆面白き研究資料…………

右の外茲に廣告せざる目次數十項、皆青年男女必讀の好文字委細本書に就て見よ。

發行所 東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 學友社書店

各地大撿校及琴曲大家御賞讃箏曲通信教授所御撰定

坂本湖月先生發明

新案特許 第二一四〇四號

琴調子笛

體裁高尙優美 桐箱入

定價金壹圓五拾錢
特別金貳圓
送料各八錢
代價引換を諾す
詳細說明書添附

◎バイオリン琵琶三絃等に應用自在なり◎

調子三年と云ふ諺も專門家の調子に於ける或る秘密も此調子笛の新發明により一切取除けられたり何となれば此調子笛に依れば如何なる六かしき新曲歌曲の調子をも初心の人にて容易に合わす事を得ればなり又專門家は教授用に且つは自己音聲の調子を知り置く等應用無限眞に音樂界の明星なり一般音樂家は速に備られよ

發賣元 福岡市博多中島町 振替福八一電話四三 積善館樂器部



毛はへ藥 最新發明

◉奏効確實◉使用簡便◉

藥學の進歩と多年の專門研究により必ず毛のはへる最新毛生法發見す其效驗如何に確著なるか諸大家の實見報告贊評等詳細は郵券二錢封入照會あれ

東京日本橋通四丁目四番地 公仁藥院

近來博文館員と詐稱し豫約募集の勸誘をなすもの有之候哉に聞及び候へども當館にては一切斯樣の派出は不仕候間爲念茲に警告致候

東京日本橋本町 博文館

女(ちの二)

羽仁もと子主筆

婦人之友

九月一日發行　第四號　一冊金十五錢　郵税一錢五厘　六冊前金九十錢　十二冊一圓七十五錢（郵税共）

●家庭に於ける婦人の職業問題……羽仁もと子

▲理想の生活　花子の巻……羽仁もと子
▲近來の一佳話……久留島武彦
▲昔の趣味と今の流行……岩村透
▲美服、家を亡す……安富來輔
▲子供の結核に就て……醫學博士加藤照麿
▲家人の小遣は如何にすべきか
▲女中訓（賢い女中と愚かな女中）

▲名畫の子供……倉橋惣三
▲歌ものがたり……遠山稲子
▲鉛筆畫の描き方……大下藤次郎
▲假名の習ひ方……星野天知
▲文藝その月々……河井酔茗
▲フロスの水車場……松本雲舟
▲立志傳に入るべかりし女……
▲神經痛治療の經驗……
▲鮑の料理法……
▲家政問答……羽仁もと子
▲讀者消息

●良妻賢母とホーム……三宅雪嶺

▲我家の家具保存法……田中米子
▲着物の繰廻しの上手下手……延子
▲服装に就てのきまり……水町たづ子
▲二十七錢で出來る帯留……
▲ひね蠶豆を軟かく煮る秘訣……
▲二つの鶏卵で十二のワップルを作る……
▲九月の惣菜（三十一日分の献立）

▲葡萄（石川寅次郎筆）……
▲溪流（大下藤次郎筆）……
▲慈母觀音の圖（狩野芳崖筆）……
▲家庭の月見（畫報）……
▲山脇夫人と愛甥愛孫（畫報）……
▲衣服整理法講習會（畫報）……
▲蟲鳴く宵（畫報）……
▲とんぼとり（畫報）……
▲姉と妹（畫報）……
▲子供の一日（畫報）……
▲初秋の田園（畫報）……

●北海に投身せる可憐の二少女……綱島佳吉

東京小石川雑司ヶ谷町　婦人之友社　振替口座東京壹六〇〇番

女（ちの三）

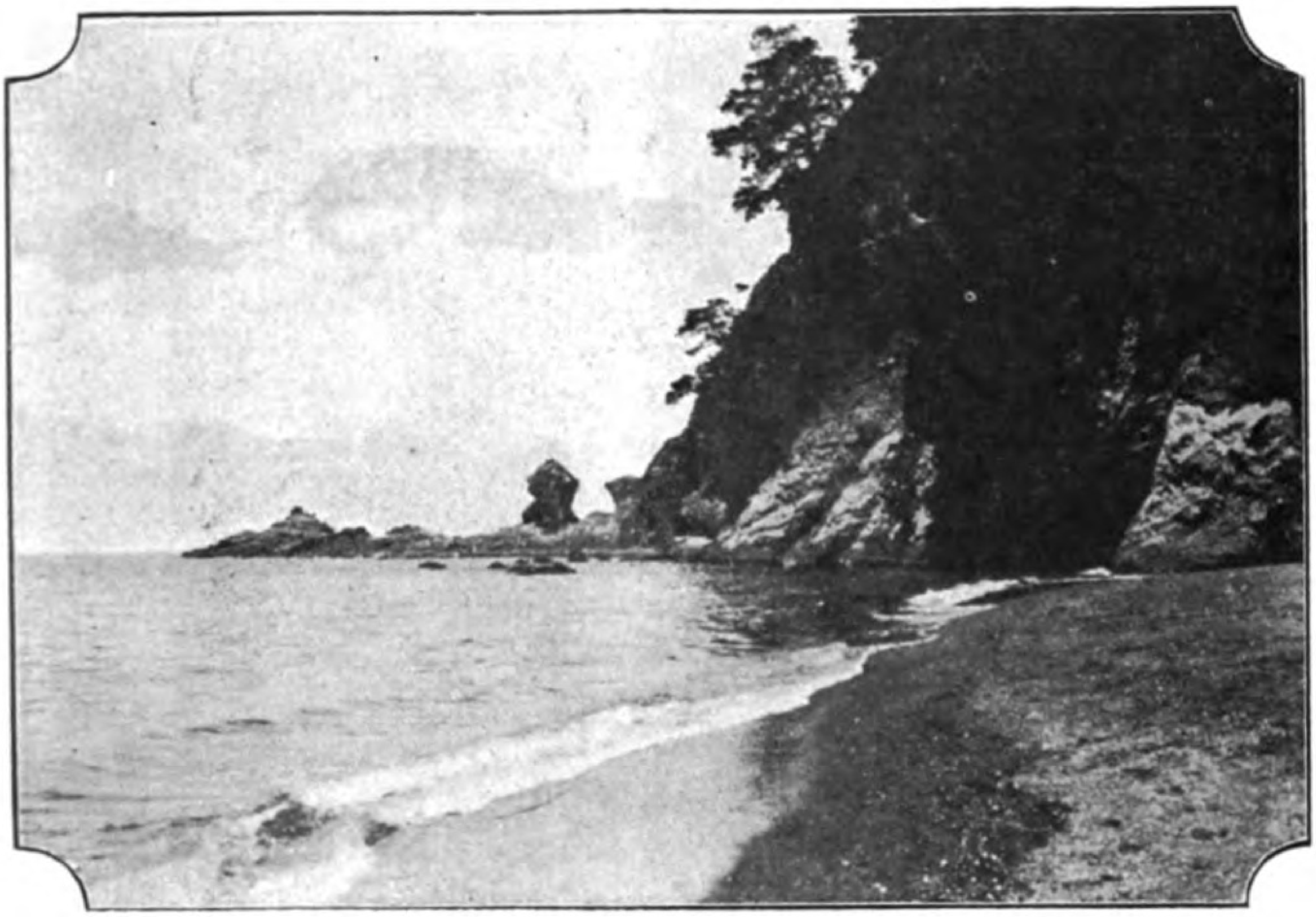
日比谷の夕景

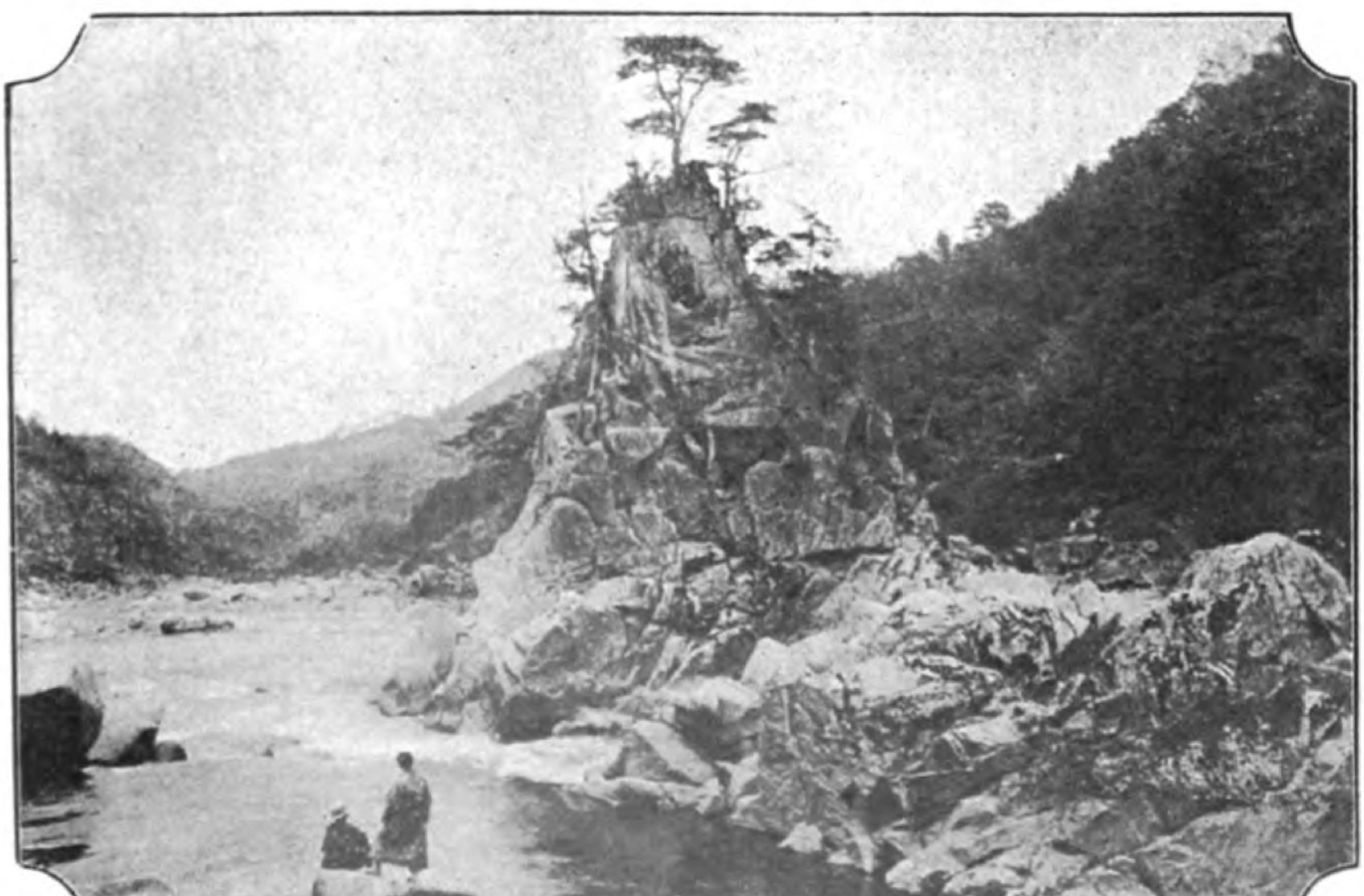


上圖　小西完子（伊丹紳商小西氏夫人）

下圖　英人ブリンクリー氏令嬢稲子

磯の奇礁（房州勝山海岸）





溪川の奇勝（紀島蓬莱岩）

(りの一)

世界無比……最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日目に必ず美麗に除去するを痕跡を残さず無痛にて

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も除去し得らるゝこと確證す 故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也 但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす 故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模様を詳細明記して申込あれ 左すれば其症に適應する藥を送附すべし 價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分十圓拾錢づゝにて郵劵代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを總用とす)前金即刻小包郵送す

●らい病根治新劑

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其效力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

●毛の必ず生る確證藥

藥價特別製分五圓卅錢▲中瓶貳圓卅錢▲小瓶壹圓廿錢

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はえぎはの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼蒼と速生する特効あること確證す 本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はえ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず 眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ。

●奏効確證 美容新劑 やせる藥

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢 特別製分九圓拾錢 前金即刻送藥す

本劑藥名(ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり 顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質、多血質、脂肪過多質の人用ゆれば 無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり 故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は 速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

●美き聲の出る新藥

▲藥名…ウエーヌス

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり ▲聲麗しくして…男子は威嚴あり

▲聲は人格を高尙ならしむる必要なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來甚だ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること諳確す。

腦病を根治し記憶力を增進する靈劑

腦病必治

記憶增進丸

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢送料各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記憶力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者、記憶力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること誓て確證する所なり 論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知られよ。

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女(りの二)

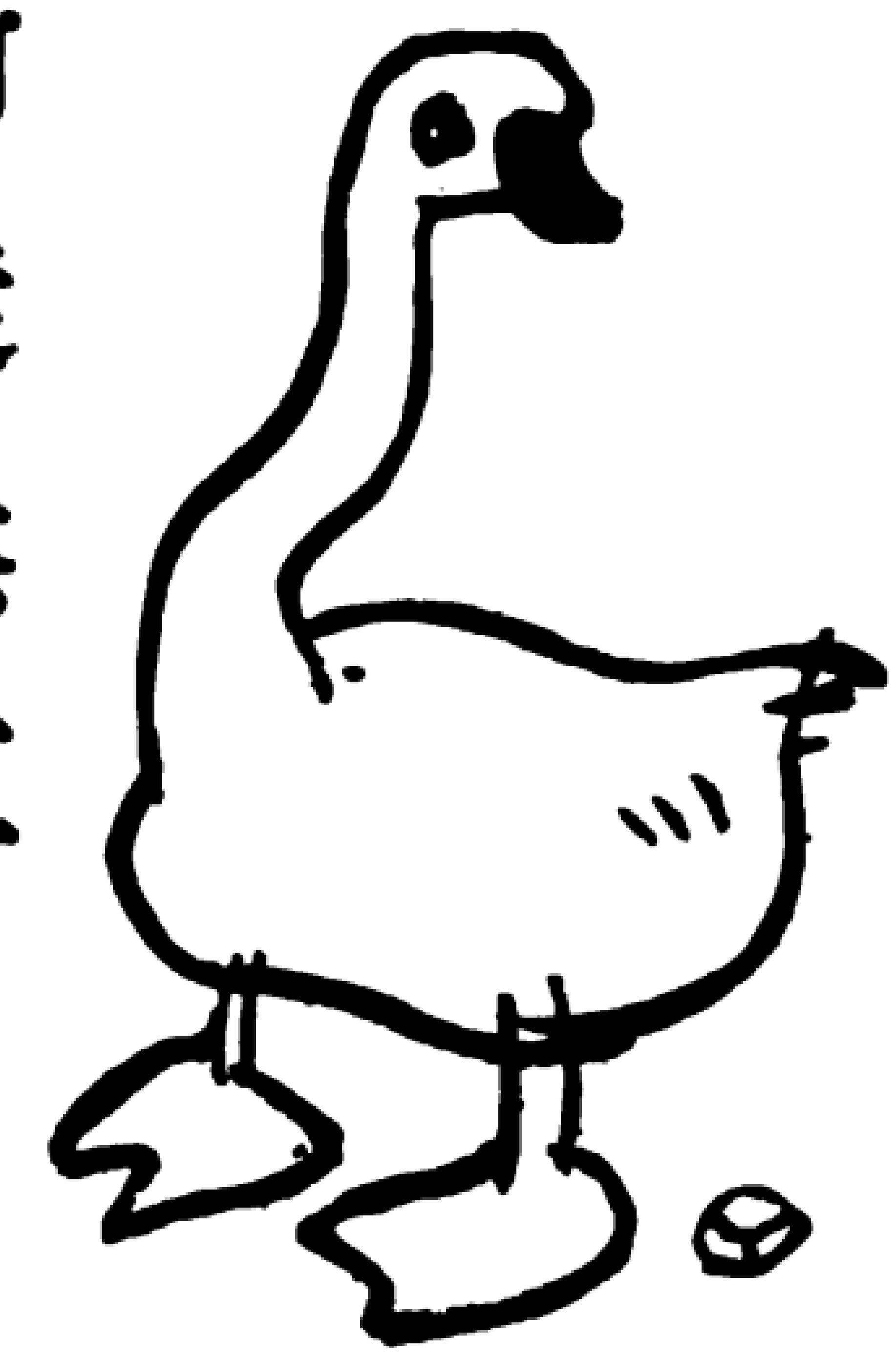
女（りの三）

女(りの四)

女學世界

九月號





新徒然草（その七）

磯ちどり

○

涼しげなるもの。梨などむきて白き鉢にうかせたる。流の上を筏のすいと行きたる。夕暮噴水等見てあると沫のさと面にかゝりたる。四十路あまりの男の頭の毛薄くなり、頂の邊の僅に赤らみ簾漏る月の様なるも涼し。

白く形よき指に細やかなる指環はめたるは清々し。

色黒き人の藍濃き衣着たるはすさまじく見ゆ。模様こまかく薄色なるを着るべけれ。なべて濃き色は暑げに見ゆるなれど勝れて色白き體、細やかなる人が着たるは反りて涼しき心地せらる。夏川に藍濃き衣を洗ふも涼げなる類なり。

眞夏の緑深き木立行く少女の後姿、輕やかなる浴衣に緋の色燃ゆる様なる帯したる、寛かに肩にしたる薄水色の傘の上に木間もる日影の金魚の様に動きて見ゆるも床し。

暑き物は——南瓜の熟したるが日中の畑に獨りころび居たる。こま〲と描きたる團扇の繪模様、毛もなき頭の大いなる。口輪箝めたる犬。

○

世に蚤とる姿こそ淺ましき物の限なれ、年とりたる女房の「宥させ給へ」など言ひて衣の上よりしかと押へ、眼見張り徐に脛の衣めくりたる。

男は蚤とる事も拙し。「あな逃してけり」など大聲擧げ、疊の上、彼方此方平手にて打叩き、押へたりと思

へば大力込めひたふるに摩り附くる事、女の人差指の鋭さには及ばざるもをかし。

蚊も憎き蟲の一つなり。されど蚊と云ふ物、あらざりせば蚊遣といふ物もなく、蚊帳の香の懐さもあらじと思へば蚊も却々にをもしろけれ、人の顔の微白く見ゆる頃、低き藁屋の火も點さで軒端より榾焚く烟の靜に這上りたる。あるは風に膨みたる蚊帳の幌の樣になりたる、昔ならば懐刀重石とすべきになど思ふ。



なべて照る月の光にさま〳〵の影こそ變れ野邊の秋草（頓阿）

蚊も櫻散る頃、燈火の許に唯一つ飛び來たるは、亦なく風雅たり。されど物讀む折机の下に群れたるは憎し、又團扇など使ひつゝ、日暮の軒端に涼むに搦手より廻りたる蚊の斷もあらで足の裏の軟き處したゝかにくひたるは腹立たし。若き男は蚊帳の外に足投げ出して眠る事あらば、ひたふるに打くはれたるをこはき廂にすりつくる也。蚊帳の内に入りたる蚊も忌はしき物に數へつべけれ。

目睡む暇もあらずぶんと言ひて頰の邊微に羽音の解るれば、又に來たらばしたゝかに打ちも叩いてむと待構ふるに、眼も覺め終るが常なり。時によりては手燭に火點し燒き殺さむとするに、靑き蚊帳の中、彼方此方へ焰棚引かせて持廻るに、母などの見給ふれば「あな、危險き事するよ。蚊帳に火移らずとも限らぬに」など宣ふが常なり。

蚊を蠟燭にて燒くは夏の夜の樂の一也、白壁などに尻あげて止りたるに火つくればふすと言ひて落つるが此上なくをかし、されど火を斜にすれば疊の上に蠟の落つるはわるし。

○

世の人の怪しまざるもの。

鏡臺の抽出は言はずもあれ、勝手元の布巾は灰色のもの。箸箱の中は洗はぬものと思ひたる人あり。厠の手拭は汚れたるが慣と思へるにや眞中黑うなりたるは雨降る日怪しき香もすべし。

其他相撲の脊には灸あるもの。金持は妾あるもの。小說は虛言あるもの。女は思慮なきもの。天氣豫報は當る折もあり當らぬ折もあり。また己が財布には金なき物と思込める男あるは女が顏見たるを己に心ある物と思ふ若き男皆淺まし。

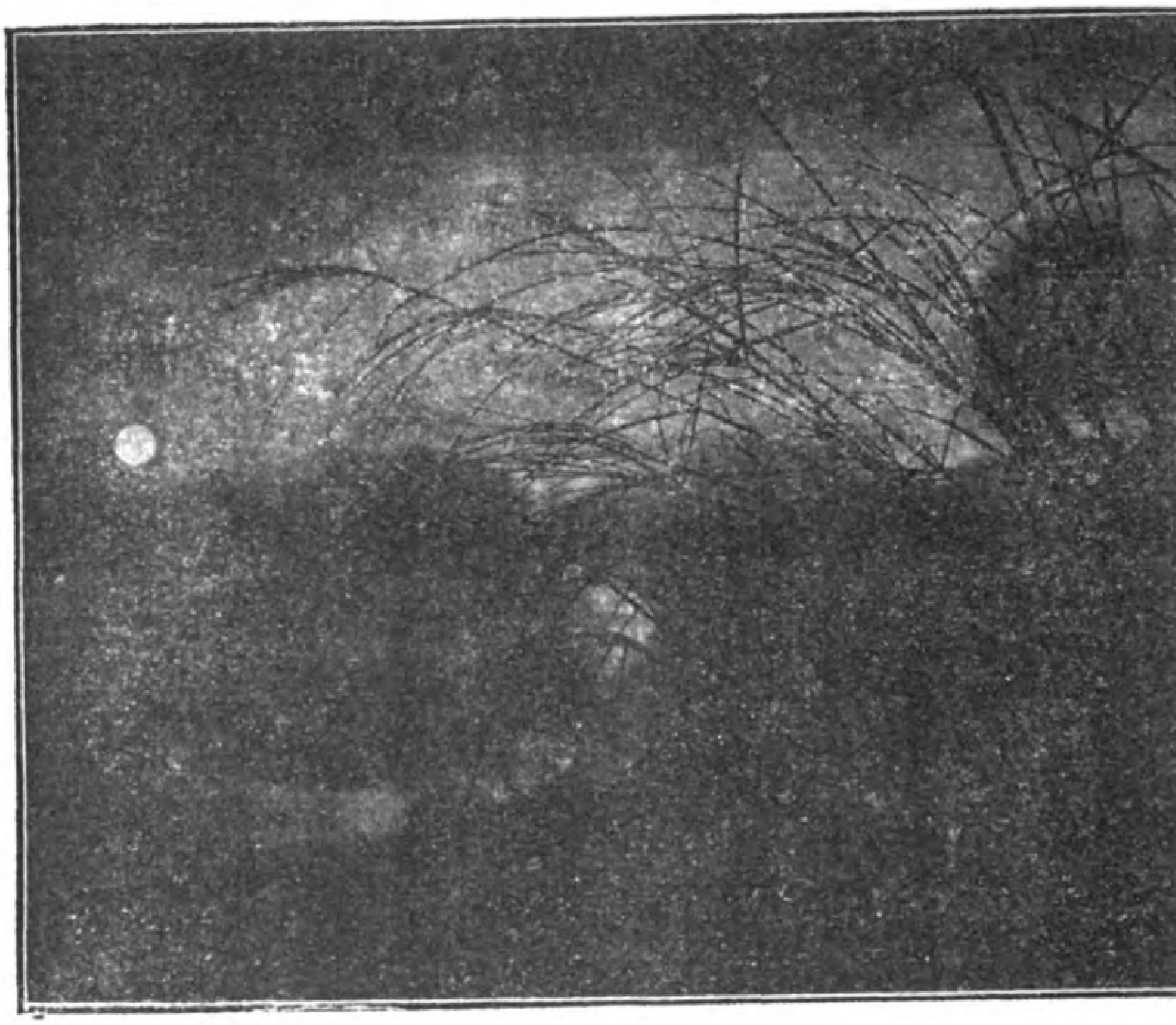
○

旅すれば日頃さして親しからぬ友の許へも文書き繪葉書など夥しく出す心となるぞをかしき。世には人より來たる文に直に返り事書くは己が威傷くるが如、思へるにや態と日數經ちて認るがあり、惡しき癖なり。文受取る方よりすれば長きを遲れて與れたるより短きを早く返り事したるが心嬉し。又書く方よりするも何れ書くべき返事ならば直に認むれば情も移り無用の斷の言葉も書かで濟む物を…

用向の手紙は用事のみ手短に書きたるこそよけれ。初には時候の挨拶長々しくかき其後にて賴み言記したるなどは淺ましく、かゝる人は我用事ある時のみ親し

げなる手紙書き巻紙の端に返り事の代として切手封じて遣すも腹立たし。

また手紙には、つとめて恭しき言葉を使ふべけれ。話の間にては戯言として心にも留めで濟ます事も筆にすれば角立ちて聞ゆなれ。さればとて敬の言葉は先方の身分に應じて異にすべく、身賤しき者に向ひて餘り恭々しくは反りて嘲の程たるべし。こは文にても日常の言葉にても同じ。さる家の田舍より下婢置きたるに、「奥様」とは言はで名にて呼ぶ。主人のしか呼ぶを聞眞似たるなり。「我身は關はねど世の人に見苦しければ奥様と呼べ」と敎へたるに、婢女いと罪の心地して其後は、桶屋の女にも「桶屋の奥様」と呼びけり。世間には斯る類いと多し。



ない袖をふつて見せたる尾花哉　（許六）

○

眞の笑を解せざる人二つあり。「一つは「笑はぬ人」是也。足の裏、腋の下などこそぐるとも笑はず、鼻の穴に紙捻入るゝとも嚏もせず。石の如き人にて、笑へば己が威儀を墮すと思へる類也。げにかゝる人の笑ふ聲聞かば谿間の石も水上に流るべきなれ。

また「笑ひ家」といふがあり。風にて紙の散りたるも可笑しく、木に鳴く鳥、水に游ぐ魚、さては人の一顰一笑、悉く笑の種となる人なり。加之笑ひ初むれば時經

るとも之を止めず、袂顔にあて俯伏になり、あな可笑し、あな可笑しと果は涙こぼして笑ふ、偶傍に人あり「何が可笑しきぞと咎むれば、其顔が可笑しとて更に笑ひいだす類也。

笑ひ家は女に多く、笑はぬ人は男に多し、今の世の教育家、頑固なる昔男は概ね笑ひを憎む事蛇よりも甚しく、如何にして此世より若き者の笑の種を除かむかと心を痛むる也。

○

幼き折なりき。芝居に行きて累と申し侍る女の亡靈など出づる幕となりぬれば恐しさの餘り顔も得上げず只管に姉の膝に縋りしか今はさる事なし。幽靈と言ふものあるや無きやは知らねども少しも怖からず思ふ是も誠に廿越せし故にや、物に驚く事も少なく亦物に感ずる事も鈍くなりし樣覺ゆるに、更に十年廿年經れば我心石の樣なるらめと悲しく思ふ。物事の理よく辨へたるは女にも固より貴き事ながら情の火のたえず我胸にあらまほしく、月の中の影は兎と思ひ、あるは盂蘭盆に生靈迎ふる心となるこそ却々に女には應はしきものなれ。

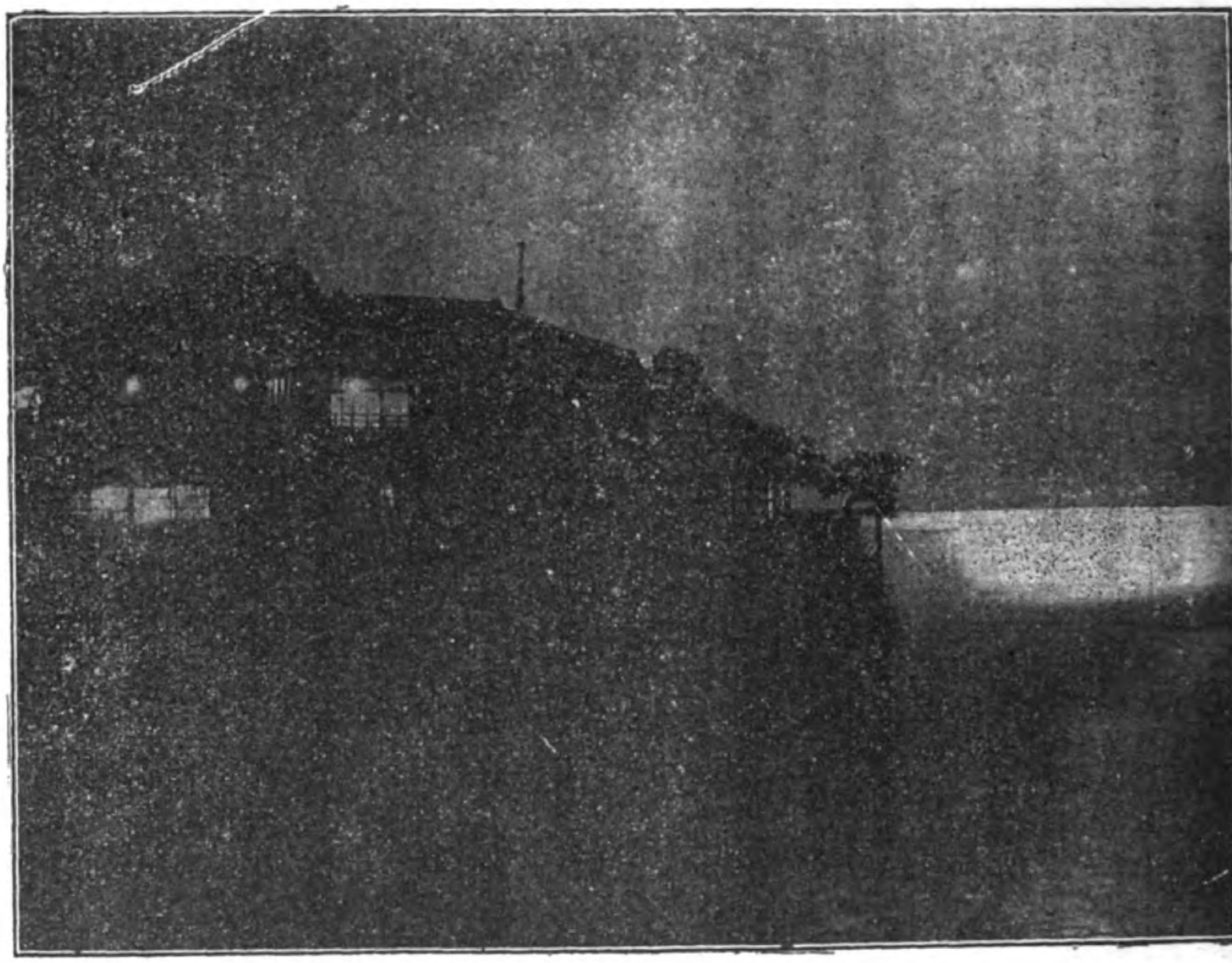
○

犬猫は食足れば則ち眠る。我心を奪ふ物なければ自と眠氣さすにや、人にても知慧鈍きは爲す事なくば直ちにうと〳〵と目睡むなり。車等に乘れば役の樣に居眠り初むる人に賢しげなるはなし。世に居眠りする顔程をかしきはなし、口開き鼻上向け、日向葵の樣に首ふら〳〵とさせたる樣、一眼見ぬれば己が眠むたさは、はたと醒め果つる也。

汽車等にのりて長き旅するに男は鞄など枕にし打ひろごりて帽子新聞など顔にのせ、傍に席なき人あるも知らず顔に空寢したる。

又上方の男女は旅すれば必ず物食ふべしと申へるにや、汽車に乘れば先づ袋開き車の動く間は口も動したり。淺ましき癖也。

芝浦の月



雲をりをり人を休むる月見哉　（芭蕉）

○

世に月賦と申す物よりうたてきはなし、買ひたる品の珍しげ無くなりぬる頃より、支拂ふ金は何となく唯取らるゝ心地せらる。

字書の月賦、洋服の月賦、自轉車の月賦など今様は恥づべき事にはあらじ、濟生會の寄附金の年賦、月賦のある世なれば・・・・

○

我より他人に向ひては心に懸けて言ふ事も他人より我に言はるれば快よからず思ふ事多し。すべて人と交り、圓滿なるを欲せば、口を愼しむこそ肝要なれ。

さればとて些細の言葉に腹打立て心の憤、色に現すは、人の輕蔑を買ひ亦見苦しき限也。我國の人、皆我に信厚く、愼深きは竟に望むべくもあらず、必ず愚なる人、快からぬ人もある

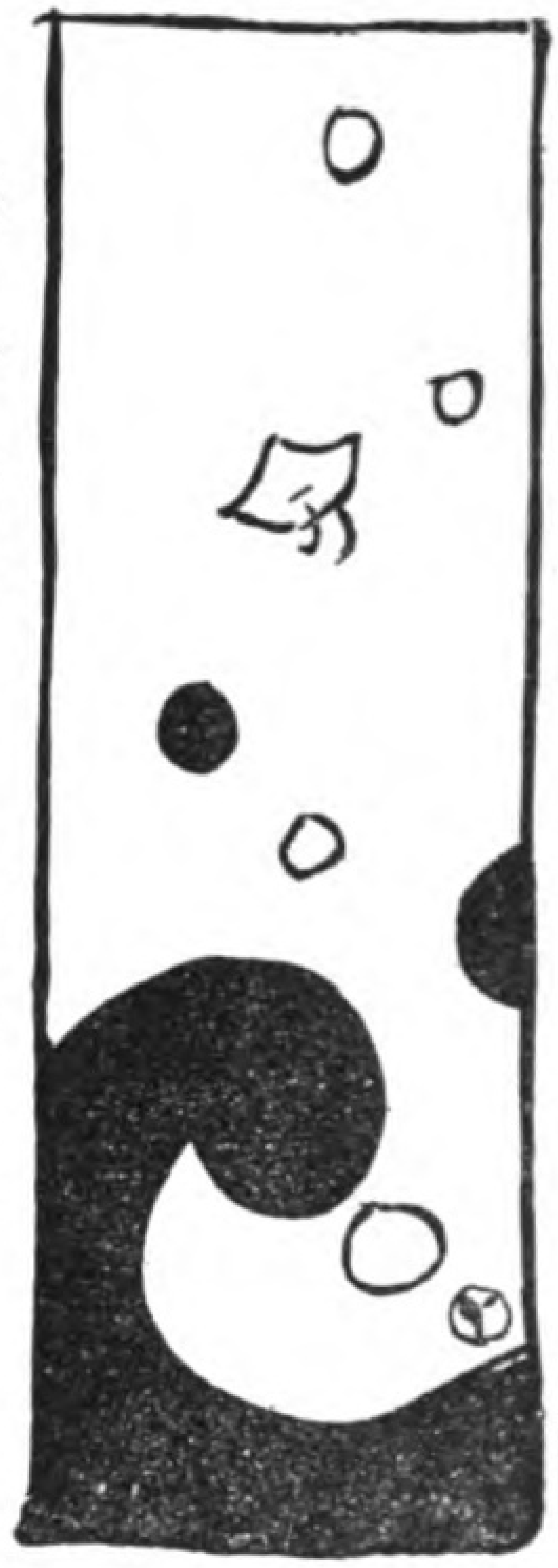
べし。是等の人の嘲、譏言に向ひて一々怒りたらむには、己が顔に怒の相絶えざるべし。人の快からぬ言葉は意に介せざるごとく笑に紛らして聞くべく、露に之に答ふるは己が身を忘るゝ物にて、此方に思遣ある友すら眉顰むらむ。

また人の話は終迄聽くべし、中途にて之を避け己が考を述べあるは屢々「何故?」「如何して?」等の言葉を差挾むは興を殺ぐ事甚し。心得べき事にこそ。

世界一の巨船

六月廿八日、世界第一の巨船オリンピック號が、紐育を解纜して英國に向ふ時、紐育の波止場は二千有餘の見送人で埋まり非常な混雜を極めたといふ。この汽船は英國白星會社の所有で、噸數四萬五千噸、長さ八百八十二呎で、且つ最新式の機關と設置を備へて居るさうなが、此れに乘込んだ客は一等七百三十五人、二等四百九十五人、三等一千一百人で、之れに船員を合すると船内の人數は約三千人實に大西洋航路ありて以來の客數である。其の汽船賃の如きも六十五萬圓に達せりとは驚かざるを得ないが、此汽船が大西洋往復に要する費用も亦三十五萬圓との事である。其の積込んだ食料品の如きも山なす許りで其重なるものを擧げると、牛肉四千二百貫、羊肉千二百貫、犢肉二百四十貫、豚肉三百六十貫、雛鷄八千羽魚七千尾、海老二千疋、ギーンヘン(七面鳥屬)五千羽、海龜四頭、牛乳二百石、乳酪二石五斗、牛酪七百廿貫、鷄卵三千個、馬鈴薯八千六百四十貫、アイスクリーム九石五斗、野菜二百廿籠(約五千百七十貫)麵包粉四千七百貫、果物七百七十箱とはこれ亦驚くべきである。而かも此丈けの食料が僅に五日間に食ひ盡されるのである。

ところが尚ほ面白い事は、未曾有の多數の乘客を載せた世界第一の此巨船が紐育を發し、ローアー灣を航行して、將に大西洋に出でんとした折しも、空中遙かに一個の飛行機が現れ、暫時船上を飛揚して居たが、均處を見計つて丁寧に包んだ眼鏡を甲板上に落した。之は船客パーヒー氏に宛てたもので、氏は此汽船の出發少し前に眼鏡を壞したので、ワナメーカー商會へ修繕にやつた後、同商會の屋上には無線電信の裝置がしてあるを幸ひに、眼鏡は倫敦へ宛てゝ送致してくれと無線電信で賴むと同時に汽船が出發したので、商會の方では眼鏡の修繕か汽船出發の間に合はなかつのを殘念に思つて居ると、丁度英國飛行家ソップウヰスが、飛行機で飛揚するとの事を聞いたから、早速眼鏡の送り屆けを依賴じて置いて、更に無線電信で汽船中のパ氏に其旨を報じて置いた結果が右の次第であつたのである。



清少納言と其時代

萩の下露

わたしは前々號の梅澤さんが御書きになつた納言と機才をよみまして興味津々たるをおぼえました而うして自分もあれの外に知つてゐる事を一ツ二ツかきたいと思ふのです。けれども私にはとても立派な意見や文藻はもちませんがたゞ私は手あたり次第によんだ平安朝文學内容によつていさゝか心ついたまゝを申上ませう

時代

勿論華奢淫蕩を事として無常寂滅を一世の思潮とした放逸無氣力の時代です、勢家の威權帝室を凌ぎ中央集權の實亡びんとして佛敎の餘韻更に氾濫橫溢を極めた時代です、政綱ゆるみ、人心眠り、柔弱者の相集つたこの時代にして、山を動かす蓋世の勇者の生れないのも無理からぬ事だと思ひます。

たゞ平安宮中は折ふしの花紅葉、雨の朝風の夕べに憧憬れて夢のごとく日を送つた時代です。

文學の概況

六朝の四六併儷體に心醉して、優艶な模倣的の漢文ばかり流行して、秦漢以前の如く氣骨稜々たるものは甚だ稀でした。而うして國文は女子のするものとして男性はこれが執筆さへ恥ぢてをつたのです、もし書くとすれば皆その名を隱しておきました。そこで女子は國文の素養を和歌にとり、漢文の素養を讀書にとつてあつたのです、かくて一たび筆とれば、艶麗優美の文字は、渾然たる瓊章綺句となり、あの有名な源氏や枕が迸ばしり出たのです。而しそれが女性的であつて優麗！　貴族的であつて放逸の條件が全く兼備して平安文學の特色は發揮されたのです。だから此の時代の文

そして剛健でないとか、豪宕の氣概がないとか云ふことは背景と時代と相俟つて然して後に言ふべきです。

背景

いかに清少の學識才藝が一世を凌駕しても、其時代が無學では一向學べません、香爐峰の雪は如何に？と問はせ給ひ鷄の聲に催されてといふた中宮や、行成卿、其の他帝を始じめとし伊周公、齊信卿等の芳烈な色彩に富んだ風流佳人がなかつたなら、あゝ徒らに駿馬痴漢を乘せて走るの嘆は免かれなかつたでありませう…その…中宮定子は中の關白、道隆公の姫君、天皇よりは四ッ上の十六の年御入御になつたのです、御情け深くて文學の御嗜みことにも深く渡らせらるゝことは恐れながら今の國母陛下を髣髴されるのです。

道隆公はあまたの子女を禁庭に奉り、和氣祥雲に滿ちたその幸運、人はこれほどの至幸は又とあるまいと御噂してをつたのです、ところが長德元年の疫病の流行したその年に、道隆公は病を得て四月十一日南院で御薨れになつたのです。

其後道隆公の御弟即ち中宮の叔父道長公の繁榮は沖天の勢あるに引かへて、御兄伊周や隆家等が華山院を射奉つたことや東三條院を呪咀したといふ罪などから、形勢日に增し惡くなつてきたのです、中宮はあれやこれやのうきことを御心一つに集められて、御嘆げきの晴れる隙もありません、たゞ天皇の御寵愛によつて、憂きが中にもわづかの光りに浴びることが出來たのです、さて道長公の御女彰子の方はいよ／＼出御になることになりました、あゝ天皇や中宮の御胸の中、多年の深き御契りも、此のたび限りと思へば、胸も裂くる樣、せめて帝は今一ト目一宮（敦康親王中宮定子の王子）を見たまひたいと思召しになりましたが、帝は道長公を憚かつておられました。

そこはさすがに道長公自ら奏上して一の宮を見給へやと申ました、帝はうれしさに泣き玉ひながら、中宮にたび／＼御文あげました、けれども中宮にも道長を憚かつて御出でになりません、御兄伊周公も頻りに參

内をすゝめられましたので、二月廿日の晴れ渡る日、遂ひ御出でなさることになつたのです。

胸に物ある道長公は、御迎ひの車まで仕立て奉りました、帝始じめて道長公の御志を御感じになりました。しかも帝室の御よろこび、御悲しびを飜弄する權家道長公の恐ろしさよ、公はいろ〳〵と御もてなしをいたしました、うら〳〵と晴れわたる一條院の泉水や、さゝやかな植込や、垣ゆひを眺めさせながら、帝と中宮は笛ふきの御遊樂をなさいました、精煉な技、高邁の御才を以て、帝は高砂の曲を折返して合奏なさいました、この優雅な樂のしい御遊び！清少等は簾の下にきてきいてをりました



此の時です清少が芹摘みしことなけれどと云ふたのは物集先生も仰有つた通り、芹摘みとはならぬ戀をいふのです、清少はかく御傍にあつて寵愛をうけてをる身のつゆはかなさを感じない

が、たゞ餘りの御めでたさにと感嘆したのです、噫我が帝の御心いかにと思ふ中宮の御胸、この欣びも今生の此の時限りと思へば、人知れば胸つぶるゝのをおぼえるのでありました。

皇后の宮の離愁

道長公が一の宮を又なく尊敬なさるのは、たゞ上邊のみ、內心には深き謀がありました、あはれな優しい中宮は、叔父上の御心を憚かつて宮中を遁れやうとしたのも幾度か知れません。けれども帝のあつき御情けに逐絆されて、行末の果敢ないことをかたりながら、涙にくづれてしまふのでありました。さて同年三月彰子の方がいよ〳〵后に（女御より）御立ちになりました、わづか十三の彰子の方が、中宮に進ませられたとき、定子の方は皇后となられました。

それから三月二十七日、皇后は大進昌生の宅に御なりになりました、この時皇后は御懷姙の御身體でありました。あゝ此の日參內し給ふ秋の露しをれし方には訪ふ人もなく、榮華なりしは春の夢、戀しき御帝の御離愁御物思ひに沈み給ふ時、今をときめく彰子の方、調度車馬衣を晴れ〳〵と全美を盡くす參內の式、あゝ皇后は恨みしげき空房に泣かせ給ふ。

荻の上風荻の露、涙にくもる八月も八日、內裏に御出御なさいましたが、廿七日には御退出なすつたのです、皇女媄子內親王は十二月十五日生昌の宅で御生れになつたのです、翌十六日皇后の苦しい御胸ははれもせず、帝の御袖にも縋り得玉はで、とう〳〵冷たくなられました、あゝ薄命の皇后は朝の露、槿花一朝の夢、匂ひやかな御影玉の腕の御主はあゝ遂におかへりにならなかつたのでした。

宮の御帳の紐に結びおかれた御歌を、伊周公が見出しました、

夜もすがら契りし事を忘れずば戀ひんなみだの色ぞ
ゆかしき

また

しる人もなき別路に今はとてこゝろぼそくも急ぎた

つかな

また

烟とも雲ともならぬ身なりとも、草ばの露をそれと
ながめよ

烟ともと仰せられた御心を量り奉つて、やがて御火葬はやめました、鳥邊野の南の方に靈屋といふものを作つて、築墻などをきづき、こゝに御納め申したのです、一族みな從ひました、雪がまふ如く降しきつて、靈屋が見えなくなつた時、伊周卿は

誰もみな消え殘るべき身ならねど、ゆきかくれぬる
君ぞ悲しき



隆家卿

白雪のふりつむ野邊はあとたえていづくを春と君と
尋ねむ

隆圓　伊周公の弟

故里にゆきもか
へらで君ともに
おなじ野邊にて
やがて消えなむ

今宵もあはれに悲しき樣、書にかかせたいやうでありました、天皇もはるかに御涙の袖しぼりたまひて…

……

野邊までも心ばかりはかよへどもわがみゆきとも知
らずあるらん

時は長保二年の十二月廿七日、皇后御年二十五歳かくて皇后の御一門は灰色に衰へて、道長公の盛運のみげに望月の影丸く、三女子三代の后に備り玉ひて天皇の御生母となつて、十善圓滿の極みに達したまひたのであります

取りあつめた清女の品性

○清少は元輔の父顯忠の子であつて、元輔のために養女になつたのであるから、元輔とは同胞であるといふことを行成卿がいふたさうです。行成卿とは清少もごく近かつたし、同時代の人のかいたことですから、信を措くに足ると思ひます。



○清少の進取の氣象に富んでゐることは、その作物にも又一般にもみとめられてあります、して漢學はことにも深く、白氏文集、文選は日頃のよき侶伴であつたのです。

若し清少が現代の女子であつたなら、定めし英學にも、フレンチ、イタリック、ドイッチ、にも通達したでせう、或はエリオット、ブラウニングにも立勝つた歌をものしたかも知れません、けれども世のあわて物のいふ樣に蓮葉な御轉婆ではないのです。私

は清女の品行をとやかくいふ人を淺薄な人だとおもひます、あの作物をもつて、清女の實歴だとすれば、紫式部はどうでせう、淫靡怪亂ともいはずばなりませぬ、光源氏は何んですか藤壺の上はどうですかよにも淺ましい不倫の道を敢て重ねた人ではありませんか紫女の品行とても單に道長の戀に應じなかつたばかりでは、斷じて然りといふ事は出來まいと思ひます、ことにあの作中に清女に對する諷刺が仄めかしてあつたと申ますが、清女にはそれがないのです。



清少が才學深く、皇后の御寵愛深く、行成卿、齊信卿、伊周公などの歴々と、對等の交誼があつたのを人から憎まれたのです、清少は喬木です、大醇です、喬木は風に折れ易く、大醇に小疵あるのは免かれません、

○清少を大酒家といふ人があります、恐らく誹譏の言でせう、成程枕草紙の中に心ゆくものゝ内にねおきてのむ水といふのがあります、宵ざめの水の甘さは下戸知らずとかいひますか

ら或はそんなところから酒家と想像したものでせう。

○何しろ清少は一般の女子と違つてゐるのです、當時の流行の物語日記などの範圍を脱して、寧ろ社會觀察批評的の一新正面を開いたものです。

○少納言を攻撃する人は、淫奔の人だとか忍び男の來る程をいたづら臥しに書きすさびたる反古に過ぎないとか、多慾の女だとか申ますが、私は時代を見て下さいといひたいのです。

○只今の御口の惡い姫御前の御作よりは、餘程御やはらかい謙遜なところがあると思ひます。

○清少は名も年齡も不明です、たゞ宮仕へにあがつたころは三十前後といふことは作中いづれも年たけたことをかいてあるからです。

○一寸今の老孃のやうに定過ぎたといふて悲觀らしく讀めるところもあるから、面白いのです、定とは丁年即女の美くしい盛り、過ぎは過ぎ去つた事故やつぱり中老になつたのですね。

○納言は獨身だつたのです。

○名ある文學者との交際の廣いことと今日の女流には一寸ないです。

ほんとうによく降りますのね、私もう〳〵厭になつちやいましたのよ。いくら雨の日が好きなあなただつて、好加減おあき遊ばしましたでせう、だから負け惜しみはなさいますなよつて、あんなに申し上げて置きましたのに……、また蝸牛みたいに御蟄居でゝか、もしお出かけ遊ばすなら、お傘をお忘れなさいますなよ、いつかみたいに袂を被つて駈け出してもしやうものなら、大事の大事の唐人髷が滅茶々々になつて了ひますからね。

「さんざお云ひ遊ばせよ、私だつてもう十七になつたんですもの……そういへば誰かさんなんて、十七だつて十八だつてあなたは一生私達の年上になれやしないんでせうつて仰有る。私もう〳〵敵ひませんことよ。だけど降參したんぢやありません。

「お肥りになりましたね、あなたは以前より日に焼けましたよ」逢ふ人が屹度この言葉をちやんぽんに云ふ、只でさへ醜くい私だのに、色が黑くなつて肥つてくる……おゝ厭……厭なこと……（鏡子）

愛情に生き愛情に死せよ

法學博士　田中穗積

一

萎微沈滯を極めてる、最近の思想界は、僅かに婦人問題に依て生きてるといつてもよい位である、最近思想界の中心勢力が全く婦人問題に移つて、識者は恰も寂漠たる冬がれの野に、偶々一輪の野百合を見出したかの樣に、時ならぬ問題に、非常なる興味を以て、また尤も眞摯なる態度を以て、此の問題を研究しつゝあるのは嬉しい事である、日本では恁うした重大問題が論議せらるゝ前に、先づ順序として必ずや歐米の學者の說を紹介する、先づ第一に京都大學の河田學士は其の著書「婦人問題」に依つて西洋學說の紹介と、自己の主張とを發表した、

河田學士の說によると、男女は元々、各自智識に於て、體力に於て、共に互角のものであつた、然るに同一の場所に二個の物體が同時に存在する事が出來ない樣に、恁うした互角の男女が圓滿に存在する譯には行かなくなつて彼等は何時しか爭鬪をはじめたのである其の結果女は男に雌伏され、壓迫され遂に今日まで、「女は弱きものである」とか「女は男に順ふべきものである」とかいふやうな習慣となり、道德となり、やがて其れが女性の一貫した思想となつたのであつて、決して男女間に先天的に强弱優劣の差別があつたのではないと論じて居る、けれども私は此の見解に對して多少の疑惑を抱かざるを得ないのである、

試みに世界の歷史に見るに、何れの頁にも未だ曾て男女間に爭鬪があつたとか、男が女を征伏して自分に順はせたとかいふやうな事實を見出し難い、また何れの國の傳說にも以上の事實を認め難いからである。恁うして天地草創の際より今日までの事實の正確な記錄ともいふべき歷史の何れの頁にも以上の事實を發見されないといふ事は、已に其の樣な事柄がなかつたといふ事を證明するといつても差支ないのである。

二

造物主が人類を男女の兩性に分けて造つたといふ事は、巳に人類には二つの天職があるといふ事を意味するものである、男女の兩性が容貌に於て、體質に於て大なる軒輊があるといふ事も巳に何等かの意味が伏在するものである、即ち男女の兩性は人類に與へられたるこの天職—つまり人類の發展に缺く可からざる、生殖と生産の中何れか自己の性格及體質に適するものを選んで其を全うするやうに出來て居るのである、而して男子は體質强健、性獰猛であり、爭闘的であり、野生的であり、まだ理智性に富んで居る故、種々な計畫を立てゝ色んな事業に從事に適する故、自然と、動的生活を營むやうになつたのである之に反して女子の美しい容貌と、きやしやな體格と、纖細な情緒とは巳に人の子の母として妊娠保育の任に當るやうに出來てるのである、まだ女子は男子の如く、動的生活、智的生活を營むにはあまりに、きやしやな體格と纖細な情緒と感能とを有して居るのである其れ故に女子は常に靜的生活、感情的生活を營むやうになつたのであつて河田學士のやうに女子は決して男子に征伏されて、家庭に幽閉せられ、萎縮した結果靜的生活を營み妊娠保育を以て能事とするに至つたのではない。妊娠保育といふ事が女子の尊重すべき天職なのである。



秋暑き江の島道や砂ばたけ　(月光)

三

日露戰爭に於て、日本の軍隊は露國の軍隊を征伏した、が日本人と露西亞人と一人づゝ滿洲といふ大きな土俵の上で角力をとつたならば、倭少な日本人は偉大な露國人に負けたに違ひない、また日本の乃木大將と露國のステッセル將軍と旅順で角力をとつたなら矢張り乃木大將が負けたに違ひない、然らば何故弱い人々の集團なる日本の軍隊が露國の軍隊を征伏したかといふと、それは日本の軍隊は戰略に於て、勇氣に於て露國の軍隊より優れて居るからである、それと同樣に女子が一般に體格が纖弱であつて、活動力が乏しい故に男子に比較して劣つて居るといつて輕蔑する人は日本人は世界の各國人に比較して體格が倭弱である故、最劣等な國民であるといふやうなものである。



御書院の瀧の掛幅秋立ちぬ　（秀峯）

強弱とは必ずしも優劣を意味するものではない。與へられたる天職を完うすると否とに依て優劣の別が生ずるのだ。

婦人に生殖以外に社會的政治的、實業的方面に活動せよ、奮鬪せよと要求するのは、單に求むるものゝ迂を表白するに止るものである。

四

女は噂と愚痴とに生きてるといふけれども、其は單に女の性格の一端を覘いて言つたに過ぎないで、女は矢張り愛情に生き、子供に生きてるのである、愛情の荒み行く日、愛情の滅び行く日、愛情に離れし瞬間、——は女子にとつては眞實なる生命ではなく、生命の淡い影である、朧なる幻影

である、精靈の宿つた、生命ではない、仙人は雲を餐し、霞を吸ひ、詩人は空想を喰つて生きてるといふが女は愛情と子供に生きてるのである、女子の愛情——處女時代には戀愛となり、夫に對しては貞淑となり、子に對しては慈愛となるのである。故に女の生涯から愛情を引き去つたならば空虛である。女は愛情を以て自己の生を充實せねばならぬ、愛情に荒み果てたる女の生活は全く空虛なる生活である。愛情に乏しい女は恰も日の光を閉して麗かな空虛を見せない北歐の冷酷なる冬の日のように、其處には寂びしい色と、闇い影とがある、——結婚してから八年にもなり、三人の子供まで生んで、夫婦間の愛情至つて濃かであつたのが



秋立つや高樓にあつて朝茶の湯（外子）

一旦過去に於て無意識の裡に犯した、自己の私印僞造罪が夫に發覺せられ、離婚を申込んで、夫ヘルマーが聽き入れないのを無理に三人の愛兒をふり捨て、「見ず知らずの他人の家には泊れません」と云ひきつて、出で去つた醒めたる女—「ノラ」の美しい顔にも憂愁の闇い影があつた。八年の永い間夫と同棲した家を「見ず知らずの他人の家」といつた「ノラ」は已に愛情の失せた寂びしい女であつた。

五

やつと乳離れした位の五つか六つの下げ髪の女兒でさへ、自分と同じ位の人形に嫣華かな粧飾ひさせたのを抱へて「坊や幾歳」とか「坊やは何せ泣くねんねえしろ」と子守歌を唄ひ乍ら

遊んで歩く、可愛いらしい女の兒が、自分が子供であるといふ事を忘すれて、人形を自分の兒と思つて可愛がるのである、恁うした五つ六つの女の兒にさへ、已に「子は可愛いもの」といふやうな、漠然とした、淡い感念があるのである。

「子供」といふ事が女の思想を支配する全部である故女は子供を生むと自分の夫に對する愛情が薄くなる事がある、また女は冷酷なる夫から忍び難い虐待や、堪へ難い屈辱をうけても「子供があるから—」とか「子供が可哀相だから」といつては忍びもし、堪へもするものである、「子供は可愛いもの」といふ事は、假令無敎育で道義の念に乏しい野蠻國の女でさへも倘且つ是れを意識して居るのである、世界中最も野蠻人と稱せられて居るアフリカのネグリトスの女でさへ子の可愛い事に意識してるのである。彼等は妻子を連れて海に漁に出で、暴風に遇つて船の自由を失うと男は自分の妻子を捨てゝ自分許り陸上に向つて泳ぎ出すのである殘された妻は降りしきる雨暴れ狂う風、逆捲く怒濤の裡にひそむ「死」を目前に見乍ら、手頼り少なの船の中に自分の子を犇と抱きしめて決して子供を離さないといふ話がある。



葉鷄頭蜘蛛の巣拂ふ殘暑かな　（鳴球）

六

女を冷酷なものにする勿れ

現代の何れの女學校の規則書を見ても「本校は良妻賢母を養成するを以つて目的とす」といふ文字を發見する事が出來る。是れを以て見れば即ち現代の女子敎育は良妻賢母の養成を以て

至上の理想としてる事が明かである、然し是等の理想に依つて敎育せられたる現代の女子は果して良妻賢母となつたであらうか、良妻賢母とは愛情に荒み果てた冷酷なる女の謂であらうか、良妻賢母とは名義の隅に隱れて、料理や洗濯にのみ日を送つてる高等下女の謂であらうか、私は良妻賢母の意味を疑ふものであります、現代の女子敎育は女子に強ふるに「勿れ」主義を以てして、凡て女子の思想や行動の自由を束縛するやうな消極的傾向があるやうである、其故現代式の敎育を受けた女子は、先天的に與へられたる自己の愛情を學校の講堂に捨てゝ來、否敎師の爲めに奪取せられて學校を卒業する時ははや「冷酷なる女」になつてるのである。此の意味に於て現代の女子敎育家は「愛情の強盜」である若し冷酷を欲する彼の藝術家の如くならば或は、現代的敎育を受けた「冷酷なる女」を欲するであらうが、藝術家ならざる吾々は、矢張り「冷酷ならざる女」を欲するのである。

尙現代の女子敎育家は、學校に於ける女子のみを知つて、家庭に於ける女子を知らない、またあまり知らんと欲しない、彼等は六ケ敷い學科や、實習に疲れた體を家庭に運んで夕餐を喫すれば、明日の學科の豫習をせねばならぬ、纖弱な體を持つた若い女學生等は、晝夜の勉強に疲れて、自然と朝寢勝である、やつと時間の間に合ふ位に起きて、下女の料理した朝飯を喫べ晝の辨當を持つて學校へ行く、これでは恰度自分の親の家に下宿して通學するのと同じやうな次第で何時しか自分と自分の家庭との間に幾許かの距離が生ずる事になる、恁うした女學生が卒業後結婚して自分で家庭を持つやうになると學校で學んだ智識を實際に應用する場合に、色んな矛盾や、疑問が生ずる事となる、其の時になつて「學校で嘘を敎つたのか知ら！」などゝ輕い疑問が頭の中に微かに閃き、やがてそれが「お前は學校で何を敎つて來た？」と遂に夫の強い力のある苦悩となる、これは實生活と乖離した學校生活から遥かに實生活に入つた女にあり勝な失態で、現代の女子敎育家は、學校即家庭、家庭即學校といふ事に注意しないからである。

服裝と文明の生活

米國教育博士　西山悊治

△思慮ある婦人の聲

米國を經て歐洲に遊ぶ者には、米國の派出な服裝を見慣れた眼に英國婦人の服裝は著しく地味に見えるが、足を一歩佛蘭西に入れ、巴里の婦人を視ると、流石は世界の流行の魁であると思はせる。其の交際社會に出入する女子の服裝は、恰も女優を盛裝させた樣に美しい。されば佛蘭西風の流行界を左右する力は大きいもので、米國邊の流行も、模範となるのは總て佛國で、紐育のテフイニーやワナメーカーなどいふデパートメントストアでは盛んに佛國風の新型を店頭に飾つて衆目を惹いてゐる。

けれども敎育あり、心ある米國婦人は決して此等の流行に囚はれることはない。

私の尊敬して居る婦人にヒリップ夫人といふ人がある。其の良人は鑛山業で巨萬の富を殘して數年前に世を去つたので、今は母のバーンと共にロングアイランド在のイーストハンプトンの別莊に平和な生活を送つてゐる。

一夏夫人に招かれて其の別莊に遊んだことがある。接して見ると非常に謙遜な貴婦人である。

一夕『金の價値と力』といふ事に就て話が出た時に、母のバーンが金力の絶對的價値を否定したのに對して『でも殆ど凡ての物は金で買へるぢやありませんか』と、主張した程米國的の所はあるが、更らに女子の服裝と流行の話になつたときには、謂ゆる社交婦人の流行を追ふに忙はしい輕佻な態度を嘲笑して、『女子の服裝も男子の如く平服、フロックコート、及び夜會服といふやうに、黑白の配合を以て禮服と通常服とを分つやうに單純なものにしたい』と言つて居た。

巨萬の富を有するヒリップ夫人の口から此の一語を聞いて意外に思つたが、これが思慮ある婦人の聲である。

△呉服店の忠實な奉公人

何處の呉服店のスタンプのある反物を仕立てゝ着なければ巾が利かないと思ふのは、流行に囚はれたのである。

敎育ある婦人、自信のある婦人は流行に左右されないで、之を左右して行く。呉服屋に盲從し、釣られ、喰はされて呉服屋に忠實な奉公をせずして、自分に適當な地合、色彩を選定して呉服屋に命じ、之を支配し利用して行くのである。

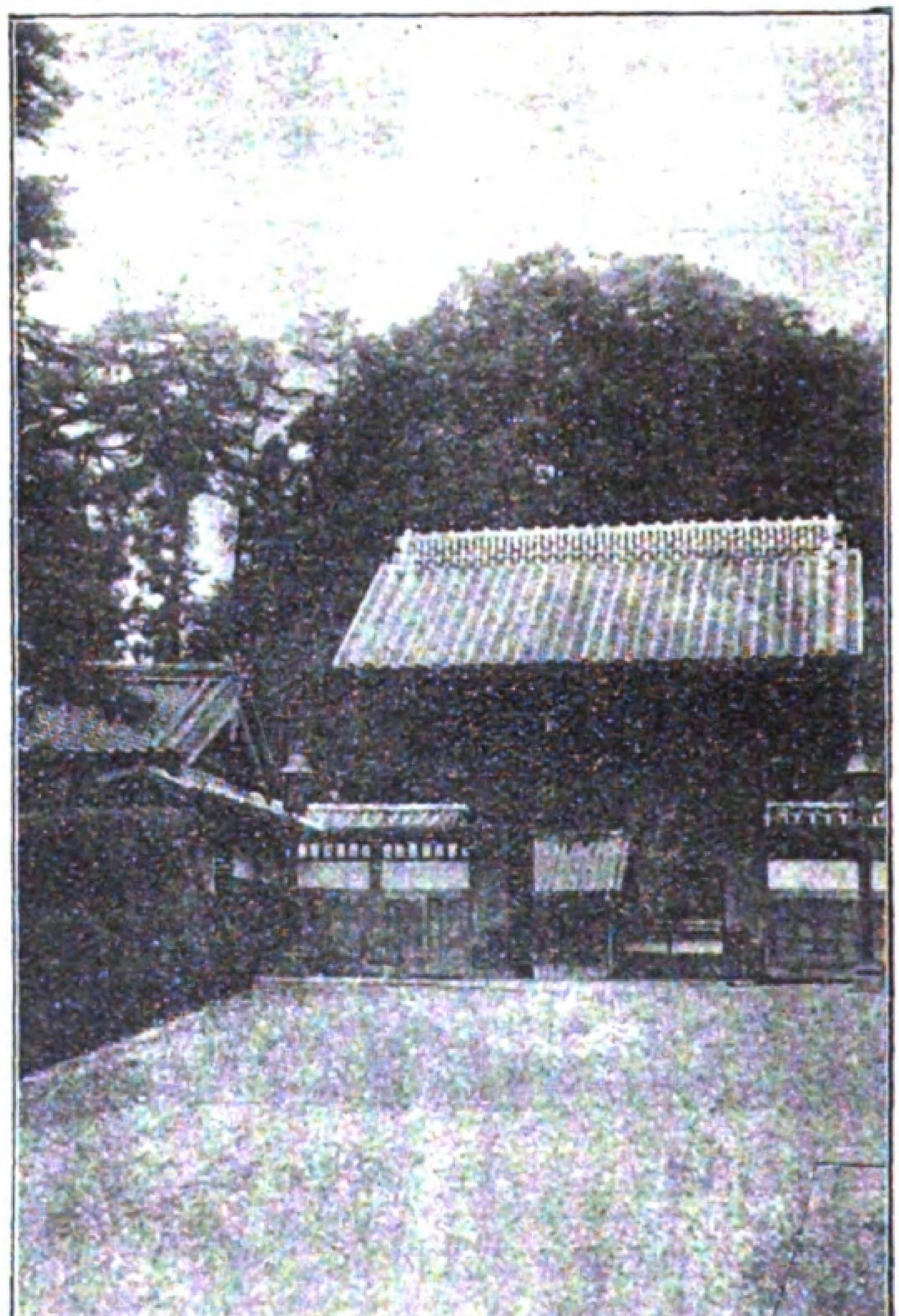


角あれば物のかゝりてむづかしや心よ心まろ／＼とせよ(最明寺時賴)

△夕立の中の美服の女

併し其れにも相當の程度がある。昨年の夏交通不便な片田舍で、氣の毒な婦人を見た。盛裝した年若い女が夕立の俄雨に逢つたのである。停車場へは遠し、車はなし、あはれ着たる着物を濡らさじと女は裾を端折つて命より二番目の帶を包むだ。そして男も斯くはすまじと思はるゝほど高く腕まくりして袖を濡らさじとそれぱかり氣にして居た。『衣服は婦人の生命也』との此の實例を眼前に見て、つく／＼思つた。足はぬれても裾や帶を助けたい、手や胸は雨に浸しても袖だけは濡らすまい、着飾つた絽の着物と博多の帶を雨にはあてまいといふのは、誠にやさしい心掛だが、これでは美服をつけた爲に、着物の犧牲となり、着物に打負けて其の奴隷となつたのである。柄にもない美服を捨てゝ相應の服を着用すれば、

斯くは着物に降參しなくとも濟むであらう。斯ういふ婦人には、自分で成程と悟るまで、幾回となく俄雨に會はせて、『汝虚榮服を棄てゝ相應服を着けよや。』といふ天の一大默示を聽かせたい！



毛利公爵邸長門（高輪）

△粗末服は卑屈である

但し私は粗服を勸めるのではない。質朴な英國の或る小學敎師に一人の娘があつた。兩親は娘に虚榮心を起させまいとて、其の服裝を極端な程構はなかつた。然るに娘は何故か人の集りへ出る事を好まず、そして内氣な小膽な卑屈な女子となつた。で父親がだん／＼と研究して見ると、粗服が其の原因である事を知つた。それは、此の娘が七ッ八ッの頃小學校の或會合に出席した時に、同年輩の娘等は皆立派な服裝をして居るに引かへ、自分は極めてお粗末な常服のまゝで行られ、其時穿めて行つた自分の右の手袋には破穴があつて、少女心に非常に之れを恥ぢて、遂に右の手を出し得ないで宅へ歸るまで洋袴のポケット深く隱して居た樣な譯で、此のとき人にひけを取つたくやしさと悲しさとが少女の小さき胸をひどく刺したので、遂にこんな卑屈な女子となつたといふので、之れに懲りた兩親は、次女の敎育には注意のうへ極端な粗服を禁じたといふ。

△囚はれざる婦人の服裝

故に女子の服裝は、派出に過ぎず、さりとて餘りお

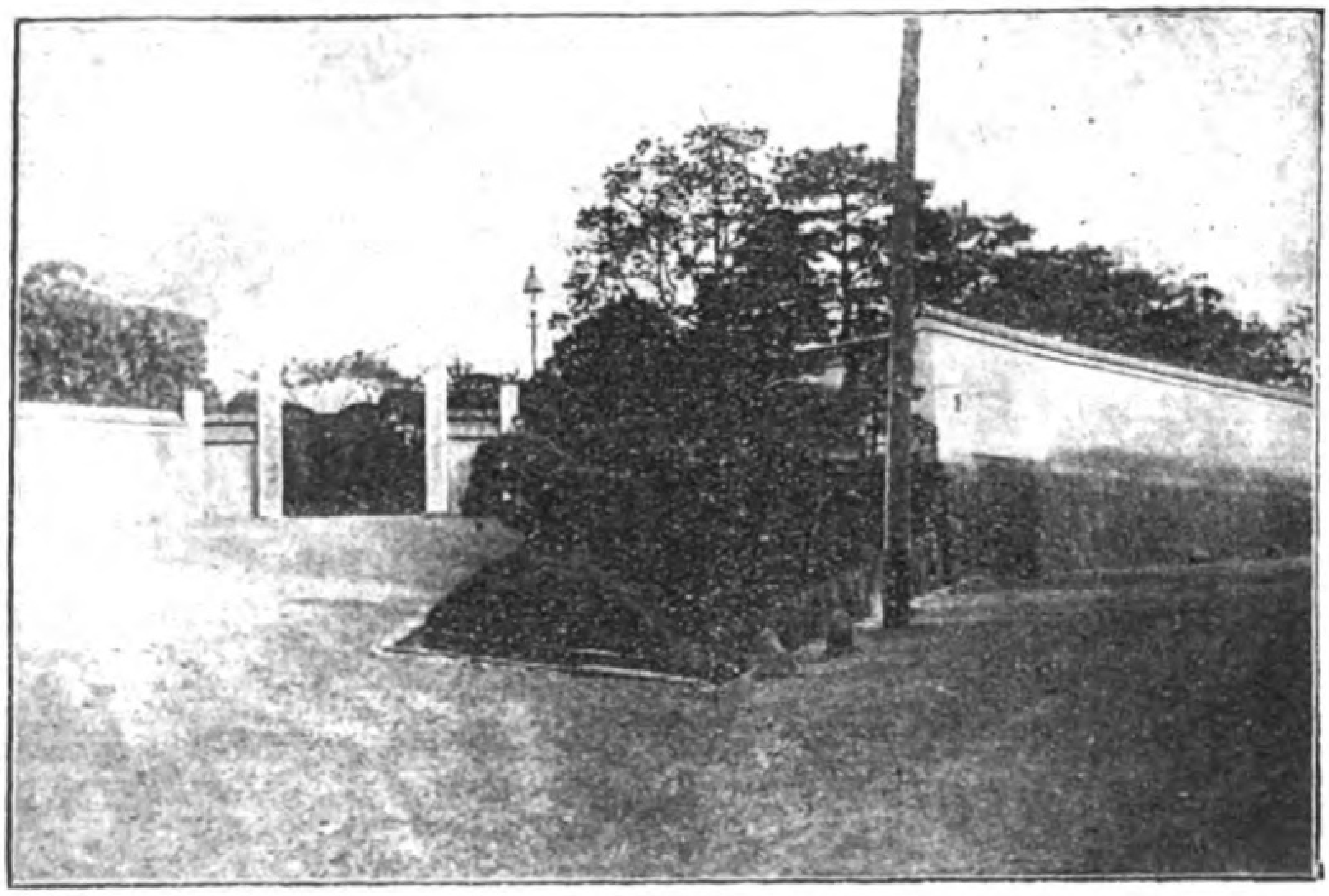
粗末に失せず、ハイカラでもなく、地味にも過ぎない、自分にふさはしい十人並、世間並の中庸服、相應服を着せたい。自分といふものを主として相應の服を選定するに於ては、決して流行には囚はれない。

美服は其の人の眞價を表はすものではない。愚かな人は服裝の修飾に心を痛め、賢い人は精神の修養に心を惱ます。文豪シエクスピアは、

美は女子をして誇らしむ、
德は人をして慕はしむ、
貞は人をして敬はしむ、

と、謳つた。

謎あり、曰く『銀の人と金メッキの人と、綿服に包まれた孝女と絹布を纏つたハイカラお轉婆娘と、果して何れを擇ぶべき』と。



九條公爵邸表門（赤坂福吉町）

若き女子が此の謎を正解して初めて相應服を着すべく、流行に囚はる勿れといふ私の言を味はひ給ふであらう。

△

さまよひ出でし夕月夜……

なんていふと大變好いけれど、私には歌もなく詩もない。忘れたんぢやあない。私の腦には、歌らしい歌を作つた歴史さへも持たないのです。

……七夕だといふ……。

月は日傘を被つて、星も三つ四つ。それも幽かだがまたゝいてゐる、やゝ明るい夜だ……

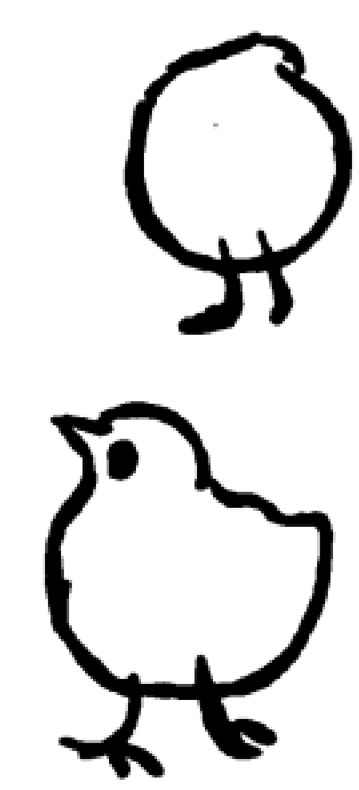
松の枝杉の木立、濃いも淡いも其儘の墨繪、それらぽつとりと描いたんぢやあなくて、墨跡をぼかしたやうな風に見える。

庭の面に色さへ見えず、白いのだけは仄かだけれど、あとはみな姿も影も一様に黒い。

夜は公平だ……

（花がたみ）

人體の營養組織



醫學博士　後藤元之助

△人の身體を作る元素の數

宇宙間の森羅萬象も、之を組成する元素の數は、現在發見されて居るところでは、僅か七十八九位に過ぎません。此の元素が色々に結付いて無數の物となるのであるが、其の物を大別すれば有機物と無機物の二つになります。有機物は總て炭素を含んでゐるから燃燒するが、無機物は中に燃ゆる物もあるけれども多くは燃えません。即ち灰の如きは無機物の例であります。我々人間の身體も、やはり無機物と有機物とで成立つて居て、其の元素の數は十五種と確定して居ります。此の定數以外の元素が體中に入ると、自然作用で體外へ排除して了ひます。或は肝臓中に銅分のあるのを見て、右の外に更に一種の元素を加へる人もあるけれども、其の間違ひなる事は生後餘り日數を經ない幼兒の肝臓中に之を見ない所を見ても明かです。

△人體に最も必要な成分

此の十五元素が種々に結び付いて、身體の色々の物を組成してゐるのであるが、之を生理的に觀察すれば、左の三種に分ける事が出來ます。

一は無機物です。此の中に、水、酸、鹽類、瓦斯等を含んで居ります。これらは既に十分酸化し盡したものだから、直接力の根源となる事は出來ぬけれども、尚ほ他物の酸化を媒介する作用を爲します。

二は力の根源となる有機物です。此の中に、蛋白質脂肪、含水炭素の三つを含んで居ります。此の三者は非常に複雜な化合體で、生理的燃燒に際しては、何れ

も熱を發して、手足の器械的動作を起す元となります。

三は力の根源とならない有機物です。これは生理的燃燒後の殘物で、新陳代謝の最終の產物だから、早晩尿等となつて體外に排除さるべき運命を有つて居るのですが、而かも絕えず體中に在るから、これも其の一成分と言つてよろしい。

以上の三者の中人體に最も必要なのは、第二の蛋白質、脂肪、含水炭素で、吾吾は之を食物から取つて居ります。人間は食はなくても生き得るけれども、それは一時的で、食はなければ其の間熱を作る爲に身體の一部分を絕えず壞はして、遂に死んで了ひます。蛋白質、脂肪、含水炭素は、生理的燃燒の爲に生ずる此の缺損を補ふて死を免れしむるから、之を人體の基礎物質と稱します。其の成分を調べて見るに、蛋白質は炭素、酸素、窒素、硫黃、燐等を含み、脂肪と含水炭素とは共に炭素、水素、酸素より成つて居ります。之を見ると、蛋白質中には人間の生活に必要な元素を總て含んで居るが、脂肪と含水炭素とには重要な窒素などがなく、そして人間の蛋白質の量は脂肪、含水炭素に比して遙に多量であるから、蛋白質が人間の主成分である事が知られます。



天の原夏の夜わたる月みれば八重の汐路も程なかり鳧　（久　胤）

△營養論の根本

吾々が營養を取るのは、右の三者を取るの意です。其他に尚ほ必要な物もあるけれども、其等は右三者に

附屬して來るから、殊更に之れを取る必要はありません。次に右三者を如何なる分量割合で取るべきかといふに、一體蛋白質のみで生存することが出來るのですが、人間は消化器が弱くて、人體に必要な蛋白質の全量を消化することが出來ぬから、蛋白質のみを食つて居ることは出來ません。人間は普通一日に七百グラムの蛋白質に含む成分を要するが、少くも其の七十グラムは蛋白質にて取り、七百グラムより七十グラムを減じたる六百三十グラムの成分は脂肪又は含水炭素を以て補缺しなければなりません。けれども量に於て蛋白質の一グラムと脂肪等の一グラムとは同じくはない。其の割合は蛋白質七十グラムに對して脂肪百グラム、含水炭素四百グラムを要し、此の割合が營養論の根本となるのです。

△嗜好料の効用



二宮貞子女史

其の外缺損を補ふでもなく、力となるでもなけれど、嗜好料は必然的に要します。これは味神經嗅神經の上に働き、又他の血液循環を司る神經上にも働いて缺くべからざる物です。之を蛋白質、脂肪、含水炭素に混じて食すれば善い感覺を與へます。其の外嗜好料の効は、食欲を高め、消化液の分泌を促し食物の消化を助けます。從つて精神を興奮せしめて神氣を爽快にし又間接には體中の臟器に好い影響を及ぼします。

△營養物の消化順序

次に蛋白質、脂肪、含水炭素が溶解する順序を申せば、口中にては唾液の爲に含水炭素は糖化され、胃中にては胃液の爲に蛋白質が溶解します。故に容積少く營養含量の多い食物を取れば、胃液を薄めずして以上の作用が益々完全に行はれます。次に腸に降れば膵液と膽汁とが混合して、膵液は蛋白質を消

化し、含水炭素を糖化し、脂肪を分解して血中に吸收せしめ、膽汁は脂肪の吸收のみを計ります。次に食物の殘餘、即ち消化されなかつた物や、吸收されなかつた物や、食物の粕などは大小便となつて排出されます。大便は肉ならば筋、血管骨等　植物ならば纖緯、脂等が排出されます。然れども消化されても十分吸收されなかつた場合、即ち腹痛の際とか腹部を冷したときなどは排出物に異例を來します。之れに反して小便は食物が消化されて血中に吸收せられ、全身を廻つて最早不要の水溶液となつた物で、之れに依つて體中の化學作用の如何を知ることが出來ます。


子供の散歩服

△料理の目的と効能

開化した人間は、食物を調理して食べます。其の目的は、食物を清潔ならしめ之れに心地よき外觀を與へ、其の風味を美くし、消化を容易ならしめる等の爲であります。之を實際に行ふには第一洗滌即ち最初に良く洗はねばなりません。果實や野菜などは熟すればバクテリヤが集り易いし、又諸人の手を經て來る間に危險物が附着するからです。又バクテリヤを培養

し蠅の卵の附着して居るのは肉類に多いから肉類は新しくなければよく拭ひ消化し難い旨くない腐敗せる所は取去らねばなりません。又馬鈴薯の芽を吹きかけた所には一種の毒があるから、これも注意が要ります。次は細碎即ち細かくすれば齒の勞力を省きます。即ち割り、潰し、卸し、挽きするのは此の目的です。大根、筍の如き纖維ある物は縦切りよりは横切りの方がこの目的に適ひます。若し其樣でなければ斜切りにするがよい。その次は烹物即ち熱を働かせる事です。煮、焙り、燒き蒸しするのは、有毒バクテリヤ又は寄生蟲を殺す爲です



大伴の三つの濱なみ吹よせて松原こゆる秋のゆふこゑ（契沖）

殊に焙るのは心地善き一種の香氣を作り、蒸せば其の物の内にある營養分を他に出さずして熱に合せる目的を達し煮れば一に煮出す事と二に野菜類等の澁味苦味を去る効があります。又植物性の物ならば外皮の細胞を破つて澱粉を出し、食物の内容を消化に接觸せしめます。

△飲食物の冷熱の度

食物や、飲料は理論上攝氏三十八度乃至四十度の温度が丁度よろしい所である。これは體溫と同じいからです。殊に乳吞兒は母の體溫と同樣の三十八度を最良とします。若し餘り冷い物を與ふれば嘔吐

か下痢を起し、胃腸加答兒の前兆となり、又熱い物を與ふれば、嬰兒の顏色は赤味を去つて蒼白色となり、疲勞の狀を呈します。大人でも熱き食物は心臟の鼓動を高め、咽喉食道等に慢性加答兒を起し續いて慢性胃加答兒又は胃潰瘍を起します。又極端に冷熱の食物を食へば、胃腸のみならず夥しく齒を害します。故に其の溫度は、熱きは攝氏五十八度乃至六十二度、冷きは攝氏六度乃至七度を限度とします。又大食すれば胃擴張を起します。斯かる場合には料理法を研究して、食物を脂濃く且つくどくすれば、量は少くとも猶は多量の感がして、病氣は段々よくなります。之を要するに、食物の調理に於て其の材料の割合は、一般に「動物性三分の一、植物性三分の二」が適當であります。（通俗學術講演會講話の大要）



子供の散歩服

△輕便支那料理

鷄の胸の肉を大切れのまま水より三十分間うでゝ纖に切り、別に玉子を適宜の數だけ割り、黃味と白味を別々の器にいれてかきまわし、双方に水少しを加へて薄め、一寸鹽味をつけ、蒸していづれも纖に切り、前の鳥と共に芥子醋醬油にて和へる、和へるとき靑味（はうれん草にても）を刻みまぜると殊に綺麗に見えます。尙は玉子を蒸すには、鳥をうでゝ居る鍋に味噌こしでもはめ、其の中に二種の玉子を入れた茶碗なり丼なりを入れ蓋をして置くと容易く出來ます。即ち支那料理の伴鷄絲です。

女（ぬの一）

女(ぬの二)

婦人へ相談

月やく滯又は不順

等を人知れず秘密に治療せんとするのが女の性癖である、夫故往々有觸れた無効の藥などに迷ふて後日の大病を引起す人が多い、此等の婦女に斯道大醫の方劑を仰ぐと同樣最も安心に快通流下する靈藥をお知らせするから、郵劵三錢を添へて申込みあれ密封にて詳報す

東京市京橋區金六町三番地　笹山むめの

◎產婦人科　◎小兒科

宅診　午前　往診　午後

病室並ニ產室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長　女醫　鷲山改姓　吉岡彌生

東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地

東京至誠病院　電話番町（二二五七）

月さらへ（内用）月經球

藥價　六十球入一圓　百廿球入一圓八十錢　三百六十球入三圓

不始末の藥品は諸種の病症をひき起す不合理の配劑はたゞ一邊の下し劑に過ぎず本品は最近の醫界に於て等しくみとめられたる強度の有効原料を配合せる月さらへ專門藥にして他の實藥の如く月さらへ藥にして子宮血の道に効ありなどと不合理の藥物に非ず其偉大なる藥力は如何に長き月やく滯りも心地よく通經す効能の後烈なると生學的配劑は確に本品の特長にして亦誇とする所以なり他藥を用ゐて効なき患者は乞ふ速に本品を試用して絶大の効力を實視せられよ

▲安全正確なる月さらへ自宅療法▼

申込所　大阪心齋橋筋周防町東二丁目　樂天堂藥院

らい病

▲全治無代報告▼

最近の醫界はらい病不治の病狀にあらずとされど立證的藥〃は果して何程かある他藥を用ゐて効なき患者乞ふ速に大阪南區笠屋町四八山田光治郎あて返信二錢封入申込あれ全治患者の實例を有する安全正確なる自宅靈藥と之に伴ふ養生法を無代報告す手後れて悔ゆとも及ざるべし明日と言はず今速に申込み前途の光明をひらへ疑ふあれば試みに二錢を捨たと思へ

せうかち、りん病新劑

ピースの出現

醫學藥學の進歩は遂にせうから淋病專門藥の大發見をなすに至りぬ内服藥は屢々胃腸を害し洗滌藥は屢々子宮病睪丸炎をひき起す事あるは注意深き患者の等しく憂ふる所なり此等副作用極めて少き良劑を求めんとせば本品ピースの外他に求むべき良劑なし自宅に居ながら安全に治療の目的を達し得んとせば世に幾多同効藥ありと雖も本品の外亦良劑なきは既に服用患者の公平なる斷定により明白なり世の同病者乞ふ速に本品を服用し其絶大なる効力に依り病毒を根柢より撲滅せられん事を◎藥價一週分六十錢二週分一圓拾錢三週分一圓六十錢送費八錢

發行所　大阪三休橋筋周防町角　振替：：大阪四六四番　山田樂天堂

女（ぬの三）

NOTE BOOK

新學期は近し須く精良なるノートを撰定せよ

新學期用

上製筆記帳

用紙は舶來紙の粋を抜き、罫線最も鮮麗にして各用途に應して數種あり表紙に瀟洒なる色クロースを使用し裝釘頗堅牢机上之を備ふるに體裁最も宜しく、而も永遠の保存に堪へ學生諸士の筆記帳としては比類なき精良品也

假綴筆記帳

小判相判の二種あり用紙の精撰に最も注意したれば使用中ペン尖の疾走に困難なし、内容罫線に數種ある事上製の如く裝釘亦堅牢なり上製筆記帳と相俟つて學生諸士の歡迎湧くが如く爲めに目下製造部は非常多忙を極めつゝあり

其他雜記帳

給表紙ラシャ表紙、大理石表紙等數種あり用紙及内容一定せず大小厚薄數十廣諸士若し其詳細を知んと欲せば請ふ端書一葉を投ぜよ然らば直に詳細目錄を送呈すべし新學期近し須く精良なるノートを撰べ

東京神田 文運堂 ■ 東京本町 博文館

女(ぬの四)

通經新劑
月やく下し
藥名メリーピルニ

此藥は子宮を痛めず如何程長き月經止りも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て峻烈なるも毫も身體に害なくたやすく下る月經不順より起る子宮血の道など全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別精製貳圓參拾錢

色の白くなる
バンドコロン溶液

本劑は歐米貴紳淑女粹士間に大高評を博したる新材料に依り組織したる新成液にして有觸たる白色藥と大に性狀を異にし本劑の力に依り皮膚の新陳代謝を盛にし且つ漂白性あるを以て其新陳代謝と共に次第々々に白色艶美となる 價A印並製壹圓 B印特製壹圓五拾錢

全治確證
ぢを治す
無痛全治する特効藥

本劑は近世醫學界の貴重なる新發見藥を以て座藥に調製したるものにして是れを肛門內に挿入するも少しも疼痛を覺えず體温の爲徐々適切に溶解して直接病患部に作用し穴痔蓮痔疣痔裂痔脱肛又痔瘻の初期等痔病一切に對して神効を奏す 半劑八拾錢壹劑一圓五拾錢特別製二圓八拾錢

根治確證 新治療藥
梅毒

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる新劑にして忽ち全身の毒も大小便にとり如何なる劇烈の梅毒●そさり●ふきでもの●よこれ●かんそう●骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必大効あり輕症は半劑慢性重症は二劑用ゐて奏効す 藥價半劑八拾五錢一劑一圓六拾錢二劑參圓

注意―各藥共に小包料拾貳錢とラビヨン●ハンドコロン●ペクネス●ぢの藥を御注文の方は外に小包實費三錢と都合十五錢藥價の外に拂込下され度 爲替は神田猿樂町局振宛

全治確證
わきが
新治療藥ラピヨン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉組織に吸收せられ毒素を潔淸驅逐し其組織内にある惡臭を止むる作用を有する最近發見の有力劑にして如何程劇烈の難重症も特別製を用ひよ忽ち臭氣を止め病根を全滅せしむ速に用て苦惱を脱せよ 內價七拾錢乙價壹圓卅錢特別製貳圓五拾錢

獨逸撰方効驗一夜に顯る
りん病
新治療藥キローン

本劑は最新の治淋藥にして急性慢性の淋病せうかちも速に輕快を覺え膿血次第々々に止り痛を止め輕きは一劑重きは二劑分惡性慢性には特製を用ゐよ速に奏効す本劑を内服すれば強度の殺菌防腐液となりて小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を驅逐し人知れず病根を斷絶す輕症用六十五錢重症用一圓廿錢特製頑固症用貳圓卅錢

毛のはへる
原名ヘグネス 毛髮生養液

本劑は最も進歩せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛根を刺戟し毛芽の發育を速にし完全なる毛髮叢生す又本劑は拔毛を止むる効能著しく又常に香油に混用すれば生際惡しきを直す●眉毛●口ひげ●其他すべて毛の乏しき人は速に試みられよ學理に適合せざる怪しき無名の賣藥に迷ふ勿れ 價並製壹圓卅錢特別製貳圓

新治療藥
らい病
ダービン發見 (DERVIN)

本劑は最近歐洲の大家が最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣繁館幾多の實驗に鑑み丸藥となしたる者にして其有効確實なる本劑に優る者なし試に一劑分丈け用ゐよ必ず大効あり一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製全十日拾圓●郵券三錢送れば說明書進呈す

理想的新劑
肺血精藥

本劑は故樫村醫學博士の處方に基き調製したる合劑にして根本的に病因を全治せしむる適中新劑なり末期の患者即ち既に肺臓の缺損せる者に向ては病の進行を止め患部を癒合せしめ初期の人は七八日目より効顯れ一二ヶ月にて全く快癒せしむ●肺結核●肺炎●肋膜炎●喀血其他呼吸器病全治半劑壹圓五拾錢壹劑貳圓八拾錢貳劑五圓特製七圓

專賣 東京神田區小川町四十
オリエンタル藥館

女(ぬの五)

新輸入 美容料 肉體

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色に變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服新劑 **サーサパリラ**

英國ロンドン、ベーゴイン製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑固なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓貳拾錢也

色白特効 ペーアス石鹼

此石鹼は**世界第一等**の眞品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白く**し、**粗糙質**を淨するは此石鹼獨特の靈効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香顏部として身體に附着し來るは館主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御註文を望む)

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を[illegible]全[illegible]秘訣通流[illegible]

下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月も滯りたる[illegible]もキレーに流下す又特別製分を運用せば半年以上の月經閉止[illegible]**血塊**にても必ず完全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續々怪しき**類似僞藥**を顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見[illegible]

從來醫藥賣藥百方手を盡し全治せざる腋臭[illegible]を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に去れ[illegible]別製を用ひよ忽ち**病菌を全滅**し惡臭[illegible]是れ他に[illegible]本劑一種獨特の**靈効**なり速に試み**病苦**を脱せよ[illegible]す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲[illegible]症根治分同上[illegible]▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割増しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

女(ぬの七)

最新發明 肺病。肋膜 新藥に就きて

獨逸ドクトル 高平氏報告 （醫事週報二一七號報告再錄）

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱に本藥應用後は常温下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を増進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞贊により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）女子三年前發病遂に末期重症の**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盜汗動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々喀血し非常に羸痩す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥蓐せしもの屋外に出で日光に暖をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を増加せり

●兵頭某卅一歳男**肋膜炎**（喀血無し肺病初期の疑あり）胸部痛み食不振身體倦怠盜汗。咳嗽。頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歴を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績	患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治	龍谷	男	兩肺結核末期	無効
中川	男	肺尖加答兒	全治	宮本	女	結核性肋膜炎	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	微効	岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
笠井	女	肋膜炎	全治	阿崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治	神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名譽の發明藥大にして報告する義務あるを信ず又効力多**喀血**と其豫防に可驚効あるとにして持長服藥するも副作用なく殊にたるを以て醫藥の傍ら服用最も妙ならん吾人は病者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むと共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す ●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく（醫者にも療法あり）遠慮なく送料郵券二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製藥所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代實の得らる・故是非一讀あれ益する處多からん、之れにより全治の幸福を得らるべし

藥價

壹週 金二圓
貳週 參圓九十錢
參週 五圓七拾錢
四週 七圓貳拾錢
五週 九圓

東京神田竪大工町 療養院製藥所

村尾明治堂

電話本局參千七百五十二番（私書函神田）
振替口座東京壹四參壹九番（本局第三號）

生田流 井上胡蝶著

箏曲新譜

最見安き琴の譜本

改訂再版 **卷壹** 定價金壹圓三十錢送料六錢代金引替十六錢增海外代金引替三十四錢增

四季の花 門松 鶴の聲 黑髪 六段 亂 八段 金剛石 夕顏 新高砂 越後獅子 千鳥 茶音頭 春の曲 小督の曲 以上十五曲

卷貳 定價送料共金壹圓十錢代金引換十四錢增 海外代金引換三十四錢增

春日影 朝外出 六段 前歌 難波獅子 末の契 松竹 梅 殘月 秋風 八重衣 飛燕の曲 以上十曲

卷參 定價金壹圓十錢送料六錢 代金引換十六錢增 海外代金引換三十四錢增

松蟲 萬歲 八千代獅子 雪 九段 巖上の松 新雪 月花 凱旋喇叭之曲 四季の詠 夏の曲 秋の曲

本書の特色

一、本書は各調子の合せ方を初め音符休止符左右手法其他彈琴に必要なる事項は悉く記載し行文平易說明懇切を極むれば師に就きて省接習ふが如し

一、本書の樂譜は西樂に適せざる人にても容易に彈奏し得らるべく且つ全部言葉記號を附記しあれば少しも音符を解せざる人にても直に了解せられ自然の間に完全なる樂則を覺え得らるべし

一、本書の購求者は萬一不詳等の節は返料添へ發行所宛照合せられなば無料之が應答をなすべし

苟も琴を習はんと欲する人及び習ひて忘れたる人は必ず見給ふべし

發行所 福岡市外馬出一一〇三 箏曲通信教授所

女（ぬの八）



西洋の日常生活（二）

中村春雨

西洋の日常生活の事は、普通の日本人が大概心得てゐるやうに見えて、實は存外知つてゐない事が多い。長時日を西洋で暮らした人には一向平凡で、無趣味だと思はれてゐるもの丶中に、却て事新らしく、未だ海外に出でぬ日本人に取つて參考にもなり、又智見を開く材料になるものがあるかも知れぬから、覺束ないながらもその西洋の平凡な事柄を並べて見よう。

△鍵に託した生活

西洋の家庭は、商店などは別として、普通の住宅になると、必ず數階の段楷子を昇つてから戸口がある。そしてその戸は常に鎖されてある。來客は鈴を鳴らして案内を請ひ、内から開けてくれるのを待つてゐなければならぬ。大都會の地に行くと、戸口の傍に電話器があつて、それへ口を附けて、應答の後、獨自にその戸が開くやうな機械仕掛が出來てゐる。家内の人々が出入する際には、皆が各自に鍵を所持してゐて、それを使用するのである。この鍵は唯戸日用のもの許りでない。家の中の廊下の左右に、幾つかに分れた室の戸に、一つ〳〵、錠が下りる事になつてゐるから、又それぞれに充欲るものが入用なのである。例へば客室・食堂始め夫の室、細君の室、小兒の室、下女の室、下男の室と云ふやうに、別れてゐる室毎に、鍵が附き物で、それを始終、ズボンの隱嚢にガチャ〳〵させてゐなければならぬ。だから西洋は「鍵に託した生活」だなどゝ言はれてゐる程で、日本人が西洋に行くと、從前の日本風の、開け放し的の生活に慣らされてゐるから、當分は窮屈で、何んだか陰氣な、淋しい居心地がする。

時偶、自己所持の鍵を卓の上などに置き忘れて外出し、夜更けて歸つて來ると、戸口を開ける事が出來

ない。家の主人など呼び起さうとしても、容易に起きて呉れない。思案に倦んで茫然、何時間立往生するといふやうな事も珍らしくない。そんな際、若し日本流に、傍の鐵欄へ乗つて窓を明けて潜り込むやうな藝當をやつたりなどすると、賊と認められて、ピストルで射殺されても仕方がない事になつてゐる。家の出入に鍵の必要なるは兎に角、同じ家の中でも鍵を手離してゐては不都合を生ずる場合が少くない。例へば寢衣なんかで浴室へ入つて後、室へ歸らうとすると、戸が開かない。鍵は室内へ打捨てゝある。主婦を呼んで、開けて貰はふにも、自分の服裝が服裝だから、面が赤くなる。大マゴツキにマゴツイて、廊下をウロ／＼して許り居り、再び大汗になるといふやうな滑稽も演せられるのである。

△往來から座敷へ

又家へ上つて行く際、履物を脫ぐやうな習慣の附いてゐる日本人の考へでは、如何に靴拭の上で擦るにしても、外路を歩いた靴のまゝで座敷へ通るのは何んだか汚ないやうに感せられるが、これは以前にも一言した如く西洋の道路は石や、アスハルトや、又贅澤なのになると、大理石のモザイックなどで、ピカ／＼光るやうに綺麗に出來てる上、掃除人夫が附いてゐて、朝夕掃除して廻つてるのだから、日本の家の廊下や、緣側を歩くのと大差は無い。加之、雨など降つても、人道の上へは溜り様がない。イヤ、却て雜巾掛でもしたやうに、つる／＼して、踏み滑る程になるのだから、靴は濕る位の事で、踵に泥などは附けやうと思つても附くものでない。靴拭で濕氣さへ除れば卸立のやうに綺麗になる。又廊下や、室内に敷いてある毛氈、緞通などの敷布は毎朝めくり擧げて、塵埃をはたいて、掃除の手が隅の隅まで行き渡るので、少しも汚いといふ感じの起る餘地は無いのである。掃除と云へば窓の硝子なども人手を傭うて曇の見えないやうに拭き立てさせる。米國の桑港邊で、日本の華族の苦學生が四階か五階かの窓口から轉落して大負傷をしたといふ何時か

の新聞記事があつたのも、この硝子拭に傭はれて、一枚五仙位の賃錢を得んとした際の出來事である。

△身邊の清掃

日本人は立派な洋服を着てゐる癖に、カラーや、カフスは薄黒く汚れてゐる位な事は平氣だが、西洋では、この點は餘程神經過敏である。毎日でないまでも、二日目三日目には必ず取替へて常に汚目の見えない、白く立つてゐるのを禮儀とし、又自分でも心地よく感じて



ゐる。ネクタイなども折目正しく、皺の見えないやうに注意して常に取替へる。それからズボンにキチンと筋が入り、上衣にも折目の附いてゐるやうに何時も鐵鏝をかける事を怠たらない。而して出入の際には、必ずブラッシュを用ゐて、羅紗の毛穴に入つてゐる細小い塵埃を掃除するのが習慣のやうになつてゐて、出來る丈、身綺麗に〳〵と心掛ける。

乍併婦人服は左の手で褄を取つても裾の一端を引

張つて歩く事になるから、塵埃が附着して隨分汚れるこれはいろ〳〵改良論者が出て來てゐる。室内へ入れば、婦人は大概外衣を取つて、室内着一つで身輕になつて立働いてゐる。

一週の中、火曜とか、木曜とかを、洗濯日に割當て朝から一日掛りで汚れ物を洗濯する。手の廻りかねる白シャツとか、カラーとかいふ種類のものは、市中の洗濯屋へ託するのもある。

△衣服の新調

又、衣服の調製となると、これは日本のやうに手輕なものは家族や、雇女の針仕事で出來上つて了ふといふ流儀には行かない。綻を縫ふとか、釦を附けるといふ位が、婦人の裁縫の嗜みで、その以外には、毛絲でシャツの下着を編む、靴下を編む、又は一寸とした繡箔をやる位が家庭に於ける針仕事の範圍である。衣服となれば洋服屋へ註文するか、若くは仕立てゝあるのを買ふか、何れかにしなければならぬ。併し註文する方は、恰度はシックリ合ふが、値段が嵩むから、大概な處は、有合はせのものを買つて濟ます。それも何番何番といふやうに、型が分れて、それ〴〵寸法が見積つてあるから、大した不體裁はない。尤も米國で小兒の着る洋服を、日本の大人が買つて、漸と恰好が附いたといふやうな滑稽談もある。兎に角、分業がかくまで發達してゐる西洋では、日本の如く針仕事を以て娘を責め、それを嫁入の資格の重大なるものゝ一として數へ立てるやうな必要は自然無くなつてゐる。

△帽子のピンのはたらき

それから西洋婦人の冠つてゐる帽子は巴里の本場の流行につれていろ〳〵變遷があつて、先頃、日本の虛無僧の深編笠式のものが全盛であつた當時には、新年雜誌に隨分惡辣なポンチ繪などが現はれ、貴夫人、淑女連の美しい眉を逆立たしめたものだが、昨今は太分小く低くなつたらしい。兎に角、あの帽子に鳥の毛を附けたり、又は造花を飾つたりして派手に拵らへてあ

るのは、日本の娘が頭に翳して喜んでゐる花簪や又は奥様連、嬢様連の髷を飾つてゐる手柄などに相當する。隨つて、途中、男子に逢つて、一方が帽子を取る場合にも、婦人の方では、そのまゝで頷いてゐて何の不都合もない譯である。殊にあの帽子を束髪の上に附着けるには、長いピンを幾本も用ゐなければならぬ。着たり脱いだりするのは手數が要る。寄席や劇場に入つても、あのまゝでゐるので、他人の見物の目障になる。いろ〱



苦情が出るが、婦人の云ひ分を聞けば又道理だと同情すべき點もあるのである。それから又帽を留めるピンは、婦人の護身の武器にも代用されて、暴漢の襲撃を受けたりなどした場合にはあれを拔いて逆手に取り、處嫌はず突き立てゝ相手を撃退する。恰も日本婦人が簪を拔いて男子の眼を刺すといふやうな工風をやるのと一般である。

△日用品の供給

衣服方面の分業は、食物の方面にも行はれてゐる。即ちパンは毎朝パン屋から配達されて來るので、一日分の使ひ殘しは、直に捨てられて了ひ、常に柔かな、舌障の善い、新鮮なもの許りを用ゐるのである。誰かが日本でもこの流儀を應用して、大きな飯炊會社を造り、幾個の大竈で飯を焚いて、軒別配達したら、費用も省け、又手間も省け、主婦や下婢は大助かりだらうといふ意見を立てゝゐたやうに記憶するが、暖かい米の飯には、かゝる簡便法が實行されさうにも思へない。

野菜や、肉類などは、配達して來るのもあるが、大概主婦が籠を提げて、自分で市場へ買ひに行く。値段は一定して、別に駈引がしてないから、自分の思ふ物を撰擇して、勝手に買ひ取る事が出來る。この様にして牛、豚、羊、山羊などの肉は毎日缺さない。鷄、家鴨、キチンなどは稍御馳走の方である。馬鈴薯、玉葱、キャベツの類は日本の臺所の芋、大根、胡蘿蔔などの格である。牛蒡は西洋人は喰へない物としてゐるので米國邊では、野生の牛蒡が澤山あるが、一向顧みやうともしない。それから小さい紅大根へは鹽を附けて、生のまゝで噛る。林檎やバナヽや、葡萄は、食後の口直しに附き物だが、日本の柿は西洋で見受けない。又杏はあるが、梅はない、桃と栗とは澤山賣つてゐる。それに蜜柑類の美味、甘味は西洋の特色であらう。果も大きくて果汁も迸る許り、舌の上で湧き出して來る。

云殘したが魚類は一體西洋人にはあまり嗜好されない。尤も蝦魚だの、蟹だの、牡蠣だのは上等料理にも用ゐられて、珍とせられてゐるが、その他の鰭物は食卓に上さるゝ事が至つて稀である。唯、金曜日には定つて魚を食ふといふ習慣がある位の事である。八足の章魚の如きは、惡魔魚といふ名さへ附いて忌み物になつてゐる。

△姿見鏡の前

扨てザッとかゝる事情と狀態との下に成り立つてゐる西洋人の家庭に入つたとして、一日の生活が如何にして行はれるか、それを掻摘んで見ると、朝、目がさめて顔を洗ふには、その室内の片隅の、玻璃の姿見鏡の前に据ゑ付けられた洗面臺に寄つて行けばよいので、寢衣のまゝ臺所や、井戸側へ立出るといふ必要は毫末もないのである。その洗面臺には手頃な水瓶へ毎日清水を入れ替へるとか、若くは水道栓を捻ぢれば、水がいくらでも流れ出すとかいふ仕掛にしてある。無論室の戸は鎖されて、誰も見るものはないから赤裸々になつて、冷水摩擦をやる。室内の溫度は一定してゐるから、少しも寒くない。随つて毎朝それを實行するのに



毫も僥倖でない。否若し怠れば不愉快な感がする。それは西洋では浴室のない家にゐると、一回二十錢とか三十錢とか、若くは五十錢以上に當る入浴料を拂つて湯屋に行かなければならぬ。自然月に何回といふ浴しか取る事が出來ぬ。西洋人は湯に入らぬから身體が不潔だと日本人は云つたり、思つたりしてゐるが、彼等は毎朝、冷水で體を擦つてゐるから、決して不潔ではない。皮膚の上の汚れた垢はそれで結構取れて行く。日本人のやうに湯に熱養つて、眞皮まで擦り剝ぐのは却つて衛生的ではないといふ話も聞いた。

又、この洗面臺の鏡の前に立つては、毎朝、顔を剃らなければならぬ、皮砥で剃刀の刃を立てゝ、頰から顋から、つる〳〵滑るやうに小い毛を落して了はなければ、日課が濟まぬ。日本人の考から云ふと隨分面倒臭いやうだが、慣れて見ると剃刀も巧みに使へて來るし、剃つた跡は誠に氣持が善い。市街へ出て見ても、通る人も通る人も皆、顋や頰には毛らしいものはない若し一分でも二分でも延びてゐたら病人か、乞食の類と思へば大した間違はない。

△寢室の設備

それから寢臺は蒲團のぬけ殼そのまゝで打捨つて置けば善い。それは後から主婦とか若くはその係の婢が來て綺麗に調へてくれるのである。寢臺は疊み込んだりするのは安つぽい方で、年が年中、床の敷つ放しなのである。家庭には特に寢臺室の設けが必要になつて來るのも、常然の事である。それから寢臺の下には陶器の便器が備へ付けられて、夜中の小用を達する。これは男でも女でも皆、然ういふ習慣なので、これも朝々、床番のものが始末に來て、後で洗面臺の下へ藏ひ込んで置く。日本人には始め一寸妙に感ぜられるが慣れると至極便利になつて來る。

次には云ふまでもなく寢衣を脫いで、下着から白シヤツ、ズボン、上衣と重ね、鏡の前に立つてネクタイの結び目を注意し、又、サツと衣服にブラツシユをかける。靴は毎朝ピカ〳〵光るやうに磨いたのを履かね

ばならぬ。日本でするやうに、三日目、四日目、若くは一週間月といふやうな、不精な眞似は決して出來ない。

△朝餐の樂み

朝餐の卓に向ふ時間には、皆が顏を揃へなくても、片ッ端から濟ませても行く。尤も一家族となれば、夫婦親子がグード、モーニングを呼び交はしつゝ皆椅子を列べてコーヒーを啜り、パンを劃き、團欒の樂を取るのは勿論である。



併し朝食は日本と同じく至つて手輕に濟ます。獨逸などは殊に然うで、パンとコーヒーと丈で善い事になつてゐるが、米國邊では麥粥に、燒肉、煮卵子などを附けて、大分奢つてゐる處もある。このコーヒーを煮るのは、日本で茶を沸かすのと同格で各戸の庖厨に備へてある瓦斯ストーブの靑い火は最初にコーヒー沸器の底を暖め出すのである。甘い牛乳と巧みに混ぜられた熱い一杯のコーヒーは、香ばしい匂が鼻先に漂ようて、何とも云へぬ美味を感ぜしめ、朝の精神を興奮せしむる事、日本の朝茶に立優つてゐる。



第三者

松平鏡子

既婚者の君二人、未婚の少女一人、小高にふくらんだ靑草の上に坐して物語る。

野薔薇の枝、撫子の花、濃やかに三人の傍を圍む、ついと立つた榛の木の繁みを通して、さしこんだ、强い光線は、六つの袂に斑な影を落してゐる、――靜かな夏の野の晝――。

A、沈鬱な面をや、伏目に「私ねえ、もう眞實にどうしたら好いんだらうと思ひますのよ、だつてお姑樣の御機嫌が如何しても取れないんですもの……」

B「とれなけりや取らないと好いわ、何もそんなにへコヘコするにや及ばないぢやありませんか」

A「だつてさうはゆきやしませんよ、Bさんはいつもさう仰有るけれど、考へても御覽なさいな、そんな事が出來るかどうか……嫁と姑との間には大した懸隔があるんですよ」

B、快活さうに笑乍ら「懸隔があるんですつて！ホヽ其樣なものを置いとくからいけないんだわ、私なんか、同じ人間だと思つてるわ」

未婚少女K、無邪氣らしく「また始まつたわ、AさんとBさんの姑論が……私みたいな門外漢には面倒臭くつて落膽しちやつてよ」

B、手を上げて制しつ「およしなさいよ、貴女こそ交返しはやめて頂戴よ、貴孃は只謹聽して居れば好いんです、私のより、Aさんのこそ身に沁みて聞いて上げなくつちやいけないわ、まづ淚をぽろ〳〵溢して……」

K、頭髮に挿した大きいリボンに一寸さはつて見て、「だつてねえ、まあお二人の云樣が全然違つてゐるんでせう、さつぱり見當が附かなくつて困るわ、一體ど

つちを信じたら好いんだか——敎へて頂戴よ…え？」

B「どつちも當つてゐるんですよ、ホヽヽヽねえAさんさうですわね。」

A「Bさんは樂天家だから羨ましい、私なんぞにやとてもすましちやゐられないの！思ひ餘つてお話したつて、Bさんにはちつとも大した事ぢやあないんですもの……いつも〳〵……冷評はもうよして頂戴！　わたしなんか朝の御挨拶する時だつて、お話のお相手する時だつて、もう〳〵……神樣さうね、怖ろしい神樣の前に立つて居るやうな氣がして、上をむく事さへ出來やしないわ」

B「小さい氣を持つちやあいけませんよ、大きく——大きく——、時によつては呑やうな氣も大切なんですよ、甘へても見たり、たまには笑談も仰有やいな、貴女みたいに大切に〳〵、國寶の佛さまみたいに奉つておかれちやあ、姑樣も御不平なのよ、たまにや反抗もなさらなくつちやあ……」



A「私だつて平常さう思ふんですよ打ち解けよう打ち解けようと、お顏を見ない時は思つてゐるけれど、どーンとした、お聲を聞いたり、脊の高いお姿を見たりすると、もう怖くつて身が震へさうだわ。甘へるなんて、夢にだつて……夢にだつて……」

B「私なんかもう、からかつて見たり甘へて見たり、時にはおしつけるやうな事もしてみせるんですよ、始

は難かしい姑だつたけれど、こつちで受け流して知らんふりをしてゐるから、この頃ぢやあ大抵の私の云ひ分は通り升。陰での評判は善いか惡るいかしれないけれど、下からばかり出ろなんて私の氣性ぢや出來ないことなんですもの、これからはほんとに優しくして上げるつもりですわ、そしてすつかり仲直りなの、……誰にしてもね、威嚴がなくつちや駄目よ、嫁は嫁としてある程度まで、人のさし入る事を許さぬ――」

K「怖いわ、Bさんみたいな嫂様でも持たうもんならぶんなぐられて了ふかも知らないわね、餘りよ、それぢやあ……」

B「そんならKさんはAさんのやうに苦しんでるのが好いつて仰有るの、私は眞平よ、私は少位惡く思はれても心配しない方が好いんです、――さういへば岡崎さんね、あの方のお姑さまはそりやお優しいんですつて！もうまるで眞の親子のやうだつて噂よ、岡崎さんなんかは裏表なく仕てらつしやるんだから罪はないけれど……ホラAさん横井さんねえ、彼方はお姑さんにも學校流の交際術を應用して、そりやあ大もてなんですつて、それもいゝけれど、陰へまはつて舌を吐くんだからやり切れないわ、一つの家にゐて陰陽があるなんて……お姑様の罪ばかりぢやあなくつてよ」

A「それでもそれだけの勇氣(？)がおあんなさるから豪いわ、仲田さんはお一人で世帯廻しが出來ないつて私の事を羨やましいつて仰有つたけれど……」

K、勢よげに「私が少しお話しませうか、あのね桂井さんの嫂さまつて御存じ？あの方は大變強くつてねお姑様が泣かされるんですつて？、いろ／＼だわ。お嫁さんが惡いんだかお姑さんが惡るいんだか家のうらのMさんの許ぢやあ、そりや始終喧嘩なのよ」

摘むだ草の葉を細かに／＼千切り乍ら、B「Kさんは見たつて聞いたつて、只上の皮ばかしの事を思ふて見るんでせう?!、そして他に少しの事でもあれば、すぐ忘れちまつて、もうそのことに就てはしみ／＼考へるんぢやあないんですもの、Aさんや私の樣に實際に當らなくつちやあ話にならない」

K「私實際に當るのは怖くつて厭なの！　話になんかならなくも好いから私はいつまでも何日迄も此儘で居たいわ、Aさんみたいに御機嫌とる事も根氣よく出來やしないし、Bさんのやうに威壓するなんて！　そんな勇氣は到底ありやしないんですからね…私はもう大きくなりたくないわ」

B、事もなげに「ホヽヽヽ、大變悲觀してるのね、姑つて怖いものだ恐ろしいものだと思ふからお顔色を伺つたり、眼の動きやうばかし見てるんだわ、怖いといふ心より先に、なつかしいつて感じが起らなくつては…Aさんだつてさうだけれど…A様は程度を失なつてゐらつしやるんだもの…」

K「Bさんはお氣になさらないから、それだけお徳なのよ、思ひつめて一所懸命にその姑の爲に盡して上げやうとすれば、怖ろしい眸の閃きも何も、耳にも目にも入らなくなるつていふのね。私にはまだ好く分らないけれど、ある程度迄は、當方の心がけ次第でやさしい姑にすることが出來るつていふんでせう？　Bさんそうなんですねえ」

B「いつになく鏡さんが身にしみて聞いたものね。それでもまあ、それ丈わかればいゝわ、まだ他にも云ふことはあるけれど…Aさんみたいな溫順しい優しい人が、でなくつちやお氣に召さないなんて筈はないんですもの、Aさんは先刻も仰有やつたやうに、怖い神樣だなんて思つてゐらつしやるからだわ。お姑さんですもの、我儘の少し位は云へる樣にお成んなさいよ、可哀想に…」

A「Bさん難有う！　私も氣をつけますわ」、誠眞を以て人に仕へよ」…今日の一時間は、私のために尊い寶でしたのねえ」

B「…Aさん、この次には二人とも幸福なる妻としてお目に懸りませう、私にだつてつらいことの數々は算へ切れぬ程にあるんです、他人には一々云やしないけれど…私も優しい嫁として、貴女も快活な嫁として、この次は、樂しい身の上でありたいわねえ」

A「私も早く歸宅つて、今日の寶を實行してみたくな

りましたわ」

K「歸りませう!?、歸りませう!、Aさん!、Bさんも歸宅りませうね、まあ頬の火照ること!、木陰でも夏の晝は暑い。影があんなに廻りましたよ、私も母様の許へ歸り度い!!!!」

K「私達には尊い時間も、Kさまにはつまらぬ時間でしたわね、ちやあそろ〳〵歸りませうか!さあBさん!」

B「それでは第三者の君!」

K「ホヽヽヽ、ひどいのねえ」

埃りを拂つて靜かに立ち上る、野の消えた森の中から農家があるのであらう‥‥長閑やかに鷄が鳴く‥‥。

女子大學 輕井澤 夏期寮訪問記

八月二日の黄昏頃、愛宕山麓の女子大學夏期寮を訪れた。場所は淺間山、離山、妙義の連山を一眸に集めて、輕井澤でもいゝ所である。寮舍は三井別邸の構内に在つて、二階建の立派なもので、庭園も廣い。丁度明日歸京と云ふ前日なので、三々五々家づとの秋草を手にして寮舍に歸つて來る學生も見受けた。入つて行くと、鈴村寮監が案内されて丘の上の別邸で成瀬校長に逢つた。(K生)

△夏期寮の目的

此の夏期寮は東京でも開くが、來年卒業すべき者即ち三年生丈けは每年輕井澤へ來るので、今年も例年の如く此地に開いたのである。尤も例年は二回開くのを、今年は七月十三日から八月二日まで三週間の第一回を以て閉ぢることになつたさうな。之を開く目的は、學生が次學年にかけて成さんとする計畫、卒業論文の準備、將來の方針などの相談をなし、各々心身の修養を積まんとするにある。

△講　演

「今年は各部を合して四十餘名の學生が來て居る、講演は學生も各自にやるし、時々は自分などもやる」と校長が言つて居た。すべての事に飽く迄自白式に自治が施がられてゐるのは嬉しいと思つた。殊に卒業生の手になる櫻楓會の働きは感心である。

△文學部の將來

文學部の事に就て校長の話す所を聞くと、これは何も廢止と決定した譯でもないので、よく外國の大學などに例のある樣に、たゞ今年は募集しなかつた迄の事であるさうな。從つて其内何時又募集するか知れ

ない譯である。がそれにはこれ迄文學科を卒業した人々が大に努力して、本科に文部の檢定試驗免除の特權を與ふる價値が十分にあるといふ實力を試驗場裡なり世間なりに於て示すことも必要であらうと思ふ。即ちこれから俊秀な學生が多く受驗すればいゝ譯である。

△分校

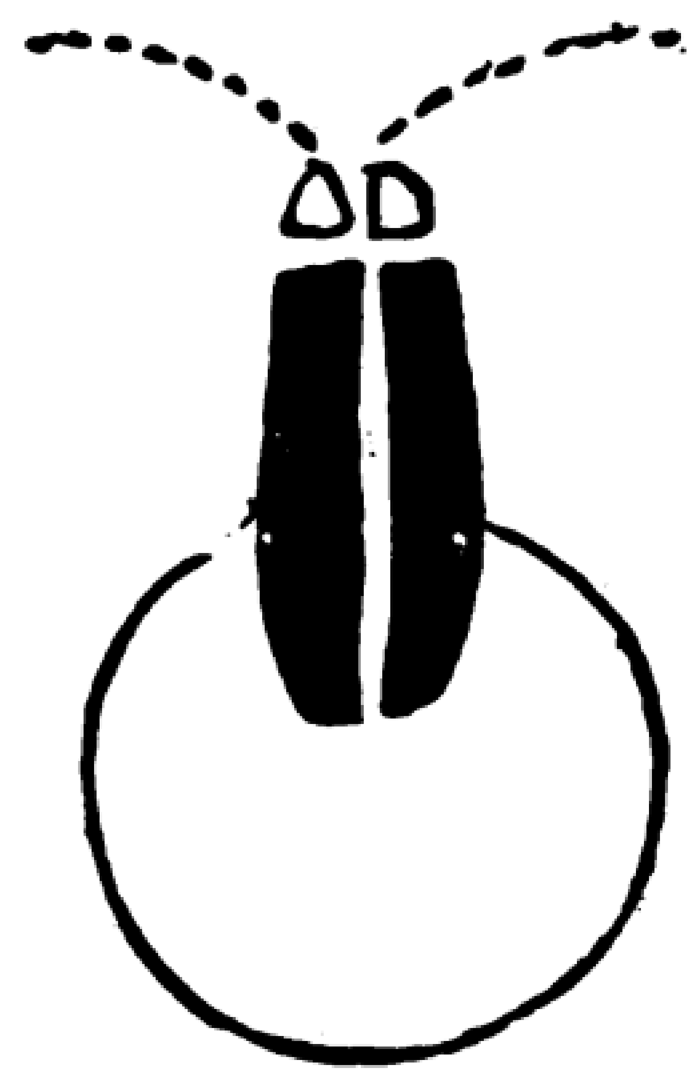
の問題に移つた。關西に一つなくてはならぬと云ふ事は早くより氣附いて居ることである。候補地は二ヶ所あるがまだ判然してゐない京都、大阪間か、大阪、神戸間か兎に角あの地方は物質的に進歩してゐても猶文化の點に至ると餘程後れてゐるから是非ともあの邊に建つる必要を認めてゐるが、しかし今は基金募集をしてゐるのであるから、其方が完成し、本校の基礎を十分に固めて後、徐に分校設立に着手する計畫であるといふ。

△卒業生

の將來、母校との關係、海外留學生、俊才の啓發、外國に於ける一般婦人の教育問題などゝ談は佳境に入つて來たが一つ面白いことを紹介して置かう。日本に於ける最高女子教育の機關として女子大學が設立せられたと云ふことを聞いて、官立女子大學を初めて建設したのは露亞西ださうである。目白臺の才媛大に得意としていゝ所であらう。

歸途再び寮舍の前を通つた。明日は愈々歸鄕と云ふ送別會の會與で、花やかな若いどよめきの聲が靜かな輕井澤の空氣を動かして居た。





饒舌

或る女

K　讀物と交友といふのを、御覧なすつて？。

A　エゝ、ほと〳〵感じ入りましたわ、醫學迄も、御勉強なさるとはねえ。然し、近頃の御態度には少少ね……。

K　私もさう思ひますの、あの方を崇拜する丈、猶更ね。

A　新しい女、覺めたる女と、いふのも少々危險になつて來ましたわね、矢張り眠れる女が御互様に安全ですね、ホゝゝ。

K　ホゝゝ、全くね、あれぢやちと葦原將軍かぶれの様に思はれますわね、ホゝゝ。

A　ぢや葦原將軍は覺めたる男、新しい男といふ、譯になりますわねホゝゝ。

K　年から云へば私達はもつと新しい女よホゝゝ。

A　冗談は扱にしてね……。糟糠臭い私も、主人の法律書引繰り返す事も、兄の醫書をのぞき見する事も、たまにはありますわ。

K　伯父さんは何等親で、從兄は何等親でなんて親類中悉く等親しらべしたり、トラスト組織がどうの、合名會社がどうしたのつて、口でばかり一所懸命しやべつてた時を他から見たらさぞ可笑しかつたでしやうね……。

A　ホゝ、あんなに若かつた昔もありましたわね。

K　御話が横にそれましたけど、つまり何ですわね私達の様な者が女といふ御仲間に入つて居るので、あの方がやつきとなりて覺める様に、呼び立てゝ下さるのでしやうけどね……。私ゃ女の片われ。

A 殿方御同樣進歩したいとは思つてますもの。勿論感謝して居りますわ。

私はあの方の爲に眞に心から惜しいと思ひますのは、なぜ、御自分の御造詣深い文學の方面でもつと敎へて下さらないかといふ事ですわ。

K あんな御門違ひの事を仰有ると、つい淺い事を仰有る事がありましてね。

丁酉倫理講演集や、哲學雜誌や、太陽を讀む者はあの方御一人ぢやありませんわね、糟糠臭い私達も御同樣スバルのむく鳥通信も、新聞の二面も讀みますわ、そして自分相當に理解はしてるつもりですわ。

A 女の中で、敎育のある殿方と並んで行けるのは御自分一人といふ樣な、御顏をなさらなかつたら、御互女の爲に、どれ程嬉しいか知れませんわねえ。

K 醫學は唯本を讀むばかりで、脈が見られるものぢやあるまいと思ひますわ。私の考へぢや衛生學のおつもりぢやなからうかと、思ひますがね。

A 兒童心理の事を心理學の應用の樣に仰有つた樣に記憶して居りますがね……。勿論初めは應用だつたのでせうが、只今では兒童の心理狀態ばかりぢやない、兒童の全體に關する學問が、兒童研究といふ名で、一の科學として現はれてるのぢやありませんか。

K 私もそんな事を兒童研究の大家の○○○○先生から伺つた事がある樣に記憶して居ります。

A どんなものを御勉强なさらうとも、誠に結構な事で妄りに他から口ばしを入れてはいけないと云ふ位は私達も存じて居りますけど、餘り御山の大將におなり遊すのを惜しむんですわ。

K さうですよ、幾らつまらない女でも大勢の女の中には、あの方が御存知ない事を一つ位知つてる女が居ないとも限りませんわね。

A 私共が毎日仕てる仕事は高等下女でも、心迄も下女ぢやありませんわ。私共頭の卑い者は卑いなりにそれ相應に何かの考へがあつて下女の樣な生活

に甘じてるのですわね。

K　もう止しませう、折角女の爲に導いて下さる御言葉を兎や角、申上ちや濟みませんわ。

A　さうね、もう止しませう。糟糠は如何にしたら甘しいか、でも研究しませうかねホヽヽ。

K　ホヽヽ。それが上分別よ。子供に寢冷えさせない樣に氣をつけてね。そしてせつせと殿方に敗けない樣に勉強するとしませうかね。

A　全く、自分の範圍をこえて他人の領分に入ると、とんだ御叱を頂戴する事がありますものね。

K　自分の職分を忠實に守る事にしませう。

A　それが一等ですわ。

K　御話が横道に入り込んで、とんだ御邪魔をいたしました。それぢや左樣なら。

A　おやもう御かへり？。ぢや左樣なら。又入らつしやいな。

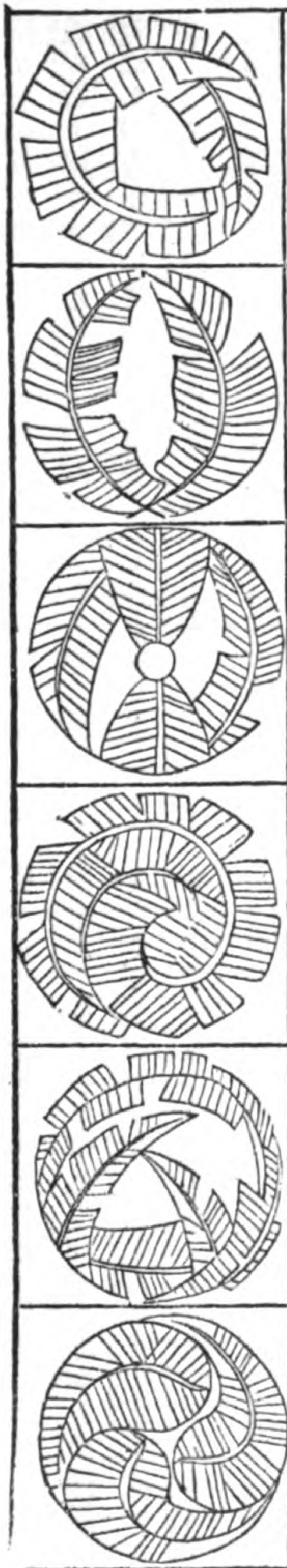
K　左樣なら。又御献立の変換をしませうね。

A　エ、しませう。近頃は御暑いので何にも製へられなくて困りますわね。

K　全くね。もうほんとにさよなら。

A　さよなら。

芭蕉の意匠



ばせを丸

だきばせを

二ツともへばせを

一ツ巴ばせを

三枚ばせを

ばせをともへ



磯より

正岡秋子

△南湖院へ

脊の君のおくすり取りにゆく、朝鎌倉の宅を出て、海岸通から電車に乗る、稲村ケ崎、行合橋を過ぎると、七里ケ濱の海に臨んだ小高い丘に、新たに建てられた鈴木博士の肺療院が、殊更に私の目についた、藤澤から汽車に乗換へて、茅ケ崎へ九時に、停車場から廿八丁の松原道を、鎌倉に比べては興もなく、がた〳〵と車にゆられながら行く。

南湖院――と思ふ時、ほのかなる暗愁の胸に漲るやうな心地がする、入口の階段を上つて廊下に立つと、此病院が東洋一の肺病の病院だと教へられたのを思ひ出して、頼もしいやうな、はかないやうな思ひがした。

看護婦がゆく、若い男が急ぎ足に何か運ぶ、突當りの患者控室の擦硝子に、薄い人影が映つて、注射室から、かるい咳嗽の聲がきこえた。

右手へ曲つて、藥局前の控場に、赤い海老色の長椅子のあるのに腰をかけて待つて居た、藥局には消毒の蒸氣が夥しく漲つて居る。

子供を一緒に連れてゆきますと言つて、今朝叱られた事を思ひ出さずには居られなかつた、口に黑い何とか云ふものを當てゝ靑い顏の人が幾人も出入をする、赤い艸花の繪硝子が病院に不似合な花やかな色彩を添へて居るが、しかも誰の面にも薄暗い不安の色が漂つて見えた。

待つ間を、そと立つて病室の方をのぞきにゆく、年の若い姿のあてな、多い髮を櫛卷に束ねた女の、淋しさうな顏が、扉の隙からちらちらと見えた。

國木田さんの亡くなられた室ではあるまいかと、そんな事が思はれる、けれど病室は他に數へきれない程もあると、すぐ思つた、つづいて後に取殘された夫人の事を思つた時、私は足がすくんでしまつた。

　うちでは元氣で、毎日の樣子が病人らしくも見えぬのに安心して私は我儘を言ひはせぬかと深く思つた、始めて北里博士の診斷をきかされた時、私は今から身も心も殺して、病夫の爲めに忍ばなければならぬと誓つた事を、今新たに思ひ沁みた。



淚は頰を傳つて、故しらぬ淋しみが胸にしみた、けれど私は、心の端から除き得ぬ僅かな苦痛も、今日の今から忘れ得る事が出來ると思つてうれしかつた。

△町の散歩

　妹の兒を乳母車に乘せて妙本寺の晩鐘の響く頃その邊へ散歩に出る。

　八幡前の通へ出ると、七日ばかりの月影が松の並木にかくれて薄い光を投げて居た、俱樂部へ寄つて、今

日買り忘れた買物をして、乳母車の端へ乘せて出る、絃歌の聲と云へば涼しさうだが重くるしい義太夫の三味が小町園からきこえて來る。

自動車が風をきつて海岸通へ魔のやうに消えてゆくと、その後を西洋人の子供が二三人、乳母車をすかして見て、おいで〳〵をして笑ひながら通つて過ぎた。

汽車が着いたと見えて、左と右へ車が何臺も續いて走る、白旗山の頂からきらめく稻妻の光を浴びて、電車の軌道を白い浴衣の男や女やが歩いて居る。

汽車がでるのか、町から山へ汽笛の音が響き渡つた。

△由比ヶ濱

曉の露の干ぬまを濱へとゆく、海へそゝぐ滑川の流れに、涼しい朝の風に吹かれて、漁師でない人が、二人で網を投げて居た、さつと引上げると、水晶のやうな網の糸目が、みる〳〵玉となつて散りおちる、銀色の魚がきら〳〵と躍つて蘆の葉に風が動いた。

小坪のあたり煙は沈んで、けさの波のおだやかさ、逗子の濱へは徒歩でも渡れるやうな氣がした。

逗子に居た頃は、濱があんまり靜かなので、海として物足らぬ心地がした、晴れた日の朝、富士があざやかに見えるのは嬉しかつたが、その裾に江の島が床の置物のやうに黑く見えるのが嫌であつた。

由井ヶ濱の波は荒く海らしい響がする、不二の景色は見られないが、どこ迄も〳〵同じやうにつゞいた波の、その果ての太平洋の風が、荒く吹いて來る鎌倉の海がうれしいと思はれる。

朝の太陽に水平線のもや晴れて、白帆の影の動く時、夕ぐれの入日は消えて、輪ける如き稻村ヶ崎に霧かゝる時、折々は潮の遠鳴りにねふられぬ夜の物思ふ時も、私は矢張、大きな海の響をなつかしいと思ふ。

△女中

お友達の某夫人が、故あつて妾と同棲された、その時夫人が話されました。

私が彼女と一しよに棲むやうになつたに就て・女中

も銘々のが二人になりました、彼女の女中は十六、私の女中は二十、彼方の女中は小粒ながらりこうで、私に對して兎に角如才なく立振舞ふ、私の女中は彼女に對してとかく傲慢で、その癖かげで涙ぐんでゐた、私の女中はこれから世の中へ出た時、きつと生存競爭の失敗者だと思つて、深く憐れに思ひました。ある日呼よせて、しみ〴〵と敎へた、そしてお前の



爲めに私が迷惑をするからと言ひきかせて、よく〳〵諭して何卒暇を取つて歸つてくれと言ひ渡した、泣じやくりをして聲も出し得ずに承知をした、そして日頃結ひなれた私の髪をきれいに結つてそれから一人で江の島見物をして其夕方東京へ歸てしまつた、かへつてから幾月もたゝぬが廻らぬ筆で二三度も手紙をよこした、此間の手紙の中には豊川稻荷のおみくじが封じ込んでありました、と。



心情の善惡と容貌の美醜

燕石子

一、美は婦人の生命なり

如何にすれば美しくなれるかといふことは、恐らくは御婦人方全體の希望されるところではありますまいか。

「士は己を知るものゝために死し、婦は己を愛するものゝために形づくる。」人は各ゝその本領があります。婦人の天職は誠に人に愛せられることにあります。されば美は婦人の生命であります。美がなければ婦人はないといつてもよいのであります。已に美が婦人の生命である以上は、凡ての婦人が美しくなることに熱中するもの亦尤なことと思ひます。

然らば凡ての人が美しくならうとして、それが果して出來るでせうか。これが一つの問題であります。若し果して出來るものならば結構なことでありますが、さもなくば誠に悲しむべきことであります。

天命果して是か非か、天は何といふ不公平なことであらうとは、あながち貧家の子女の歎聲のみではありますまい。多くの醜女も亦同樣の歎聲を放つでありませう。併し天命の如何ともすることが出來ないことを覺つたら、徒らに歎かずに、須らく人力で左右することが出來ることについて、工夫をこらすべきである。

「形こそ深山がくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ。」これはこれ、形態の美に絶望して、その精神美を一段發揮せんと勉めた努力の聲であります。私はこの言葉を以つて、一般の御婦人方に呈したいのであり

ます。

これによると、天賦の醜は到底これを美化することが出來ないものでせうか。私は必ずしもさうでないと信ずるのであります。

二、美のあるところに快樂あり

眞善美は、私共が日常達せんと努力しつゝある對象であります。それであるから私共がこの對象の何れにも出會つたときは、いふにいはれぬ快樂を感ずるのであります。例へば、數學の問題を解くことが出來たとき、又は自ら眞實を言ひ又は行うたときは、その眞に出會つたときの快味であります。總じて學者が學問を研究するの快味は、此種に屬することゝ思ひます、此快樂は甚だゝいしたもので、學者が往々尋常世俗の快樂とする所のものを顧みないで一意專心樂んで只その研究をつゞけて、一生を了へるなどは即ちこの快樂があるからであります。又ある人が善行を見たり聞いたりし、又自分で善いことを行うたと自覺したときに、一種言ふべからざる快感を起こすものであります。古人も已に、「善を行ふは最も樂し」と言つたではありませんか、此道德上の善を私共は精神美といふのであります。自然の美景を見、音樂の妙をきゝ、繪畫の美を見たときの快樂は、實に此上なきものであります。彼の音樂に聞きとれる、繪畫に見とれる、自然の景に見とれる、凡てこれらは、その快樂の極度狀態の繼續中をさすのであります。人でも同じことであります。その美しいのを見ると快樂であるし、又自分が美しいと自覺したときも確に愉快なものであります。されば眞善美のあるところには常に快樂を伴ふ。從つて美のあるところには、快樂があるといふことが出來ます。

三、精神美は努力の効果なり

言ふまでもなく、人は精神と肉體との二面からなつて居るのであります。その精神の方面は所謂性は善なりといひまして、その生れたばかりの時は、玉の樣にうるはしいものであります。それが成長するにつれて

「性相近く、習相遠し。」で、四圍の境遇からして善惡何れにも分かれるのでありますが、大概は惡い分子を含むものであります。けれどもこれは自分の心の持様如何によつて、漸々磨きあげて立派にすることも出來るのであります、御歌に「金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらむ。人も學びて後にこそ、誠の德は表はるれ。」と畏くも遊ばされてあります。その誠の德とは性の善なるものをさすのであまして、孟子の所謂「大人は赤子の心を



失はず。」といふ赤子の心とはこれのことであります。人のものを取り、人を殺すことをも何とも思はぬ彼の大惡人も、近江聖人によつては、一朝にして善人に化したといふことは、有名の話であります。尚ほ此種の例は澤山きくところであります。即ち精神の方面は自分の考へ次第によつて、盜跖のやうな大惡人も、堯舜のやうな大聖人になることが出來る證據ではありませんか。

四、形態美は努力の効果ありや

肉體の方面はどうであるかといひますと、醜美は已に先天的のものでありまして、私共がこれを左右することは頗るむづかしいのであります。否殆ど不可能のことゝ思はれて居ります。それは無論うまれつきの醜女がいくらあがいても、小町のやうな美人になることは、とても出來ないのでありませう。併し醜女も衣服を選び、紅粉を施し、頭髪を飾れば幾分美しく見えるのは爭はれぬ事實であります。俗に「藁人形も衣裳から」といふのは、全くこの間の消息を說いて餘りあるのであります。尙ほ又昔のアゼン式の敎育は、身體の均當的發達によつて美を增した例もありますし、又身體の健康なることによつて容貌が美しくなるものであります。これらは皆それ〳〵美を增す一の方法たるには相違なきも効果の大なるものとは認めることは出來ません。私共はこれら以外に尙ほ、より根本的に、より重大なるものがあると信ずるのであります。しかもそれが世間一般からは、一向注意されない有樣でありますから、歎かはしい次第であります。

五、容貌の美は何によるか

美は快樂を與へ、醜は苦痛を與へることは、私共が日常出會つて居る切實なる感覺的事實であります。されば美しい景を見て快を感ずると同樣に美しい人を見て快を感ずるのであります。汚物を見て苦痛を感ずると同樣に、醜女を見て苦痛を感ずるのであります。併し顏面各部の位置形狀大小等にて調和的の美があり尙ほ顏色といひ、光澤といひ、一點非難すべき所がなくとも、どうしても快感が起らぬことがあり、又それと反對に容貌が醜くあつても快感が起ることがあります。若しも容貌の美が、只その形態の美の外に、美の要素がないとしたら、これは不可解の事實でありますが、一體容貌の美といふものは、顏面各部の調和、顏色、光澤等と精神の表情と相俟つて、はじめて完美するものであります。それでありますから精神の美しい人は、その容貌がそれ程麗はしくなくとも美しく見え心の眞直でない人はたとひ、容貌が麗はしくあつても

さほど美しくは見えないものであります。これは已に各人が經驗して居られることでありませう。前の美貌の人に對して不快の感が起り、醜女に對して却つて快感が起るのは全くこのためであります。即ち前者は形態の美なる處に醜なる精神の表情を宿したのであつて、その精神の美醜の表情によつて感ずる力は、形態の美醜によつて感ずる力よりも深刻なものでありますから、醜なる精神の表情によつて、形態美を打ち消したのであります。後者は正にその反對でありまして深刻なる感じを與へる表情美のために、形態の醜を蔽うたのであります。之を以て觀ると、精神美は容貌の醜を奪ふものであります。



六、表情美とはどんなものか

精神の表情は、顔面及び眼に表はれるが、とりわけ眼によく表はれるものであります。「人に存するものは眸子より良きはなし、眸子は其の惡を掩う能はず。胸

中正ければ眸子瞭に、胸中正しからざれば眸子眊し。」と孟子も言つて居られますし、又「眼はよく物を言ふ」といふのはこの事實をさすのであります。その顏面に表はれるのは、顏面筋肉の緊張の工合によるのであります。さうしてそれが顏面に固定するのであります。然らば何故精神の表情が顏面に固定するかといひますと一體人の喜怒哀樂の情が内に起こりますと、それが筋肉運動となつて外に表はれるのであります。即ち人の怒るときは、ある一定の筋肉が運動して、一種恐ろしい感じを人に與へるものであります。愉快の情が外に表はれるときは、又同樣にある一定の筋肉が緊張して人になつかしいおだやかな感じを人に與へるものであります。それで絕えず怒つて居る人は、已にその筋肉緊張が顏面に固定して、怒らぬ折も怒れる相を表はして居るのであります。心の常に愉快な人もこの理によつて顏面は人に快感を與へる相となつて居るものであります。不平面の人やさびしさうの人、乃至貧相福相の人等色々見るのは、皆この理によつて平生の心が顏面に固定したのであります。それで邪見の相を持つて居る人は、大抵邪見な心であり、佛のやうな相であれば、その心もやはり佛樣の樣にうるはしいものであります。その他色々の心がそれ〱相當の相を表すものであることは、一々言ふまでもありますまい。

七、精神美の價値は絕對である

若しそれ精神美の價値に至つては、絕對的であつて他に比すべきものはありません。元來身體は精神の宿るところ、精神は身體の主人公であります。人間の價値の如何は、精神美の程度によつて定まります。容貌の美醜はたとひ婦人であつても、人間の價値を左右するだけの力はありません。精神美はそれ自身、かくの如き大なる價値があるばかりでなく、容貌の美をも增すものであります。內、美なれば外、自ら美となります。性來容貌の醜いものも、その心が高潔であれば精神美の發露はよく人に快感を與へ、崇高の念を起させるものであります。私は良家庭に育つた淑女によつ

て、屢々此快感を繰返すのであります。又裏長屋などに、稀に見る美貌であつて、しかも不快の感を起させるといふやうな、前者の反対のものも折々見ることがあります。

形態美については已に天賦であつて、如何ともすることが出来ないものであると思はれて居る中にも、此のやうな光明が見出されます。なるほど衣服の美、頭髪の装、紅粉を施す類は、たしかに幾分の美を添へることゝは思ひますが、精神美の発露たる表情美は、又一層の



美を加へ快感を起こす次第であります。

然るにこの頭髪、顔面、衣服にばかり腐心して、曾てこの表情美に頓着しないものが多いやうであります。その結果、心を砕く割合に人に美感を與へないのであります。「事に本末あり、物に終始あり、先後する所を知れば道に近し。」何事もその本をつとめれば、労少くして効が多い。精神は本で、容貌は末であります。源がすめば末流は自然と清むものであります。心が美しくなれば容貌も自然に美しくなるのであります。して見ると私共の努力の方向は已に決定されたの

であります。即ち日々善いと信じたことを、どし〱實行して、只その心を美しくするやうにつとめればよいのであります。さうすれば自然に容貌も美しくなるものであります。

容貌と精神と二つながら美しいのは、申分のないことでありますが、容貌の美は天福ともいふべきものであつて、萬人これを望んで得べきものではありません。多數はこの天福を得ないものと見て差支はありますまいが、併し容貌の美醜によつて感ずる快否よりも、精神の表情によつて感ずる快否の方が、一段深いものであるのを以つて觀ると、醜女必ずしも憂ふるに足らず美人必ずしも誇るに足らないと思ひます。若し容貌の美しい人が精神をも美しくしたら、それこそ鬼に鐵棒で内外の美に煥然光を放つわけでありまして、所謂天女の天下り、誠にこれにこした結構のことはありません。要するに最後の勝利は、精神の美しい方に歸するものであります。

八、精神を美しくするには犧牲的精神が必要である

容貌を美しくするには精神を美しくすればよい。そんなら精神を美しくするには、どうすればよいかといひますと、第一に犧牲の精神を持つといふことが、重要なる要件であります。犧牲の精神とは何事を思ふにもするにも、我がためといふことを考へず、恒に人のためと云ふことを念頭に置くことであります。一體人が罪を作る本は、「我」といふ考がいつも先に立つて、自分のため、自分のためと考へて行くからであります。この「我」といふ考さへ捨てゝ了へば、その人の精神は立派なものであります。さうして心安らかにして、一の心配一の苦痛といふものがなくなるわけであります。人間の心配といふものは、實にこの「我」といふ考があるから起るのであります。凡ての人が只これあるがために公明正大の心もなくなり、苦悶も起こるのであります。彼のキリストも釋迦も皆この我がためといふ考をなくしようとして、遂にはその目的を達したものであります。それでキリストも釋迦も自分がその目的を達したところが心安泰に、極樂の境界にあつて、只その樂みたるを知つて苦みたるを知らんものでありますから、世間の人がこゝに氣付かず苦しんで居るのを見て、大へん氣の毒に思はれて人にもかういふ境界に至らせたいものであるとの考から、彼處此所に行かれて、人民をこの苦悶の中から救濟しようとされたのであります

その意志をうけついで居りますのが、宣教師とか牧師とか僧とかであります。耶蘇教徒や佛教徒などは、それらの指導により、その善を美り美につかんとつとめて居るのであります。

九、次には自然に親しむこと〻文藝に趣味を持つこと

第二には。自然に親しむこと〻、文藝の嗜みあることであります。一體人が上品に見え下品に見えるのは何のためかといふに、主としてその趣味の高い低いといふことによるものであります。つまり人の品位といふものは趣味の高下によつて定まるものであります。それで品位の高い人にならうとすればどうしても高尚なる趣味の中に生活するやうにつとめなければなりません。自然に親しむこと文藝に嗜みがあるといふことは實にこの要求に應ずるのであります。一體美には自然美と人工美とがあります。それで自然に親むとは旅行などをして山水の風景を探り宅に居りては盆栽、果樹、栽培、牧畜などに趣味を持つことがそれで有りまして即ちこれによつて自然に接することが出來るのであります。文藝とは詩歌音樂繪畫を始めとして活花遊花刺繡彫刻小說演劇舞踏等のやうな凡ての美的の思想感情を或る物象を假りて表はすことをいふのであります。これらは自然美に對して藝術美といつて居りまして人工によつて成るべく完全になるべく靈妙に美を表はさうとするのであります。乃ち人はこれによつて美の中に生活することになるのであります。人は凡てその接するものによつて幾分感化されるものでありますから、高尚なる美の世界に居りますと自然とその人の情操を養ひ、風尚を高尚ならしめ、品性をも高尚にするものであります。それ故御婦人方には、一方に於ては自然に親しみ、一方に於てはこれら藝術の中、その好尚に適するものを選んでされた方がよいかと思ひます。和歌よし、琴よし、ヴアイオリンよし、活花よし。尙は點茶なども趣味を高めるには宜くあります。とにかくこれらによつて趣味を高めると、他の一般的趣味も自然高まつて、凡て高尚なることに趣味を持つやうになるものであります。此趣味は實に人の價値をも定めるもので、彼の慈善の如き一種高潔なる道德的行爲も、その本をたゞせば、やはり高尚なる趣味をもつところから出るものであります。

要するに、その末を淸めんとすればその源を淸めなければなりません。その容貌を美しくせんとすればその心を美しくしなければなりません。犧牲の精神を實行すること自然に親しみ文藝に趣味をもつことによつて精神を美しくすれば容貌も亦從つて美しくなつて來る譯であります。それでこの犧牲的行爲と趣味の向上とは、容貌を美しくする唯一の根本的方法であると斷ずるのであります。





アメリカに居る日本婦人の珍話

凧間不二子

六月十日土曜日の夕餉後、散歩かた〲〇〇商店へ日本青物の罐詰を買ひに行くと、店の入口の左側に今日來たばかりの雜誌が澤山積み上げてあつた、いつも一日發行の諸雜誌は十五日後の入船が持し來るので、その頃になると讀書家は續々店へ聞きに行きますが、今度の樣に早く來たのは全く思がけなかつた。

アラ……と驚喜の眼をみはりつゝ、女學世界の目次にザット眼を通すと、自分の名が載て居た、が名だけでは誰方か他に同じ名でお出しになつたかも知れないと云ふ樣な氣がして信じられません、大急ぎにそのページの初めから仕舞まで讀で見て、初めて自分のであると信じると同時に、胸一杯にこみ上げて居た、熱した樣な、つまつた樣な重い呼吸をホット致しました。そこでまた書く氣になつて、半年前の日記を記して見ました。

△良人の旅行

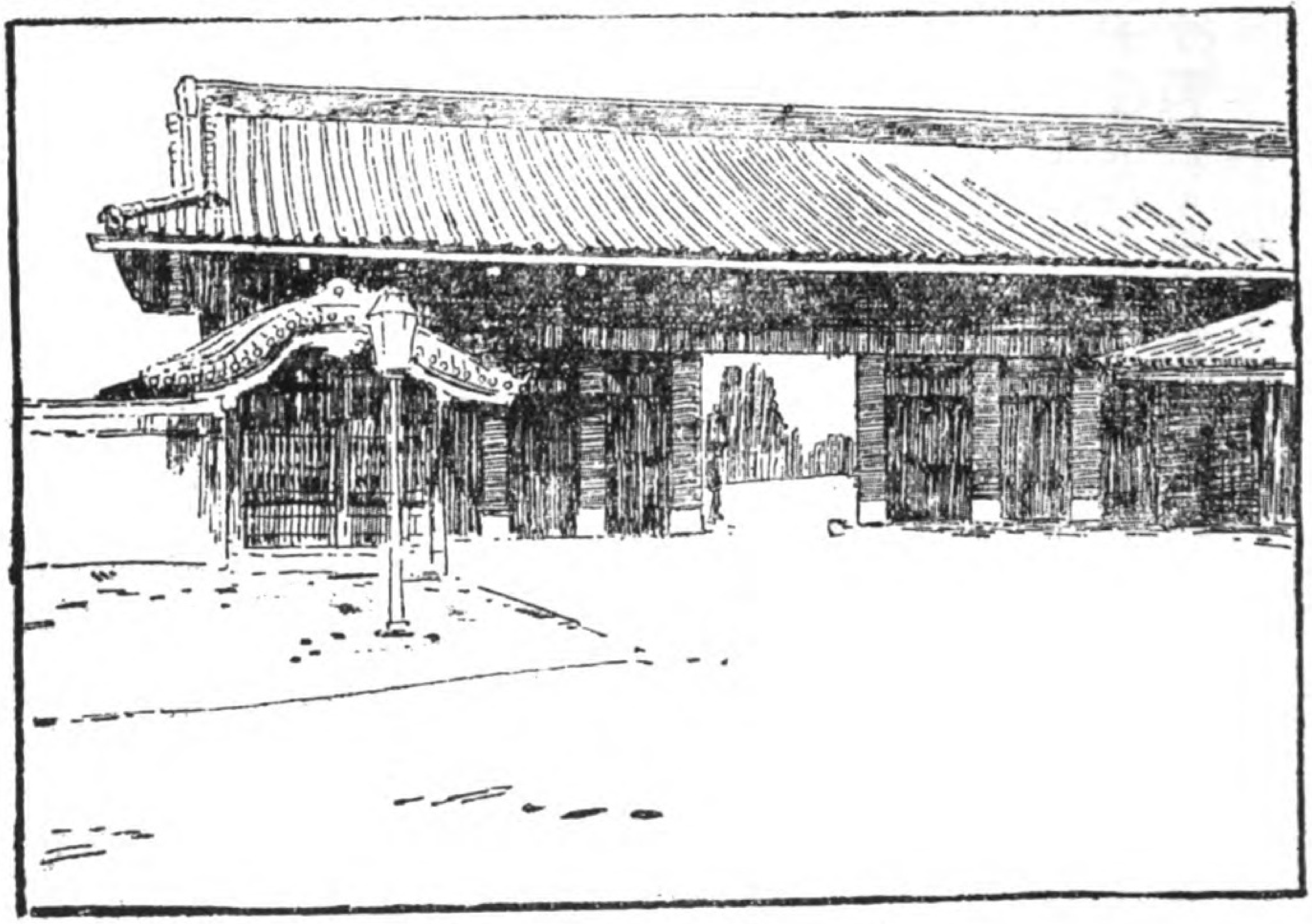
二月十六日の木曜の朝良人は處用で八日間ほどの豫定で東の方の他州へ旅行するとて、旅行鞄一ツ携げてお立ちになつた。

一晩か二晩の留守と違つて不用心でもあるから、事務所に働いて居る青年に泊て貰たらよからうと仰で、その方にお頼みなさつたが、御都合が惡いとて來て被下る事が出來なかつた、デ廣くもないが兎に角一軒の家に私一人留守居しなければならぬ事となつた。

留守居の用事としては「秘書官、新聞を見て置いて與れッ」て之れで御座りますの、夫れ故私は日本字新

聞紙三紙と、朝、夕刊の英字新聞の五紙に端から端まで眼を通しまして、良人の事業に關係した記事には印をして置いて、お歸りになつた時に報告致しますの、夫れから「英語の手紙を寄さないと返事を出さないぞ」と言ひ渡されてあるので行く先きのホテルへ宛てゝ隔日に手紙を出す、之れが私に、大仕事なのでありますけれど、常々私が英語がすゝまん〳〵と口癖の樣に申ますから、勉強の爲めを思つてこそ仰て下さるのであらうと思へば、むりにも背かねばすみません、お歸りになつたら直して頂けると思て無茶苦茶の手紙を出す、良人の方からも隔日にはキツト英文が參ります、良人は長らく此の國に居るので、日本字よりは英文の方が少しの言葉で多くの意味が通じるから、簡單でよいと仰て英文の方を多く使はれます「たまに日本字の手紙でも書きますと「オイ釘と云を字はどうだねと私に聞きつめてですの初めの内はよく答へて居りましたが近頃は私まで忘れる樣になりまして、字引を持出して來てはこんな字がなんて笑ふ事が度々あります、二人一緒に書見でも致しますと、英語を讀む時は私が半ページも讀まぬ内に、良人の方はモー濟で仕舞て「まだか、駄目な奴ぢやなアー」なんてぢらすものですから、日本の本を讀む時は私から仇討を致します。

話が大層横道へ走りましたね、サテ其の他には只今は衣替への時でもありませんから裁縫もありません、御飯事は成だけ經費と勞力を省く樣にし良人の陰膳だけは缺さず致します、他には別にしなければならぬ仕事も御座りませんので、之れは一ッ日誌でも綴つて女學世界に投書して見樣か知らん、然し、學もなければ文の才もない自分如きものゝ書いたものがどうして數十萬の人の前に出せ樣ぞ、私がこんな事を望むのは恰度井戸の底の蛙が青空に達したいと願ふと同じことであらう、無謀も甚しいものだと、思ふと書く勇氣も出なくなる、しかし良人の留守に澤山の時間を有益に高尙に費したいと言ふにはどうしても、私には此の樣な事より外に考へ付きません、まゝよ沒書になるとも一ッ書いて見せうと決しると、すぐ原稿を胸の内に纒



高輪御殿

める愉快さ。

△婦人會へ出席

十七日金曜、今日は私の屬して居る教會の婦人會の誕生日の晩餐と云ふ集りがある、私も招待狀を受けて居るから行く。

此の教會には婦人會が二ッある、一ッは聖書の研究や、求道者を導く事や、其の他傳道のために必要な事柄を研究する、ミッショナリ會と云ふのであつて、今一ッは婦人會と云ふて之れは專ら會員双互の親睦を計ると共に婦人に必要なる修養を積む機關としてあります、夫れで前者は毎月第一の水曜日午後、後者は第二の水曜日の午後何れも會員の宅にて順次に開く事になつて居ります。

何れの會でも毎年色々な方法を講じては金を造つて一切の慈善事業に寄附致します、その一、二を擧げて見ませう。

婦人會では例年春秋の二回、ランメージセール

と云ふのを致します、場所は下街の或る空家を無代か無代同様の金で三日或は五日間借りまして、夫れへ粗雑な卓子を列べしその上へ、古着一切と手輕な古道具類を會員の宅から集めて來たものを、古物商の手から買へば一弗位するものも二十五仙で賣ると云ふ仕方でその前に三日ほど新聞に小さく廣告をして置きます
その日ともなれば、兼ねて何月の此の頃にはと期待して居る細民は、我れも／＼と押かけて參りましては掘り出し物もやと搜す眼の凄まじさ、全く古くなつたものもありますが、中には死人の所持品や、遠方へ轉宅する人等の寄贈品には、ずゐ分上等の物があります新らしい上下の服を二弗で買つたつてホク／＼で行くものもあり、母親が三、四人の子供を引張て來ては、自分のものは求めずに「子供の物は何程あつてもなんて鼻の上に苦笑の皺をよせながら、片腕に一ぱい抱へては五十仙ぐらゐ拂つて行くのもある、何れ替らぬ親の情とそろゝに涙ぐまれるのであります、その他、甲と底の外れかゝつた樣な靴を穿いて來ては靴掛りの前で二十仙ぐらゐで、ピカ／＼磨き立てのを紙に包で貰ふのがある、新古の違ひこそあれ、買ふ人の心持は恰度日本の誓文拂ひの樣だと思ひました。

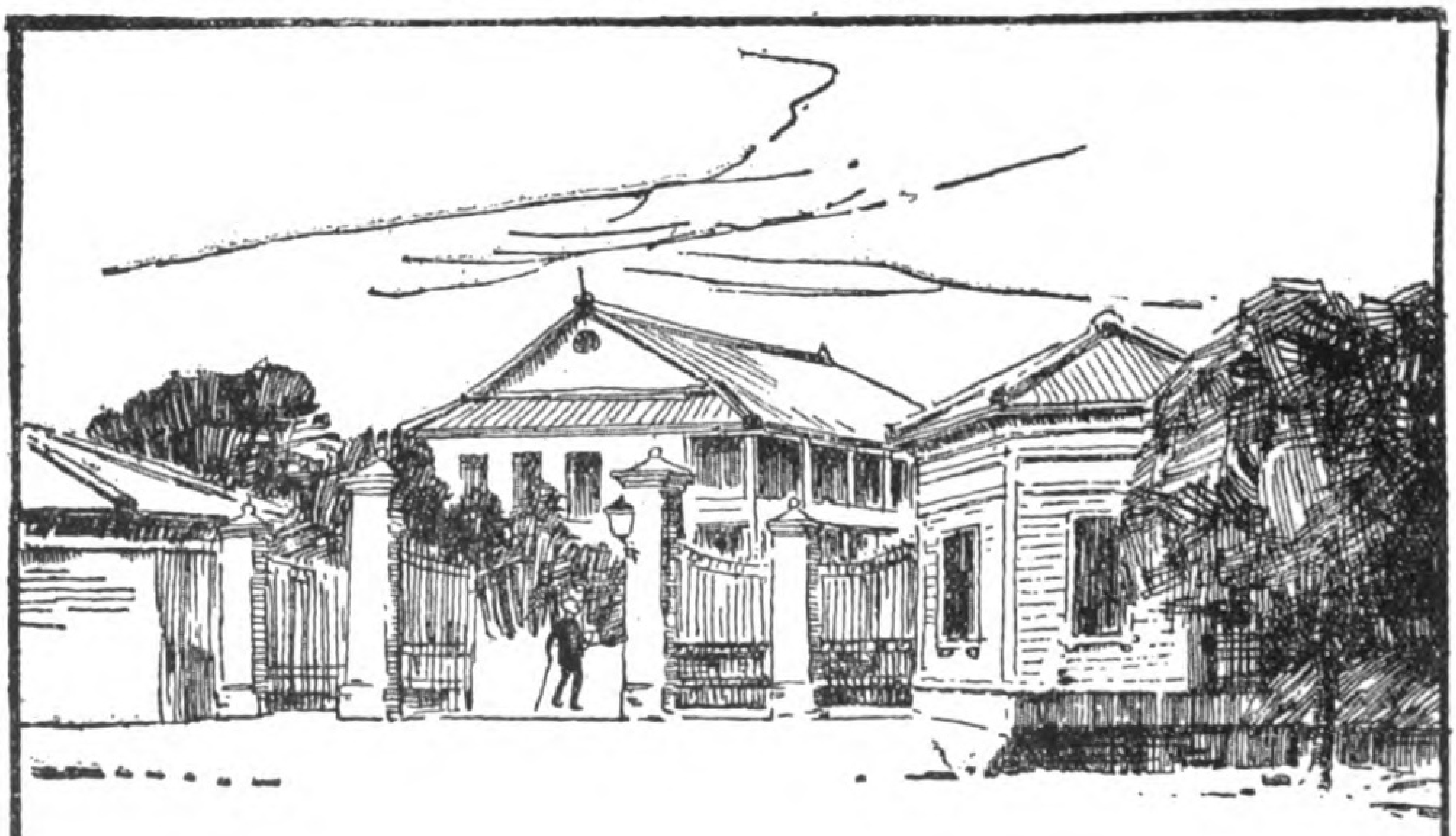
賣子は勿論、婦人會の會員の中から誰れは何日の子供掛り、誰れは何日の肌衣掛り、或は何掛りと云ふ風に、女中のある方は午前中からも出られますし、ない方は午後から交替もする、兎に角大勢の會員が半日ぐらゐづゝ會のために時間を捧げる事を喜んで致します私も或時は賣子を致しますが、常は下街あたりの繁華な處ではあまり見受けない樣な細民が澤山ゾロ／＼と集まつて參りまするのをみましては、働けばすぐ澤山な賃金を得られる米國にもどうして此の樣な氣の毒な人があるかと不思議でなりません朝から一遍買て歸つたがまだ欲しいものがあつてなんて言ふ人が來ると何れ重からぬ財布の金を受取るのが可哀想で出來るたけ安く賣てやります。

かうして得る金は大抵百弗から二百弗にもなる事がある、ソシテ殘品は廣い地下室を持た方の處へ預けて

置いて次ぎに又新らしく募つては賣ります、夫れから今一つ例年致します事は、クリスマス前に之れも前同様の場所にて、重に贈物用品をすべて會員の手からなつた、細工ものや、キャンデー、ケーキなども持ちよりで賣り上げて貧民の子供に贈物をしてやります。

△晩餐會の珍事

ミツショナリーソサイチーの方では、前者の様に定まつた方法でなしに、或時は教會の下層でバザーを致しましたり、今度は誕生晩餐も此の會の催しであります、招待狀には會食費五十仙としてありますが其の他に、絹やリボンの端布れで造つた小さな袋を添へて、之れには應分の寄附を乞ふと云ふ仕組みであります。勿論五十仙の會費でも利益のある様にしてあるのは知れては居れど、誰れとて袋を空で返す人はありますまい、皆々身分に應じて、寄附を致します、中には五弗十弗と出す人もありませう、夫れ故會費を七十五仙にして寄附なしにするよりも此の方が餘計に集まる



內務省

のであります。

之れから一寸その晩餐の模樣を皆樣の御參考のために書てみませう。

ピユー〳〵と頰を切る樣な寒い風の吹く日であつたが幸に冬季名物の雨も降らず、霧もなく出るには氣持ちのよい日でありました、冬の日の六時半はモー街道の電燈の光りが凍りさうに點つて居ました、宅から五丁ばかりの近さでありますから、一寸ヴエールを被て出かけました、會場は敎會の下層室の大廣間、千人位は裕に這入れ樣と云ふ處へ、天井から萬國旗や、綠り變らぬ常磐木の葉で美しく飾りまして其の間の數十の大電燈は晝をも欺むくばかりに輝て居ります。

集まりし紳士淑女の服裝は、嚴格に制限するほどの場所でありませんから、裾長く引いた夜會服もあれば訪問服あり、又は普通の外出着もあります、男子の方でも絹帽もあれば中折れもあると云ふ思ひ〳〵で御座ります、かう云ふ風の場合、日本ならばキツト眼に付く美々しく飾つた人々はいやに濟まし、粗服を着た人々は自分から僻んで仕舞て、隅の方で小さくなつて居て、その癖眼ばかりは恨めしさうに、キヨロ〳〵さして居ると云ふた風の事は少しもありません、上下入り交つて快活に話して居るのは實に床しい點と思ひました。

△十二ケ月に擬した食卓飾

食卓は十二ケ月に擬して裝飾をしてあります。

◎一月は雪の月とありまして、卓子の中央には硝子板で氷を造り、其の周圍を綿や銀粉にて雪を造り、花瓶には猫柳をさしてすべて雪景色であります。

◎二月十四日はバレンタイン日とて、此の日は戀人同志其の他一般に親密な間柄では繪葉書から初まつて、バレンタンカードなどの意匠をこらしたものを贈り合ふ日である、即ち此の日を取つたもので、二月の卓は白い卓子掛の所々へ眞紅のハート形の紙を張り付けて花には常磐木の枝へ同じハートを無數につけてあります。

◎三月十七日はセントパトリックと云ふて、スペインの祭日がある、此の日は胸間に緑青のクローバーの葉をつけて、お墓參りを致します、夫れ故三月の卓子は、眞中に一本の棒を立てゝその頂上から緑青色の細いリボンを八方へ引きまして、夫れへ一寸おき位にクローバーの葉を括りつけてあるのは、恰度日本の宴會等で見る高い棒の先きから繩に鬼灯提灯を縱横に吊てあるのと同じです。



子供の郊外散歩服

◎四月は當地では驟雨のある月ですから、外の月の卓子は何れも長いのであるが、此の月だけは圓形にして中央に卓子一ぱいの大きさの傘を立てゝ、薄の様な細い葉を上からダラダラと垂れて雨の降て居る處を現はしたものです。

◎五月卅日は招魂祭なので、卓子の上に、白の十字架に芝草などをあしらつて恰度墓地の様にしてあります。

◎六月は學校の卒業式と、モ一ッは六月花嫁と云つて此月は薔薇の花が盛りで、一年中で婚禮の多い月であります、ソコデ卓子は幅廣のピンクのリボンを縱横に引きまして、花瓶には室咲

の眼もさめるばかり美しいばらを盛てあります、十二ヶ月中で此月は一番賑やかに美しく見えました。

◎七月四日は米國獨立祭とてクリスマスに次いでの大祭日であります、卓子掛けも白でなしに星と條の米國旗を用ゐて、卓子の最中には爆竹の打上げ處を設けてあります。

◎八月は避暑の月とて卓上に海岸を造つて、天幕などを處々に置き客の前には蛤を盛り分けてある。

◎九月は秋月で楓の紅葉したのが飾つてある。

◎十月はハローウヰン祭で、此の日は家々でポンキンと云ふ南瓜の一種をパイにして食するのが例で、ソシテ子供等は之れに眼鼻など繰りぬいて、晩には中に火を燈して、ハローウヰンゴーストだなんて遊ぶのでありますから、卓上にはポンキンに蔓を付けて、如何にも畠に熟して居る樣に見せて居ります。

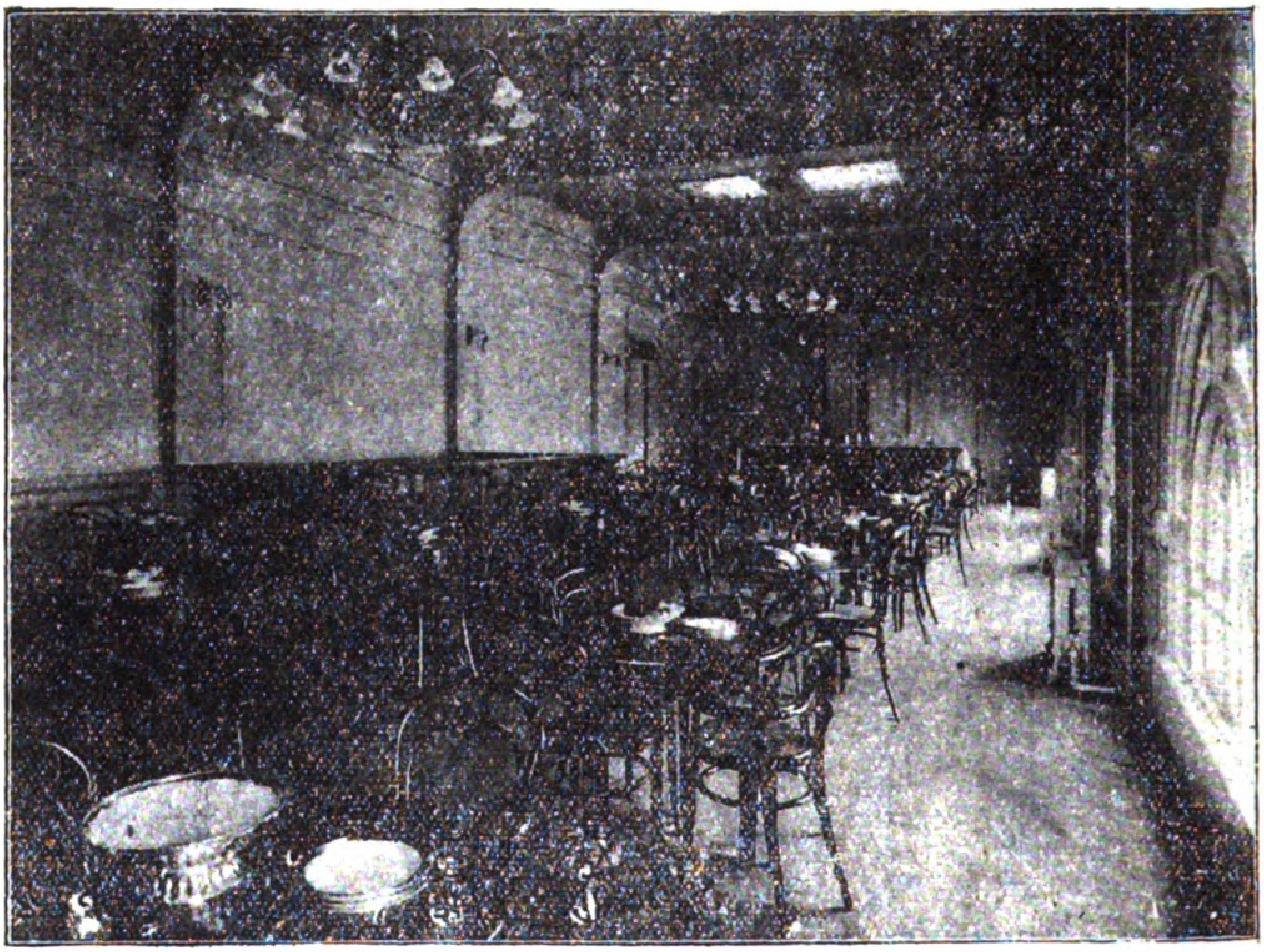
◎十一月終りの木曜日は感謝日で、此日は七面鳥を食する事になつて居りますから玩具の七面鳥を卓上に澤山遊ばせてあります。

◎十二月は皆樣御承知の、クリスマス大祭がある故、卓の中央には色々なものを吊した、クリスマス木が立てゝあります。

一ツの卓子には三人づゝの給仕婦が付いて裝をして居ます。此の給仕婦は各々その月に因んだ服裝をして居ます。二、三、の眼に付いたのを記してみませう。六月は黒のガウンに黒の角帽と云ふ卒業生の服裝で七月は國旗と同じ星條を染めてある布切の着物を着、八月は白の水兵服に白のキャップと云ふ樣に、各月の給仕婦の服裝を卓子の裝飾は一切此の三人の意匠なんださうです、夫れに感心すべき事は、此の給仕婦には四、五十の白髪、夫人もあれば、妙齢花の樣な二八の少女も同じ服裝をして働く事です、何でもよき目的の爲めには喜で假裝もすれば、滑稽な裝ひをもして、會衆をアッと云はせて好結果を得る事に勸めます處は日本婦人の大に學ばなければならぬ處と思ひます。

時刻になりますと、皆々自分の生れた月の卓子に就く、長い卓子の兩側に九人づゝと、短い方の兩側に一

帝國劇場の食堂



人づゝ都合二十人の椅子へ、「貴女に此方へとか、イヤ私は此方が勝手です」などゝ、耳ざはりな虚禮めいた問答などせずに、男と女と成だけ一人置き位いに、指揮する人もないのに靜かに着席するのは、實に羨ましいと思ひました、ソシテ短かい方へ御主人役と云つた樣な人が着席し、給仕婦は臺所から持で來るものをこゝで盛り分けて、ソシテ給仕婦は各自の前に運ぶのであります。

此處で一寸書いて置かねばならぬのは、米國では社交會は勿論、何れの教會にも大勢の人に食物を供給するに足るだけの大きな臺所が、下廚室あたりに設備されてある事です、之れは時々會員が集まつて午飯又は晩餐等を共にして睦まじく樂しく時を持つ事を必要の一ッとしてあるのです。

△此の日の献立

一　チキンパイ、これは鷄を柔かくなるまで煮て、夫れをプデングパンに薄く列べて、その上に乾麵包

二　の細かく砕いたのを列べて、又鷄を入れ乾麵包を被せて、夫れへバタ點、胡椒をパラ〳〵と振りかけてミルクをヒタ〳〵に入れてオーブンで燒く。

マッシュポテト、これはポテトを水煮して湯を切り、其の儘鍋の中でポテトマシャーで潰して、少量のミルクとバタ、鹽胡椒を入れて、モ一度よくマシャーで攪き廻しまして、雪の樣に白くなつたもの。

三　グリンピーズ、これは罐詰の靑豌豆を一煮立てしてバタト鹽胡椒にて味をつける。

四　セロリ「之れは鳥類には付きもの」

五　ジャレ「之れも同じく」

六　ブレッド「パンの事」

七　バタ

八　飲料はコーヒですが、コーヒを飲まぬ人は氷水、

卓子の用意が出來まして、ドクターホワイトと云ふ宣敎師の祈禱がすみますと、サア夫れからの賑かな事、彼方でも此方でも歡聲沸くが如しと云つた有樣でほんとうに愉快に一時間ほどかゝつて食事を仕舞ひますと、一旦卓子を綺麗にして、今度は、誕生ケーキ「フルーツケーキ」の上に數十本の小蠟燭を點じて持て出る、主人役が切分けて居る間にアイスクリームも出ました、冬にアイスクリームなんて日本の人が考へると一層寒さを感じるでせうが、米國では冬でも室内は暖爐でカン〳〵と夏程の溫度を保つて居ますから、氷水でもアイスクリームでも決して寒いとも思はず味よく頂けます。

△食卓演說

私は三月生れですから同月の卓子に就て居りましたが、隣りの四月の卓子では、ケーキを切るのにワーワーと云つて被在る、仕舞にカチン〳〵ブリキの樣なものを叩いて居られます、どうしたのかと一同の視線が集まりますとこうなのです、主人役がケーキを切ろうとなすつても堅くてナイフが通らないのださうですよく〳〵見ますればケーキを燒くブリキの型パンを皿

の上にふせて、ソシテ他のケーキと同じ樣に上から白い流しをかけてあつたのです、此れは四月一日はエープルフエールとて、害にならぬ範圍內で欺し合ひをする日なのです、夫れで四月の者はみんな擔がれた譯なのです、一同が亦大笑ひを致しました。

やがて婦人會の會長が、S夫人とて當市屈指の富豪の寡婦をトーストミストレスに指名なさいました、此方は西洋人には珍らしい小柄で、お年は五十過ぎ位いでせうお頭はすつかり白くなつて居ます、白婦人は一體に白髮になるのが早い樣にあります、夫で髮が澤山ありまして、若い方と同じ樣に周圍がフックリ膨れて居りますから大層品よく見えます。

指定されたS夫人は、早速お立ちになつて、今日の催しの成功したる事や、委員諸氏の勞を感謝なさいました、夫れからS夫人は食卓の談話を一月の卓の一人に指名すると、其の人は立つて簡單に自分の月に就て所感を述べる、一月がすめば二月へと一々S夫人から指名されますれば各自にスピーチを致します、中



帝國劇場の外觀

には婦人に指名される處もありましたが、私は不調法ですから、どうか他樣へと云ふ樣な辭退なんかする人は一人もなく、ドシ〳〵と立て話されます、前以てあなたにと通知のあつた譯でもありませんが、指名さるれば直ちに之れに應じられるのは、平常に凡ての方面に注意と研究が積で居るからでせう。

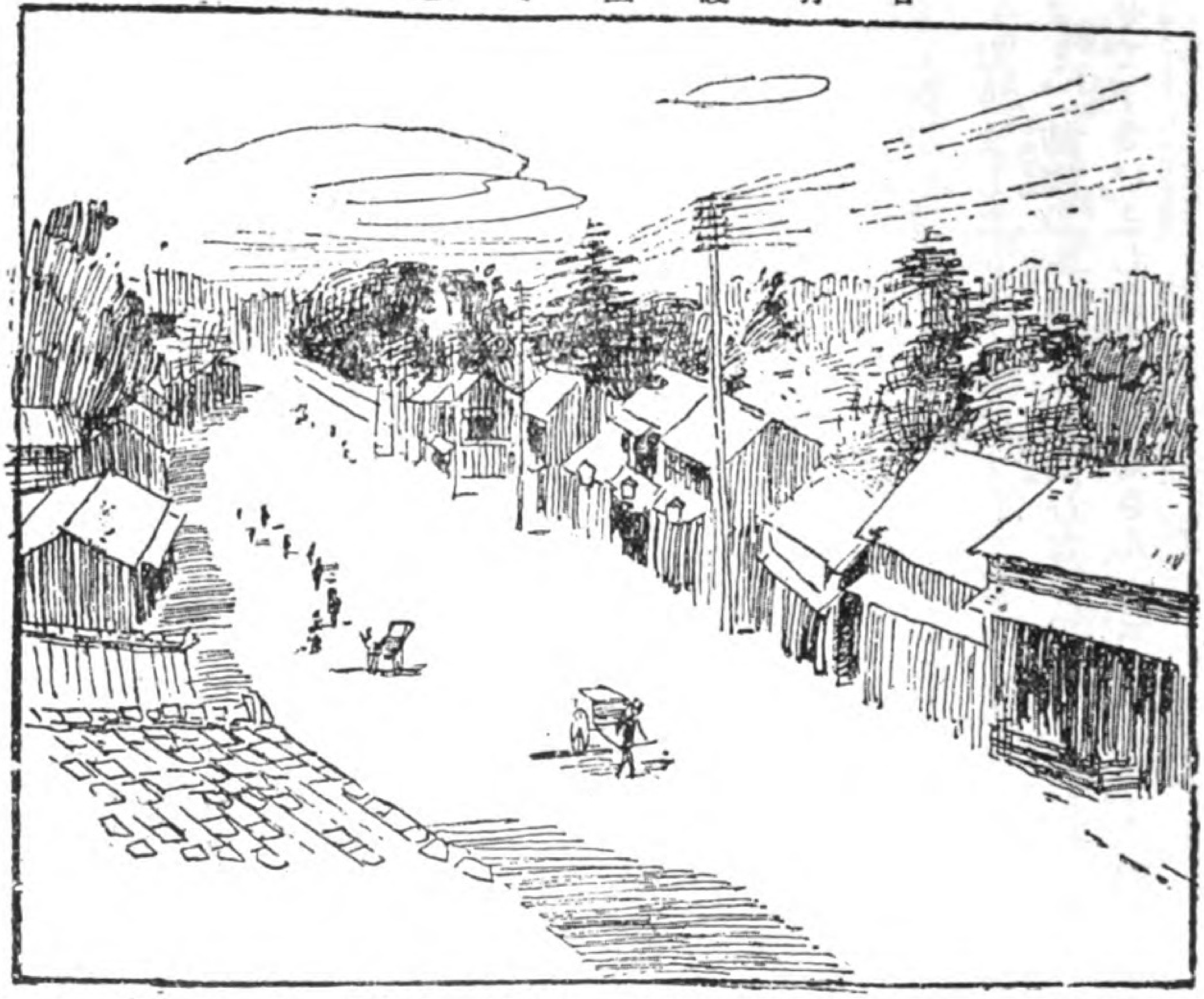
ソシテ其の談話中には諧謔でお腹の皮をよる樣なのや、或は月に因んだ獨奏や獨吟をなさる方もありまして十一時頃に散會となりましたが、私は始めから終りまで一ツの出來事も見逃すまいと、注意して見て居ましたりが、たゞ〳〵感心するの外はございませんでした、日本でもかう云ふ風に、婦人會なり社交が進步致すのは何年先きの事でせうか。

此の日集まつた人數は、十二ケ月の卓に二十八人づゝと、外に座席のなくなつた人達を一緒に集める爲めに一ツを子供に一ツをすべて二百八十人會食を致しましたさうです、夫れでその純益金は三百五十弗餘と報告書にありました、勿論寄附金も入てゝあります、之れ等は皆七十人からなる、給仕婦・臺所係、裝飾掛の委員の然も女の手にて出來たのですから隨分盛な働きではありませんか。

△日本には珍らしい婦人

二十二日の午後某氏から、今夜何々敎會で日本女子基督敎會青年會の河合道子女史の講演がありますと電話で知らして下さいました、良人の許を受けないで夜一人歩きするのは好みませんが、この樣な機會を知らねばいざ知らず、知た以上は逃す事の出來ぬ私、僅か三丁向ふの角にそゝり立つて見えて居る敎會故と思て參りました、女史は當市の基督敎女子青年會の秘書ミスヒルマンに紹介せられて壇にお立ちになりましたスラッとしたお姿にサッパリした鼠色の裾模樣を召してお顏の何處となく引緊つた品位のあるのは、學問と御修養と積で居られるからであらう、日本婦人を代表して外人の中にお立ちなさるには立派な方であると嬉しう御座りました、お顏を拜見せねば米人と思はれる

音羽護國寺通り



ほど、流暢な英語にて、日本女子の教育界、宗教界に伴なう思想界の事に至るまで滔々と水の流るゝ如く筋道の立つたお話を一時間に渉つてなさいました。

その内に故國女學生が親しき者もなく、目的もなくたゞ無闇に米國へ來たがつて居ると云ふ樣なお話もありましたが、私も此の事に就ては常に考へて居る事もあるが、何れ折を見て書きたいと思つてます。

女史のお話がすむと、四方八方から會集が（重に婦人）握手を求て居られます、私も○○牧師さんを見出しましたから御一緒に挨拶に出ました、恰度一人ポッチ淋しい折柄でもありますから宅へ來て頂いてゆつくりお話を伺ひたいと思ひましたが、モー時間に少しの餘裕もないので殘念ながらとのお返事に致し方もありませんでした、歸途に就かうといたしますと、兼て知合の白婦人等は私の肩を叩いて、日本にあの樣な立派な頭を持つた婦人の居られるのを、日本の誇りではないかと、仰て下さるのでほんとうに肩身が廣う御座りました。

△人形の着物

二十三日木曜の午後から、建築學士夫人を訪問致しまして、キャンデーを敎へて頂いたりして、二時間ほど有益なお話をして參りました。

私が當市へ移つた當時、某夫人に連れられて私の派の敎會へ行きました、ソシテ澤山な方に紹介せられて居ります時に「コンニチワ」と日本語を遣ひながら、御自分から名乘つて出られたのが此の夫人です、夫人の姉様は、ミス、エマセットルマイアーと仰て矢張り日本基督敎派の布敎の爲めに、八年ほど大阪、京都其他の都市の宗敎女學校に敎鞭を取て居られたとの事です。

私に遊びに來よ〳〵と仰て下さつて、宅へもお見えになりましたから、答禮として私からもお伺ひ致しますと、姉様のお土產にお貰ひなさつた日本の品々を見せて下さいました中にも菊さんと云ふ、八寸ばかりの上等の人形をお出しになつて、「之れは姉が歸國する時に生徒の一人がお國の妹さんに上げて與れよと云ふて私に贈られたのです、十年前の私はカレーッジに居りましたが、お友達がガールスに見せては自慢したのです、之れを御覧なさい、此の通り着物が汚れるまで幾千遍も着物を脱がしたり、帶を結び直したりしたのです」と仰る、成ほどよく拜見しますと友染縮緬の模様だけは、うつすら殘つて居りますが、地色は鼠色だか、水淺黄だか分りかねるほど手あかで薄黒く汚れて居ります、夫れでも今に昔の貰つた時の事を喜では大切に客室の一隅に保存して、初めての來客があれば見せて居られます「夫で私は、貴婦がこんなに何時までも大切にして居られる事を、その贈つた娘さんが聞きますならば、キット昔貴姉が喜ばれたより以上嬉しがりませう」と申た事です。

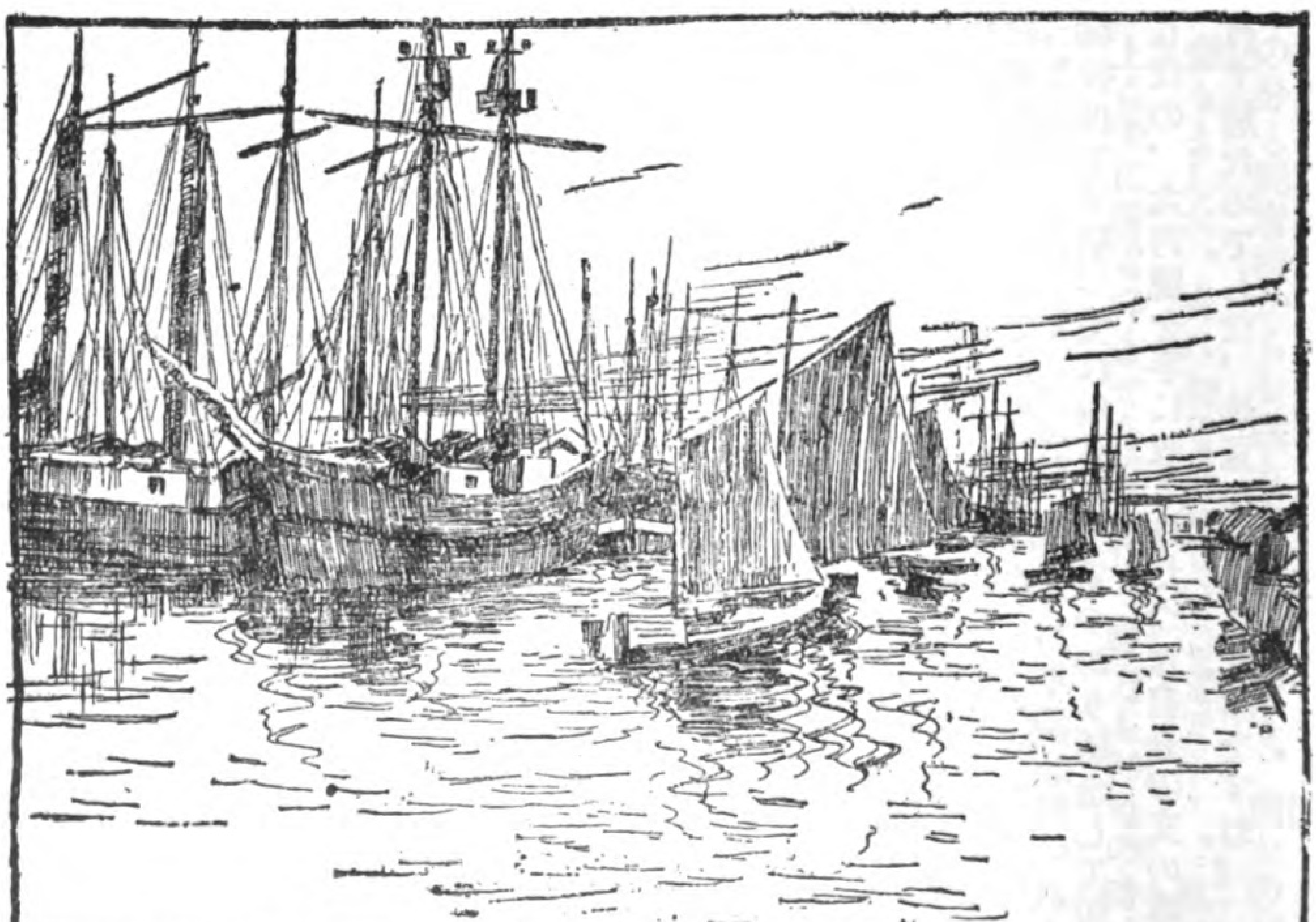
其の後私とは大變お心易くなりまして、時々往來しましては、お互に日米の知らぬ話を交換いたしては利益するのであります、所謂帝大の流行語とやらの利用致し合ふのでございます。

△病氣の診察

轉んでも無手では起きぬとは吝嗇の人を嘲る言葉でありますが、私のは外出したらば、たゞは歸らぬ主義であります、夫れは自分の知らぬ事を一ッでも覺えて歸るとか、修養の資となる樣な事を捕へる事に注意致します、今ふはモー良人のお歸りになる日だのに私の仕掛けた事は思ふ樣に進まないので焦つて居ると、豫定より五日遲れた委細手紙と云ふ電報が八日目に着致しました、隨分良いお留守で早くお歸りになるのを待ち兼ねて居るのだが仕事の方には大層都合のよい譯で、この五日の内にこそは是非仕上げて仕舞ひませう。

その五日も過ぎて、例のものも郵送するまでに運んだ三月一日良人は無事にお歸りになつた。

留守中は何をして居たと尋ねられました時は「とうとう無意味に過して仕舞いましてね」と口を拭ふて濟まして置きました。



月島の夕照

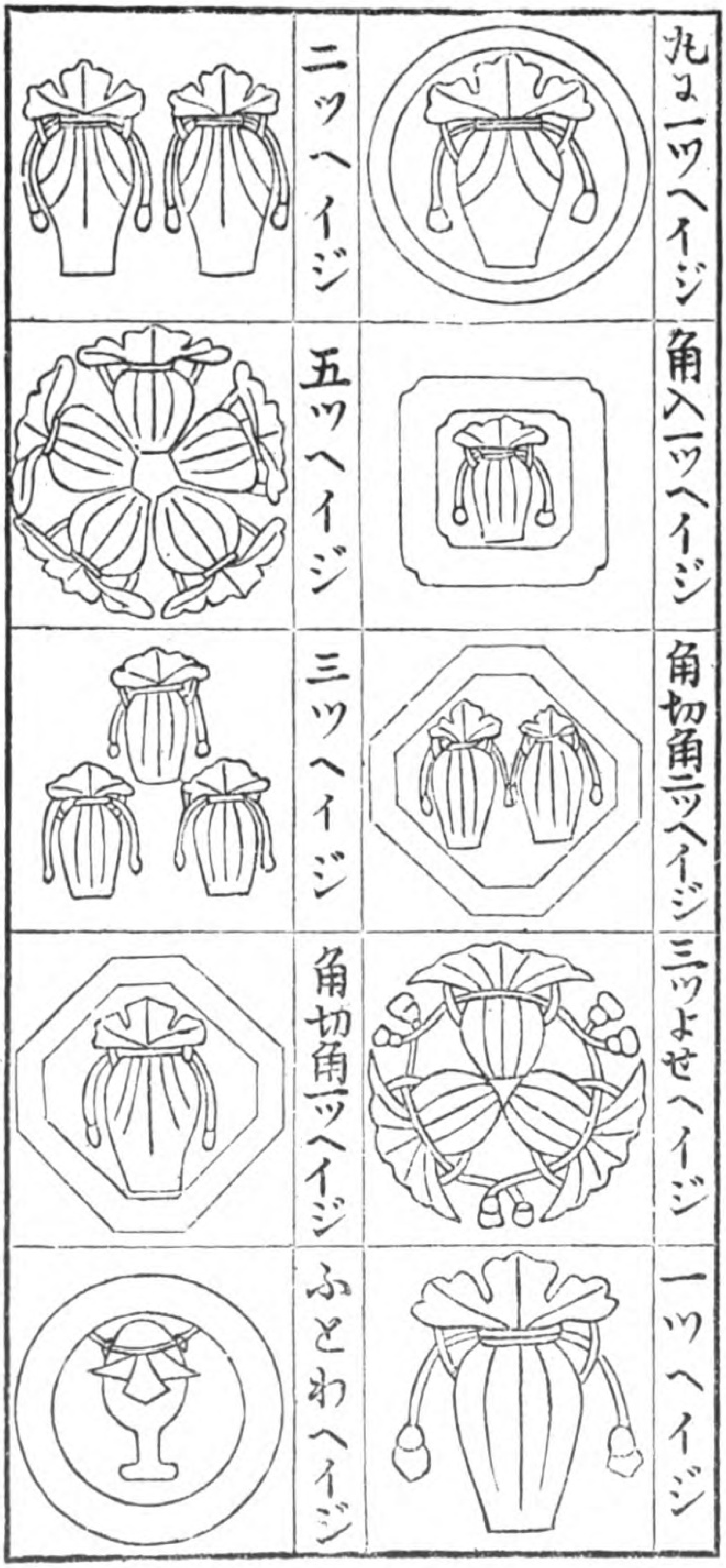
夫れから一週間程しますと左の胸部から脊部へかけて、時々痛みを感じました、兩三日は何であらうと氣にもせずに居りましたが、だん〳〵痛みが增すのみなので今はほつても置けず、某醫師に叮嚀に診て頂きましたが、私の案ずる肺でも肋膜でもないとの事で「貴姉にはリユーマチスの氣はありませんか」とお尋になります、私は「別にそんな事も御座りませんが、先年白のスコッチで自分のコートの長いのを編みますに三ケ月ほど四本針を働かして居りました、スルト右の拇指の關節が痛み出しまして醫者よ電氣マサージよと大分長く困つた事があります」と申すと「夫れでは今度も何か其樣な仕事をなさつたんぢやありませんか」と念をおされますが「イーエ今度は其樣な覺えは更に御座いません「デモ病氣としての徵候は今日の處少しも認められませんから、モー二三日してモ一度診て上げませう」と、藥も頂かず診察料として〇弗お拂ひして歸りました。

良人も不思議だなー〳〵つて申て居りまして、二三日後に手紙を書かうと思て机に向ひ、筆を動かす每にキリ〳〵と左が痛みます、夫れで漸く留守居の仕事が原因だと分りましたので、良人にも默つて居る譯にも行かず「實は斯々、之れが原因らしう御座いますと打開けて大笑ひ致しました、ソシテ「盜人に追ひ錢とは此の事だナー」つて隨分、皮肉りで御座いませうその後五日ほどすると痛みは忘れた樣に治て仕舞ひました。

郵送したのは四月八日までに届いて居る筈故五月にはモシヤと女學世界の着くのを待ちかねて目次を見ましたが駄目。

「オイ〳〵茲にお前の死刑の宣告が出で居るぞ」つて良人が食事の跡始末をして居る私を呼びますので何かと思つて濡れ手拭き〳〵行て見ますと、讀者倶樂部に記者樣からピンで止めたのは皆その文がまづい」云々御挨拶です事、夫れからモーすつかり斷念して居りましたの、六月號を手に取る時だつた自分の文の事は忘れて居たのでした、炒豆に花とは此事ですね。

瓶子の意匠



土曜の晩に一部買て來樣かと思ひましたが、何だか妙に羞かしい樣な氣がして買へません、デ郵便で直接に來るのを待つ事にしましたが、日曜は郵便夫も廻りません、月曜の朝まで待つのが、千秋萬秋にも増す思が致しました。

月曜の朝洗濯に取かゝつて居りますところへ、毎月の分と記者樣からお送り下さつたのと、同じのが二部參りました、夫れから手紙で〇〇まで…、私は飛び上らずに居られませんでした、誰方も初めの時はこんなものでせう片手に雜誌、片手に手紙を持つたまゝ。

フレー〳〵ラッラッラ、チックルッーデヌチックルツーデス（死ぬほどくすぐつたい）と室中踊廻りました

我は貧を厭はず さはいへど

初雁

皆様、ちとお遊びにいらつしやいましな。

産聲あげてより二十年、住みなれた生家を立ち出で、今度のホームはたつた十疊の二階ずまひ、面白いので御座いますよ？エ小石川のあの……御存じでゐらしやいませう。

六疊の方は良人のお書齋、兼客室、食堂、次の四疊が私の室で、此方の緣がはには七厘だの炭取りだの、籠、雨傘エ、臺所は下の奥さんと一緒なんですが……どうして東京へ來たかと有仰るの？ それは、良人が下宿に居りましたつて、かうして二人でくらしたつて、經費の點においてはちがはないのですものれ、これには良人も感心して居るのでございますよ。

それで田舍の家はいゝ借人があつたのを幸ひに、出てまゐりましたのですわ、でも母樣はれ、手足のきく中は一人で居る、若い人達と一緒ではお互に何だからつて、あちらに殘つてゐらつしやいますの。きよをおつけ申してはありますけれどあまり不幸なやうで氣になつてならないんですけれど……。笑止とおとがめ下さいますな、二十にみたぬ人妻ですもの、



あと一年……學生で居る中の一年を、思ふさま氣樂に自由に送りたいので御座います。

まゝ事のやうな新世帶、何しろ人の二階に同居なんて私だつてイヤですけれど、たゞ良人の登校後、活花やお畫に時々家なあけますもんで……老猾でせう、ホゝゝ。

近所の子供達に、「叔母さん、叔母さん」つて呼ばれるもうれしうございますわ、

「叔母さん、叔父さんは毎日何處へ行くの？」

「叔父さんはれ、學校」

「學校の先生」

「いゝえ、生徒よ、」

「うそ／＼うそ、あんな大きな生徒があるもんか、」

袖にぶら下つて放れないんですよ。

私は時々下らない事云ひ出しちや叱られて……此間も、

「お友達の方はみんな卒業なさると、新らしい奥樣お迎へ遊ばすのに、貴郞ばかりはもうこんなに古くなつて了つて……何だかお氣の毒でなりません、」

と申しましたら

「誰のだつていつまで新らしくては居ないさ、」と笑つてるのにそれでも私がきかないもんですから、

「何も細君は新らしいばかりがいゝとかぎつたわけぢやある

まい。」と少し景色ばむで……。私何だかつい泣いて了ひましたのよ。

泣き蟲だつて？　ほんとに泣き蟲ねえ、私は。でもこの頃は良人が立腹た時、私が泣かなければ御機嫌が直らないと云ふ妙なことになつて了つて……。良人はむかつ腹で歸つてくると、決して口利かないんですの、ごろりと寢ころんだまゝ私が「どう遊ばして？　お氣分でもお惡いの、」つて傍へよると、くろりとあつちむく、あつちへまはればまたこちむく、あげくの果に「うるさいッ」つてどなられる。私　自分の机の前に來てつつぶしちやふ……。ときつと良人の方から

「すまなかつた。」つてれ。

可笑しうございましたのよ、先日法學士のM様とJ様と良人と三人で、お二人が、夫人の

『氣に食はぬ事して叱り飛ばす時、理窟をならべ立てゝ口答へされる程、癪にさはる事はない』つて有仰やると

「花子は駄目さ、ふだんはあんなへらず口ばかり利いてるくせに、僕が一寸でも小言らしいこと云はふものなら、はい、はいつて後退りをしないばかりだ、田舍者は意氣地がないれ。」

勝手な事を……次の間できいて　可笑しくて。だつて、叱られるのは此方が惡いからでせう。また何の落度もないのに叱り散らす様な良人ならば、私だつてだまつては居りません。



いつか一度おべんとうに煮豆屋のうづら豆を入れましたら、ひどく叱られて了ひましてれ、それからは毎日〳〵玉子燒ばかり。それでもだまつて居りますのよ、私にもおぼえが御座いますけれど、お辨當を開ける時今日のお菜は何？　とそれが一つの樂しみでしたが、良人はいつも胃袋がカラッポになつたカラッポになつたつて歸つて來ますもの、お待ち受けの御馳走澤山こしらへておいた方がいゝと思ふて、おべんたうには苦心致しませんの。A様つては

「花さんのお手料理なんかどうせ伊藤君でなくつちや食へやしない。ひもじい時の不味いものなし。」

隨分ですこと。良人が歸宅ないそぐからつてサイノロジスト、手編の靴下なはいて行くがらつてサイノロジスト、これではとてもやりきれない。

折々緣日へ花物など買ひに行くのはようございますけれど、二人ともあまり好かないんで、机の上へおいては手すさびに花も葉も坊主のやうにむしり取つてしまふ。金魚と云つたら死んでもいゝやうに安いのばかり十尾五錢ぐらゐのな。

つや〳〵とふきこんだ緣に、手すりまで枝なのばした楓の葉の、チラ〳〵映る心地よさ。私はこの頃よく働きますのよ、東京へ參つてから始めて洗濯もいたしますし、お來客だからつて

今までのやうに、

「きよや、お茶をいれてきて……」

なんて云つてるわけには行きません、菓子鉢を風呂敷にしのばせて、そつとかけ出す事もあれば、鮨屋、そば屋の暖簾もくぐつて註文に行かなければならない、だん／＼趣味まで俗化して、着物も欲しくなりますし、硯箱には薄いちりが浮いたまゝつい机の前より鏡臺の方と仲よしになつて了ひましてね。

夏の女？　我田へ水を引くわけぢやないんですけれど、人妻つて一寸いゝものよ。盛装した時よりもかう、大柄な銘仙や紺飛白ぐらゐ着て、薄い羽二重の帯恰好よく締めて、丸髷は三日目くらゐに結はせて、毎日お湯にはひつて、ねえ、私ふだんその位な事はしたいのですわ。でもこゝらの髪結さんは駄目よ、御近所の奥さん方もどなたも／＼村長の奥さん然とした人ばかり。あんなお丸髷ではイヤですもの、エゝこの髪？　伊藤巻とでも申しませうか、奇抜でせう、ホゝゝ。

二三日前、朝起きしてすつかり梳いてきれいに結び上げ、顔洗ひに下りたら、水道の栓に引かけて切角の前髪をめちやめちや!!!泣きたくなつたとこへ、今日は學校が早いんだ、早くしてくれつて呼んでらつしやる。何の泪がホロ／＼とこぼれました。

良人は毎朝新聞見ながら御飯食べるので、飛んでもないとこへお箸つゝこんではびつくりした顔？　いつも失笑だしますの。



さう／＼、いつか良人の留守にお友達がゐらつしやいましたの、玄關だけでお歸りになりましたが、一分苅だか三分苅だが、短かい伊藤のあたまよりまだみじかいお頭してゐらしたので、

「あのネ、今日何だか坊さんみたいな方がゐらしてよ、」つて申しましたら、その後またこの方がゐらした時、

「伊藤君居ますか。坊主が來たつて云つて下さい」

角帽手にもつて、つんと澄まして有仰るんでせう。私手をついたまゝ俯いて笑ひ出して了つたの。男と云ふものは何てまあ……。

大切な／＼試驗目前にせまつては、流石の『三四郎樣』達も、滅多にお見えになりません、A樣、M樣は「本場の三四郎」、五高の御出身なんで御座いますの。この方達ですのよ、夜おそくお歸り遊ばすと、下宿の閉つてる門を傘さして下駄はいたまゝぴらりとおのりこしなるんですつて。

私は「學生時代享樂主義の鼓吹者」だなんて云はれますけれど、まさかれ、やつぱり私だつて早く卒業して貰ひたう御座いますわ、卒業すればいつれ地方へ行くと思はなければなりません。地方へ行けばこれでも鳥なき里の何とやら、大いにマダム振らなければならないんですもの。皆樣はどう云ふわけか、ハイカラな女學生風よりも半玉のやうな風姿がお好きなんですよ、

ですから私も随分長く桃割にばかり結つてましたわれえ。なるたけ華美にしとれ〳〵つて良人は申しますんですもの、

割烹會でお目にかゝる夫人で、毎日お裁縫にも通つてゐらつしやる方が御座いますのよ、良人様は大學生で、お家閉めてお出掛なさるんですつて……。

こんな事申すと、だからいまの若い者は氣樂だの呑氣だのつて云はれますけれど、なか〳〵のん氣や氣樂ではそんな眞似は出來ません、私なんかほんとに意氣地がないんですわれ、どうしてこんなに氣が弱くなつて了つたか、もう〳〵淋しうて、一人ではとても居られませんわ、さわぎ屋で派手好きで飛びまはりたくてならなかつたものが、この頃は無暗と引込主義になりましたのよ。

昨日はほんとにたのしい日で御座いました。光村の奥さんが晴雄ちやまつれて、久しぶりでお訪れ下さいましたので……『御免下さい』と聞覺のある氣高いお聲に、私はかけ下りると共に、「晴雄ちやま」は、飛びついて了ひました。わづか見ぬまにまあ見ちがへる様なお育ち方、眉も濃く眼もいき〳〵と、ハーハがお生えになつた故か、お口許も可愛うしまつて、父ちやまそのまゝた幼くしたやうな凛々しいお顔立ち。御挨拶も忘れて私は二階へ上るまでに奥様のお手から晴雄ちやま取り上げて居ました。



「しばらく。」「御機嫌好う。」とかろく頭を下げて、二人とも晴雄ちやまのぞきこんだ顔を上げるとふと、眼を見合してまたにつこりして了ふ。ふつくりとしたルイザに結げて、青い色のお半襟、お召は濃茶地の、絣は少し違ふけれど、私のとよく似たおみ袷　裾もお揃ひのクリーム、うれしい。

細面、高い鼻、切長のまなじり、濃過ぎる程のお眉がいたいたしう薄うなつて、心なしかお肩のほそりよ、妻なれば、母なればこそ……。

晴雄ちやま齒が六枚生えて、もう何でも食へるの、パンだのお煎餅だのポリ〳〵と音を立てゝ、可愛いお口して……。

奥様とはすぐ御良人のおうはさ、ホヽヽもうお互に人前で旦那様のお話をはゞかるやうな、新マダムではございませんものを。奥様も今年からは法學士夫人、いづくの空へお別れとなりますやら……。

この頃はよると、それはかり申し合ひまして、社會に舟出せん日の一日も早くと願ひながらまた、學生……の妻時代に名殘を惜しいので御座いますよ、いゝえ、もう停電、それには及びません、まつ平で御座います……。

お話がはづんで警句續出、随分高笑ひがほとばしりましたし。こんな時伊藤でもA様でもゐらつしやれば敗はしない、奥様と二人で散々いぢめて上げるものを。奥様、晴雄ちやまをお膝に

ゆすり上げながら、

「花子さん、伊藤樣はれ、何故お髭お立てになりませんのあまりお若いですものね。ほんとにお二人お並び遊ばしても、御兄妹の樣に見えるんですつて、また貴女がいつまでもお若くてお可愛らしいから……」

イヤな、伊藤はやつぱり今のまゝでおきたいわ、學士になると、さうまでお髭が氣になるんでせうか。光村樣も中田樣もあの、チックをつけると赤くなるつて、奧樣の東髮の油を頂戴なさるんですつて。

中田樣ては

「奧さんは强熱な好みだから、伊藤君がネクタイつけるようになるときつと、眞紅でせう、」

なんてお冷かし遊ばすのよ、にくらしい。私たゞいつまでも手柄の赤と振りの紅とはやめたくないつて申したばかりなのに……「奧樣までいまそれを云ひ出してお笑ひなさる

驚いたやうに晴雄ちやまのつぶらなお眼は、眞黑く輝いてゐる

牛乳を飲ませて上げやうとすれば、生意氣に管で吸ふのをイヤがつてお茶碗でガブ〳〵。つひ先日まで……いつか我宅へおより遊ばした時には、困つちやつて、サジで一口〳〵たらしこんだり、ノートの紙を引やぶつてまいてそれで吸はせたり、どんなに持ちあつかふて大さわぎしたでせう。あの時は赤



ちやんながら此方できまりが惡くなつて了ふ程、まじ〳〵と人の顏ばかりみくらべてたのに、もう立ち〳〵も出來て「ウマウマ」だの「バカ」だの「イヽヤ」「トウチヤマ」なんて云ふ。「バンザイ」と云へば兩手をあげる。「白コイ〳〵」つて云ふとおいで〳〵をする手首の可愛さ、一高萬歲、これも未來の白二本筋、向ケ岡の若櫻?。こんな可愛くなつた坊ちやまを伊藤にみせたくて早くかへればいゝと格子戶のチリンと鳴る度、『あら』つて私が飛び出す奧樣もお笑ひ遊ばして……けれどとう〳〵六時過ぎになつて了つて、奧樣のお車の影の見えなくなつた時分に歸つて來ました。

この頃ふと「若い夢」と云ふ樣な事を考へます、わけもなく心が跳つて熱しやすかつた昔の若い夢――私にはそれが夢の樣な悲しい記憶――それを思つて、更にいまの自分の境遇をかへりみると只わけもなく胸がつまる、だん〳〵周圍が複雜になつて來ますと、それや早死なんか出來ませんわ、兩手を胸の上にくみて、永久に靜けき夢に入らまし、なんて死と云ふことを藝術の一種とあつかふてゐた時代、青年文人や病詩人と云ふ者が無やみにたふとくてならなかつたものです。あゝ私の過渡時代……結婚前の心と云ふものはどんなに動搖しましたか、とう〳〵現實の力に囚はれて、精神的の生活が出來なければ物質的の滿足を得ようと申したつて、何もダイヤの自用車のと云ふわけではないんですが、病的な人にばかり熱中してた時分の事ですから、心身の健全な人をみれば、無趣味なデク坊主みたいに思はれてなりませんでした。



臺所雜記帳

心得て居て便利な事

○ハンカチーフの洗濯法

白い無地の手巾なら三十分許り水に浸して置いて後石鹼をつけて湯で洗へば綺麗になります。併し色模様のあるのなれば水に浸さずに直ぐ湯で洗へば良いのですが豫め湯の中へパラフイン粉を大匙一杯程入れて置きます。斯うして日に乾して後金巾の上から火熨斗を當てれば洗濯屋へ遣つたより美はしくなります。

○リスリンの用法

メリケン粉で菓子を製へる時、粉一磅につき五六滴の割合でグリスリンを入れると大變揑粉が軟くなります。又果物のジャムでも拵らへる時之を大匙に一杯(果物一斤につき)程入れると汁の煮方が足らぬ時でも醱酵しませぬし、又砂糖が白く結晶する様な事もありません。其他毛織物を洗ふ時大匙に二杯も入れゝばよく落ちます。膠を煮る時膠の分量の三分の一程のリスリンを混ぜれば其粘着力を増す事妙です。

○假漆塗物の傷

熱くした亞麻仁油を綿に浸し其器物をよく拭ひ假漆をアルコールで薄めて塗ればよろしい。

○剛い雞肉を軟くするには

毛を拔つた老雞を牛酪を薄く引いた紙で包み二時間か三時間鳥の大さに應じて蒸せばよろしい。一體雞は若鳥より老雞の方が滋養が多いのですから今一つの手輕な方法は、毛を取つてから洗濯曹達を溶した水に一晩程浸けるのです。曹達は桶一杯の水に一握程。尙料理する前其雞の體は十分洗はねばなりません。

○馬鈴薯の用法

生の馬鈴薯は石鹼の代用するので手等洗へば肌が細くなります。亦その茹汁は絹物を洗ふのに役に立ちます餘事乍ら馬鈴薯を茹る時酢を少し落して置けば色が眞白になります。

〇正宗等の酒罎のつめが固着するのを妨ぐには栓の根元に薄紙を卷いて置けばよろしい。

〇便利な膠液

膠五十匁を水一合の割にて、こげのつかぬ樣ぬる火の上にて溶し、攪亂しつゝ後少量の硝酸を加ふる硝酸の量は膠が沸騰する迄入れれば宜いのですがそれと同時に火の上から降し罎に詰めて置けば何年經つても固まらず、何かに物の毀れた時の間に合ひます。

〇永く使用せぬ夜具等に濕氣のつくのを防ぐ法

これは毛布で掩ふて置くが一番簡易であります。

〇毛織物類の塵

疊の上に灰のこぼれたのを鹽をふり掛けて掃きとるのは誰でも知つてるのですが絨氈の上の塵を鹽を撒いて掃くのも一法でせう。其他毛織物の表に鹽を振つて刷毛ではくのも宜敷い

〇玉子の殼と西洋蠟燭

玉子の殼は棄てゝ終はずに箱に入れて殘して置けば瓶罎等の中を洗ふ時殼を細く砕き石鹸を溶した湯と一緒に入れて振れば中が綺麗に洗へますし又糊を煮る時西洋蠟燭で幾度も攪きまはしておけば糊附に火熨斗を當てる時滑がよく其上布地に光澤が出る事妙

〇家具の乾拭

布に石油を少し浸し箱なり桶なりに密閉し、一日程放置して後家具を拭けば塵もよくとれ傷もつかず、それに布の方は多少石油臭くても拭いた物に臭の移る樣な事はありません。

〇濕氣る壁

濕氣る壁に紙等を張らうと思へば、シエラック（假漆の原料）を揮發油にて溶き先壁に塗る。それは軈て薄黒い色に固りますが斯うして置けば濕氣が壁の表へ透る事なく張つた紙のはげる憂もありません。

〇果物汁のしみ

果物のしみを落すには、洗濯する前にアルコールで濕して置くか、白い食卓掛等なれば、しみの附いた時牛乳を少し掛けて置けばよろしい。

○美顏料としてのレモンと乳

レモンが大抵の吹出物に効能のあるのは誰も知つてるのですが最も簡便な法は、五勺程の熱い牛乳をレモン一片の上に注ぎ、蓋をして冷し上皮を棄てそれを毎晩寢る時に塗ればよろしい。斯うして二週間程續け次に一週は休み愈らねば更に繰返せばいゝのです。



英國式家庭料理

きよ・子

●カレーフイツシユ

これは秋から冬へかけて絶好の物ですが其造り方は

一、魚肉三十匁、バター十匁、玉葱一個。カレー粉一匙。牛乳少々及青味。味の素少々。鹽。パン粉。

先魚肉の骨を去り細くきざみ。ソース鍋にバターを入れ溶ける時分を見計ひ細く切りたる葱、青味、カレー粉を加へ十分間程焦げぬ樣攪きませる。後魚肉を入れ牛乳にてゆるめ、鹽と味の素にて適宜に味をつけ五六分攪きませた後扇貝か、火に耐へる小皿に盛り、パン粉を十分表面にふりかけたのを天火にかけ褐色になる迄燒くのです。

●玉葱のオムレツ

玉葱二個、玉子二個。青味（和蘭芹其他適宜）鹽、

玉葱を細く切り脂にていため、卵の溶いたのに青味を混へ脂を引いたフライ鍋の底にて玉子燒の樣にする。それは裏向に皿にのせ適當の形に切つて出すと一寸體裁がよろしうございます。

●フイツシユ、マカロニー

魚肉五十匁。管素麵。バター七匁。パン粉。肴煮汁一合半。故椒。鹽。

製法。先管素麵を鹽湯にて軟くなる迄ゆがき後細くきざむ。魚肉の良き部分を小さくほごし、不用の部分よりは煮汁を取る。

ソース鍋にバタを溶し、メリケン粉を少し宛攪き廻しつゝ入れ、後煮汁を入れる。それが沸立つ時分を見計

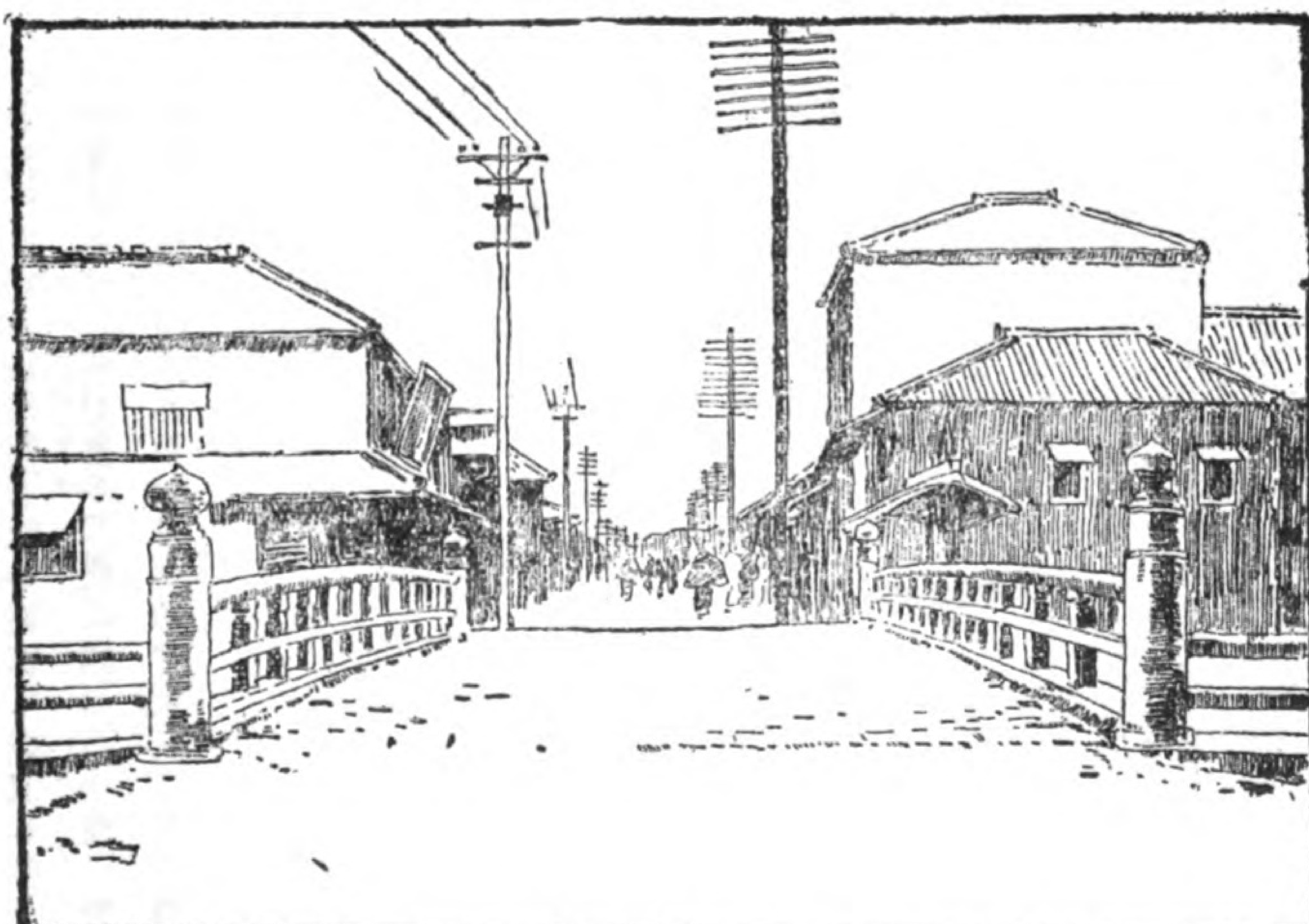
ひ、細くほぐした魚肉、管素麪を加へ鹽胡椒等にて味をつけ、どろ〳〵になつたのを皿（耐火の）に盛り、上にはパン粉を振散けて、天火で燒くのです。

●パンケーク

上等のパン粉五勺強、同量の牛乳、玉子二個、牛酪大匙一杯。メリケン粉（量、パン粉の半分程）。ふかし粉（ベーキング、パウダー）大匙二杯。鹽大匙半杯。の割合

製法。パン粉を牛乳に浸け、軟くなる頃糊の樣に捏ねる、之に溶かした牛酪、玉子（黄味と白味とを別々に溶いて）鹽、メリケン粉を加へ、最後にふかし粉を混せ　脂を引いた鐵鍋の上で燒く、燒けたら可成的熱い内に、砂糖入のバターを塗つて出すのですがふは〳〵とした輕い味は殊にお子樣方がお喜びになるでせう。

　餘事ながらパンでも菓子でも輕くふかさうと思へばなるべくふかし粉を後に入れねばなりません。



長野市本町通



萩の古蹟

安藤妍子

物のあはれは秋こそまされと昔からいひ來つて居ますが必ずしもさうとも限らない樣です。試みに朗かに晴れた一日を秋の野に立つて御覽なさい。天は高く澄み渡つて、蕭々と吹き送る風に、鬢のほつれ毛ふかれながら、清い、新鮮な、その秋の氣を呼吸しますときには、ほんとに、何ともいはれぬ一種の快感に打たれます。

支那の詩人が羽化登仙とか申したのもこんなことでもあらうかと思はれる樣な心持になります。まして野邊のこのもかのもには、今を盛りと色競ふ、桔梗、刈萱、女郎花、黄に紫にさま〴〵に、人のくるのを喜び顏なる、風になびく其風情、なんと優しいではありませんか、いづれ劣らず咲きにほふ、秋の艸花の中でもわけて愛らしいのは胡枝子の花であります。かつ散りかつ咲きて、いつを盛ともわかぬさま、露を帶びつゝ枝のたはめるさま、庭の面に錦をしきわたしたらむやうなる姿など、そゞろに昔の、青丹よし奈良の都の時代に宮仕へした女性の有樣は、とやありけむ、かくやありしなどゝ、それからそれへと追憶の古の影を辿るのであります。胡枝子は普通に萩と書き、荳科植物に屬する野生の灌木で稀には高さ八九尺に達するのもあるとの事です。幹は一つの根から叢生し、葉は棗に似て小さく羽のやうな狀で三出し、秋になりますと、紅紫色や、淡紫色や白色やに花を開きます。名高い伊勢女の歌に、

・うつろはむことたに惜しき秋萩に、をれぬはか
　りにおける露かな

と申すのがあります。

庭見草、玉水草、野守草、秋地草、初見草などゝも

いひまたは玉萩とか、絲萩とか、鹿の妻などゝも形容されて昔から歌に多くよまれてゐます。

夕風のふかぬすゑ葉もなひくなり、おもゐか露の秋はぎの花
宣長

戀しくはかたみにせよとわかせこか、うゑし秋はき花さきにけり
讀人不知

などの歌は萩の花の性情をよく寫したものだと思ひます。俳句にも蕪村のに、

岡の家に繪むしろ織るやはぎの花
小狐の何にむせけむ小萩はら



白萩を春わかちとゐちきり哉

といふやうなのがあります。

胡枝子の果實は節莢をなし、節毎に一箇の種子を藏めてゐます。東京では龜井戸の龍眼寺といふお寺は別名を萩寺といふ程萩の名所で、それから奥州の宮城野も其の名所として知られてゐる所です。

種類も細に研究しましたならばいくらもありませうが、先づ、宮城野萩、木萩、山萩と大體、斯う分つことができます。今それ等に就て、その特徴を申しませう。

宮城野萩は、前申しました宮城野に多くあるから、左樣名づけたのでせう、他に絲萩とも或はみだれ萩ともいひ、葉は本末ともに尖つた三小葉、品字形に排列し、花穗は長く垂れ、色に白と紫とあり、盛りがながくて、萩類の中で人の最も賞觀するものです。

木萩といふのは山や野原に自生するので、幹の大さは略栂指位までになり、葉は本も末も尖つてやゝ宮城野萩に似てゐる。しかし質が剛くて横脈が多く、花は重に紫色です。

それから山萩、これは幹は直立してゐて宮城野萩のやうには垂れず、また葉は稍大きく、庭園に植ゑて花を賞します。

この胡枝子の花が吾が國で賞觀せられたのはずつと以前からで、仁明天皇の御即位の承和元年、同じく十四年にも宮廷で萩花宴をなされたといふことが「續日本紀」に見えてゐます。今からざつと千〇七八十年前です、既にこの花が賞觀せられつゝあつたことが分ります。

胡枝子はかやうに花が賞せらるゝばかりでなく、いろいろの用にも立つのであります。其嫩葉は製法すると茶の代になります、それゆゑ萩の事を、隨軍茶とも申します、軍の樣に急がしい場合に持つて行つて間に合せたのかも知れませぬ。又凶年には其實を米の代りにして炊いたこともあるさうです。「救荒本草」といふ本に、

饑を救ふに子を採り微しく舂けば即ち米と成る、先づ冷水を用ゐて淘淨し後、熱湯を注ぐこと三五次、水を去り鍋に下し或は粥と作し、或は炊飯を作し、皆食す可しとあります。其外これを刈り取つて乾燥し、貯へて置いて冬の間の馬や牛の飼料ともすることが出來ます。胡枝子の幹はまた筆軸に使用します。彼の仙臺の名產として、埋木などゝ共にこの萩軸の筆は現在賞用せられてゐます。箒などもこの幹でこしらへますし、或は袖垣に結ふたりして庭園に雅致を添へます。

むかし京都が都でありました時分、禁中には萩戶と申すがございました。九重雲深うして詳しく拜承する

由もありませぬが、清涼殿の庭前、東西に小萩垣があり、その傍の御殿の障子にも萩の繪が書いてあつたさうです。それを萩戸といふたのでございます。「禁秘抄」といふ書に、萩戸は天子のおはす所なりとしてありますけれどもはつきりは分らぬと申すことです。月清集に

はぎの戸の花のしたなる御溝水、ちとせの秋の
かげぞうつれる

といふ歌がございます。



夏の眞晝の日光は、强い光線を庭に投げて、花も葉もみつめられない程まぶしい。

孔雀草の一群は、暴風の惱みの名殘を一畝り、こんごらかつて咲いて居りますの！

何といふ心地でせう？、さう？！

勝ち誇つてゐるやうにも見えるのね

「あの葉が孔雀の羽のやうに、青くつて細そいでせう その先に花がまん中にえびいろの紋をつけてゝ、よく似てゐるからさういふんぢやあないかと思ふわ」みどりさんの說明も一理ある。

しほらしい花ぢやあないが、美くしい。……よく輝やく。

誇りのやうに――努力のやうに――。（花がたみ）

古事來歴

△踏繪の事

徳川幕府の初め頃 耶蘇教禁制に關して起りたるものなり、寛永五年長崎奉行が、轉びの者(棄教者)の眞否を試みんが爲めに信徒の崇拜せる耶蘇の畫像を踏ましめたるに起る、元と紙製の畫像なりしが、破損し易きを以てこれを木版に彫刻し、爾來毎年一般庶民に行はしむることにしたれども、猶久しからずして磨滅破損せしを以て、寛文九年長崎奉行は更に之を銅版に鑄造せしめたり、されど幕末に至り西洋との交渉次第に頻繁に及び、和蘭人の請求と世界の大勢とに鑑みて遂にこれを廢したり、其形は長方形と楕圓形との二種あり共に長さ六寸、横四寸許、厚さ一寸半、表面に緣廓あり、中に聖母耶蘇を抱くの體、又耶蘇書を講じ、衆弟子傾聽するの樣、或は耶蘇の十字架に刑せらるゝ狀等を隱起せり、さてこの踏繪は長崎奉行所と江戸吉利支丹屋敷とのみに藏し、これを行ふ範圍は江戸吉利支丹屋敷の外、九州に限れり其法は毎年正月四日以後、奉行所より長崎の町々へこれを下附し、庶民全體を通じ老少男女悉く跣足にて其上を兩足もて踏み、病者は足跗に當てしむるものなり一町終れば次の町へ廻し毎町、斯くの如くして終れば奉行所に返納す、又九州諸大名の領内には奉行所より踏繪を貸し渡して民衆に踏ましめたりき、尤もこれは庶民にとゞまり、士分には及ばざりしなり、當時長崎奉行所には十七面を藏したりといふ。

△祓の事

祓は災穢を解除するを云ふ、即ち穢を去り淨に就き、惡を除き善に移り、災厄を拂ひ、吉祥を求むるなり、拂の義、古はハラヘと訓じたり、伊弉諾尊が黄泉國に赴きて穢れたるより日向の橘の小門の阿波岐原にて、まづ身につけたる杖、衣服、冠、手纏等を投げ棄てたまひし事あるを初見とす、蓋し我國俗不淨を忌むの念極めて強きを以て此風俗を生じたるなり、なほ右の穢に觸れたる場合に自ら行ふ者なるが、別に人に科したるものあり、斯くして祓の風次第に廣く行はるゝ事となりしが大別して事前に行ふものと、事後に行ふものとの二つとなり、事前に行ふものとは祭祀、祈禱、奉幣、參詣等の事あるに臨み、其當事者が豫め行ふものにして事後に行ふものとは多くは除服の爲めにし、其他燒亡、雷震、疾病、死穢等の後に行ひしものなりき、

△唐草の事

唐草とは織物又は、蒔繪などにあらはせる蔓草をいふ緘草の

義なるべし、古實家伊勢貞丈の説に、からくさとて物の文に畫くは、草の蔓のからみたる體にてからみ草といふ事あり、唐土の草といふ事にはあらず云々と、中古以來、袍の文に多く此唐草を用ふるに取り、官位又は家々の故實によりて、菊唐草、丁子唐草、窠中唐草、轡唐草、若松唐草、牡丹唐草等を用ゐ、其他器具等に皆唐草を用ゐたり。

△羽子板の事

羽子板は正月女兒の遊びに用ふるものなれども、古事をさぐればこれはむしろ夏秋の頃に用ゐしものなるこそをかしけれ、世諺問答に、「これはをさなきものゝ蚊に喰はれぬまじなひなり、秋の初めに蜻蛉といふ蟲出來ては蚊をとり喰ふ物なり、こぎのこといふは木連子などを、蜻蛉がしらにして、はねをつけたり、これを板にてつきあぐれば、おつる時とんぼがへりのやうなり、さて蚊をおそれしめんが爲めに、こぎのことてつきはべるなり」とあり此説もし眞なりせば、最初は夏より秋にかけて用ゐしもの、いつしか變じて正月の遊戯となりたるならん。

△文箱の事

文箱又は狀箱ともいふ書狀を納むる箱をいふ、伊勢物語に、「男いとうめでゝ、ふみばこにいれて、もてありくとぞいふなる」と見えたれば古へより行はれしものなるべし、されど中古は手づから持ち行き、又は文杖に挿み、或は木、草、などにつけて遣はし、文箱を用ふる事は廣く行はれざりしが如し、室町時代より漸次行はれ、江戸時代に至りては消息を遣はすに男女共に文箱を用ゐ、終に華麗を競ひ、蒔繪、螺鈿、等を用ゐ、其上を紫布にて包み、更にこれを黑漆箱に入るゝに至れり、大なるは長さ一尺三寸、幅三寸、高二寸五分、小なるは長さ七寸、幅二寸五分、高さ一寸四分位なりし、明治以後郵便の制行はるに及びて其制頓に廢れたり。

△草紙の事

思ひ浮れる事何くれとなく書きつけたるもの、即ち隨筆體の文物の總名なり、枕草子春曙抄に、草紙は雙紙とも書けり、草紙は物の下書を草案、草稿などいへる其心にていまだ清書をもしあへざる物との心にや、雙紙は紙ならべて書きつられたる心なるべし、何れも昔物語の總名也といへり我國にては清少納言の枕草子を最古とす。

△埴輪人形の事

埴輪は上古墳墓の周圍に立てたる埴製の器物にして、周圍に輪のごとく竝立したるより名づけたるものなり、其種類は、土

偶、土器又圓筒形のものあり、土偶には人、牛、馬、兎、野豬鷄、水鳥等あり、土器には笠、楯、靫、鞆、鉾、壺、鐘形の器物等あり、又圓筒は土管形をなしたるものにて人類學者の說によれば最初は墳墓の崩れざる爲め、土留の用に供し後には神社の玉垣と同じく區域を定むる用に供したるならんといひ、又考古學者の說によれば、墳墓の裝飾ならんといへり、垂仁天皇二十三年皇后薨じたまへる時、野見宿禰が陵墓に生人を埋め立つるの風に代へんが爲め、埴輪を以て人馬及び種々の物の形を作りて天皇に獻じ、これを陵墓に樹て、後世の法規となさんことを請ひしかば、天皇嘉納したまひ、始めて皇后の墓に樹てしめたり、埴輪の制こゝに起ると言ひ傳へり、或はいふ埴輪の制は神代より存じたるものなりと。

△檜扇の事

檜の薄板を以て造つたる扇をいふ、檜の薄板は親王以下三位以上は二十五枚、四位、五位は二十三枚、六位以下は十二枚を以てつくる、これを綴るに白の絹糸を以てし、板地の繪樣は持つ人の老少によりて各差あり、普通少年の人の使用するは板目の泥繪に少し散し描きたるものあり、攝家盛年の人は兩方の表に藤の丸おしたるものなり、東宮の持ち給ふは金青、緑青を以て白地に鶴に松、龜に波を描き、村濃糸の垂れに松枝を結ひつけたり、さてこれを使用する時は束帶衣冠、直垂を着したる時にて、夏冬ともに通用したれども後世蝙蝠の起るに及び專ら冬の扇となれり、女子も大儀の時檜扇を持てどもそれは古くより衵扇といひて、檜扇とは稱せざりしなり。

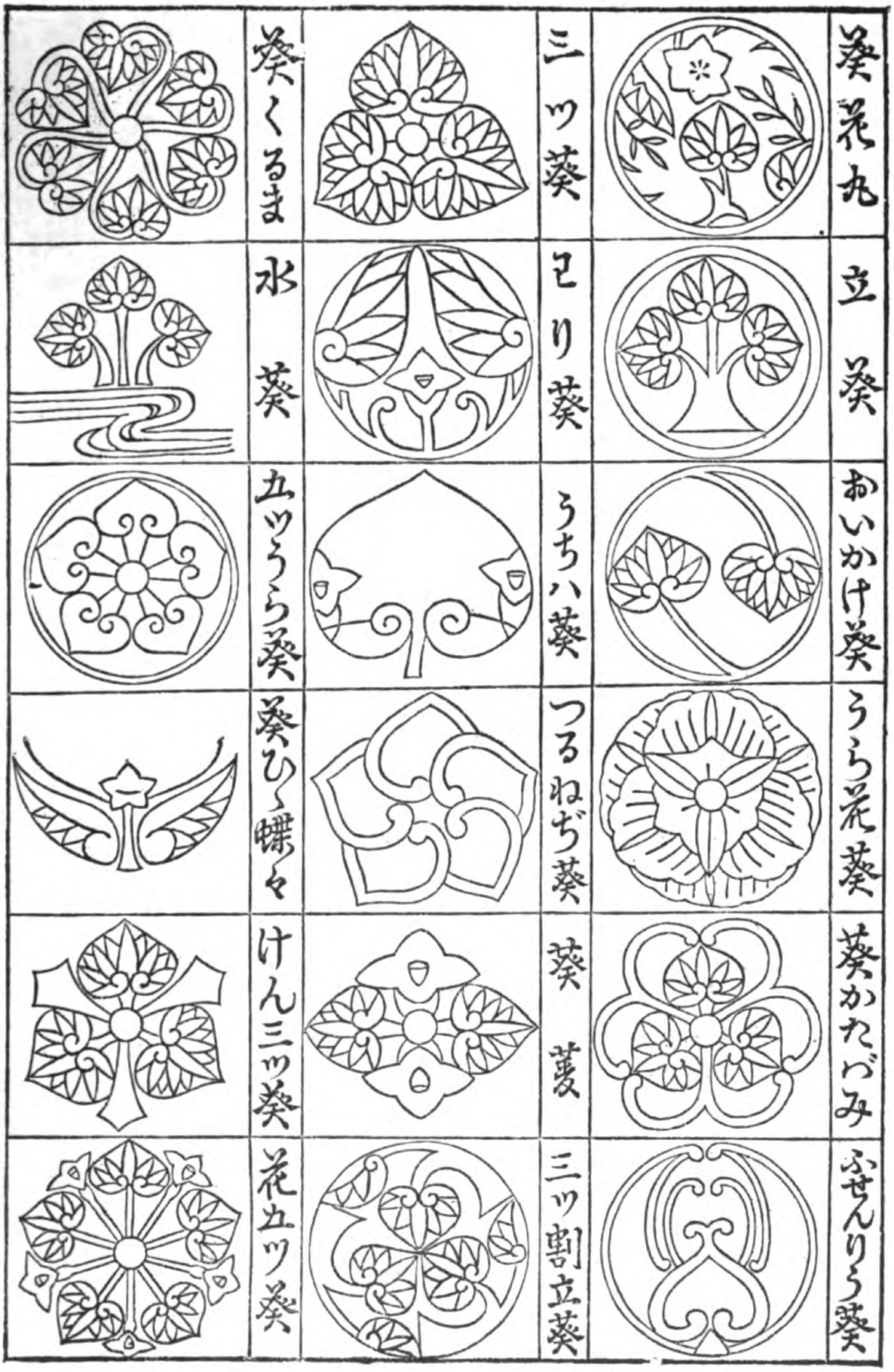
△歌繪の事

これは戲れ畫の一種、歌の意によりて畫きたる繪をいふ、又は歌詩の意に採り、その歌詩の全部又はその一部の文字を書き交へたるものをいふ、又一說に延喜の頃より屏風などに歌の意を繪にかき、傍らに歌を書きたるが始めにして、後には歌中の字を草木水石に畫きたる故に葦手繪に似たるを以て、兩種を同じものなりといひ誤るに至りしといふ。

△緣座の事

犯罪者に連帶して、親戚故舊の者が、その罪の責任を頒つを緣座といふ、王朝時代には謀反、及び大逆を犯せるもの父子は皆沒官す、但し、年八十以上並びに篤疾者は免ぜられたり、又兄弟は配流し、謀叛を犯せるもの子は中流に處したり、鎌倉時代には情を知ると知らざるとによりて其の罪を分ち、情を知らざるものは妻子といへども緣座せざるの制なりき、以下時代によりて多くの變遷あり。

葵の意匠


葵花丸
三ツ葵
葵くるま
立葵
巴り葵
水葵
おいかけ葵
うち八葵
五ツうら葵
うら花葵
つるねぢ葵
葵ひゝ蝶々
葵かたばみ
葵菱
けん三ツ葵
ふせんりう葵
三ツ割立葵
花五ツ葵



研究的態度

浮葉

おや、お歸りなさる氣？、まあ厭な、かへるたつて歸へすものですか、此夜更に、え、何ですね、內へ來ていらつしやるのに、ちつとも心配なんかありはしないわ、必度、泊るつて事は始めつからきまつてるのぢやありませんか、ほゝゝゝ隨分無理を云ふでせう、でも留守で淋しがつてる所へいらしたのが、因果と諦めて頂戴な、ま落付いて下さいよ、さあ、おゝさう〳〵、、、かすてらがありましたつけ、あれを切つて、新らしくお茶をいれませうね。

照さんあのそら、水島さんね、貴孃が大變きらつてた、あの方との御緣談どうなつて？さう、ぢやきつぱり斷わりなすつたの、好かつたこと、伯母さんはあんなに乘氣になつていらつしやるのに、照さんはもうもう厭がつて居なさるし、何うなるかと思つて私、內々心配して居ましたのよ、けれど何故またあれほど信用して居らした方を、伯母さんがよくまあやす〳〵と破談になすつたのでせう？、へえい？驚きますねえ、まあ、あの方そんな人でしたの、水島さんに欺かされた女は幾人もありますつて？ぢや色魔なのですねえ、危いこと〳〵貴孃がいやだ〳〵と云つて、話がのび〳〵になつたから、よかつた樣なものゝ、もし照さんが平生の素直ではいつて直に承知して御覽なさいな、今頃はどんなにして御出でせうね、ほんとうによ御座んしたわ、爾でせうとも、人つてものはまつたくうかと信用することは出來ません。なあに伯母さんでなくつたつて、誰でもあの人には欺まされますよ、ま、男前はよし、口は巧し、第一鷹揚で、何處其所の若樣と云つても好位なのですもの、え？ほゝ爾でせう？尤もねえ髭のない男は油斷するなつて事を云ひますが、ま、水島――あの人なんかを云つたもので御座いませうよ

眞箇に氣をつけなくちや、凉子ですか？え〻御蔭樣でまあ〳〵い〻工合らしいのですよ、姑がやかましいの、弟が腕白で困るのつて泣言ばかし云つてはよこしますけど、どこへ嫁つたつて姑の八釜しいのは當前ですわ、姑が云つてよこさないたつて分つてゐますのよ、まあね、義明さんが大變わかつた人で、始終凉子の機嫌をとらんばかりにして居ますつて云ひますから、彼女にとつてこれほどの仕合はないでせう、女は何と云つても良人が第一ですよ、姑や兄弟はいくら世話がやけると云つても、一生面倒を見るてのぢやないのですけど、良人ばかしは一生どころか、二世も三世も連添ふのですから、もし惡いのにでもぶつつかつて御覽なさい、もう〳〵六十年の不作位ぢやありませんわ、まつたく、

私は爾思つていつも云つてやる事ですが、凉子なんかの家でも、お姑がしつかりした、まあむづかしいと云はれる方なればこそ、義明さんがあんなに有情しくして下さるのだと、どう云ふ譯つて事もありませんけど、爾ちやありませんか、男つて者は妙な者でしてね、女房は可愛い〻、おほ〻〻〻それはまあ當前ですけど其女房を可愛がるのがまるで子供がおもちやを持つて遊ぶ樣に、朝から晩までなめる樣にしてるかと思ふと、打つてかはつておいつなんて呼び方からして違はして怒り散らすのですよ、女房て云ふ者は凭うまで男が自由にしてもい〻者だと云ふ樣な、氣持をあらはして見るとでも云ふのでせうよ、ともかくも叱かつたりなだめたりちやうさいばうにしないと承知しないのです、だから差し向ひと云ふ御家を御覽なさい、夫婦喧嘩が絶えませんでせう、夫婦喧嘩は犬も喰はぬと云ひますが、其筈ですよ、男が妻を可愛がる爲めにする喧嘩ですもの、ほ〻〻〻でもまつたくですよ、所が姑樣があつて見ますとね、姑はいじめ役でせう、そら自分のいじめて見たいと云ふお役は姑樣がして終うものですから、仕方なしに男は可愛がり役を勤めて役不足も云はないと云ふ譯なのですわ、女もですよ、姑にいびられいびられる程、心細くはあるし、悲しくはあるし、自然に良人を賴ると云ふ風になり、賴られ〻ばそこは人

情ですから益々妻がいとしくなる、頼もしいといとしいとで夫婦中はいよ〳〵好くなる、姑様の方は一種の嫉妬心で、なほと嫁が惡くなると云ふ段取りですのよ

私なんかの友達でもねえ、姑様がむづかしいから、御夫婦中がよいとは一概に云へませんが御夫婦中の宜い方は必度姑様がおむづかしくつていらつしやる、それはもう十中の八九いゝえ百人の中で九十九人迄郷ですの、もし當嬢が御嫁にいらして、お姑様の始末にお困りの樣なればお仕合ですよ、男一人の所へなどいらつしやるものではありませんよ、ほゝあら戯談



では御座いませんわ、お姑様の機嫌のとり方ですつて、私は姑もちませんものですから困りましたね、不如歸のお豊に山木が教へるぢやありませんか、武男さんと中よくするなつて、ね、お姑様の御手から、後生大事に納まつてるいじめ役をもぎとつて良人に渡せば、お姑様は仕様事なしに可愛がるて役になりますのよ、然しもしか良人が眞實にいじめ方に廻つては大變ですからそこは宜しく御二人の相談づくでつかずはなれずと云ふあざやかな所を見せなくつてはほゝゝゝほゝゝゝ、餘りしやべつておゝ辛度、はゞかりながら茶々ひとつ、よ

云ふ所ですね、あゝのどが乾いた、ほゝゝおや苦い事、入れたまゝ忘れてしやべつて居たものですからお茶が出すぎて、まあ、此色！

人樣は知らず、私が見た所では良人として一番いけないのは、人前のいゝ人と、酒のむ人だと思ひますわ、人前が好いと云つても色々ありませうけれど、御世辭が上手で挨拶の巧い人や、所謂交際家と云つた風な人は友達としてつき合ひますには、女の友だちなぞよりどんなに面白いか知れませんけれど、只通り一遍の交際丈で、良人としては大の禁物ですよ、こんな人には誰でもコロッと乘せられてしまいますけれど、表の美しいものは必度裏はいけません、一寸見にきさくな樣に見えましても、内ではそれ



はそれは氣むづかしいと云ふのが殆ど御きまりですの、同じ彼の人は面白い方だと云ふ中にも、眞から邪氣がなくつて、樂天的な、表裏のない愉快な人もありますけれど、よく〳〵注意してつきあつて見ると、前のと之とは直に見分がつきます、一番よく分るのは、笑ふ時の顏で、男でも女でも、爾ですけど、笑ふ顏ほど眞のあらはれる事は御座いませんよ、ね、さうでせう、髭むじやの怖らしい方でも、笑ふと子供見たいに愛らしいかつたり、どんなにおとなしやかな顏してゝも、笑ふ口元が薄きみが惡かつたりしますでせう

いくら親切な面白い人でも、上部ばかりの人は、笑ふ

時に必と底意地の悪るさうな顔をいたしますよ、そんな人には忘れても嫁らしちやいけませんよ。

御酒のみですわ、一合位で上機嫌で、ねてしもう樣なのなら、よござんすけれど、五合でも一升でも、いけるとか、三度々々なくてはいけないとか云ふ方は、眞平々々、でも御縁物ですから、どんな事で、御酒のみの旦那樣を御持ちにならないとも限りませんわねえ其時に旦那樣の御酒の嫌になると云ふ秘法を御敎へしませうか、ほゝゝ秘密の法ですよ、それはねえ白南天の根を煎出して、其汁を何かに入れて呑ますのですと——實驗したのぢやありませんから保證は出來ませんわ——妙に効くと申しますよ、おやお婆さんの樣な事ばかし、今晩は云つてますのねえ、私も年を老りましたわ、ほゝゝ、

あ、御降りで御琴の御さらへを御始めなすつた、御上手でせう、え生田ですつて、御十八よ御美しいつたら、あら、月があんなにさして居ますよ、ランプがあかるいものですから、ちつとも氣がつきませんでしたよ、緣側へ出て見ませうね、其御羽織御召しなさいよ、風がひや〳〵して冷えますから、

あゝ好い月！　爾ですね、もう十八日位ですよ、虧げ行く月は一層風情があるやうに見えますこと、世事にたとへて少し傾きかゝつた人の身の上御覽なさいまし、あの楓の蔭！　此きたない庭がまあ、繪にかいた樣ぢやありませんか、月光は萬物を美化しますよ、今夜の樣に澄んだ淋しい月の光と、あの琴の音と調子がぴつたりと合つて、ほんとうにもう好い事！　おゝ寒い、あゝ木の葉が散る、あの楓かしら、あんなにひらひら舞つて居りますよ、池に落ちたら、月が碎けるでせうね。人の心も？丁度・・・





斷腸錄

松井鏡子

△風に傷みし無慘の花

隨分吹きましたのね、私もう〳〵驚いちまつて……。お障りもなくゐらつしやいますか！　御案じ申して居りますわ。

まあ何といふひどい暴れ方でございませう、木の枝なんて、泣くの叫ぶのといふのを通り越して、もう必死の怒號！　パタンと凄まじい音がして垣が倒れる。瓦が飛ぶ、雨に交つて松の枯葉がまるで槍の様に散つて來ます、此邊は建仁寺垣が多いから、垣の被害は數へられない程ございました。

雪にさへ褪色もせず、おぢけもせぬ松の嫩葉を、むごたらしくも地上に叩き落した暴風は、容赦なくあれ廻つて、脊のひよろつ高いコスモヤスや、ダリアや、立葵やをことごとく地に跪づかせて了ひました。

だつて、大きな樫の木が、根ごと倒れて垣根にくづれかゝつてゐる位ですもの、草花なんて實際手の附けようもなかつたのです。あなたも御存じの戸山の原へ行く路の大木ねえ、あんなのでさへ可哀相に、根本五尺餘の處から、思ひ切りよく吹き折られてあります。

先刻汲み上げた井水を見ますと、枯葉松葉が澤山浮んで、お白米を磨ぐにもお茶碗を洗ふにも、邪魔をしてどうしても退きませんの。

コスモスの花が咲けるかしらと、私心配で堪りません、咲かなければ……あゝ春から樂しんでた花なんですのに！

昨夕被せたふくろの儘に、朝貌の蕾は吹き折られて絹洋傘を疊むだやうなのが、がつくりと頸垂れてゐる可憐さと云つたら……普通の朝貌より早く咲いたのが、不幸だつたんですのねえ。

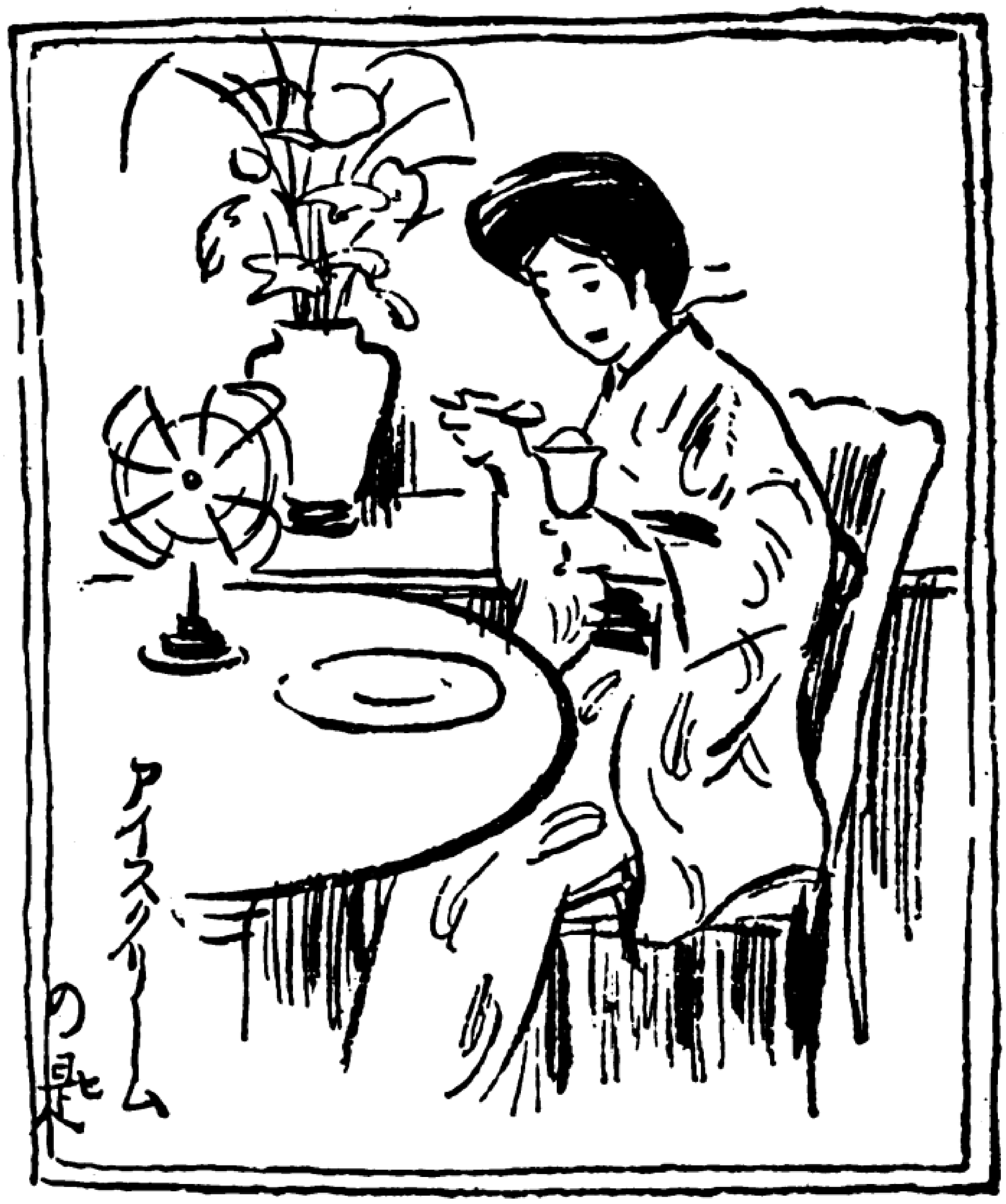
……………。

あの物凄い嵐は夢かと許り、今の日光の麗らかさ！

風は未だ吹き治まりはしませんけれど、先刻程の烈しさでもなく、雨はもう止みました。

さあ、さあ、さあ、と風が吹く、梢の葉は裏向に、白いところを見せて靡いて居ます。丁度川に溺れて死だ美人の髪の毛の様に、濡ればんで而して艶がない。

家の破損は屋根の僅と垣根ばかり、壁一つ落ちや致しませんけれど……人に負傷なんぞ、ちつともありやあしませぬけれど……私は草花を助けてやりたうございました、大きいうつむき勝な百合の姿や、紫色した桔梗の枝。それももう半分からは、私の眸から消え去つて了ふものなのです。



廣くもあらぬ庭園乍らも、花の種類は五十にあまる、人形一つ無い私の身にとつて、小さい花はどんなにか懐かしいお友達だつたでございませう？

……………。

ゆがみなりにも月見草の花は、この夕べに匂ひました、風の悩を忘れたやうに、矢つ張り淡い黄色でございます。

「もうお帰り遊ばしますの？」、人を送つて出た私は、門の扉に手を置くと、袂にさはる花の一輪を摘みとりました、石竹の花、水無月は美麗しい花が多かつた。

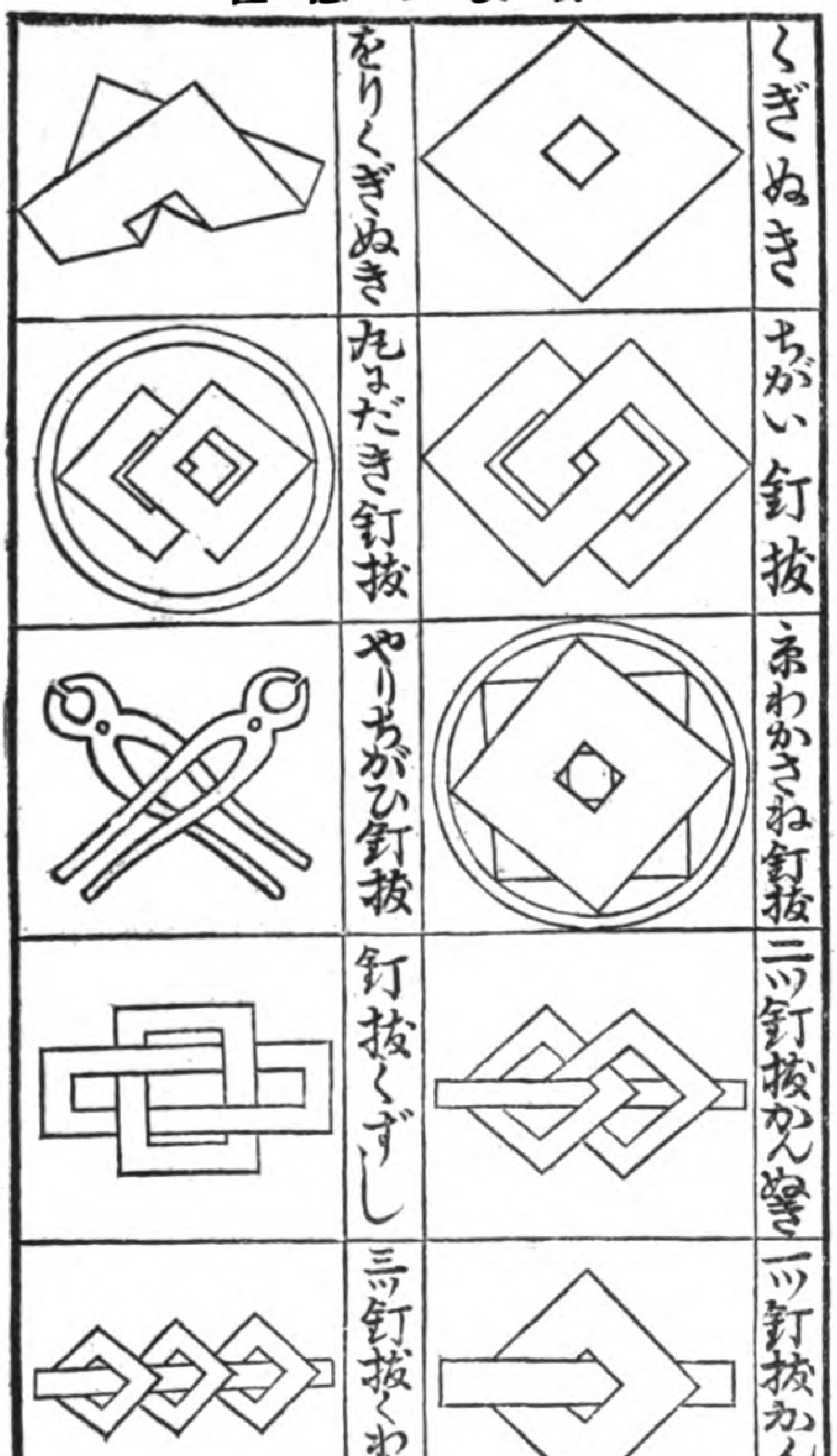
ダリアの花の深刻な色彩をみつめると、寂しいやるせなさがひそんでゐるやうに思はれます。それを包む華美な衣裳、丁度都會に住む女の心に、よく似てゐるのではありますまいか？月見草の花、石竹の花、マクレッの花、アラセイトウの花、みんななつかしい！好きだと云つたつて夏も逝くあゝもうよしませう。

私の十七のともいつの日にか逝くのでございますもの……（それは私にだつて勘定が出來る）……

その逝くものを戀ふてゐるうちに遂に私も逝くであらう。

書き始めて三度筆を擱いて三度改ためました、晝、夕べ、夜。私は此の儘筆を捨てませう。また曉となつたならば新しい心を新らしい筆にまかせて……

釘拔の意匠



クルツプ夫人の財產

獨逸第一の分限者は孱弱き婦人のクルツプ夫人である。例のクルツプ製鋼所の持主で、八千九百萬圓の資產家として之に及ぶものは無い。年收は略と八百九十萬貳千圓あるさうである。今獨逸の五大富豪を順に記すと下の如くである。

一、クルツプ夫人	八千九百萬圓
二、ドンネルスマルク公爵	八千四百廿五萬二千圓
三、ウーエスト侯爵	七千百九十七萬六千圓
四、ロスチヤイルド男爵	五千九十三萬二千圓
五、プレス公爵	四千萬圓

次に年收を順に記すと

クルツプ夫人	八百九萬二千圓
ドンネルスマルク公爵	四百二十五萬二千圓
ウーエスト侯爵	三百三十三萬二千圓
チール、ウヰンクレル伯爵	三百二十五萬六千圓
ロスチヤイルド男爵	百九十一萬四千圓
カール、ヘンシエル	百八十萬圓

クルツプ夫人の全財產は、人も知る如くクルツプ製鋼所に投資してある。製鋼所の資本總額は一億三千萬圓で、今や六萬八千百九十一人の使用人を有して居る。是が今より八十五年前には唯僅に四人の職工を使役するに過ぎない一小鍛冶屋であつたのである。



嫁入準備の寫眞

娘も十九歳から廿一二乃至二三歳の嫁入仕度時分になると、第一容子が學校時代とはカラリと變つて來る。今迄快活に口數の多かつたのが急に内氣になつて、云ひたい事も多く云はず、擧動も萬事控目になる。而して寫眞を撮るにしても自分から註文を出して、斯して寫さう怎うして撮らうなどゝは云はぬ。最うチヤンと自分の特長を知つて居つて、例へば左鬢より右の鬢がフツワリして恰好が好いからとか、仰向加減より俯向いた方が好いとか云ふ風に夫れだけを參考の爲めに云つて、其他は一切寫眞師任せにする。之は云ふ迄もなく唯少しでも綺麗に美しく寫る樣にしたいと云ふ心からである。夫れだから寫眞師の方でも、學校時代よりも此時分が責任も重く、從つて殆んど眞劍になつて撮る。寫眞が出來上つても、學校時代は美しいとか可愛らしいとか奇拔だとかと褒られるのが一番嬉しいのだが、嫁入時代になると、人の批評よりも先づ自分で仔細に判斷する。人の前では自分の寫眞を見て見ぬ振りをしても、人の居ない處で幾時間でも凝と見詰めて、眉の間が何うとか、半襟と着物の具合が何うとか、或は襟を合はせ過ぎたとか、胸に皺が寄つて居るとか云ふ風に、男子の思ひも付かぬ微細な點にまで注意を拂つて研究する樣になる。而

して寫眞を撮る二三日前から、雜誌の口繪や友人の寫眞を仔細に比較研究して來る人が多い。畢竟學校時分は面白半分で撮り嫁入時分は眞劍で撮ると云ふ違ひがある。

又た寫眞師の最も責任を重く感ずるのは見合に用ゐる寫眞であるが、此場合は殊に其人の特長を見出して其特長に全力を濺ぐのである。以前の樣に唯美しくさへ撮つて置けば好い抔と思ふと大きな間違で、此頃は見合の寫眞に違つたのは役に立たぬと却つて不興を蒙る樣になつた。(大武寫眞師)

大地震の豫測

大阪測候所の下野所長の話によれば、地震學上の歷史と學理に徵して、本年は日本で最近百年間に最も慘害の凄じかつた江戸附近ですら十萬の死者を出したと傳へらるゝ有名な安政大地震の地震學上の一周期に近づきつゝあるといふ事である。言ひ換ふれば本年から四十五、六、七、八年の數年には日本中を搖り崩すドエライ地震が何時起るか分らぬといふのである。

所長曰く、この地球の天災中で一番恐ろしいのは大地震であるが、その大地震中で最も恐ろしい太平洋の大地震系上のやつがもうそろ〳〵日本の中部に起るべき時分になつてゐると思はれる。

此の大地震帶は、南米から太平洋西岸を北米へ廻つて、アラスカから亞細亞に飛び、カムサツカに入り、日本の千島群島を經て



本土、四國、九州を通り、南米諸島に入る二萬餘哩に及ぶ絕大なる?形をした帶である。

この地震帶の上で日本附近に大地震が起るとなれば、海ならば大海嘯を陸に送り、陸ならば無數の人もろとも大厦、小屋、金殿、玉樓を一瞬に搖り崩し去るのである。

今天正以後の日本の大地震を調べて見ると、天正三年十一月二十九日午後十一時、攝津、讃岐に大津浪起り、死傷算なく、餘震三箇月に及んで止まず、慶長元年閏七月十三日午前二時に起つた京畿の大地震は、死者六千人、それから寬文二年、文政二年、天保三年に相繼いで起れる大地震、次で安政元年の江戸大地震、次で同二年九州四國を搖り崩したもの、更に下りて明治二十四年九月美濃の大地震、それから三十六年一月及び四十二年八月(江州)の大地震に及んでゐるが、能く專門的に調べて見ると、これらの大地震の中にも自から前記太平洋の地震大系線の外に反れた處に震源を有するものもあるけれど、嚴密なる專門の調査に據つて知り得らるゝ處によると、大都會を全滅若しくは全滅に瀕せしむるやうな大きなやツ、例へば先年南米ヴアルパライソに起れるもの、及近くは桑港を殆ど全滅に陷れた如きもの、我日本に取りて言へば大江戸を殆ど全壞の有樣に陷れた安政元年の大地震の如き、最も恐ろしき大地震中の大地震は何れも前記大地震の本系の上に現るゝのは斯道の泰斗大森博士初め歐米專門家等

の等しく一致唱道するところである。

それで大地震中の親玉は果して何時頃日本の本土を見舞ふであらうかと言ふと、專門的調査の届き得る限りに於て、平均五十一年目から六十七年目内外に起る割合になつてゐるから、我等日本人は既に今より七年前から安政大地震に歩一歩近づきつゝあるのである。徒らに世人を畏懼せしめるのは好まぬが、事實の統計は我等に斯く教へるのである云々。

エリサベス女皇に就て

英國の歷史に有名なる彼のエリサベス女皇は婦人に非ずとの奇怪にして然かも相應の證跡ある說あり、之を唱ふるは英國の學者ブラム、ストーカー氏にして、氏はヒスレー地方に行はるゝ古話を耳にしてより種々研究を重ね此說を口にするに至りしものなりといふ、抑も此ヒスレーは英蘭の西に位するコッツウオールド山中の一僻村にて、エリサベス女皇は、幼時此地に成長し、其の邸宅は今尙ほ當時の狀を改めずと傳へらるゝが、此の地方にては、千五百四十年、エリサベス內親王熱を病み、七歲の弱齡を以て敢へなくも此世を去りしに、恰かも內親王を訪問せんと父君ヘンリー八世到着せんとするあり、皆々些かのことにも臣下の命を召さるゝ猛き此君に、此凶報を傳ふる勇氣あるものなく、養育の任に在りしアシュレー夫人は、窮餘の策として替へ玉を以



て一時を彌縫せんと、年頃の少女を尋ね求めしも得ず、辛うじて同年配の少年を偽り飾りて僅かに同王を欺きたり、此少年亦事露はるれば己が命の危かる可きを思ひ、力めて內親王の狀を装ひ、遂に史上稀に見る大君主の一人となりたるなりと云ひ傳へたり、ストーカー氏は不圖此古話に基き、種々史上の事歷、記錄を調べたるに、同女皇は養育者アシュレー夫人並にサー、トーマス、パーシーを終身寵し、結婚を拒み、男性的性質を備ふるなど、男らしき節多きを發見せり、即ち女皇とアシュレー夫人とパーシーとの間に一種の秘密ありしことに就いては、既に數多の史家の認めし所にして、此の兩臣に對しては非難の聲高かりしに拘らず、女皇は終世之を捨てず、ストリツクランド夫人の如きも、其著に於て『斯る行動は自ら人をして女皇とパーシーとの間に一種の秘密存すとの疑を抱かしめたり、而して此秘密も決して輕々しきものに非ず、啻に女皇の淑德に關するのみならず女皇の生命を危からしむる底のものにて、パーシーは此秘密を守りしものなる可く、アシュレー夫人に就きても同樣の想像行はる』と記せり、萬人の尊敬を受くる地位に在る女皇が、數多の結婚申込を退けたるは決して禁慾主義には非ず、又女皇がシーモア卿に寄せたる親翰に於て『朕は婚がんとするの意更になし、假りに斯る意起るとするも、行ひ得ることゝは信ぜざれば云々』と記せり、他の親翰にも之に類する語句を見ること少からず、何

が故に女皇は婚姻の不可能なるを繰返されたるものなるか解す可からず、夾に若し限りなき野心、斷呼たる決心、敵者に對する殘忍が男子の特質なりとせば、女皇は確かに立派なる男子なり、女皇はエセックス伯を誅し、メリー女皇を殺せり、又屢ゝ侍臣を毆り、大聲を以て輔弼の臣を叱り飛ばせしことあり、西班牙の來り寇せんとするや、女皇は勇ましき言葉と勇ましき態度とを以て兵士を激勵せしことあり、ストーカー氏は、此等の資質は是れ婦女子の有す可きものなりや、女皇は男なりとの說も强ち無稽なりと笑ふ可きに非さるなり云々と說けり。

注意すべき毒茸

茸類は凡そ三百餘種あるが、其中毒茸と云はれる物が、凡そ一割、約三十種位ある。其中日本人の心得て置くべき重なる毒茸類は大抵左の如きものである。

一、毒鵝茸　是は鵝茸に似て、滋掛の樣な物がある上、非常に氣持の惡い香を持つて居る。四十一年に始めて我邦にある事を知つたもので、上州伊香保で六人が酒の肴にして食つて、五人迄死んだ。

二、卵天狗茸　と信州長野邊で云ふ茸がある。此茸は一昨年木曾で二人食べて一人死んだ。全然虎列拉病と同じ樣子になる。

三、赤縄取茸　と信州邊で云ふ物、是は會津邊では紅天狗茸



と云つて居る。長野、輕井澤邊では隨分採れる。此茸の毒に中ると瞳が小さく縮んで了ふ。之を利用して此茸からムスカリンと云ふ毒を採つて、瞳の廣がる眼病の時に眼に注射すると非常な効がある。人造でも藥を調合してムスカリンは出來る。併し人造のムスカリンは注射すると折々人を殺す危險があるが、不思議にも茸から採つたムスカリンは其心配が無いので、大變重寶がられて居る。此茸は赤くて白い斑紋があつて實に綺麗である。之によく似た茸で食べても宜い美味い卵茸と云ふのがある。併し卵茸は莖其他の所が黃色である。紅天狗茸は夫等の處が眞白である。且卵茸は七八月頃出來、紅天狗茸は遲く秋になつて出る。露國皇帝アレキシス三世などは卵茸と取違へて此紅天狗茸で亡くなられた人である。

四、汗茸　是は小さい茸で、眞中か尖つて、笠が茶色で、竪に茶色で絹糸の樣な筋が入つて居る。是は東京の道灌山で人足が食べた所が、無闇に汗が出て堪らない、夫れから白井博士が調べられた茸で、小石川の植物園にも出來る。此茸に中毒した時には、腸胃も神經も些とも惡くならないで、只汗だけが無闇に出る。そこで武藤獸醫學博士と林春雄博士とが研究されて發汗劑としてはアンチピリン以上だと認められた。

五、毒茸のいろ〳〵　此他土かぶり又は地割と云つて東京邊にもよく出る漏斗形の莖の短かい茸、一本しめじと云ふ色の少し

赤い茸、色がはりと云つて空氣に觸れると黄色が忽ち青く變る茸是れは信州戸隱邊では先年お仙と云ふ女が食つて死んだと云ふので此邊ではお仙茸と云ふ、夫から澤山にある紅茸、柿しめじ、蠅取しめじ、衣笠茸、泥鼈茸、狐の炬火、狐の繪筆、狐の蠟燭、摘み茸、三鈷茸、是は佛具の三鈷に似寄て居るから名けたもの、初五郎茸、是は四十三年中石見國飯石郡赤名村の宮谷初五郎外二人が食つて死んだ爲に名けたもの、等は孰れも我邦にある重なる毒茸である。（理學士河村清一氏）

父母の顏の合せ寫眞

合せ寫眞は、最初外國の或人が、好奇心から、軍人なら軍人の顏ばかりを集めて撮たらどう云ふ顏になるかと之を試みた處、洵に逞しい寫眞が出來た、それから泥棒の樣な犯罪人の顏ばかり集めて撮つた處、洵に獰惡な寫眞が出來たのが起原、でズツト以前から外國にある寫眞です。では一つ美人の合せ寫眞を作つて見たらどうかと云ふので、新橋の七人の雛妓の寫眞を合はせ見た處、合せるに從て各自の缺點は消え、長所のみ現はれて出來た寫眞は一番美しい美人となりました。坪井博士の說に依ると、父と母の顏を合せて撮ると子供の顏が出來、父と子の顏を合せて撮ると母の顏が出來るさうですが、未だ試みないから實際は知りませぬ。此寫眞は一種のおもちや寫眞で、技術上別にむづかしい事は



ありません。標準を眼にとり、眼と眼を合せて燒き付けるので面長の人もあれは、丸顏の人もあり、顏には色々の恰好があるが眼と鼻と口の距離は著しい差のないもので、眼を合はせれば鼻や口も大抵合ひます。燒付は例へば一枚の寫眞を燒くに七分掛るものとすると、七枚の合せ寫眞を作る場合には、一枚を一分宛燒き七枚燒いて一枚と同じ時間になる樣にするのです。（寫眞師柴田常吉氏）

病氣見舞の贈物

病人が出來れば直ぐに見舞品を贈ると云ふことは、實に宜しくない習慣であります。官公立病院などでは、家庭から食物を持ち來る事は絕對に禁じて居るから、例令ひ何の樣な見舞品を贈つた處が、それが病人の役に立つと云ふ譯には往かないが、普通には隨分之れが行はれてゐる。これは日本の家庭の交際法の一つになつて居るけれど、若し之を改良することが出來るならば非常に宜しいことであると思ひます。

日本橋邊の下町に行くと、見舞品の多いのを一種の見榮と心得て、是れほどに自分は平素交際があると云ふことを見舞客に知らす爲め、病室に嚢く菓子折などを積み重ね、中實は出して了つても空折を飾つて置くと云ふ實に嫌な風が行はれて居るが、こんな事は速かに廢して貰ひたい。（ドクトル富士川游氏）



女(ろの一)

女(ろの三)

前田曙山君著

花卉應用裝飾法

本書を一讀すれば菫蒲公英は元より路傍に咲く赤のまんまも「直ちに採りて金殿玉樓の裝飾となし得べし」

菊判總クロース製南京綴美本紙數三百頁
正價九十錢郵稅八錢

東京本町 博文館

紐育市體育局長 醫學博士 ルーサー、ギユリック著
シドニー、ギユリック
水野和一君共著

健康の生涯

著者は生來蒲柳の質で、青年時代に廢學せねばならぬ程であつたが、非常な意志力を揮つて體育法と醫學とに心を注ぎ、終に强健な體格と旺盛な元氣とを造つて、米國で有名な體育家となり且つ醫學博士となつた◉本書は著者が多年の實驗の結果として生れ出たもので、頗る簡明に健康術の祕奧を說き示して居る◉心身の不健全な人が此書を讀んで、活氣が生じ體力が加つて愉快に仕事が出來だしたといふ例は非常に多い◉而かも本書の示す健康法は、誰れでも實行の出來るものだから、學生や、敎師や、官吏や、實業家や、又は婦人など、凡て運動不足の人々に取ては、特別に有益である、

四六判上製 紙數二百頁
正價四十錢郵稅六錢

發兌元 東京本町 博文館

女(ろの六)

女(ろの八)



現代の人より

萩香

愁ひと汗とちりにまみれて、あへぎ〳〵しほらしうも手首の細りよ、暑い〳〵都の夏は、世なれぬ子に堪へがたう御座いました。

早くも東都の戰ひにつかれはてゝと、思はれるのがイヤでしたけれど、やつぱり、やつぱり、私は歸省ましたの。その日は打ちつゞいた烈日もさすがに薄曇りして、品川沖の波がチラ〳〵光つてゐた、線路みちには夢のやうな晝顔の花が咲いて、月見草も赤くしぼんでゐた、汽車の窓に身をおしつけて、都をはなれるゝと云ふ悲哀に胸は一ぱいで御座いました。

あゝ草長き相模の小野よ、松の梢をはらふ海風、濱邊の夏は、休暇中の本郷通りよりもにぎはつてゐますけれど、けれど、私は。

幾年か心も空にあこがれてゐた生活が、たとへ一部でも實現されて、たゞ花やかに若やかに、プライド多き春の日を、紅リボン、紫袴。

かくてわが十九の三春の行樂は、あわたゞしう過ぎて了ひました。青葉が茂る、雨がけぶる、活動の夏、強烈な生。

いましばらくは、何も〳〵おとがめ下さいますな、丁度いまあの眞白な、少さい美しい繭を食ひやぶつて出て來てゐる蛾のやうなもの、草がくれにはうけた茅花がなびくのをみても、野良犬の尾かと膽を冷し、事毎にふるへる胸よ、驚く心よ、どうしてこんなに氣が少さいでせう。もう和らかな母の腕も、十年の夢を守りし家も、おのゝく我が靈のかくれ家ではあ

りませんでした。ひろい世界によりどころなき五尺の身、紅深き脣にのぼるは、人をも世をもおのれをもあざけりの冷笑のみ。

そも世の人は何をおもひ、何を生命に生きゆくのでせう、樂しかつた嬉しかつた私の美しい高い理想や希望はみんな〳〵幼い夢でしたもの、覺めてみればあまりにつまらないから捨てゝ了ひました、捨てたらば空虚になつて了ひました。

くらき涙はつゝめども、何もかも灰色がらうと云ふのぢやありません、新しい光明を見出したいと悶へ悶へてゐるのです、が、みちびいてくれるものもなく、服すべき偉大な力もなく、行くに道なく、かへるべき家も知らず、たゞなやみつかれました。胸が熱くて熱くて、安まるひまもありませぬ。

「私は考へをひとつにまとめる事が出來ませぬ、山の奥の野にかへりましたら、しづかに考へて涙を流してみませう、私はそれをまつてゐます、のぞんで居ますの、千代子樣さよなら。」

ペンの走り書き、あゝ泉子樣、泉子樣、同じおもひを抱いて私もかへつて來たのですよ、手のつけようもなく苦しい、この心の整理をつけようとて……歸つたふるさとで……あゝふるさとで、朝も夕も草の色をみ海の氣を吸ひ、浪のさゝやきをきいてゐますけれど、はてなき涙は流れるけれど、のぞんだ事はみな空でした。貴嬢は大きな山の中の自然に親んで白百合の香をかいで、あたゝかい人の情に抱擁されてゐらつしやるか、海近い町に育つたあなたは、やつぱりやはらかな浪の音が戀しくはありませんか。

少い可愛い奥樣の泉子樣、北國の故郷の草にかくれると有仰る泉子樣を、私もかへるとて夜おそくお訪ねした時、二人の若い女は對ひ合つて、物云ひたげな脣は、眞黑な桃割は、花やかな燈火に照らされましたけれど、けたゝましい電車の響に一層胸がいら〳〵して十時を過ぎた時計のセコンドのみ耳について、つひにつひに何にも云はずに別れました。私が

「ね、泉子樣、永遠の誓もやがて虛僞に移つて了ふつ

て、それをせめるのは酷ですわ、月に月に人の心の、かはらないのがウソですものね、永久に、なんて云はれるのもイヤ、浅墓な…。それよりも私は、私は、もうその刹那の眞で滿足しますわ。」

と云つたら

「私には、もうとても滿足する事なんか出來ないんですわ、世のすべての事に對して……」

長いお袖を口に、細いお聲はふるへてゐました、私は冷やかに泉子様を見ましたの。



十八の若き人妻、肩上げもまだある君を、私はたしかに妬ましい心地もしたのでした。

生涯を共にすべき相戀の夫もあり、すでに繋がれた身もて、安住の地も知らぬ、ひとりぼつちである、つてお泣きになるのですもの、何と云つて上げたらいゝかわかりません、一人で生きて一人で死ぬ、どうせ二つの靈ですもの、はなれ行くのはあたりまへです。戀のみに生くる生命であるのなら、飽きない中に情死するのが一番だ。

○○先生は、處女の純潔をうたがふと有仰いました（これはある小數の立場の人達についてゞすが）私はそれに對して躍起となる程、同性を信じては居りませぬから、だまつて居ましたけれど、あんまり情なう御座いますわ。道德は不自然か、性欲が何か知らぬが、火と燃ゆるこの自尊心のためには、あらゆる物も燒けつくされて、えゝ立派な節操も純潔もたもたれて行くので御座いますわ、壓制な道德なんかに囚はれなくとも、ちやんと「自己」は守つて行かれますわ。

誰がために粧ふ姿ぞ、朝な〳〵靑葉の窓に、私は鏡に向ふたび、頰の血の氣の失せたのが悲しい。これは今年ばかりにかぎつたことぢやないので、いつも〳〵夏になるとこんなに白けて了ふのだが、氣にしたことはなかつたものを、この頃はあまり力なく淋しいので紅でもさゝうかと思つた事は幾度だか知りません。やせたと云はれたらうれしいのか、肥えたと云はれるのが名擧なか、ゆるんだ指輪をまさぐりながらそつと顏へ手をあてゝみた。

可愛らしいのは美香子樣のお手紙。

『私はちかつて夢から覺めません、よび起されるまで起きませんの、そのよび起されるのが、おそかれと祈つて居りますのですもの、なんて自分から目ざめなんてするもんですか、その幸ひな時、即ち憧憬時代をなるべくながくしたいために、自分から起きないのです世の中にこの夢の樣な思ひの時がなくなつて、すべてが現實的にのみ生きて居なければならないのなら、生れたかひがありませんわね、私はかうまで思つて居ますのよ。

花姿衰へぬかぎりは靑春で御座いませう。靑春は歲に年限のあるものぢやございませんもの、心の持ちよう一つで若くなるんですわ、いたづらにすぎ行く年を數へてゐるやうな悲しみにしづむよりも、積み行く年を樂しみませう、そして長い靑春を作らうではありませんか。

一つや二つの年のちがひに、そんな少い心を持つもんぢやありませんよ……』

私ももうつみ行く年を數へて、おとろへる姿に悲觀してるのですかしらん？　可哀想にまだ十代で御座いますよ。美香子樣、私はたゞ微笑みをもつてお答へしときます。日進月歩の少女心がいつまでスヰートな夢をつゞけてゐられるものですか、いまにおかはりになりますとも。

戀を戀してかぎりなく人のなつかしかりしは我が十六のゆめであつた、牡丹くづるゝ夕陽の庭に重い高髷俯けて、逢ひたさや戀しさに眞珠のやうな玉が薄紅の頰を傳ふたるあたゝかい悲しみ、儚ない歡喜…。胸を病みます若き詩人、多感多涙の月岡樣、あの頃しきりに書き送つたあどけない熱烈な筆のあとには、私がいま登鯉ちやまや美香樣の手紙をみて仕方なくほゝ笑むやうに、きつと苦笑遊ばしたであらう。

『わけもなく心がをどつて熱しやすかつた昔の若い夢……』

あのお言葉が今になつて、解されました。君はもう雲のあなたにかくれてしまつた。



千い姉樣〳〵と慕はれても、憧憬の盛んな年下い人達は、もうわづらはしくてなりません。折々の便りもとだえ勝となり、たまにお目にかゝつても昔にかはる母樣姿で、世帶の御苦勞でもおもらし遊ばす方の方が、まだお話が合ひますの。

柳さん達のゝぞんでゐらつしやるやうな、日比谷あたりの夕月夜や、花と散る白浪のなぎさに手をくんでローレライでもうたふと云ふ、まさかさうでもないでせうが、ありふれたお甘いところなんぞおよし遊ばせよ、黴びが生えた羊羹ぢやあるまいし。

もう大學の卒業式がすんでからです、綠蔭ふかき田端の里の龍子様のお宅でA様なんかと落ち合つた時、みんなテーブルをかこんで坐りました、御主人公のお書齋で、ガラス戸の本箱の上には何と云ふのか白くて少さい細かい花の鉢植が置いてあつた、奥様の束髪の左にもそれが一輪挿されてあつた、垣根のきはに薄るり色の紫陽花が重げな花ぶさ地に引くばかり、松にからんだ凌霄花をゆるがせて吹き入る風に、バラ〳〵前髪がみだれるのをかき上げる度、襟元で五時のリボンがサヤ〳〵と鳴る。

『ほんとに貴女のお若くおなり遊ばしたこと、やつぱりお氣が若いからでせうね、私なんてあなたのお年の今頃にはもう坊がお腹に居たんですもの……』

實様お膝に抱きしめて奥様は私をみつめて眼をおはなしなさらぬ。

苦笑して思はずA様と顔見合すと、プッツリはさんだ濃いお髭のお口許に皮肉な笑がうかんで何か有仰りさうに見えたが

『葬むられた女とでもおぼし召してゐらつしやるでせうが、貴女だつてぢッきこんな境遇におはひりなさらなければならないのよ、エ、愛は神秘的なものですもの、獨身の涙、獨身の想ひとは全然ちがつた新らしい意味も光明もそこに見出されるのですよ、捨つるにあらず捧ぐるなり――自分のことばかり考へてるからいけないのです、相互に補け合うて生きるのが……人類の生存上に有用な材となるのが、人生の意義なんぢやないでせうか。』

脣の色もやゝあせて、少し面やつれした奥様のお顔は凄いやうに美しかつた。私はうつむいて袴のひもをまさぐつた。

結婚と云ふ新らしい世界へはひつたら、はたしてこ

の暗い心からのがれ得る事が出來るのでせうか、あらゆるものに覺めはて、母の胸からはなれ去つて了つたごとく、所詮愛は冷め、良人にはなれ、子にさられてつひに〳〵ひとり逝くべき最後なんぢやないでせうか。

「かつて、紅塵萬丈の裡に常に功名に燃えかすかなる未來の光明をのぞんで、心神なへつかれんとしつゝ浮世のさがに健闘しつゝある……」と、有仰つたA樣、羨ましいわこの凛々しい眼ざしはどんな功名にあこがれてゐらつしやるのでせう、前



途はどんなに輝いてゐるのでせう、人に寄らば安全なるべき女の身もてどうして私ばかりがこんな心持でゐるのでせう、世のあらゆる物に懐疑を抱いて……。

順境に育つて幸福な家庭に入られた靜樣は、數多い御友人の中ながら、勿體ないほどよくして下すつたし、文と詩を語るによい友であつたけれど、海山遠く離れて了つたいまは……先日もたへかねた悶々たる心の一端をもらしたら、昔ながらの花やかな優しい優しい御返事が來た、私は靜樣にあんなこと申上げたのを恥ぢました。

またきのふ弓様の手紙をひらいた時、おのゝきやすい心は得ならぬ驚愕に打たれました、共に手を執つて泣きたいと顔をふり上げた。

『ちい様、私は、私は、悲しい運命の囚はれ人となりました、この二三日、泣いて／＼涙の泉の涸れるまで泣きました…。姉様、自己の目的をさまたげられてなんで生きてゐる甲斐がありませう、オプリビオンの杜にかくれんとした私は、離愁の胸の縺れに今も涕泣して居ります。

十八年の生涯はすべてうつろで御座いました。けれど二十年、三十年、私の生涯といふものはもう永久に空虚であると思うてゐます。

目的をも希望をも拾てた身は、何故生きて居るのかさへわかりませんの。

死なんとしてなほ死ぬることの出來ぬ私は、あゝやつぱり女ですわねえ？ 瓶につめられた重コロム酸を見たとき、さすがの私もそのゝきました、はつとして退ぞいて、袖を掩うて泣き伏しましたわ。

ちい様、死は罪悪なりと云つて下さいますな、私には私には、死ほどなつかしい戀しいひゞきは外にありませんもの。富もいらぬ、名もいらぬ、あゝ私はもう瞑目して生きて行きます、現在も未來も…』

机に泣き伏してゐる若い女の姿が眼に見えて來た、ばら色の頬美しく。紅の襦袢の袖に額をうづめて…あゝ青春の夢の去り行くはわが身一つにあらずとおもふと、悲しいやうなうれしいやうな妬ましいやうな念が胸一ぱい。

弓様、弓様、夢みる人の世のみ美しい世界でせうか私らはもう花やかに生くる生命は失つて了つたのでせうか、惜しいとも思はないけれど…。

けれどもふたゝび讀み返した時には、苦しみを銜ふ少女よ！ と何處かでさけんだ、弓様にありさうな事だ！ と冷やかな心にかへつた。『狂うてか、狂はないでか、夢中で自分の髮を切つて了ひました、ばさりと紙に落ちたのが一尺以上もありましたらう、私は涙も出ませんでした。姉様、あゝ尼になりたう御座います

尼に……し
毒藥を手にしたり、髪を切つたり、私にはそれだけの熱もなかつた、動機にふれたのでもなかつた、朝顔の花のしぼむやうにしをれて了つたのですもの、だから死にたいとは思ひません弓様、死ぬるもんですか、無光明！ 何のめあてもない世界に、何にひかされてかやつぱり私は生きてゐたい。よく死を語る人をばにくむ。
多くの敵の迫害と嘲笑とを殘して、私は死にたくありません、意地になつても生きる、生きる！ 死して甲斐ありと我が心の許すまで……



泣きに生れて來ました、泣かされに……と云ふか。
冷笑しておやりなさい、あざけつておやりなさい、その運命を！。よしや甲斐なき反抗にわが在存は破壊されて了ふまでもつよく／＼おなりなさい弓さん。
鵠沼の夏は美しう御座います、毎朝玉の様な露をふんで龍田を取りに草原へ出ます、薄桃色の可愛い花がいくらでも咲

いてゐます。霧の深い朝は江の島など薄墨でぼかしたやう、時々起きぬけに濱へ行きますの、引地川の水が白銀のやうに冷たく白く流れてます、半町ばかり白砂をふんで、浪打ぎはへ出ます、遠く大磯あたりの白壁も見えるのです、伊豆の山々箱根連山、思ひ出は湧くよ函嶺湖畔。

人に逢ふのがイヤなので、大抵家にばかり閉ぢこもつてゐます。葉櫻の影ゆらぐ二疊の書齋の縁に坐つて庭をみてると、ちら〱と紅をみせた眞萩の枝に、きいろい少さな蝶がやすらひました。

濃紫の桔梗が毎日々々三十ぐらゐつゝ咲く。赤い鬼百合もある、日まはりもある、道行く人がのぞきこむとピシャンと障子を閉めて了ふ。日盛りにぐみのしげみの中できり〱すがなく。

夕方はまた人がぞろ〱散歩します、折々は時計のなるやうな音のお琴もきこえます。寮歌をうたうて行く人もある、白地の浴衣に緋の帶しめた令孃の後姿は可憐である。



私もう水帽かぶつて水着着てあばれる勇氣はこのからだ中のどこにも殘つて居りませんもの。

奮鬪の地が戀しい、東京がこひしい。かへりませうまた東京へ。

初秋の活動の天地には靜まつた胸の血汐もふたゝび燃ゆるか知れない、海邊の秋はわびしいのですもの、悲しいのですもの、さびしいのですもの。

薄命の佳人

百合香

芭蕉の葉うつ玉だれの音繁く、雨がへるの鳴聲も交つて、淋しい夕暮園窓によつて、手箱の内かき見るにふと目に止まつたは、亡き武田夫人が、御病中の御うつしゑ。懐かしさの餘りほゝあてゝ都子樣都子樣と三度よんでみた。

氷嚢に頭冷やして臥し給ふ傍らに、行儀正しく、お坐りになるは愛兒、秀一樣、可愛盛りのお四歳。奥樣のお苦しさうなお顔の、おいたはしい。『お兄樣が寫して下さいましたのが、出來ましたつて、お送り下さいまして、喜しう御座います、國の母や、妹に送つてやりませう』と、仰せになつた、あの時のお喜しさうな紅薔薇の御ほゝの色、輝く瞳お聲さへ、耳に殘るけれど、君は晨慕ひまつりし都子樣は胸の傷手に堪へずして去年の文月中ばのたそがれ時、最後の願ひに盛りの花を乞ふて其香を匂ひながら、媚笑して、永久に歸らぬ人とおなり遊ばしたといふ美しくも氣高き、御最後を聞いて私はふり落つる涙を止められなかつた。最愛の良人の君に別れ、幼兒を遺して逝かれれた時、胸中の苦はさりながら、何事も運命と御諦め遊ばしたが。清き品性と美しき容姿とを、齎らして逝ける薄命の佳人、のなつかしさよ。

慈母に先だゝれて、秀一樣は、どう遊ばしてか、ご幼少の事故悲哀もないけれど、ご成人の後このお寫眞ご覧になつた時のおん歎き思つても、胸がつまるやうに御いたはしい。都子の君を想へば叔父君を憶ひ、樗牛博士を思へば慕ひつゞける其愛姪の御うへ、胸の病ひは何故こう有爲の人を惱ますのであらう。多望な『野の人』さへ苦しまれて、あゝ、二人の叔父君、一人の令姪は、同じ病魔の、手に奪はれて、再び見ぬ人となられた。災多き人の世よ。

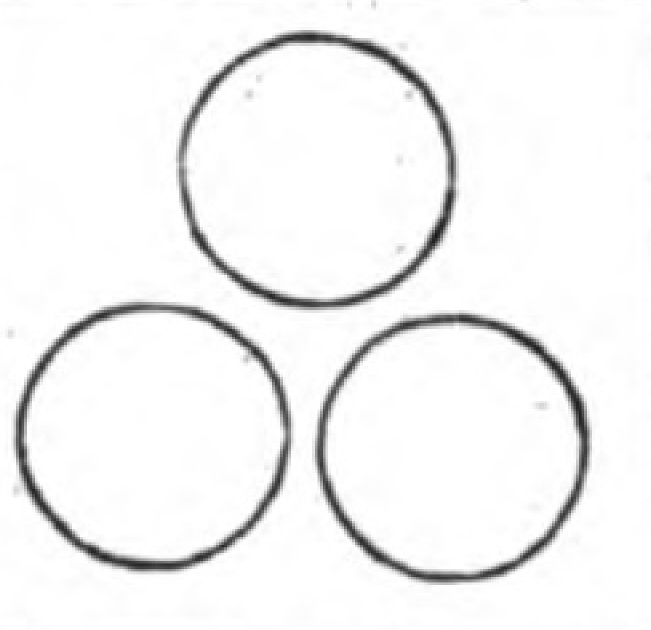
顧みれば四年の昔、修學旅行の途次清見潟に近き龍華寺に立よつて、寺庭の大蘇鐵の前に整列し師の君より博士の事蹟を伺つた時、六十有餘の若き女が、顔は百數十の眼は何の爲に曇つたであらう。寂として音なく松吹く風の聲のみ繁かつた。寺内の石段五つ六つ上りし高地に其奥津城を訪ひ參らせた時、人々の視線は皆、一樣に大理石の墓表に刻んだ『吾人は須らく、現代を超越せざるべからず。』と博士が訓言に注がれ其目は、異樣に輝いた。

たてる木碑に、勝れたる墨色で、『文學博士、○○○○○之墓。』と、記しの文字の殊に目立ちて、一層寂寥を加へた。あゝ、あの時の、侘しき光景は、終生忘れられないであらう。

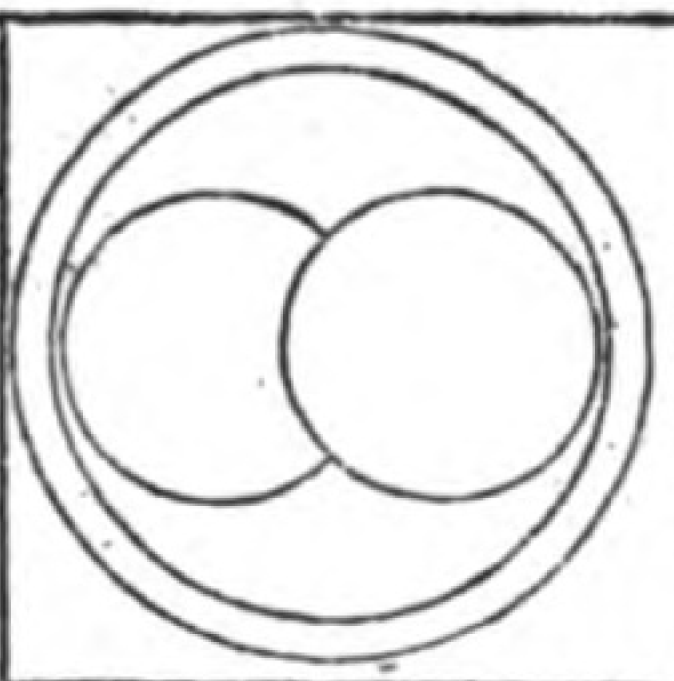
晴れたる日、中空に聳ける富嶽を仰ぎ、四時色變へせぬ、三保の松原を眼上に見、清水港を近く控へ、天の成せる偉功、自然の表はせる美妙、東海の勝景を、一望に集めた、君が理想の地に靜かに眠りませる博士の英靈よ。永遠に安けくおはせ。君は逝き給ひ年は一昔に垂んとすれど、其が清麗なる、御心の彩は、永久に、異彩を放ち、いよ〳〵世に尊重せられ御名は永久、不朽に輝き候はん

星の意匠

三ツほし



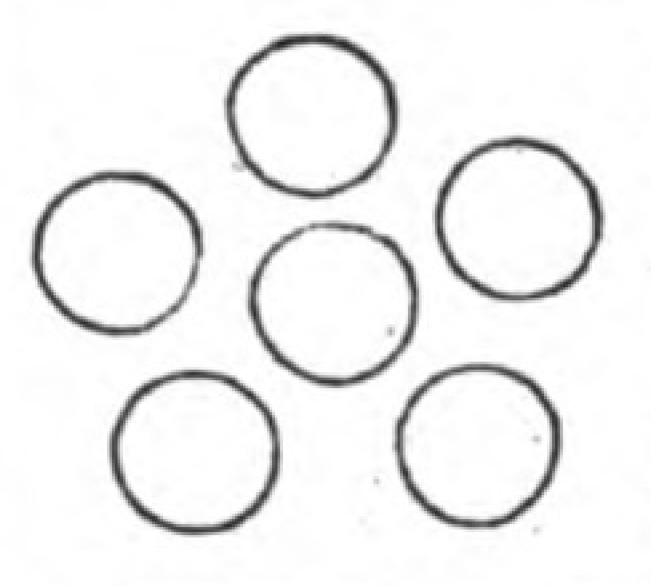
丸に二ツ星



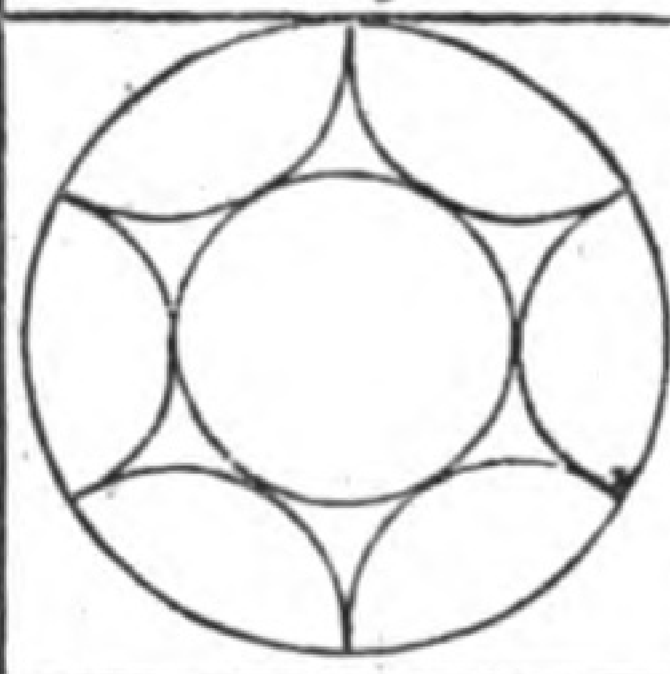
割けん三ツ星



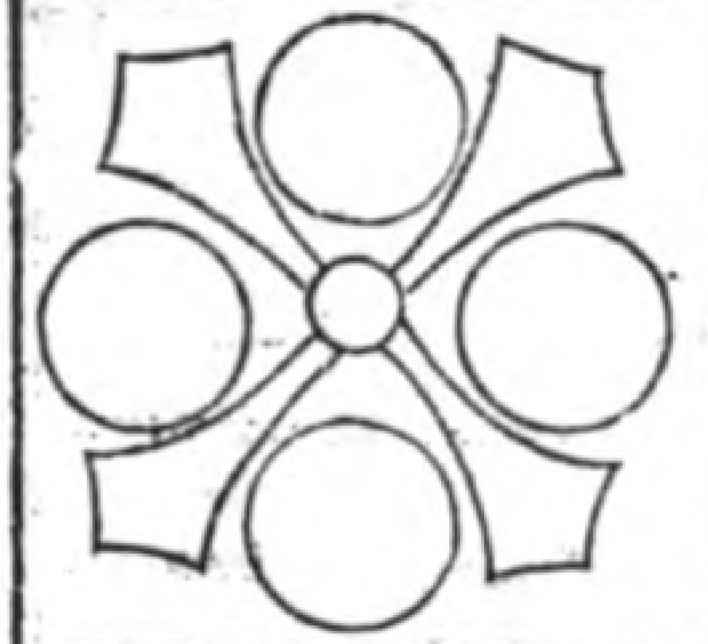
五ツほし



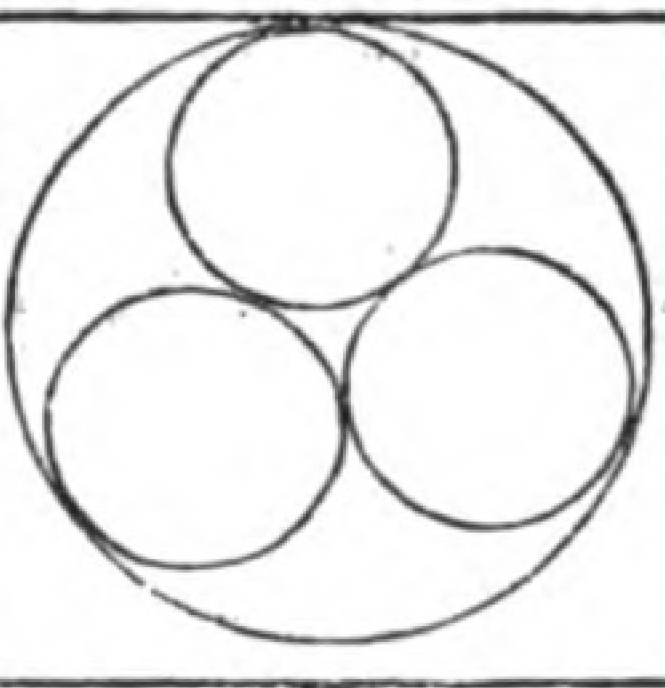
五ツ割ほし



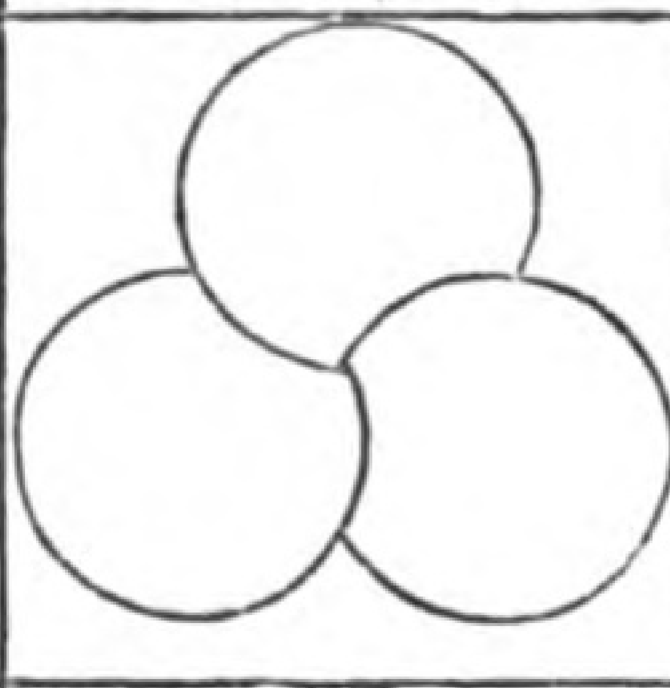
けん四ツ星



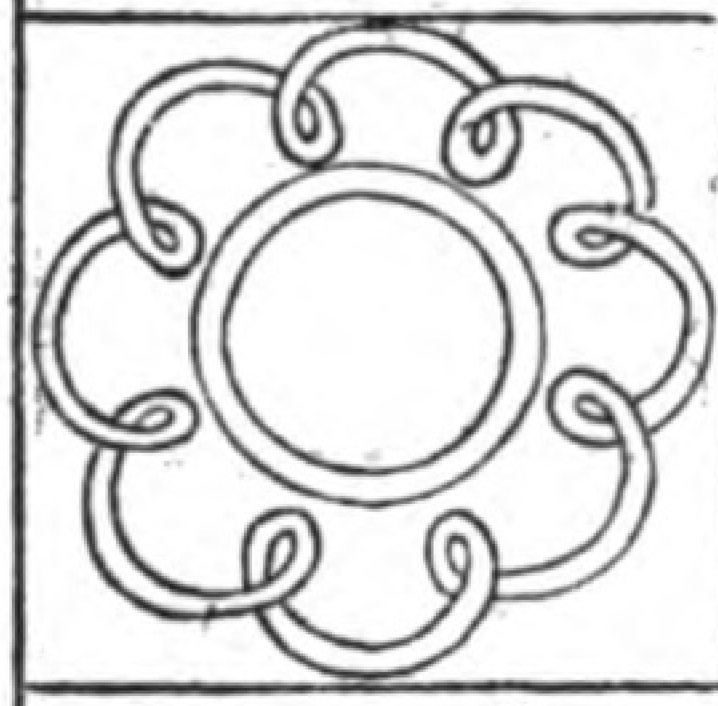
石持三ツ星



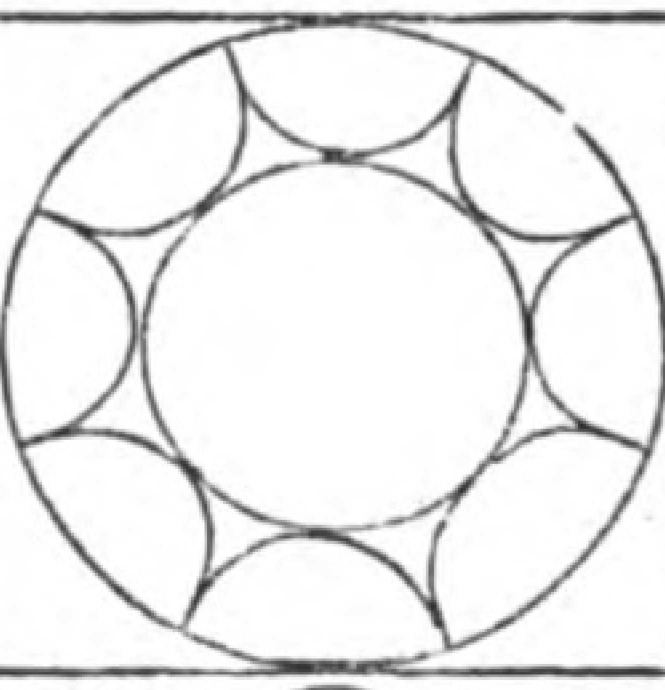
かさね三つ星



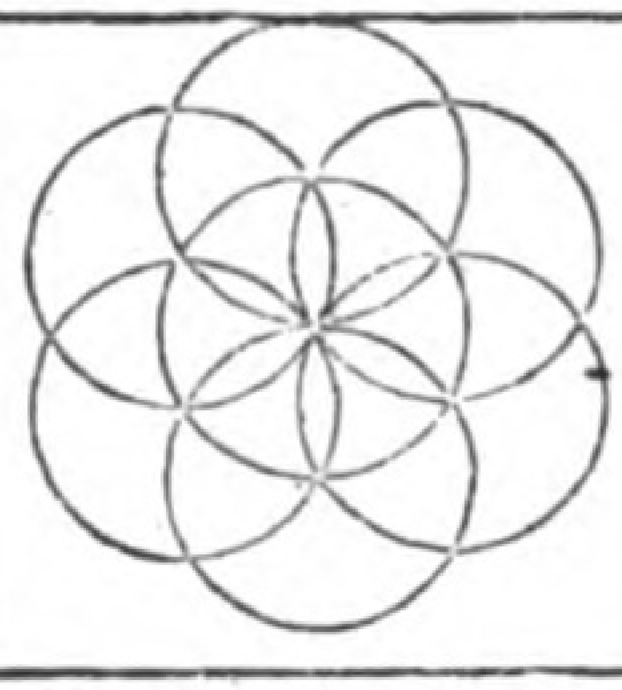
むすび九よう



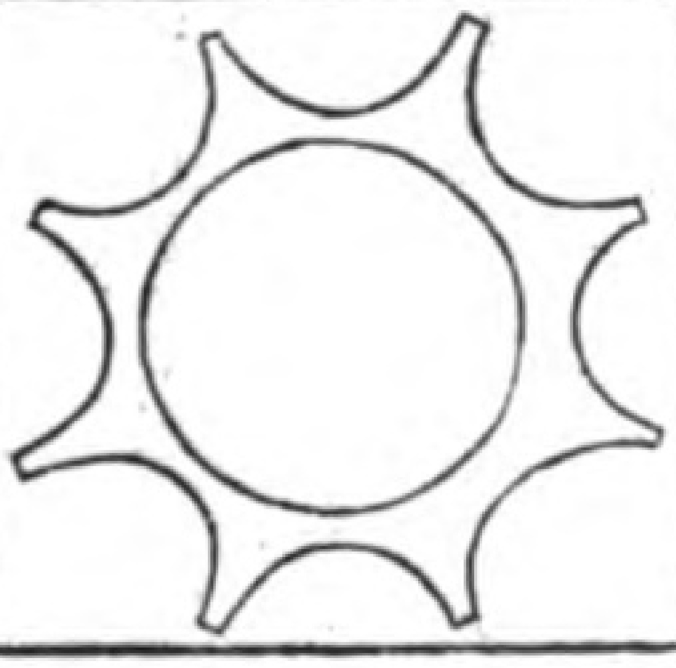
割八ツほし



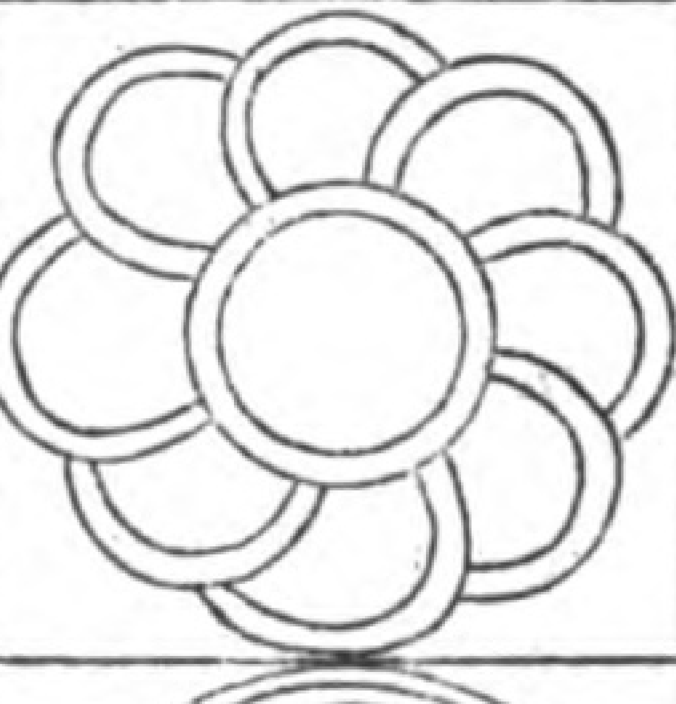
六つツ割ほし



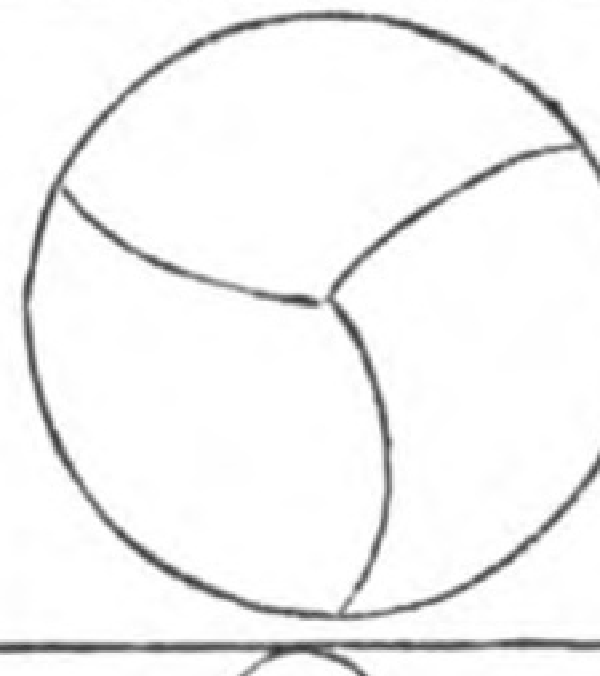
おぼろ九よう



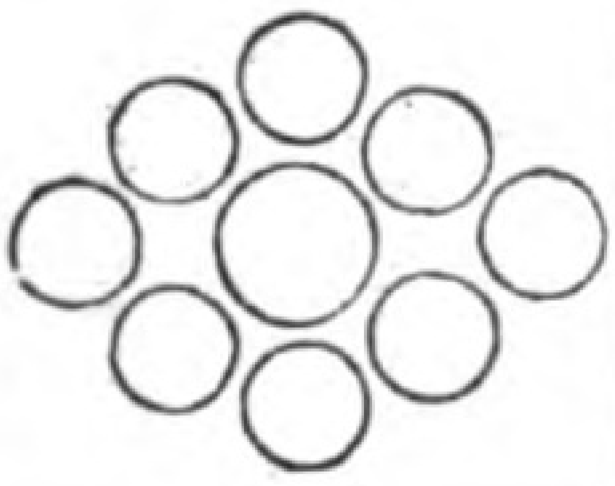
かげかさね八つ星



三ツ星くずし



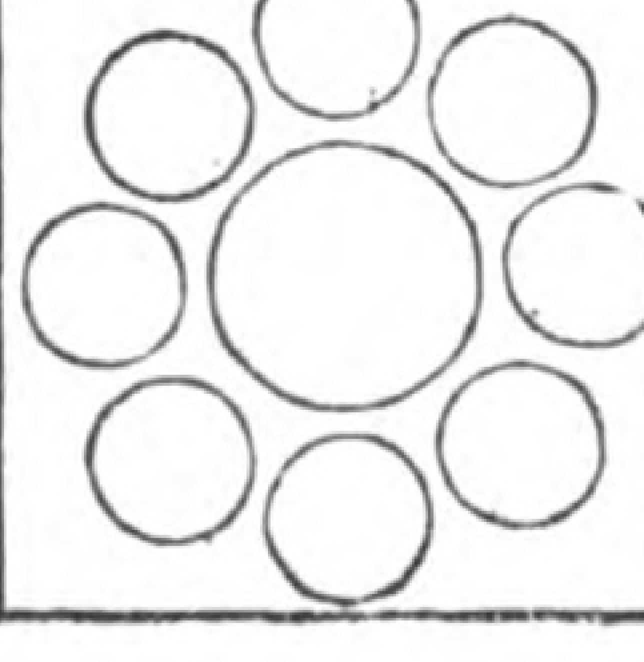
菱九よう



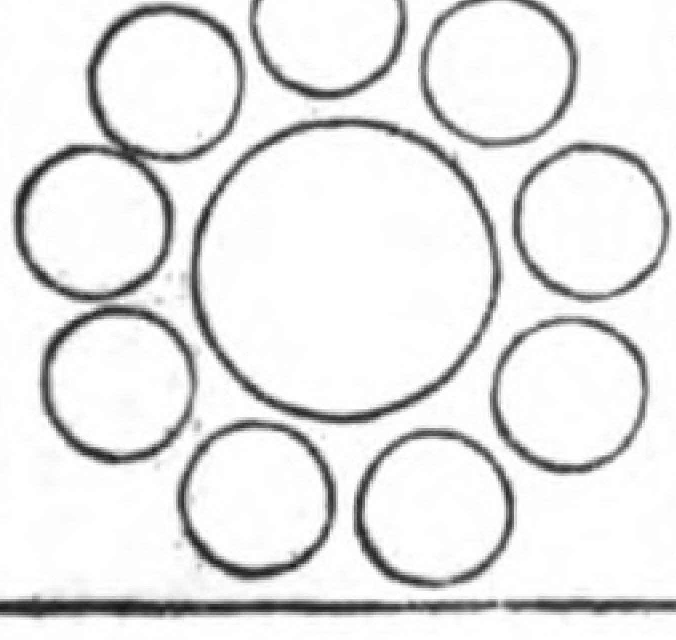
けん三ツほし

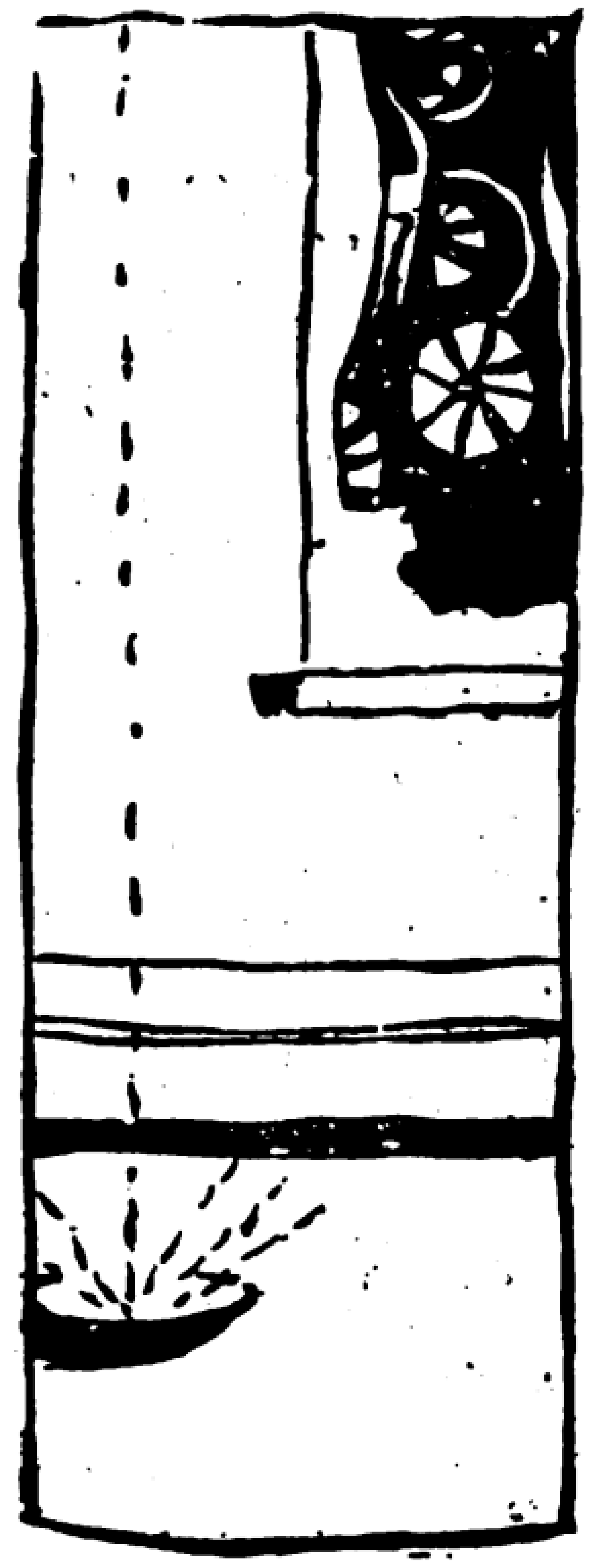


八ツほし



細川九よう





誤解された日本婦人

千葉秀甫

△見當違ひのお世辭

我國が外國から誤解せられてゐる樣に、殘念乍ら日本の婦人も外人に誤解せられて居る。恰度日露戰役の最中に、英國の海軍大佐のロークといふ人が來朝したが、大佐の夫人は本國で餘程日本の事を研究されたものと見えて、私の家を訪はれた時などは、「お髮がまことに佳く出來ましたと」日本語で頻りと婦人達にお世辭を述べられた。ところがお世辭を頂戴した人々は多くは束髮なので、少々閉口の體であつた。夫人は日本の婦人に遇つたら髮の話をするがよいと思つて居たのだらうが、聊か見當が違つたのです。それから日本最屓で有名な米國軍醫正シーマン氏が、新婚の夫人携帶で來朝されたとき、二人に、料理屋へ行つて日本料理でも食べませうかと言ふと、夫人は、料理屋なら妾は遠慮しましやうと私に言はれた。これはシ氏が夫人に對して、日本人は妻を宴席には連れて行かないとでも兼々話して居たからと、思ふが、これも可笑しな話である。けれど此等は極く罪の無い方で、中には隨分ひどいのがある。今年の春、シャーレク孃といふ墺太利の女新聞記者が來て、私に向つてこんな事を言つた。「日本人は一般に外國人を惡む樣です。現に日本の婦人は決して外國人とは交りませぬ。又日本の婦人は全く男子の奴隷の樣です。男子には蓄妾と離婚の自由があるし、如何はしい女が名流の夫人となつても世間の制裁がありません。そして婦人の社交的の地位は皆無で、觀櫻の御宴の樣な立派な會には、婦人は算へら

れる程に少數です。その少數の者も變に歐化した婦人達で何れも見苦しい洋裝です。又日本には處女と云ふ俗語がない程あつて、處女の貞操はありません。中にも生強ひ學問して居る女學生の風俗の美くない事は驚くべきで、街路で始めて會ふた人を忽ち情人とする相ぢやありませんか』と滅茶苦茶に攻擊するから、飽く迄辯解した事がある。

△小說家の見た天國

元來外國には日本を天國視する小說家と地獄視する詩人とがあるので、其の爲めに又滑稽な事も隨分ある。嘗て露國の一女記者が大隈伯を訪ふて、其の記事をノーオエヴレミヤに揭げたが、それには、伯爵邸は暫々天皇陛下の宴遊會場にも使用せられ、富士山は伯の溫室から神々しく見える抔と記してあつた。これ丈け小說的なら寧ろ面白い。それから中にはこんな珍妙なのがある。瑞西の一新聞に『日本に於けるシルクハットの流行』と云ふ記事があつて、日本では車夫ですら禮帽を戴いて居る。足は洗足だが



夏山や雲井に細る塵のかげ　（支考）

頭は貴族だと記して、尚ほ之を實見したとて車夫がシルク、ハットを冠つて居る圖が掲げてあつた。餘りに不思議だと思つて調べて見ると、何處かに轉宅があつて、古いシルクハットを入れる箱がなかつたと見えてこれを車夫が荷車を曳き乍ら、潰さぬ様にと大事さうに頭に載せて居るのであつた。こんな喜劇が往々喜劇視せられずして堂堂と記事になるのだから、十日や二十日日本見物に來る外國の記者には注意してやらぬとトンだ間違ひを出來すのです。特に日本婦人は外國人には一種の謎で、彼等の多くは日本婦人は男子の如何なる命令にも從ふものと信じ、婦人には意志が缺けて、否と云ひ切る力のない弱い不思議なものと思ふてをる。



△日本婦人に對する外人の不平

又彼等からよく聞く苦情は日本の婦人は外國人と交際してくれぬ日本人を訪ふても其の家の婦人は顏を見せぬ日本の婦人は我々外國人と結婚して呉れぬ抔といふ事である。そして女の風を見ては、白粉の塗り方が賤しいとか歩き方が內輪で蛙の如うだとか、髮が臭い、談話しても相手の眼を見て呉れぬウカとすると太い卷煙草を

吹かす抔と評してゐるが、其の反面には、日本婦人とは交際が不可能だと云ふ不平の意味も含んで居る。成程何處の夜會でも晩餐會でも、外人の出る席に出る日本婦人の顏觸れの極まつてゐる事は餘程物足らぬ氣がしよう。此の内外人の接觸に關して不平の起るに就ては、日本の男子の罪もある。内外人が相集まると、日本人は日本人同志、外人は外人同志と、二組にする事が多い。これは外國語が本國語より不便であるのみならず、血は水よりも濃しといふ樣な理由もあらうが、餘り感心したことではない。そして婦人方に對しても、何故白粉をもう少し薄化粧にして、眼の力を働かして外人團との交際を圓滑に出來ないかと恨まぬわけにはゆかなぬ。

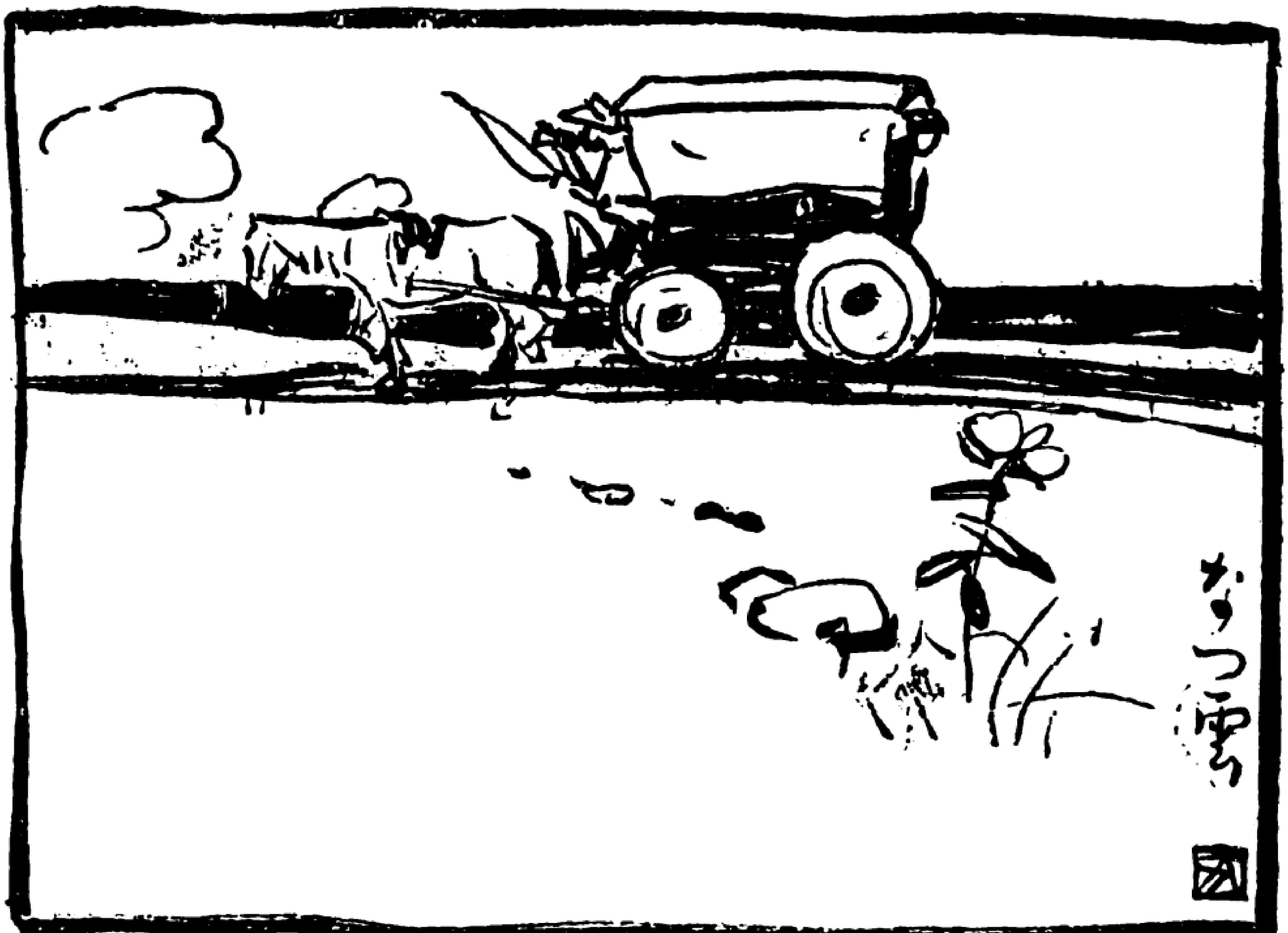
△手輕に能ふ限りを盡す交際

外國人との交際は金がかゝると云ふ掛念もあらうが御馳走するのは蕎麥でも汁粉でも構ひません。食ふ食はぬは先方の勝手で、此方はたゞ能ふ限りの待遇をすれば可いのです。又何處の女學校でも大抵英語をやつて居るが、學んだ人は三語でも四語でもいゝから、最少し大膽に試用して、内外人接觸の道を講じて貰ひ度いものです。斯くして何々學士の肩書があつてもグード、モーニングの一語を話すのをさへ遠慮する男の缺點を優しい婦人が少しでも償ふ樣にしたら、嘸ぞ外人も喜ぶだらうし、又我國の爲めでもある。婦人の社會的地位を以て國の文明の標準にしてゐる外人に對して餘りに引込み思案なのは不利益極まる話です。而して「然り」と「否」とを明言する勇氣を持つて、外國の貴婦人紳士を友人とせられたら、日本人特に日本婦人に對する外國人の誤解は除かれやうと思ふ。かくして始めて日本は吉原とゲーシャと美術品と風景との外に日本の眞價を公示し得るわけです。これは獨り上流社會の夫人令孃のみならず、日本婦人は誰れも彼れも行ふて貰はねばならぬ。元來日本に於ける内外接觸の範圍は甚だ狹いのです。之を廣くして内外人が誤解なく交際するに至るには、中流以下の婦人に此の方面の

活動を願はねばなりません。

△見苦しい建物と風俗

更に遠慮なく婦人方に勧告し度いのは服裝の事です。日本が段々外國風になつては、將來まさか「西洋らしい日本」を見物する爲め態々千里を遠しとせずに漫遊に來る者もあるまいとは外人一般の感想で新橋に着するや否や、見苦しき半洋館式の銀座を見せられて皆な失望する。或は此頃の「ツアイト、イン、ビルド」といふ獨逸の畫報を見ても、日本一の醜建築物として東京商業會議所の圖が出てゐる位



で、日本らしき日本は一寸一尺宛消えて行き、西洋模造物のみが增加するのを見て外人連は皆な嘆いてゐる。せめても婦人丈けも日本らしかれと祈れるに、髪は束髪といふのが殆んど一般の風となつた。束髪は假りに結構としても、束髪にしたら帽子を冠らねば形が惡い、さりとて體格の小さい日本婦人が直徑三尺も四尺もある當世式の婦人帽を冠つたら、それこそ打壞しである。此に於て同じ束髪でも今少々工夫して頭の美を高める樣にしたいものである。被服に就ては飽までも日本服でなければならぬ。現に式部顧問

たりし獨逸人の回顧錄にも、恐れ多い事であるが、宮中の女官に洋裝せしむると否とに就て故伊藤公と論爭した一節が掲げてある位で洋裝は決して賞むべきではない。又外人と交際のある日本婦人で日本服を着る人でも、夜會の時抔は裾を短く着付けらるる樣に見受ける。これは裾が長いと舞踏場などで汚れるとの考へかも知れぬが、婦人服の裾は何處の國でも長いもので、節約の爲めに裾を短く着付けた姿は丈の低い日本婦人には殊に格好が惡い。之も何とか工風して汚れたら直ぐに洗はれる樣に仕組があつてほしいものです。



西瀨家や打返し行く月の影（乙洲）

△外國人の苦笑の種

それから輸出向きの日本美術品などに描かれてをる日本婦人は、藝妓の半玉の樣に派手な着物を着てをるが、日本婦人と云へば半玉式の着物を着して居ると思ふ外人のあつた時代は已に去つた。それと同じく、今でも夜會抔には婦人達は半玉よりも派手な服裝をして現はれるがなんだか下品で今では外人連も苦笑してゐるのだからやはり年齢に應じて色の配合を考へて優美な作りにせねばならぬそれにガラスと異はぬ樣な惡るい寶玉入りの指輪抔は

禁物で、持つ位なら立派なものを持つがよく、生強ひのなら指輪杯は拔ぎにした方が却つて味ひがある。又結婚指輪は日本でも大分流行してをるが、丸髷といふ立派な嫁證があるから、そんな物は用ゐぬ方がよい。丸髷が重々しければ外に何か一工夫してミスとミッセスとが一目で判る樣にしたいものである。

△何故日傘をさゝぬか

それから御注意申したいのは、日傘の事です。日本婦人は何故日本の紙製の日傘を廢したのでせうか。流行だからといふならば、コレラもペストも好いわけである。立派な日本傘があるのに、なぜ洋傘を用ゐるのでせう。竹と云ひ、紙と云ひ、共に日本の特産で、外國の漫遊客は之れで造つた傘を買はずに歸る者は無い位なのに却つてＨ本婦人は雨天の外は日本傘を用ゐないとは、何たる沒趣味の事であらう。切に日本Ｈ傘の御使用をお勸めする。

かく色々の事を述べた序でに尙ほ一言し度いのは、外人を招いたときの食事のことです。普通は吸物や魚を順々に出して、最後に米飯を出すが、外人は、吸物をソップと認め、刺身をセコンド、コースと思つて、ドシドシ食つて仕舞ふ。そして最後に白い米飯を出しても味も何もないのに閉口する。ゆゑに外客を招いたときには、茶飯でも豆飯でも炊かして、此の味の附いた飯も吸物の出るときから出して置くとよい。さすれば米飯をパンの代りと思つて食するのです。又外國婦人には往々刺身嫌ひがあるから、之れは客の意見を問ふてから出すがよい。それから澤庵は香ひを好まぬものが多數だから、之れは決して出してはならぬ。又昨年であつたか、德川慶喜公を外人と共に御訪ねしたら、公爵邸ではカステラと珈琲を客に出されたが、何故玉露でも出されなかつたかと殘念に思つた。外人は日本へ輸入せられた飮食物を御馳走になる爲めに來るのでないから都合に依つて、天麩羅蕎麥の御馳走でも可い強ひてハイカラがらずに有合せで食事も共にし、遠慮なく交際せられたなら、どの位萬事に都合が可いか知れないと思ふ。



質疑應答　日用便覽

問　七月號にあつた二木謙三博士の腹式呼吸法のお話は大變有益な事と思つて讀みました。就ては私は今姙娠中ですが、やはり之を行ふても差支はないでせうか。お尋ね申上げます又お序でに先生のお住所をお知らせ願ひます。（府下大森今田しん子）

答　此の事に就ては博士は何とも言つて居られませんが、姙娠中に之を行ふのは、横隔膜を押し、從つて胎兒に壓迫を加へるから宜しくないと言つてゐる學者があります。これもまだ確定した說といふのではありませんが、兎も角もこんな事をいふ人がある程ですから、先づ實驗に基いて確實な事を言ひ得る時の來る迄は、姙娠中は之を行はない方が安全でせう。博士のお宅は神田區小川町六十番地です。

問　月見のお供物は何んな風に致しますか。（芝芳子）

答　舊八月十五夜に、月見團子を製つて、之を十五膳に据ゑ、尙ほ枝豆、栗、柿などを添へ瓶に薄、其他秋の草花を挿し、御酒を飾つて月前に供するので斯樣にして互に物語などして月を賞するのは實に奥床しいものです。舊九月十三日にも十三夜と稱して右の樣にする風が昔からありますが、此の時は團子の數を十三に致します。

問　七月の御誌上に、文學博士の福來先生の強迫觀念のお話が出て居りましたが、私の兄もそれぢやなからうかと思ひます。實は四五年前より人に秘して好んで或る催眠藥を飲みます。（醫師ですから藥は自由です）。藥名コロラールヒドラートと申します。之を飲みますと、もう狂氣のやうになりまして、覺めては飲みさめては飲み、家業も何もあつたものぢやなく、止めれば暴力を出して腹を立てゝ外出し、そして又求めて飲みます。之れが爲め前年から三度ばかり入院致しました。すると十日ばかりで治つてしまひますけれども、又一ヶ月ばかりたつと、又いつの間にやら買つて來て又飲みます。本人は平常はいつでも飲んではいけないいけないと言つて退院當時なぞはそれは〳〵私はなぜこんなだらうと涙を流して後悔して居ながら又初めます。私は今日迄いくら血の涙をこぼして諫めたか知れません。それになぜ聞いて吳れないだらうと不審に思つて居ましたが、先生の御話で承はり、始めて強迫觀念だとい

ふ事が分りました。どうかして全治さす事が出來ませんでせうか。（京都にて藤井萩代子）

答　眞に同情いたします。心理學上では或はさう云ふのも强迫觀念といふのかも知れませんが、つまり其の藥品の中毒を起して延て神經作用にも變調を來して居るのですから、先づ如何なる苦痛を忍んでも服藥を禁じなければなりません。これが出來なければ如何なる名醫も如何とも出來ません。そして生活を規則正しくするのが何よりも大切です。福來博士の御說には强迫觀念の矯正法なども述べてありましたがあれは何人にも頁い法ですから、倘ほ御一讀を願ひます。

問　桃を永く貯へて置く法がありませんか。（大和林なほ子）

答　まだ十分に熟しない無疵のものを取り、うどん粉か生麩を粥の樣に柔かく煮て、鹽を少しばかり加へ、冷めるのを待つて、壺などに詰め、之れに桃の實を漬けて密封して置くと、冬になつて出しても尙ほ取たてのやうです。

問　私の夫、肥厚性鼻炎を切り取つて全治の宣告を受けたれど、臭覺未だ完全ならず、かつ神經衰弱も前と異りません。神經の方を頁くする方法を御示教願ひます。（廣島の一女）

答　鼻炎の方が果して全治し居るものとすれば神經衰弱は他に原因がありませう。其原因の重なるものは、遺傳性の素質で、其の外、長く心身を過勞し、睡眠不足なる時にも起ります。又慢性中毒（殊に酒精の）、房事過度等よりも起ります。之を治するには、其の原因を除きそして神經衰弱に罹れる者はすべて病狀を過信し輕快となることを信じないものですから、第一に之を慰めて元氣をつけることが肝要です。次に興奮劑殊に濃き茶、珈琲、酒、煙草などを禁じ、食物に注意し、運動を適度に行ふて十分心身の休養をしなければなりません。なほ電氣治療、按摩、體操、水治法、催眠術も効がありきす。藥を服する場合はあまりない方で、不眠に陷つたからとて眠藥を服用するなどはよくありません。一時轉地するのは常に効果のあるもので、輕症は職務を廢し、遊山旅行をなすのみで十分に癒ります。

問　私は小學校を出てから町立の技藝女學校を卒業したのですが、御地に此の程度で入學できる國語專門學校で、卒業後は文部省の國文科檢定受驗資格のつく學校は御座いませんでせうか。（兵庫月岡はるゑ）

答　神田區三崎町に國語專門の國語傳習所といふのがあつて、さういふ準備に入學する人も多い樣ですが、其の程度で入學は出來るけれども、文部省の檢定試驗を受けるには、師範學校或は高等女學校を卒業した者でなければなりません。

問　雀斑の療法はありませんか。（越後桃子）

答　外用藥でも內服藥でもまだ眞に之を除き得るものはありません。けれど、硼酸水にて常に洗ふか、又米糠或は牛乳にて顏を洗ひ、常にベルツ液を用ふれば効能があると言はれて居ります。

問　痣を取除く方法を（橫濱細井貞子）

答　剔絡といふ外科手術を受ければ大抵除き得るけれども餘り大きいのだと多少瘢痕が殘ります。

葉末の露

碎花

○

時として涙をおぼゆ草木の悠々として日を浴ぶる見て

慰まぬ心を抱いた若人は、この日も家を出て、近い郊外の野をさまようた。眼に入る綠色は、激しい生存の競爭過程を、馳驅するに疲れた若い心を痛ましきまで刺す。野に展げられた一木、一草の微にいたるまで、おほらかに何の愁ひも無げに、日光を浴びて居る。然るを何ぞやこの身のかくうなだれ歩むは……と思ふともなくおのれの姿を省みると、涙は潸々として頬を傳うて流れるといふのである。自己の心に何の缺陷もないときには氣もつかないが、時には無性物の生存慾にさへ涙を覺えるその機微をとらへて歌つたのである。

○

戀せぬ日わが聞きしとはことなりぬ彌生の空の智恩院の鐘



皮膚に快い汗ばみをも覺えさせて、眠りを誘ふやうな彌生。地にはさくらの花が夢のやうに咲き、空は空で、これも夢の中の國のものゝ如うに、ぼうつと霞んで見える。斯かる杲い中にも、きのふ、なほ君を知らずして聞いた鐘の寂しい韻と、けふ聞くそれとは、同じく寂しいと言つても寂しさが異つて居るといふので、戀する人のいはふやうの無い哀愁の漲つて居る作である。誰れか春を以つて、最も樂しき、華やかなるときとはするぞ。春は四季のうち最も寂しい時であらればならぬ。動揺に包まれつゝ沈靜……。殊に戀知り初めしつら若き人々は之を感ずるのである。又智恩院は京都に在る淨土宗の古刹で、この固有名詞で限定れてあるために、その影にかくれてゐるものなつかしい舊都の面影がしのばれる。

○

母よ母よそのたたかひのわかき日を語らずや今泣きて聽かまし

わがいのちを懸けて奉ずる母刀自の、眼にはそれと見えわかざれ、日に衰へゆきたまふことの著さよ。み鬢の白きに

額の深きみ皺に、その父亡き後、獨りわれらを育み給うたみ苦勞の跡を語つて餘りある。兒はかくとも知らずして、背きまつることもおほかたでは無かつた。恕させたまへ――といふので、一首を貫いて流れて居る純な情緒は卒讀に堪へざらしむる。

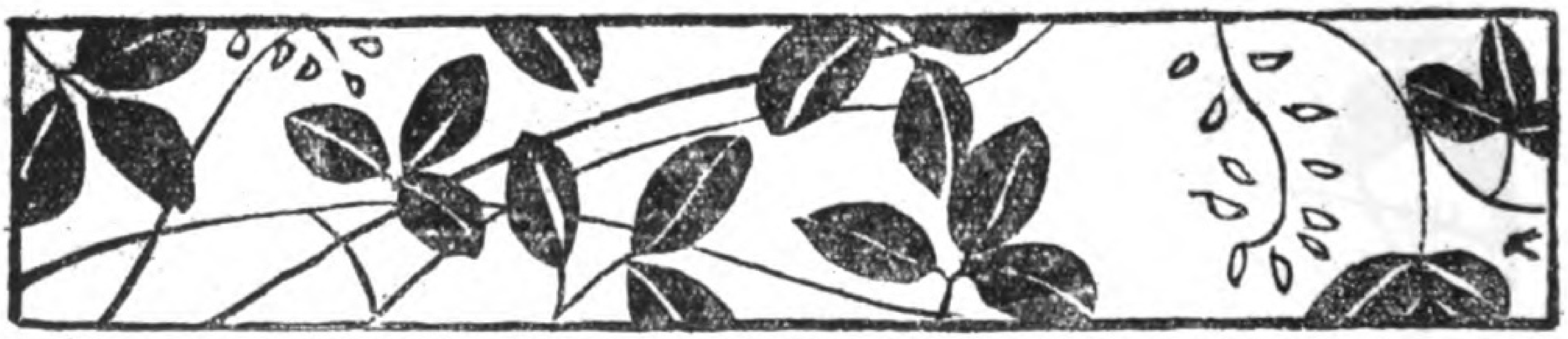
○

かの目白僧園の鐘なるころにひとりさびしくいぬるべき身か

五月の夜頃の闇は、しと〳〵としたゝり來り、青い靄は冷たく喘いで雫する。柩のやうに暗い家がならび、音無川の冷たい響を聞く目白は、靜かに更けた――

すべてのもの、蒼く靄にかこまれた中に木々の息はけぶり、空明りは涯なく擴がつてゐる。かゝる夜頃、思ひ疲れた作者が、常にきく僧園の鐘は、いかに淋しくあらうか。その淋しさに、ひとり寢れむとして我しらず涙がおちたであらう。飾りに飾つた歌の中から、このさゝやかなる官能の明るみを發見で、私は快くこの一首を歌うた。

○



木の下にしら髮たれし後ろ手の母をみるなり晝ほとゝぎす

あ、ほとゝぎす――

ふと驚いたくろ髮のひとは、伏せてゐた瞼をあげた。そして故里を想ひ出した。梧桐の木でもあらう、その垂れかゝる葉の下に立つて居られる母びとのうしろ影――

力なげなる白髮と、うしろ手と、

――別れて荏苒いく年か經つた。すこやかにふるさとに老いゆく母よ。いまも宵月に出て、夕雲のおこないを空しく眸にうつしては、いかに私らをおもふであらうといふのである。――かういふ技巧の歌は、澤山ある歌で、別に新しくもなく、出色のものでもないが、ただ、なつかしい歌の一つである。

○

神よこのはしためは泣く憎しともはたあはれともさばきしたまへ

戀も信仰も何も棄てんばかり、神のまな兒であることを忘れた男はひた泣きに泣く。

「神よ」と、血をしぼるやうに叫ぶ男が祈禱を聽きたまへ、

戀のために神に冤ることを忘れたこの奴僕を、憎いとも、さてはあはれとも審判したまへといふのである。
敬虔な、若いクリスチャンの痛酷な叫びである。

○

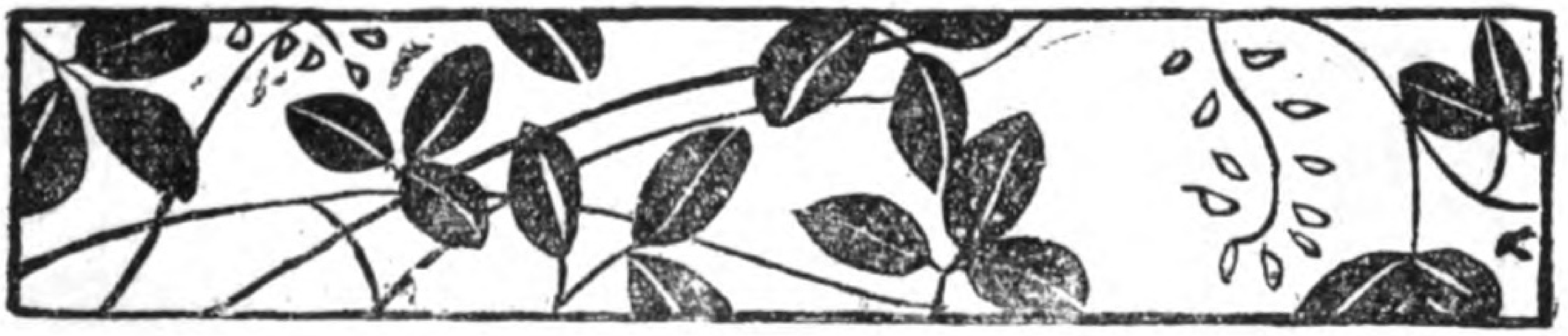
病ひのごと思郷の心湧く日なり眼に靑ぞら
のけむりかなしも

生れた國を遠く離れた漂泊して居る若い作者が、うな垂れながら歩るいてゐた日でゞもあらう。日光は、軟く哀愁をつゝんで空にみち、心の底を透して故さとおもふかなしさはいつか涙にぬれてゐた。
地平の果の森はひろの靄に音もなく歩み、そこから靑い空に白いけぶりは亂れもせずながれてゐる――あこがれやすい若いこゝろを抱いてさまようとき、誰れしもかゝる情緒に遇ふであらう。何ら技巧にも促はれず、流るゝ如く歌はれたところにこの歌の無限の生命がある。

○

君を見てきのふにおなじ戀しさを覺えさせ
ずば神よ呪はむ

恒に緊張した心持ちを、對手に對して持つて居たいのは苟くも戀する人の、偽らぬ願ひであらう。然かも一張一弛



は免れがたい。きのふ身も世も忘れて男に對うて居つた心の緊張が、いつとはなしに弛るむともなく弛るんできた、疲れたのであらうか。いや〳〵さうぢや無い。しかもきのふとおなじ心に君をおもひながら血もわかずなつたかなしさよ。こんなことでは不可ぬと氣をとりなほすいぢらしい女性の優しい心持ちを歌つたもので、「覺えさせずば神よ呪はむ」と大膽に云ひ放つたところにこの作の力がある。

○

ひぐらしや雨戸のひまに曙の色しろ〴〵と
して眼に入り來る

かな〳〵と、空に向うて力強い、然し透明な句切りのよい蜩がないた。床のうへに眼が覺めると、もう夜が明けてゐた

○

ひぐらしよ汝がありあけの淸き音にめざめ
ぬ人はあらじとぞおもふ

暗い雨戸の隙間から、ひらめく夏の明方のいろは水盤にたゞへられた銀の水のやうに眼に沁みてきた。露ふかい木々の間からなほもひぐらしはかな〳〵と響いた。
温和な覺めたる歌の中から拔いたのであるが、極めて淡い多少の新味の加はつた歌である。



清涼語

筑摩子

△

高島平三郎氏の兒童心理學の講習が○○町にあつて私の姉も暑中休で任地から歸省中だつたので出ました。

「却々むづかしいてすね、私など頭腦が惡いせいかどうもはつきりと解らなくつて困りますよ」

つて姉がこぼしますと、傍に居たこれも一緒に講習へ行く近所の娘さんが

「さうでせうねえ、どうして教育學や心理學の原理を書いたものを、餘程研究して置かなけりや、あれは容易に解りませんよ、私なんかもう以前に高島先生の心理學書を見たもんですから、今度は餘り熱心に聞いても居りませんの、何だか同じ事を二度くりかへす樣で……」

ですつて、まあ何と云ふ人を見くびつた高慢な言ひ分でせう、其くせ質問されたつて一ツでも滿足な答は出來ないんですよ、考へて見ればいつそ可哀さうな、此娘さん年は十七、師範學校の二年生、何を云ふにもまだ若いですからねえ、一寸むづかしい書物をのぞいたゞけでも忽ち偉くなつたつもりで威張りたがるのも無理は有りません。もう四五年經つて一人前の先生にでもなつたら自然こんなふうもなほるでせう。

△

人は一般にさうですが、殊に婦人で謙讓の德に缺けて居るのは實に苦々しいものですね、前の師範生なんかまだ子供の殆ど、滑稽に近い不遜ですけれど、それでさへいま〳〵しいんですもの、愼しまなけりやなりません。

併しながら、此謙遜もあまり極端に走つては却つて人に非常な不快を與へます、もう立派に教育もあり、修養もつんで居りながら、他人に何を聞かれても頼まれても、否どう致しまして私なんかにや出來ません、存じませんで澄し込んで居られては、愼しみ深い人とよりは、妙にかくしだてする底意地の惡い人だと、聞いた者は大そうに心持をわるくします。

それよりも修得してある學問でも技藝でも、場合に應じて親切に使はれた方が、どれ程世のため、人のためになるか知れません。これを見苦しい知つたかぶりだとそしる人はおそらくありますまい。若しあれば、そは實に取るに足らぬ卑劣な嫉妬屋です。

能ある鷹もその鋭い爪をかくし通しでは、小雀にも劣ります、人だつて折角の才學を利用する事がなかつたら、可惜寶のもち腐れで、心の空虛なる愚人とすこしもえらぶところは有りません。

△

羽織の衿だけは活動ぎらひな、いつも意氣地なくべたりべたりねてばかり居るのに限りますね、それですのに、私の拵へるのは、どれも〳〵頗る活潑にぴんぴん立働いて弱りはてます。

△

顏色の白い人の着物は黒でも白でも結構ですが、すぐれて黒い顏の人が、白色い物を着たところは、餘り配合がよすぎて滑稽ですね。

△

「ホヽヽヽまあゝの人の飛んで行く姿御覽なさいなまるでポンチ繪ですね」

「アハヽヽ鳥羽繪に違ひなしだナア」

前者は新らしい人。後者は古き人。

△

先日私が梅を漬けましたら、餘り鹽を入れ過ぎたゝめ、梅がすくむ程からくつて〳〵、到底食べられない様なものになりましたの、私の考へでは、長くもたせるものだから、餘程鹽をきつく漬けないと、腐るだらうと、用心したのですけれど、あとで人に聞けば、何

の事、酢さへませればいくら鹽甘でも惡くなる氣づかひはないんですつて、そしたら傍に居た友の云ひ草が氣が利いてるぢやありませんか。

「だからさ、漬物ばかりぢやない、人間だつて無暗矢鱈と鹽ッぱく嚴しくばかりすると、その梅のやうにをぢをぢとすくんだやうな仇がらい、絶えてやくにたゝんものになつちまいますよ、少しは粹味も甘味も加へなげりやよい味は出ないもんですよ」

友は折々こんな警句をはきます。

△

「らしく」と云ふ事は最も大切でせうと思ひますよ。親は親らしく子は子らしく、夫婦らしく學生らしく姉妹兄弟らしく友人らしく、主人らしく奉公人らしくつまるところは總べて人間らしく。

△

敎師「皆さん、秀吉と云ふ人は氏もない卑しい家に生れて、そのやうに艱難辛苦してだん〳〵出世して行つたんですね、そしてしまひにはどう云ふ人になりましたか」

生徒「秀吉はおしまひには死にました」

敎師「ウム……」

これは全くこの近邊の小學校にあつた話です。

この生徒は偶然にも、人生の大問題を一言のもとに易々と解決したんぢやありませんか、なまなかの賢人にはこれ程完全無缺な答は出來ぬでせうと思ひますよ。

△

目の前に十萬の金貨を並べられて、有頂天にならず冷然として居得る人は、凡人の群を脫した人です。

△

花を盜むも米を盜むも、罪を犯したと言ふ點に於ては少しも變りないのですけれど米盜人と云ふよりも花盜人と云ふ方が何となく奥床しく風流にきこえるではありませんか、妙なものね。

△

うき世がだん〳〵進歩するに隨つていよ〳〵複雜な

清濁定まりなき巷となつて行くんですから、此場合、融通の利かぬかたくなゝ人は實に厄介ものです。勢祉會の片隅へ追ひちゃめられて小さくなつて、世を呪ひ人を呪ひして暮さねばなりません、口惜しいではありませぬか、ですから、どうしたつて今後の人間は、時勢に逆はず時勢を利用するだけの手腕がなければ駄目だと思ひます。即ち人生の風もし清からば清きを吸ふて精魂を養ふは勿論、よしや人生濁りたりとて、其濁りに住みて倘汚れなき白蓮と咲き匂はんの覺悟こそのぞましう御ざいます。

△

もうずつと以前の事で、婦人會へ初めて參りました時でした、私は少しをくれて行つたゝめ、も早や會員の方は大抵お揃ひで廣い室へづらりと正しく並んで居られましたが、私が這入つて行くと、皆さんの幾百のお眼が云合せたやうに屹とこちらを見つめられるのでまあそのきまりわるさ御挨拶申したつて、只形式的に丁寧な默禮をされるばかり、かゝる席のつねとて誰一人心安く話しかけて下さる人もなし、全く手持不沙汰で居りました時、日頃餘り親くもない婦人がニッコリ「よくお出でなさいました、さこちらへ入つしやい」と云ふて下さつた其刹那のうれしさ、今に忘れる事が出來ません。これは私ばかりではない何誰にも經驗がおあり遊ばす事でせう。

何事によらず或る一刹那にチラリと受けた感じ程、腦裏に强い〱印象をのこすものは餘り有りませんね友達同志親しく話合つて居る時分などに、どうか云ふ拍子でプッと對手が親友間にあるまじき嫌な目使ひをしたのを發見した折のその不快な事、何に假令ませう、丁度三石の冷水でも浴びせかけられた樣に一時に美しい熱情がさめ果てゝ云ふに云はれぬ惡感情を引き起しますものですわね。

親しい友垣の仲がいつとはなし次第々々に相隔て行くなどはよく聞く事ですが、その動機をさぐれば乾度前のやうなほんの瞬間、實に電光石火の一瞬時に受けるいやな感情が因をなして居るのが多からうと思ます。

茗荷の意匠



だきめうが



だきめうがくずし



めうがさもへ



めうが巴



三ツよせめうが



めうが巴くずし



花だきめうが



めうがの蝶



蝶めうが



ちがひめうが



めうがの花



光琳だきめうが



むかひめうが



丸ニ八ツ割めうが



花めうがの丸



田村めうが



菱めうが



三ツ花めうが

草まくら

潮風

▲金澤の十日

◎五月の末に下野の那須溫泉で七日暮らした。黃色凉しき茶臼山の噴煙、化け切れず九本まで尻尾を出した狐の殺生石那須與一の氏神溫泉神社みな忘れがたきものゝ一つである。それに躑躅が四面に火の海の様であつた。

◎六月初め加賀の金澤から招かれた。金澤は人口十一萬。それで女の數が男より五千多き由。水の町、樹木の町、鳥の町諧の町家並みの五分通りは京都の面影がある。ことにベニガラで塗つた處なぞ。

屋根に石のおいてある家なぞ、雪圍そつくり、そんなに降りもせぬものをとをかしい。銀行その他大きな建物の中には實用向きの洋館作りのもある。僕の泊つた家も夫れだ。

◎兼六公園は成程金澤人の誇るだけあつて立派なもの。丘あり、流れあり、四阿あり。一木一石にも多大の勞力と經費が費されてゐるなうなづく。さして廣くはないが、趣味はとても日比谷公園の比ではない。尤も金澤人士が、すでに過去の夢となれる百萬石の城下也と云ふ觀念と、伊萬里より脫化せる九谷



燒と、宏大なる庭園の如き兼六園とに囚はれて、新らしく誇る品を出さうとしないとあらば、寧ろ此公園は無いがよい。

◎當地で不思議な仙人にあつた。名は北村爲助、六十一歳で白髮は一つもない人間の五官の外に第六官があるとて、之を無意心識と名づけて居る、氣絕した折など靈と肉をつなぐはこれだと云ふ。無意心識を強くする神藥は古渡龍腦(生藥屋にて四匁三十錢以內)から製するので湯呑みの內を綺麗に拭ひ、その口に日本紙を張り太鼓の皮よろしくする。龍腦をその紙の上に置いて火のしをあてる。青い臭い煙を立てゝ藥は影を消す。試みに日本紙を破つて見れば、龍腦はスツカリ微細なる粉末となつて湯呑の內面に附着してゐる。之を別の器物に收めて、毎朝耳搔に一匕か二匕づゝ用ゐれば、非常に元氣を増すと傳授してくれた。その後實驗したが非常に結果がよい。

◎落して割れぬ陶器——即ち硬質陶器の製造會社を縱覽した。名古屋に一つあるが、金澤のが日本一であると云ふ。色の淺黑いむくつけき燒物だが大抵の虐待では割れぬので一名を兵隊茶碗と稱へて兵營、病院、寄宿舍、船中などで使用されるさうな。

▲熱海の七日

◎金澤の後約一ヶ月。今度は熱海へ志ざす。避暑にあらず。僕の所謂「遊人旅行」俗務往來を絕つて、七分通りまで出來上

つた「雄辯術の研究成せん為めである。

◎熱海は去年の暮春より初夏へかけて二ヶ月病ひを養ふた地。樗牛がリカテアの懸崖に比した魚見の岬に寄る波の快然として白く、金色夜叉のお宮の松。海風に吟ずる姿、何となくあるものが胸の鱗に觸れるおもひ。心の中ではおぼえず「オゝ熱海」と叫んだ待たるゝ人はなき乍ら。

◎晝間は専ら英氣を養ふ。

舟して魚を釣りに行つたり、魚見岬の断崖の下の白百合かをろ浅渚に舟をつないで青嵐に吹かれてうたゝ寝をしたり時には三里沖へ出て、初島と云ふのを訪ふたりした。

◎初島は全く好い島だ。東西八町南北廿四町、周圍一里廿六町の浮城。黒松島をめぐつて、磯々には大石磊砢、戸數は四十二戸で、他村の移住を謝絶し、この戸數を増さず、減さず、人口三百、漁業七農三の生計をたて、日用の必需品を賣る萬屋なるものは村に只一軒よりなく且つ一番貧乏な家に之を營ましめる。獨占であるから利益が確かだ。さしもに傾いた家庭も恢復されやうと云ふ譯し。三年過ぎれば權利を召し上げて他の貧乏者にゆづる。此故に、富者なく貧者なく、いづれも平均四五反の畑を所有して。一島は即ち一家。盗賊なければ風雨の夜の外は戸を閉さず。地震雷はあれども、火事は絶えてない。水仙と鼠の大を以て鳴り、桃の實と、椿の油を産物とする。輸物としては牛一頭、豚三頭を飼ふ外は何も居らぬ巡査もゐない。



◎小學校は複式とか何とか云ふのだ。寺を建てなほして一年から六年までの男女生徒を一室に収容し、一人の先生が八面六臂の働きをしてゐる。片隅で讀書、片隅で習字、算術もあれば地理も－歴史も－修身も－これが電話なら何の苦もなく混雑する。面白いのは子を負ふてゐる者もある。子泣けば、場の後に出てあやし泣きやめばまた席につく。

別天地、安樂世界。こゝで生れて、こゝで育ち、こゝで婚しこゝで死ぬ者もあるといふ。

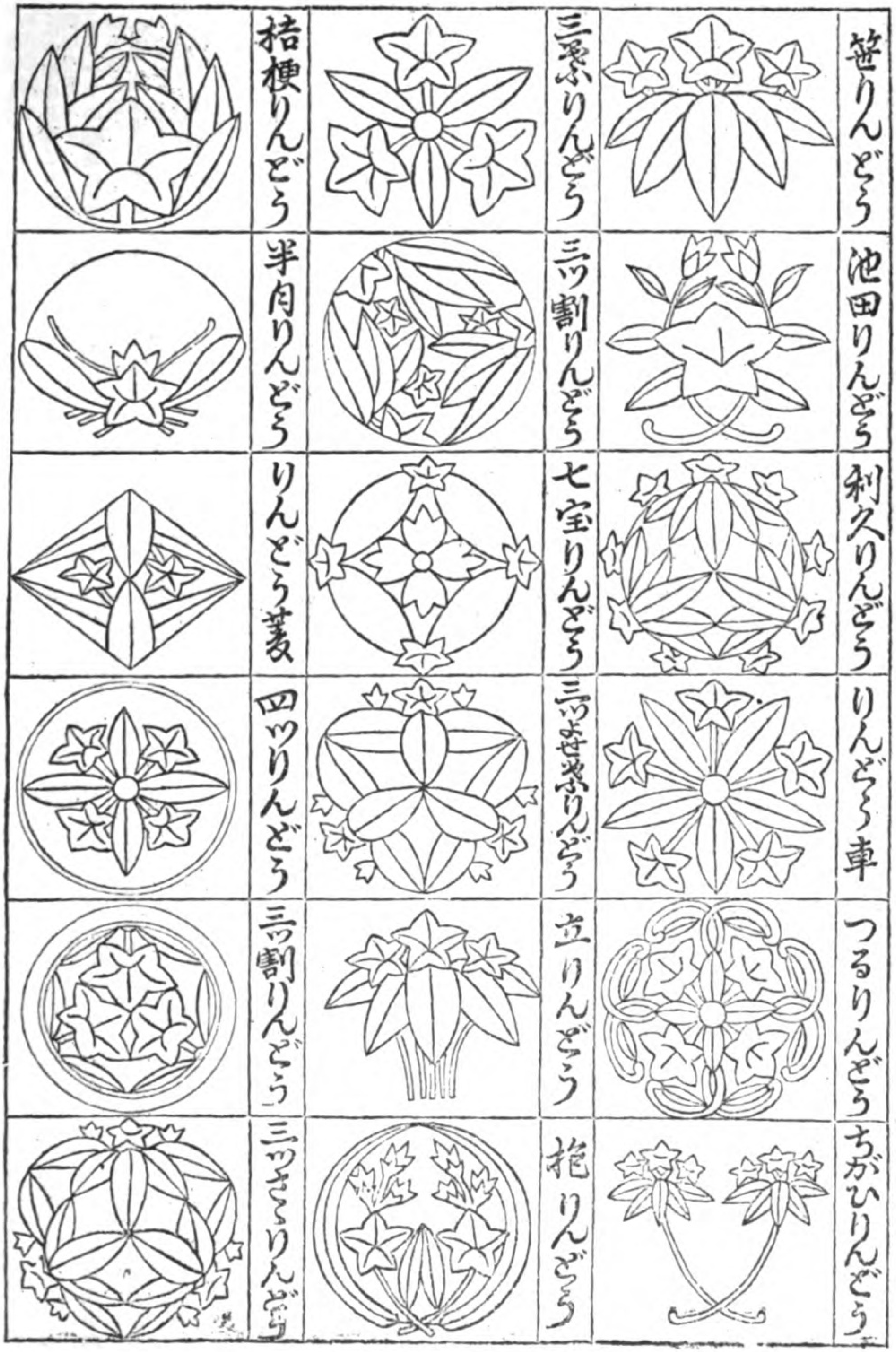
▲箱根と鎌倉

◎七月の三十日急用があつて國府津の大隈伯にあひにゆく。暴風海嘯東京灣を荒らして間のない事だ。雨はれて蒸々する。

◎思ひきや伯は其朝、箱根宮の下の奈良屋へ出發されたと云ふ。少なからずガッカリ。

◎伯を尋ねて奈良屋へついたのは彼是五時頃、こゝで一泊した。動かざる山波を見て伯と快談した記憶、伯及伯爵夫人、令孫、從者打ちつれて木賀まで散歩し、小休みした茶店の鸚鵡が「オシヨーサン、コンニチワ」と叫んだ記憶、山はあくまで緑りに流れはあくまで青く。瀬はあくまで白く、瀬はあくまで涼しかつた。

龍膽の意匠


笹りんどう
三葉ふりんどう
桔梗りんどう
池田りんどう
三ツ割りんどう
半月りんどう
利久りんどう
七宝りんどう
りんどう菱
りんどう車
三ツよせ葉ふりんどう
四ツりんどう
つるりんどう
立りんどう
三ツ割りんどう
ちがひりんどう
抱りんどう
三ツさゝりんどう



晩餐

夕かげ草

お小間使の絹がお代りのお銚子を、塗盆にのせて、鏡の様に拭き拔いた縁をする〳〵と。けたゝましい御催促の電鈴が、嚙み付くやうに鳴る。

「初まつたよ。」

絹は口の內でつぶやきながら、膝まづいて障子を開ける。

打水涼しい庭を前に、端居の小酒盛り。大きく草の葉を絞つた、對の浴衣の夫婦は、數々取り並べた食卓を中に、杯と箸の手がたま〳〵動くばかり、沈默に座はしらけた。夫人の手近に置れた蓄音器も、先程まで奏で續けた流行唄を、ばつたり忘れた樣に默して居る只ならぬ雲行、雨か、風か、絹は伏目に夫婦の顏をぬすみ見た。

「絹、酒は氷箱へれて置くのだな。」

「ハイ。」

「一體氷箱には氷がはひつて居るのか。」

「未だ可成りはひつて居りますが、アノ…只今の御酒は、一寸そそう致しまして、別なお入物へ移しましたから……。」

「さうだらう。道理でぬるまつこいと思つた。」

「相濟みません。どうぞ御勘辨遊ばして……。」

主人ははだけた浴衣の衿もとを、自暴にばた〳〵扇ぎながら。

「貴樣を叱るんぢや無い。奥樣の世話が屆かんからだ帝國座や三越へ出懸けるばかりが細君の能では有るまい。ちつと質實な考へを持つたらよからう。」

家付きの奥樣は、もう三人子持であるが、からきしお孃樣だ。稀々誘はれて行つた芝居を、毎日でも見物に出歩くやうに云はれて、たまら無く口惜しさが込上る。

「どうせ屆きませんが、私だつて…。」

「イヤ言譯はせんでもいゝ。自分の非を覆ふと云ふの

は、卑怯な奴のする事だ。以後氣を付けると云へば濟む事ぢや無いか、乃公は決して無理は云はん。一家の主婦として、當然盡すべき事さへ仕て呉れゝば、夫で滿足して居る。」

「夫では私の仕方に御不滿なんで御座いますか。」

「ウン不滿だ乃公は一々口へ出しては云はんがな、粉糠三合持たん奴は侮られるのだ。」

「マア貴郞は……。」

さも／＼呆れ果てたと云ふ想を眼に集めて、憎い事ばかり云ひつのる醉顏を、ぢつと見詰めた。庭の植込を透ける夕燒雲にも增して、燃えるばかりの醉ひにまらぎして、並べ立てる酒癖、なじつて責めて謝らしてやり度いのは此方だのに、先んじて壓倒しようとする、心根が殊更憎く腹が立つ。



足音もなくすらりと障子が開いて、切髮姿の後室が肉付のよい面に笑みを浮べて立つた。座に滿ちた險惡な氣壓はぱつと散つた。主人は安座の膝を周章てゝ坐り直し。

「ヤア御姑様。さあこちらへ。未だ飲んで居ります」
「いゝ御機嫌ですねえ。」
「お酌が上手だもんで御座いますから、つひ酔ひ過ぎまして……。」
流石に恥ちた顔色を夫人は小氣味よく眺めた
「いゝへお前好な御酒でも飲まなけりやねえ。一日御苦勞おしなんだもの。お父様時代の事を思へば、今の人は大人しいものですよ、マア玄關へ出で、お歸り遊ばせと申して、お返事も無く、怖い顔をしていらつしやれば、ハヽア今日はお役向きに面倒が有つたなと、夫から氣を配るのが大抵では無かつたよ。私でもお氣障りを仕た様に、平常は何とも仰有らないそうまで、一々心有つて仕たやうにお腹立ちに成るんだものねへ、手が付けられやしない御無理御尤もお小言が頭の上を通り越すやうにお辭儀をして、謝り奉つて居るより外無かつたのですよ。夫に比べりや貴子は仕合せさ。」



心樂しげに夫人をかへり見た。

膝頭へ手を突いて、恐縮の體の主人が、袖垣の葉蘭の蔭に、宵々かしこまつて居る蟇の姿に似て居るとお小間使の絹は笑ひを忍んだ。

「だから貴子とさう云ふのだよ。男は外が大切だからねえ、家では十分くつろいで、晝の重荷を忘れる樣に出來るだけ氣を付けて上なければいけ無いつてね。アアほんとうに御苦勞だねえ。だん／＼お役が進むにつけて、心配ごとも多からう。」

「お姑樣。さう仰有つて下さると、實に恥入ります。」

「イヽヘ私は人樣にも鼻が高いのですよ。世間に法學士は、ざら一面播いて捨る程ある、其中から選りに選つた事務官參事官を滑拔けて、お前の年で地方長官に成つた人が幾人有るでしよう。お父樣が今迄御存命だつたら、どんなにか御滿足なすつたらうに。長生しなけりや損だねえ、もう來春は十三年忌になりますよ。」

「早いものですな。どうも御恩返しを御法事でする樣では、實につまりません。」

感慨之を久しうする主人。今鳴つた雷は何處の空やら。」

好人物だが、お酒の上のよく無い主人は、晩酌のこながら酒に、いつも／＼ぶう／＼が初まる。懷育ちの夫人は大侮辱を蒙つたかの樣に、まつ赤に成る。湧き起る大波瀾。舟も筏も渦中の物と見る間に、濤を鎮める油の力、忽ち千鈞の重きをなして、萬事を壓するのは御隱居の威だ。聟養子とは云へ、知事ともある―少しは小鬢に白い物もまじる頭を、自然と下させるお手際はえらいもの。お里を洗へば某藩の士族は士族はながら、足がるとひだるがるお家柄で、雀の糧程頂くのでは、寺子屋へも通へ無かつた。けれどもいろのいの字を、右から持つて行かうが、左から書かうが少しも此人の威を奪ふに足ない、拔目無い才智のはたらく、やさしい同情はすべての人の心をそゝめて、某知事樣の北堂と云へば、侮り安い姑を與から讃美する此主人を知る方はよく御存じでせう。（特別懸賞文第一等）



人生の準備期

津末みさを

花子樣、昨日は長々お邪魔致しまして濟みません小雨降る中を、態々お見送り下すつて難有う御座います蛇の目片手、停留所にお立ちなすつたお姿を、私は釣革に下りながらも、のび上り〳〵見えなくなる迄見て居ましたよ、ウキンナとかいふ粋なお髮、すつきりきこなしなすつたお浴衣の格好よさ、此れが去年まで、前髮わけるのが厭だと被仰つたおやんちやさんと誰の目に映りませう、もうお十七、女學校の三年と云へばあの位におなり遊ばしたのも、さら〳〵お無理ぢや御座いません、考へてみれば、貴女と私、四つしか違はないのですけれど、貴女のほんの這ひ〳〵が出來る位、私が片言交り、桃から生れた桃太郎ちやんを唱ふ頃からのお交際ですもんだから、失禮ですけど、貴女がお懷しくつて、眞實、姉妹のやうな氣がしますの「あんな田舍女に妹だなんて云はれる義理はないわ」なんて、お憤り遊ばしては困りますけど、私、心からさう思ふんです、なつかしい花子樣、何でも思ひついた事は、云つて終はなければすまない例の性質から、今日は失禮も省りみず一言申上げたいと思ひます、世の中は三日見ぬ間の櫻とやら、私は久々振でお目にかかりまして、貴女のお物腰なり、お思想なり、大變にませて見ちがへる程におなり遊ばしたのに吃驚り致しまた、殊に純文學の方面にお委しい事、何時あんなに御精讀遊ばしたの、學校の科目が十數科目あります上お琴もお茶も遊ばしますのに、いつあんなにお調べになりましたの、ほんとにお若いのに似合はないと、すつかり感心して終ひましてね、實は貴子が、御入浴にとお立ちなすつた後、小母樣――お母樣に「まあ花子

樣つておえらいこと、どうしてあんなにお出來になるんでせう」つて、伺ひましたの、すると小母樣のお顔は急に曇つて、貴女だから申しますがね、花子はこの頃何ですかそわそわして學校の成績もよく御座いません、今迄兎も角、優等生の何のと云はれて居りましたのに、此度は裁縫や算術なんか隨分、ひどいので御座いますよ、本人に申しましても、あんな無趣味な者は厭だなんて生意氣な事ばかり申しますし、先生が御注意なすつても、何とも思はない樣子、閑がなすきがな



圖書館に許り通ひますので私も困つて居ります」つてね、私も今更、胸が潰れました、物の理解の早い、お悧悧なだけ、横道にそれやすいのに、お無理ぢや御坐いません、それはね、私も貴女許りが惡いとは申しませんの、學校のお稽古はうら若い、萬づ浮々した年頃の方には無趣味にも乾燥にも感じられませう、Ａ角とＢ角とが等しいの、御飯はいかにして炊く可きかなんて事よりも、新しい燃えるやうな思想、天馬空を行くやうな幻影からなり立つた詩や小說の方が面白い

には違ひありません、むげに又文學趣味がなくつて女の癖に、美か何か、涙が何か、一切お構ひなし、萬事十呂盤から彈き出す樣でも、仕方がありませんが花子樣、貴女のやうに感情的で趣味があり過ぎるのも、不安心です、考へて御覧遊ばせ、何處にお出ましになつても、ひけを取らない立派なお身分のお父樣とお優しいおしつかり遊ばしたお母樣と、優等生のお弟樣、天下にこんな揃ひも揃つた不足のないお家庭がありませうか、いつもお家は明るい温い、ぽか〳〵した春の日ざしが、さして居ります、貴女はたとへてみれば、その美しい園生の一輪の名花、まがりもせずくねりもせず、馥郁とかをりそめたのですから從つて人目にもつきやすい、誘惑もうけやすい、花子樣、餘程おしつかりなさらなくつてはいけませんよ、七重八重花さき誇つて、痴蜂狂蝶を醉はしめても、美しい秋の實がなくつては淋しいぢやありませんか――否花咲く甲斐がないではありませんか、最もある種の女になりましたら明日は徒花で凋落しても、浮世の春を一人占めて、世を飾り人を魅すると云ふのもありませう、が、貴女にはそれは望みたくない、明日といふものをお考に入れて頂きたい。私の心は間なく戰つて居る、燃えて居るまたと來ぬ人世の春、飽くまで美しうあくまで華かにありたい、幸福の花は摘む間に色はあせると云ふものを」とかう被仰るかも知れないのね、ええ御尤も、私も御察し致します、けれども花子樣人生は夢ではありません、小說ではありません、若い時の虹のやうな夢は跡なく消えて醒めた人世は長く續きます――つゞけて行かなくつてはなりません、ねえ花子樣、こゝにもお氣がつきましたら、少しお考を質實になすつて頂戴、明日の收穫の爲め、今日の花の少しは匂ひが薄くつても、我慢遊ばす氣は出ませんの。

云ふ迄もなく、女學校時代は長い人生の準備の期で御座います、私一人の考では、女學校の目的は良妻を作るの、賢母を作るの女流の學者を出來すのといふ、女まくろしい目的に制限されるものではないと思ひます、一かどの出來上つた完全な婦人、どんな境遇にな

つても挫けず、己の持する處は失はないといふ見識があり、日常生活上の種々の出來事は一人で立派に、判斷し處理して過たない常識のある婦人を養成するのが目的なんでせうこの點から申しますと、お學びになる十數ケ目の中、より今直接に役に立たない厭に思召すものでも、疎に遊ばしてはならないかと思ひます。まあこゝに一つ家を建てますとしますね、初め技師に願つて設計をたて目論見を定め、それから日傭人夫も雇はなければならない大工も左官も是非、雇ふし、煉瓦工も入る漆灰もコンクートも必要と云ふ様に、幾百の人の幾多の働が、綜合してやると人の住める様な家になるのです、さあその上住む主人の好一つで、お庭に花も植ゑませうし、お座敷にも修飾を致すんです。人間もやはり其と同じこと、立派な人格を作るこは是非とも各方面各部分が立派でなくつてはなりません、煩瑣な面倒な學科のお稽古も、いはい花子様といふ建築物を、ちやんと落成させるには是非とも、踏む可き順序なのですね、さうして文學は建築物が出來上つてからの修飾で御座いますわ、四本柱の風がふけば、よ



ろようとする様な中に、いくら掛物があつても、挿花をしても何にもならないと同様、いかに純文學が御得意で感情生活が豐富でも、人間としての價値が低くつては何にもなりますまい。



最も御自分では、もしかすると、もう一かどちやんと出來上つたおつもりかも知れませんのね、然し花子様、貴女なんて未だお年が若いのですから、さうおせきになるには當りますまい、大に自重して大に人格の向上をお心がけになつたら、いかゞです、人生に觸れたの、詩を解したのと申しましても、まさか四疊半の茶室に、七寶莊嚴な、巴里の宮殿的な裝飾が不可能であるやうに、低度な人格では低度な文學より味はふことは出來ませぬ、眞實、藝術上の鑑賞が遊ばしたいのなら、こゝ暫くは、目をつぶつて學科の方に一段力をお入れ遊ばせな、母様の被仰る事、先生の御敎訓定めし貴女には、まだるつこい、ききともない、月並の事が多いでせう、でもね花子様、現代の新思潮と云ふ者はさう〳〵突飛に出來るものではありません、やつぱり陳腐な舊思想に胚胎し、又反動として起つたものですから、新しいのを追ひ、奇を求める反面には、女大學式の母様のお言葉もべからず訓の先生の仰せも、眞面目によく咀嚼なすつて御覧なさい案外御發明になる事も、多いでせうと思ひます、それとも花子様、「私は一生の幸福を犧牲に供しても

文學とは離れともない、むしろ舊來の女の型に這入つて齷齪する位なら、死んだ方がましだ」とこゝまでの御決心があれば、決して私もおとめだては致しませぬお進みなさい、あくまでもお進みなさい、然し「人を泣かしむるには、先づ自ら泣かざる可らず」といふ、警句を御存知でせう、文學を一通り解します丈けでも相當な智識が入りますのに、まして作者となりますには根柢となる可き人格が必要なのはいふまでもないことで、作物はつまり作者の人格の反映にすぎません、低度な讀者のうけばかり思召すなら知らぬ事、苟しくも一代の傑作文學史上に花を咲かせやうといふ、御抱負なら、やつぱりこゝ當分は學科の方を、滿遍に御勉强なさいと私は申上げます。

それはお若い方のことですもの、初秋風のふくあした、小雨そぼふる夕暮、門の小草のそのゝきにさへ、世馴れぬ小羊のやうな御胸は、共鳴りしていふにいひ得ぬ、ある感じか遊ばしたりする折もあるでせう、そんな時こそ、ずん／＼、御日記なり御歌になり、御得意の筆を揮つて、おかきつけてお置き遊ばせ、おかまひなくば私にも拜見させて下さいな、何の私の事ですもの、前後の意味が撞着しても、矛盾しても、當字があつても、文法が違つてゝも、誇張にすぎても、決して笑ひは致しません、眞面目で拜見して、泣きも笑も御一緒に致しますからね、ね、どうぞ送つて頂戴まあ筆にまかせ、御遠慮のないまゝに、とんでもない長談議致しました。（特別懸賞文第三等）



嫁の述懐

更科典侍

鬼にも似たる姑のために、いとし良人の家を去られあはれや血にむせびて逝きにし浪子孃か身の上を、小説として見たは昔の事、一昨年今の家へ嫁てからは沁々浪さんの事が思はれてまんじりともせずに泣き明す夜がいくらあるか知れません。

實にあの不如歸のにも勝る仕へにくい姑でしてね、いくら嫁にだつてあれ程頭を曲げないでもよかりさうなものを、御承知の通り私は女學校をでると直に嫁つたもんですから、ほんとに裁縫やお料理なんかお恥しいんですよでれ里の母もよく云ひ聞けましたし、もう何事も姑様にお縋り申すつもりで、遠慮なく。

「姑様これればどうして煮たらいゝでせう」「この裁ち方敎へて下さいな」なんて申しますと。

「私は盲者で何も知らんよ、お前さんは女學校とやらを四月も五年もかゝつて卒業した偉い學者なさうなから何でもお出來なさらうさフン」

これですもの、取りつく島も泣く／＼下女を相手にまよひまよひ致しませば。

「今時の女は圖々しいねえ、ろく／＼出來もし無いくせに人に



聞くつて事た有りやしない私なんかまるで片付け者にしてさ」出入りの肴屋でよし米屋でよし捉へて、こんな惡口仰るのを默言つて聞いてる私の辛さ悲しさこれが針の筵とでも云ふのでせうかあれ程お轉婆でお多辯だつた私がもう／＼ほんとは一言の末一行の端にも心を使つて居るのですけどまだ折々失敗があつて困ります先日近所のお老人が亡くなりましたから。

「いゝ人でしたのにお氣の毒ですれえ」と何心なく申しましたら、さあ大變

「エゝ／＼お氣の毒ですとも、憎くつてならない此の私でも死んだらさぞ嬉しいだらうけれど、あゝ／＼他人程恐ろしい者けない、何かにつけて死れがしに扱はれる」なんてぷり／＼怒つて、どうお詫び申してもお聞き入れなく寢てお仕舞ひなさつて、一日半つてものは私が泣く樣に願つても御飯一粒も召食らないぢやありませんか、途方にくれて居りますとこへ運惡るくも瀬村のお秋さん(緣づいてる良人の妹)が見えたのかすもの、姑樣には百萬の味方ですすれ。

「ほんにれえお前が來なりや、私や明日あたり餓死するとこだつたよ、却々酷しい嫁だかられ、あゝ餘りお腹が空いて息切れがする、秋や何でもいゝから一口おくれな」

とは何ぼなんでもひどいぢやありませんか、秋さんとて姑樣には敗けない人でせう。

「お姉様、いくら憎らしい姑だつて千殺さうとまで企まないでもいゝぢやありませんか、ほんとに私が來なけりやどんな目にお逢ひなさるか分らないわ、母様少しも油斷はなりませんよ先づ何が差上げませうれ、大分衰弱させられて被居るからたゞの御飯ぢやいけないれ。葛湯でもあげませう」

ペタ〳〵臺所へ出て、まあ聞いて下さい

「お姉様、まさか此お湯には――否此湯は母様が召上つても大事ないでせうれえ」

さも〳〵毒でも入れて置きはしないかとの様に、私はもう悲しいの口惜しいのなんてことは通つて、只ぼうつと夢心地で戸棚の隅に立ちすくんで仕舞ひました。

萬事この通りに苛めたてられるんですもの、もう到底私なんかにや辛抱しきれないからいつそ……と思ふ事も幾度あるか知れませんが、でも良人があゝ云ふ優しい質で陰へまはつては色々に慰めてくれますので、只々それはつかりを頼みに暮して居りますの。

私それでもまだ時子さまに較べたらいゝ方だと思ひますわ、あの方のお家ではお姑様と旦那様とがすべて正比例でお姑様が何か皮肉な言ひ掛りでも仰しやれば屹度旦那様も一緒になつて時子様一人をそれは〳〵酷いいびり方なさるんですつて、まあ何と云ふ旦那様でせうこれぢやあの氣弱な時子さまどうして立



つ瀬がありませう、先日から離緣話が持ち上つていまだに紛紜紛紜してるやうですのよ。

私此の春一寸お目に掛つてまあこれが昔の時子さまかと疑がつた位ですわあのよく肥つた頰がげつそりこけて目は落ちくぼんだし手なんか私よりまだひどい荒れ方なんですもの、情ないぢや有りませんか學校時代にや時子様のお手と云へば誰にでも羨ましがられる程、美しくつて玉のやうでしたのに……。

あゝ學校時代と云へば、私等と同級だつた村子さんれ昨年お嫁きになりましたよ、あの方のお姑様は又一風變つた方でしてれ村子さんをそれは非常に大切になさつて、いくら朝寢しやうが半日中髮をいぴつて居やうがお叱言一つも仰らぬのみか絶えずお世辭たら〳〵でお嫁さんの御氣嫌を取りぬいていらつしやるんすつて、否貴女それだけなら實に佛にも勝る優しいお姑様ですけれど却々どうしてちやんと息抜きを拵へてあるから恐しう御ざいますわ即月に二三度の御親類あるきはみんなお嫁さんの惡口罵倒だと聞いては呆れ返つた次第ぢやありませんが誰やらが云ひました、いつかあのお姑さんが他所で嫁がよめがと村子さんの惡口云つて居られる横顏を見てまことに鬼と云ふものはかうしたものかと身の毛がよだちましたつて。

だから餘り口のお上手な姑にも油斷は出來ませんわれえでも當の御本人たる村子さんはあの通り呆然とした方でそんな事一

向御存じなくいつも我儘云つて甘へて[illegible]さうですがそれで永久につゞきさへすれば御目出度いんですがねえ。

さうかと思へば又清さまの姑様のやうに、一寸旦那様と立話なすつても、険しい目使をあそばして。

「さかりのついた猫のやうだよ、暇さへ有ればベタ〳〵くつゝいて許り――」

なんて厭味仰つて事毎に旦那様との仲をへだてなさる御出張の折などに旅先からお寄來しなさる清様あてのお手紙をさつさと開封なすつてもしや其中に少しでも留守の新妻をいたはるやうな文句でも有らうものならそれこそ大變々々、ヤレ鼻垂らし男のこんな女房の氣嫌ばかり取つて、親なんか病んでも死んでもいゝと思つて居るなんて叫めき散らして果ては折角眞情こめた御玉章をずた〳〵に引裂いてしまつて清様には御見せなさらぬ事も有りますつて、その位ですから無論清さまからの御手紙も一通り姑様が御覧なさらぬうちは封じられんのださうですこんな大の〳〵嫉妬屋さんも有るのですよ。

姑様もあんまりですわねえつて清さまはさめ〳〵御泣きになりました。

かうしてお友達のお話をお聞きして見ても何方も〳〵辛い切ないお物語りばかりして見ると世に心底から優しいと思はれるお姑様はまづ有りませんわねえ。



そりや○○夫人見たいに

「――私は嫁に對しては極めて自由放任主義を取つて居ります舅姑だとて無理に氣嫌氣褄を取るやうなことは要らぬ」

と仰る極ハイカラなさばけた方のお嫁様は御幸福なやうなものの姑様があの様に賢明な分つた方だけに、又私共の思ひ及ばぬところに御心配もおありでせうねえ……あゝ實にわづらひ多き浮世です事つく〴〵しがない嫁の境遇には飽きました考へれば考へるほど。

以上は久々で遊びに來た夏子さんのくり言。

いつも〳〵來るから時計を見たり立ちかゝつたり可笑しい程ピクシヤクして一時間とは落着いて話して居得ない友が今日は察するに姑様不動詣のお留守とでも見えて珍らしい長座で悠々と四方八方の姑物語りを捲くしてゝいつたこと。

成程かうして承はつて見れば却々嫁姑の間つてむつかしいものですね。私など幸か不幸か一人子と生れた甲斐には姑の味と云ふものは生涯知らずに終つてしまう身の上なんですのけれど日頃の見聞から推して姑は嫁を憎まなけりや居られんもんだとは斷定を下し得ませんが併し決して可愛いとは思つて居ない位は承知して居ります。私の母は口ぐせの様に云ふんで御ざりますよ。

「ほんにお前は世の仕合せものだいつまでも親の傍に我儘の仕

放題で居られるんだから、私なんか十五の年に此の家へ……」

もう〳〵母様「十五の年」は聞きあきました。

私のお祖母様(即ち母様には姑)と云ふが名にひゞいたやかましやでそのため母様は云ふに云はれぬ苦勞をしたんですつてけどもこんな話も三日にあげずきかされちや、私は兎にかく此の耳が嫌がりますからねエ何で御ざいます

「餘り察しのない事云はずに少しは嫁の身にもなつて見て…」

仰るはどちらとの花嫁様か存じませんが、全くさうで御ざいましたね、まあ私は自分が門外漢だと思つていゝ氣になつて、無駄口ばかり叩きまして恐れ入りました併しね貴女よつくお頭を落着けて考へて御覽遊ばせよ例にも申します通り浮世は何事もめぐる小車で御ざいますもの、只今のその御なげきはやがて貴女の嫁樣の御なげきでは御ざいますまいか。

こましやくれた言ひ分ですが、どうせ嫁ゆき姑來り、姑去つて嫁姑となるのが人の世の常なれば、もういゝ加減に觀念していつそ芝居氣取りにお暮し遊ばせよ、ねえあの川柳の小父さんも仰やるぢや有りませんか泣かしやるな姑は嫁の古狸——

己れに恥ぢよ

(特別懸賞文第四等)

小百合



今夏何ぞ雨多き。雨に煙る漁村の柳、一幅の墨繪と見るべしされど、そは江邊湖邊のことなり。雨の漁村、何となう五月雨の病院を思はしむ。羨ましきは、溪泉を無弦の琴と聞きたまふ友が身の上。

○

友よ——蒸して揚る都の塵を外にして、短かゝらぬ五十日そも何をかなさむとはしたまへる。友の文は、唯だ云ふ齊の蝿夜の蚊、此世に在るの心地もせじと又た云ふ——諾るに、招くべき人も無く見るに訪ふべき所もなく、歌人文雄が『冬の日な二日よりなほ夏の日永きと云ひしの今更の如くに思はるゝと。終に云ふ——都は夏も冬も都なり都を外にして、我は住むべき所ありとは覺えじと。

暑き青山白水に避くる友よ、一たびはいたくも羨みし我れ友の、休暇五十日、ほとんど爲さむとすることころ無きを知りて、竟に此の小さき胸を痛めさる能はず。友よ、眞の友が眞心より出でし一ひらの書、冀はくばたゞ一片の婆心とばかり讀み去りたまふなかれ。我れに謎のあらざるは、友よく之れを知らむ。我が心は直なり。其色白し。文字のまゝに解したまへ。拙き筆、淺き想、言外に掬みてよと、求むる意を宿し得ざれば。

○

友よ――人は暑きを以て夏を嫌へど我は長きを以て夏を好むと云ひしは、げに勤勉の人には侍らずや。季、暑に向ふ毎に我は常に佐藤一齋の『怠惰の冬日何ぞ其れ長きや、勉强の夏日何ぞ其れ短きや、長短は我れに在て日に在らず』と云へるを想ひ起す。

人生の春は短し、落花落葉、霜頭やがて悔いむ年少怠惰の日。友よ、自ら省みて善なる道に勇進するを期したまへ。立てそめしだにたゆまずば、遂には龍のあぎとの玉も取るべしと云ふにあらずや。神は、怠惰の人に命じて、勤勉なる。蟻に往かしめたまへり。勤勉は幸福の母とは、友の幾たびか聞きたまへる金言ならむ。

○

友よ――無學は恥づべし。老て學無きはげに古き狸のごとくも見ゆるかな。學問は、素より見すべき爲めに力むるものにあらず。されど學問はよく、智識を開發し、人格の修養を致さしめ、時の力も失ふべからず、運命の力も奪ふべからざる寶玉を人の心に造り、おのづから人の顔せを輝かしむ。太平記を繙きては勇將高の師直が鹽冶判官の妻を慕ひ『重きが上



の小夜衣』てふ歌の句を得、さては衣に釉を調へて送れと云ふ心かと喜びし無學を知る者、誰かは笑を洩さゞるを得べき。友よ、喜劇の材料の常に無學者によりて供せらるゝを思ひたまはずや。

友よ――容姿の美はしきは榮とすべし。時に古今なく美は女子の總てと云ふに近し。されど學問無き人の美はしきは、魂なき人形の心地せざるか。

學問の力は大なり小さき眼をも涼しく、大きゝ口をも紅ひゆかしき蕾と見えしむ。げに『美』よりも價値ある『尊さ』は、唯だ學問の力に俟つと云ふが當れり。氣高き姿と云ひ、上品なる顔と云ふは、要するに學問ある人のことなり學問せずして氣高く上品なる人あらは、そは即ち學問せざれども、學問せしが如くに見ゆる人なるべし。

趣味は、人格を包む光なり、人格より發する香なり、人格の帶ぶる色なり、愛嬌は色か、威嚴は光かチャームは香か。學問は趣味を養ふ、趣味を變ず、やがて人格に影響す。學問は一しほ強き威嚴の光を發せしめ、一しほ高きチャームの香を放たしめ、はた一しほ深き愛嬌の色を有せしむ。學問ある人のハイカラなるは、ゆかしきところあり、學問無くしてハイカラなるは、人をして沐猴に冠せる心地あらしむ、其面に唾せまくも思ゆ。

○

友よ──女子は、妻となりて、夫が唯一の補助者たると同時に母として、子女が最上の指導者たるべきものなり。良妻賢母の稱は、實に女子最高の榮譽にあらずや。

友も然り、唯だ良好賢母たるべき道に努むるが、即ち今の時に於ける至上の努めなり學生として優れ、處女として英きは唯だ良妻賢母たる資格の上にあらずして何ぞ。美容の如きは、そもそも末なり、學生たる者の言はずして可なる事にあらずや。

外に在りて多忙なる夫の爲め、新らしき書籍を讀みて、少なしと雖も、夫の智識を加へ得ば、夫の幸福いかばかりぞ。況て外國雜誌を讀み得る力もあらばよ……此意味に於て我等の學問に勵まざるべからざるは、火を覩るよりも明らかならずや。

子女の教育は擧げて之を學校に任かすべきにあらず。學校教育は十が六なり、否な五なり。實に十が四は、十が五は、即ち常に家に在る母の手にありと云ふに近し。たとひ家庭教師を雇ひ置くとも、母にして、教育を指導し得ざれば果して如何。母の感化は、父の遠く及ばざるところなりと云ふ。秀吉も、ナポレオンも、母の血を傳ふるの父の血よりも遙かに多かりしを見たまはざるか。若し子女にして『家の母様佛蘭西語出來てよ』と云ふを得ば、子女の歡、そも幾何ぞ……此意味に於て、友も我も、ひとしほ學問の道に勵むべきにあらずや。



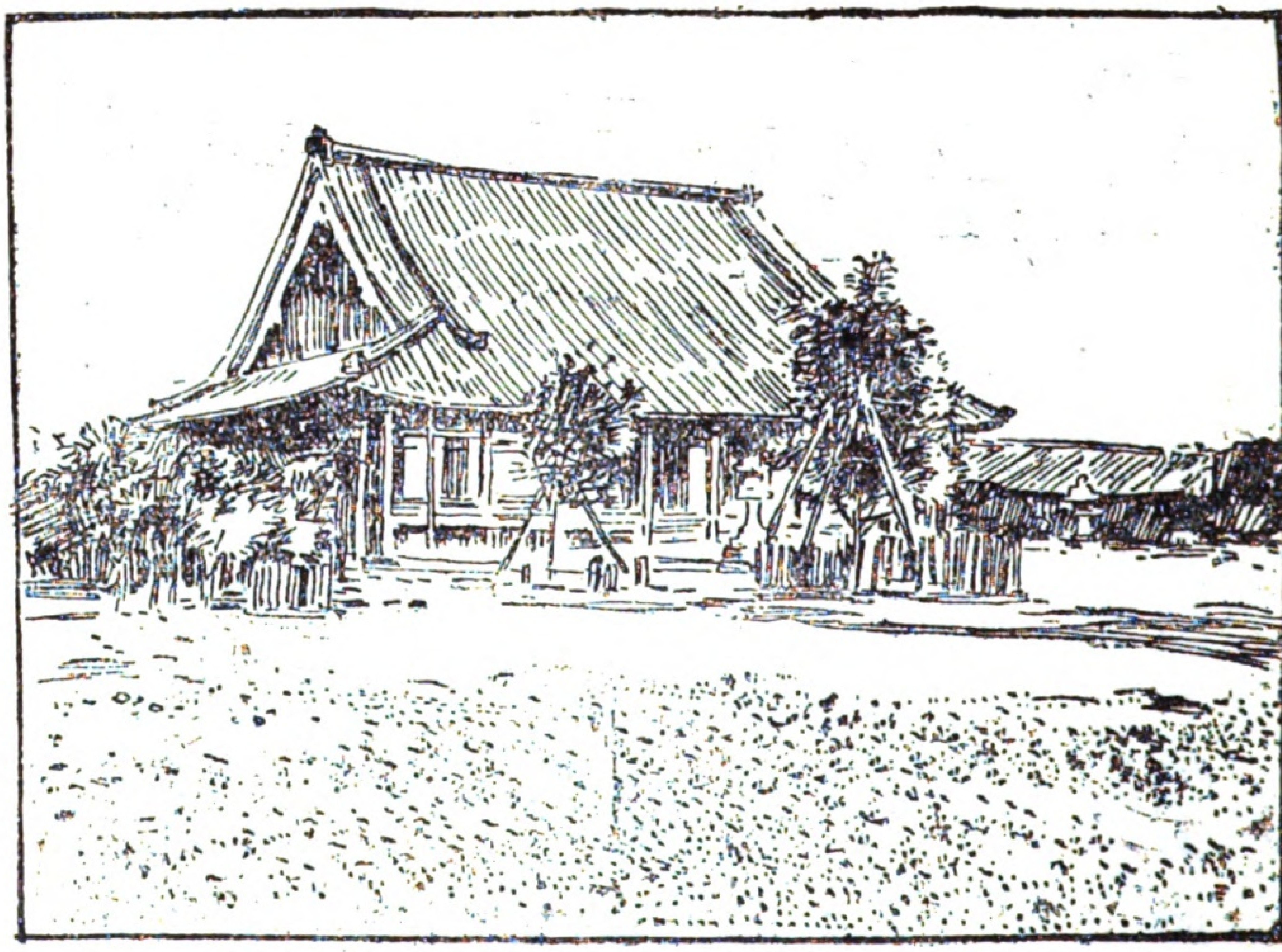
友よ──我は友が直き心を、奇しき玉とも思ひて、かくは友を敬慕しつゝあるなり。友の譽めらるゝを聞きては、自ら譽めらるゝを思ひ友の毀らるゝを耳にしては、人しれず涙を飲む友よ、眞の友が、眞心より出でたる此書、若し讀みて惡感を懷きたまふあらば友や誤れり、我れは悲みをかへざるを得ず。

友よ、一學期の成績の甚だ良しからざりしを知りて、そも如何なる。感をか生ぜる。而して或人は友を評して『おしやればかりして』と云ひ、或者は『うか〳〵して』と云ふ。嗚呼友よ、之を聞く我の心の、破れむとするを察し得ざるか。況て父上母君が御胸の痛み……孝を以て百行の本となすは、不易の格言なり。不孝の子は、實に百惡を具備すと云はざるを得ず。眠らば覺めよ醉はゞ醒めよ。光陰過ぎ易く、老て歎くも益なきを思ひたまへ。

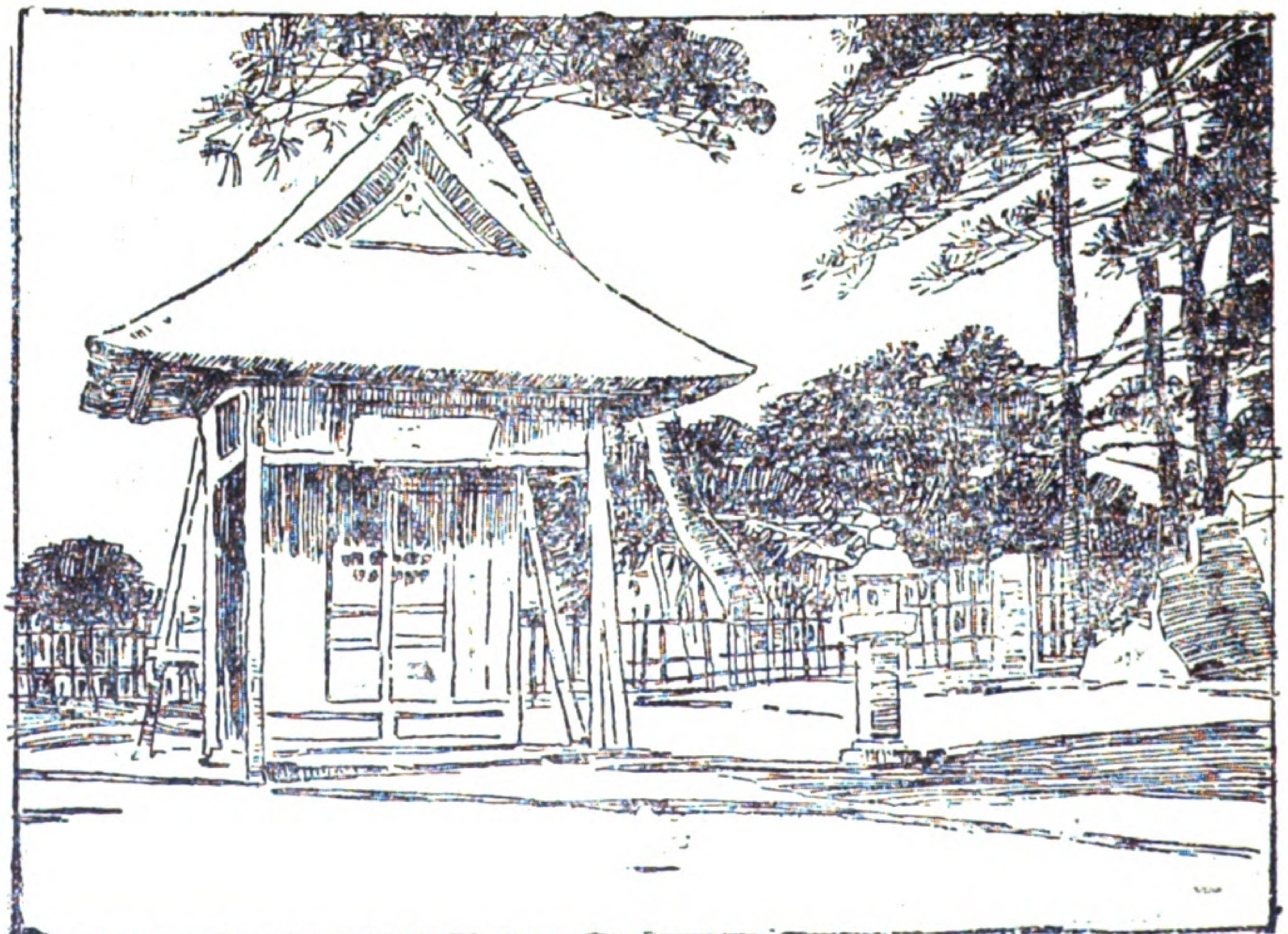
友よ──孟子は、長を挾まず、貴を挾まず、兄弟を挾まずして友とするを友と云へり。友とは、其德を友とする所なり。晴天の日、花間談笑の友は到るところに見るを得べし。實に友も我も『晴天の友』の、餘りに世に多きを苦とするにあらずや。

眞の友が、眞心こめし一ひらの書、空しうしたまはずば、いかに嬉しからむかし。

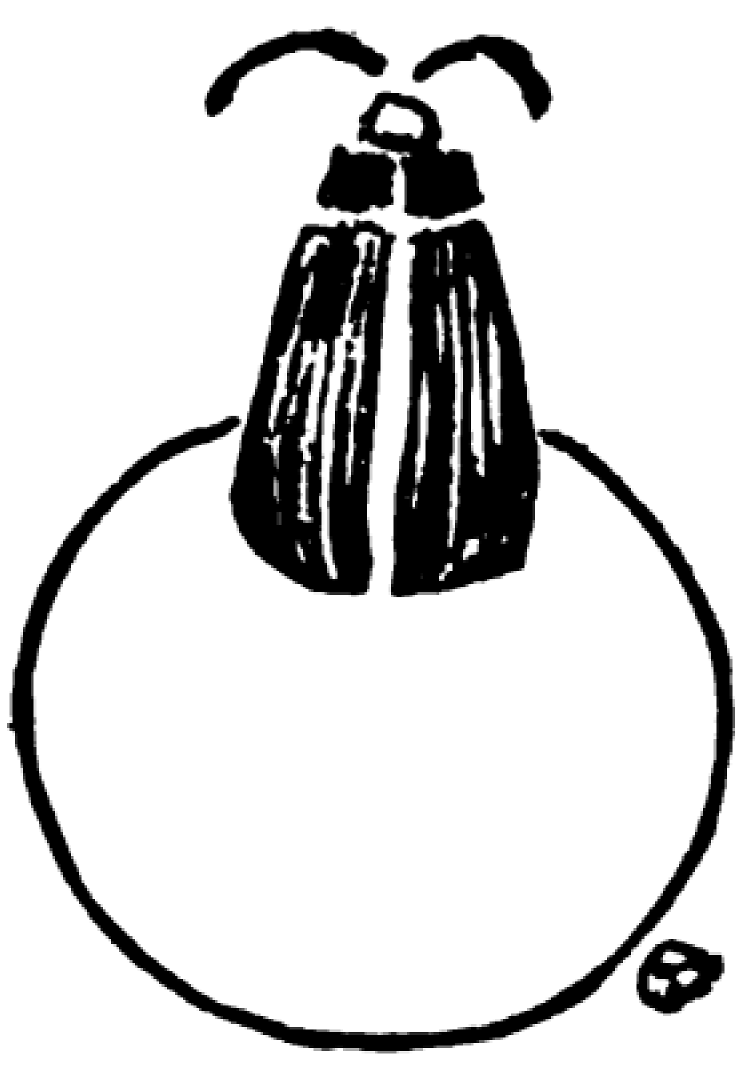
（特別懸賞文第四等）



築地本願寺



大磯古蹟鴫立澤



遊學中の娘へ

葉櫻

暑さ殊の外きびしく候へども御障りなき由めでたく存じ候、もはや休暇に近づき候へば今日か明日かと歸省の御報をのみ待ち居り候處、昨日のお手紙の樣子にては、常夏は輕井澤へ避暑との事、最もアンナ先生のお供のよしなれば安心は致し居候へども、一日千秋の想ひして待ちに待ちたる母は、何だか物足らぬ心地して少からず失望いたし候。

廣き世の中に、親一人子一人の中、母が唯一の樂は一年一度の暑中休暇に御身の健かなる顏を見、成績の益々進むを見聞して、一ヶ月をにぎやかに暮すの外御座なく候。然るに御歸省なきのみか、此度の成績は不結果なりしと、何時になき御報に接し、實に意外に感じ申候。しかし心にさへ怠りなくば、試驗は時の運に候へば、決して悲觀するには不及候へども、今春たしか、五十日餘りも敎師につきて傳道に參られし事ある樣覺え居候が、かゝる事に興味を覺えて勉強が横道にそれしには候はずや、又そんな事を不面目に思ひて歸鄕せざるにては候はずや、若しさる事ならば、非常なる心得ちがひにて候。御身は大そう英語に堪能なるため、先生方に愛せられ、娘の樣にして頂くといふ事も、先日御地より歸られ候森岡樣より委しく承り喜び居候、數多き生徒の中より、特に人格高き敎師の知遇を受くる事は、平生の御心懸に依ることゝ、實に嬉しく存じ候、併しながら學問を以て世に立つとか或は家庭の必要上研究するとか申す人は兎に角、普通一般の女子として、平凡なる家庭に入るべき娘としての御身などは、一藝に秀づるよりも、却て普通學を修め、常識を養ふこそ急務と存じ候、されば如何に好む

事なりとて一事に深入りして肝腎の正科を怠るなどは思慮の足らざる事に御座候。殊に英語などは都にてこそ必要なる時もあれ、地方にてはまことに入用なきものに候へば、其邊よく〳〵御考へ、決して思ひちがひなき樣くれ〴〵も御注意下され度候。

かつては宵々の添乳の枕に、又遊學の首途の朝、くれぐれ申聞けし事に候へば改めて申迄もなく候へどもお父樣名譽の御戰死ありしは、御身が漸く二歲の夏、大切なる忘れ形見、かけ替のなき家の礎、父は名に負ふ鬼大尉女ながらも其熱血を受けたる娘、天晴立派に育て上げ、よい婿取つて家名をつがせ、祖父に似たる初孫の顔見る迄は、石にくひつきてもと決心して、あらゆる誘惑や迫害に堪へ、父なし子を寡婦育ちよと、後指さゝれまいと、嗚呼十五ケ年の母の苦辛、思ひ出すも涙の種に御座候。ことに手離して御地へ出し候後は、雨につけ風につけ、御身の上を忘るゝ暇なく、只管健康と成功を祈るに餘念なき母の心中、御察し下され度候。

かゝる歷史を持つ我家、かゝる重任を負ふ御身は、他の嬢樣方の如く、轉地よ避暑よと浮れあるく境遇に御座なく、唯一心に勉強して一日も早く業を了へ家を興こし祖先以來一貫せし、勤王の節義を全うする樣御考へ下さるべく候。

御身とは仲よしの山村の清子さん、今春京都の女學校を優等で御卒業、御容色よしとて大そうな評判にて候ひしが、二ケ月後には灘一番の酒屋とやらへお嫁入なされ、お里入りの時宅へも御出下され候が、お召物からお持物迄、私共の名も知らぬものばかり、目のさめる樣なおこしらへ、あの御容色にてりはえて、輝くばかりのおよそほひ、まことによいお嫁樣にて候ひしさるに此程きけば、半年たゝぬに早や御離緣となりしとか、噂さに聞けば生花茶の湯は申すに及ばず、ピヤノ琴などはお得意ながら、裁縫がおきらひにて羽織でさへ、ろくに縫へ不申、又交際々々とてお家にじつとして居られないのが病とか承り候、いづれ人の噂は尾鰭がつくものには候へども、幾分の缺點は此方面に

ありし事と察せられ候、良妻賢母式のあの學校の優等生がと思ひ至り候ては、御身の上を案じずには居られず候。

又新町の植村の松子さん、昨年高師を御卒業なされまことに御樣子よき先生にて、父兄の氣受も至極よろしく、御兩親も大變なお喜び、早くよき婿君をと大そうお急ぎなされど肝腎の御本人理想とやらが高いため如何も思はしい御縁もなく、今年ははやお二十六、母樣が泣く樣に仰有るのを、「意に滿ちた人がなければ生涯獨身で暮らします」と仰有るとやら、一つよければ



又一つ。お母樣「こんな事なら學校へやらなかつたものを」と唯それぱかり苦に遊すと聞及び候が、年頃の娘持つ親心は皆こんなものに御座候、殊に我家は人爵は元より、大した財産があると申にてもなく、唯々御身の人格技量に望みを屬する外御座なく、されば家を興すも倒すも一に御身の心掛に依り申べく候、かく申候へば、十八世紀式だとか、いや家族主義の犧牲にするとか、親が自由を束縛するとかと、直に不平の聲を耳にいたし候が、時代後れかは知らず、母は個人主義など申す我儘は斷じて許るし不申、どこ迄も武士氣質

昔ながらの家の風を吹かせ度覺悟に御座候。

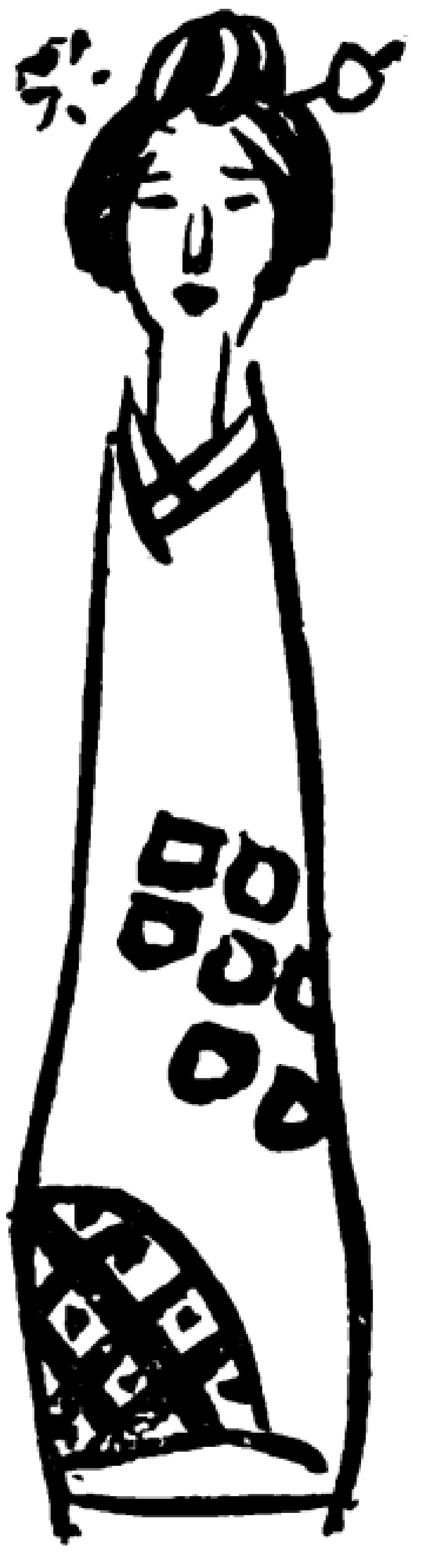
ミツシヨンスクールは修養上長所の多きかはり、短所としては一種異りたる風ありて、朱に交はれば赤くなるの諺に洩れず、師たる宣教師を見様見眞似に、傳道師を理想として一生を宗敎の犧牲とする人々も多しとか、母は一がいに惡しゝと申には御座なく候へども傳道師のみが神の子にはこれなく世俗に交りつゝ世を感化する事も尤も必要なる事に候。

御身は前申す通り大切の身夢にもさる心を起さぬ樣なされ度、御身に限りかゝる心配は無用とは存じ候へども心の定まらぬ中は感情の走するまゝに周圍に化せられ易きものに候へば、轉ばぬさきの杖にと申進じ候なんの馬鹿らしいと笑つて呉れゝば母は實に滿足いたし候。

何と申しても女の仕事は家事が本體なれば、夏休にはこれを利用して其修練をつむ事大切と存じ候。

しかし折角參りし事なれば直にとは不申候まゝ一週間も經候はゞ母の手紙の趣きよく〳〵先生にお話しなされ兎に角一度御歸省の程待ち入り申候。

旅費として金十圓別紙爲替券にて封入いたし置き候受取なさるべく候。（特別懸賞之第四等入賞）



眞綿の蒲團

あき風

世には學士の母堂とも云はるゝ御身にありながら、年甲斐もなき嫁いびり、二十幾人もとりかへてなほあき足らず、思し給ふ姑君も在すとか・聞くだに空恐ろしう身の戰くを覺ゆるを、……これはまた……以下友の物語をそのまゝ記して見る。

お年は五十七とか被仰いますけれど、色白のお小柄なので、やつと五十二三歲位にしかお見えになりません、それは〳〵おやさしい、と申しても決して甘いのじやございませんよ、一方秋の霜の如く嚴格に、一方氷をとかす春の風のように溫和な、それは堅固な武士的氣風の家庭の中で、圓滿にお育ちになつたからでご

ざいませう。

　御嗜好と申したら生花、お琴、盆石位でございませう、それでお室の飾りつけなどでも皆人手をかりず、御自分御好みの風に遊ばします。

　姑様のお部屋は下の六疊、若楓の美しうのびた南の窓に、風通りの良い明いお室です、鴨居には先代様のいかめしき御肖像床には『もの言へば脣寒し秋の風』の御軸、お花と盆石は毎朝挿しかへ、うちかへてお飾りになります、生花はむづかしい組物葉物などより、可憐しい草花の文人活けのようなのがお好き、盆石は姑様非常に御堪能でいらしつて、細川流とか被仰いました、此間も私が器用に動く羽根先きを感心して拝見してましたら、お前もこれから少しづゝ始めちやと被仰つて、彩子様とお一緒におそはりますの、四季盆すまして先日から勅傳になりました。



　お琴は昔は尾張藩中でも名高い彈き人でいらしつたさうですけれど、今はもう手が重くなつたから、興がさめると被仰つてお彈きにならない、たゞ彩様や私の

弾きますのを嬉しさうに聞いてお出でになりますの、それでも時折徒然にお謡ひ遊ばす箏歌の涼しい御聲、巧な御節まはし春や昔、藩中の娘共を集めての絲竹の宴、御臺様姫君様御出ましの室に翁や鶴の巣ごもり奏でさせられた姑様のお振袖姿のあやしう胸に浮ぶのでございます。

昔風なごく堅苦しい教育をお受けになつた割に、そりや新らしい事を被仰るのでよく驚きますの、嫁りまして間もなく、何かのお話の序でに「お前は精一の嫁だから、私や彩子の世話は決して心配して下さらなくとも宜しい、唯精一、一人の世話をよくして仲よくして下されればそれでいゝんですから」と仰せられましたかつて雑誌でこのような記事みまして『まア流石は春子夫人ねえ』と友達と語り合ひましたのが今は我身に親しう聞く言葉となりました、此言葉は舊思想の方は云ふに及ばず、新らしい教育を受けた人でも餘程めづらしい言葉であると存じます。

日々の御仕事と申しましても、もう今は御隠居様の御身分ですもの、別に定まつては遊ばしませんけれど、まア彩子さんの御教育には随分注意を遊ばします、でもね姑様は餘りやかましく被仰らない方で、何事も自分から開發的に進んでさせようといふ風な御しつけですから、いはゞ監督をしてお出でになるような物でございますね、御手すきの時には御眼鏡かけて美しい小切集めて押繪や袋物などの小細工を遊ばします、孫のおもちややら近所の子供衆の御愛相にするんだからねと被仰つて、そりや眼のさめるような見事なのがございますよ、此間もお仕事遊ばしていらつしやるお傍で『姑様、私などまだ學校出ましたつきりで實家ぢやアあゝして母なしで育ちましたもんですから、何んにも氣がつかず、ことに女に一番大切だと云はれてますお裁縫なども御らんの通りで、どんなに御眼まだるつこい事でございませうねえ』と、むやみに氣になつてならなかつたもんですから、つい口をすべらしましたのするとね、

『何んの〱お前、私やね始終母様なしでよくこんな

に育つた者だと思ひますよ、母がついて居てさへ彩のように、あんな、女のする事は一切嫌ひなんていふ困つた子が出來るんだもの、お父樣の御教育にはつく〴〵感心して居ります、裁縫だつてさ始めから上手な者はありやしない、縫ひ〳〵する内になれて來て、自然に巧者にもなるといふもの、それよりもね、私は俊二や彩子のような横着者が居て、どんなに暮し惝からうと、お前のお出ぬ前から、心配してましたのに、あゝした睦まじい樣子をみますとね、も



う老の心の嬉しくて〳〵、何日御暇頂いても、心殘りはないと思つて安心して居りますよと被仰るのですもの、嬉しくつて私泣きましたの、當家に參りますまで姑つてどんなに恐ろしい者かしらと思つてた私の心が、今日はなかなかに空恐ろしうなりました。

俊二さんですか八高の第二部に在學していらつしやいます、來年の七月は大學の試驗をお受けになるんですの、そりや快活な方で今は篠島の水泳練習に行つてらつしやいますのよ。

宗敎？　え佛敎よ、中でも頑固と云はれてる日蓮宗で御座いますの、それで毎月十三日と二十五日とにはかゝさず婆やをつれてお堂樣へお參りにお出で遊ばす佛敎信者などキリスト敎つていふと得てキリシタン何とかの法つて厭がるものでございますわね。それが姑樣には少しもそんな御樣子がおありにならない、何宗でもかまはない、何宗旨が宜いつていふような事は愚な私達には分らない、つまり安心立命をしたい爲にする事なんだから、キリスト敎だつて神道だつて祖先を敬ふといふ意味に變りはないだらうと思ふから！と、被仰います、嫁しては其家の風に從ふといふが定めでございますから私もキリストの敎は忘れませんけれども、朝夕お佛壇の前に香たいて南無妙法蓮華經と手を合すようになりました、けれど心からお參りするようになりましたのは刺戟、動機があつての事なんでございますよ．先頃私が右の足の關節部に骨膜炎を致しましたでせう、あの時〇〇病院で某博士の切開手術をうけました、其折の事でございますの、手術臺の上にのせられた私はいやな〳〵痲醉劑の香をかゞされて追追に人の顏もそれと得分かず、聲も聞こえず、刻一刻夢とも現とも定まらぬ界に落ちて參ります時、かすかにいと幽かに何處からともなく響いて來る御經の聲の朗々と！、半ば感覺を失つた私の胸に、僅かにあゝ姑樣だなと知り得ました時の心！　後から考へてみますと其御經の聲は天上の音樂とも、またよみじの國に旅立ちかけた我魂を再び生の國へ向ひに來て呉れた神の使の奏づる樂の音とも聞きました、此時はじめてお經の力、經の人に與ふる慰安の力の大なるを知りました

それと同時に有りがたい姑樣の御心に感謝せずには居られませんでした、其およみ下すつたといふのは法華經の中でも殊に貴い觀音經であつたと仰いましたそれからの私は生れて十九年始めてお經に耳を傾けるようになりました、其觀音經はもう多方諳誦じるようになりました。

餘り長くなりますからもう一つ御軸のわけを伺ひましたから一寸！　もの言へば脣寒し秋の風、これは

姑樣が座右の教訓として崇拜していらつしやいます俳句御秘藏のお軸でございます。

「女は口のはしたない者だと昔から云ひ傳へられて居ります。まことにお參りなどに行つても女の口數の多いのが眼に立ちます、どんな話をして居るのかと思ふと九分までは人の惡口、惡口も八分までは嫁の缺點をあげる人が多い、私はそれを聞くと實に情けなくなります、世の中に美しい淸いといふ事は幾何とあるけれど私が一番、眞に快よく感じるは人情の美にあります姑が嫁の行をほめ、嫁が姑の德をたゝえる、それ程美しく淸い物はなからうと思ひます、私はお前にまだこれといふ缺點を發見した事がないから、云はふにも云ふ事がない、お前だつても私の日々の行に眼に餘るような事がいくらもあらうけれど、殊更によく云ふ必要はさらにないが、なるべく人に惡く云つて貰ひ度くない、それはね決して私の爲にではありませんよ、皆お前の人格をなほ高める爲にです、少しでも惡口だと思ふ事を云つた場合には決していゝ心地はしないだらうと思ひます、若しもまた自分が人を謗つたとすれば其人も必ず自分をそしるものと思はなけりやならないお前はこの後、精一の地位が高くなればなるほど社會に出て多くの人に接しなけりやなるまいと思ふから、そういふ場合、一言一句心して後で、あゝはしたない事を云つたなどゝ悔いないように今からよく注意して居たらばと思ひます、口はわざはひのもと、舌は禍の門とか、そふいふ意味から、日々の教訓としてあの俳句を黃金白金にもまさる寶と思つて居ります……と

今まで申上げました事は日々の御行の一二にすぎません、ひと日〳〵と暮して參ります内に被仰る一言一句、遊ばす御事の一擧一動、どれとして教訓を含まぬ物とてはございません、良將の下に弱卒なしとかかゝる健實なる主婦に仕入れられた召使も一人として陰口きく者もなければ働けといふ姑樣の御主義の下に一同いそ〳〵と立ち働いて居ります、私は今まで母のない、寂しい家庭から俄に此塲へ、ず春風の吹いて居るような暖い花園に投げいれられて愛の女神の主宰

の下に樂しい〳〵日を送つて居ります。家庭の不和に
なく薄幸の婦人も多い世に、私のみは何んといふ幸福
な者であらうと朝な夕な、天に地に感謝して居るので
ございます。（特別懸賞文第三等入賞）



赤い鳥

横笛

可愛いゝ聲がする！
オヤ何ンだらう雀かしら？
ヂツトそこいらを物色すると秋草の繁みからヒョイと飛んで出た小さい赤い鳥、紅の艶麗しい翅は未だ生え揃ろはず、黄ろい小さな嘴も柔かさう、卵の殼にグツドバイしてから未だ間も有るまい、太細かい滑稽なかつこうして、ピョイ〳〵ホツプする可愛さ、危險な大きい目がガラス越しに光つて居るのも知らずに。
鴇色の扱きで袖と裾とをグイと絡らげてソツと苔蒸す飛び石の上に下りた。
お轉婆の本領發揮するは此處なんめりと下女の干しといた垣根の笊を密かに奪つて狙ひよるとも知らず、赤い鳥は鼻の先きの楓の枝に梅の下枝にピョイ〳〵飛ぶ、此度こそは逃すべきや、二の腕露はに被せる笊の網を巧に避けて、又八ッ手の陰に燈籠の裾へバサツトふせれば、ツイと逃ぐ、廣からぬ庭を大童になつてぐる〳〵追つかけまはす、縞モスの單は汗ばんで無氣味に肌へ密着く、もう根氣も盡き果てゝトンと夕陽映ゆき縁側に腰を下ろすとたんに茶の間の庇へバタ〳〵と。
何故あんなに逃げるのだらう！
假令私の手を逃れたつても、キツト誰れかに捕まへられるのではないか？
お前はさぞ無慈悲な人とお思ひだらうね、
だけど私は決してお前を殘酷な目に逢はしたりなんかしやしない、大切にして人手も借らず生きゑが好きならお庭の蚯蚓を掘りませう、すりゑがいゝなら鶯と

一緒に拵さへて上げませう、お前の要求を入れて幸福にして上げようと思つてこんなに迄努力してるのぢやないかね。

だけどお前は美麗な籠に住むより自由にありたいとお云ひだらう、然しマア考へて御覽お前は誰かに捕まるよ、世間の人はお前の秀れた容姿と清い歌とは捨てては置きやしないから。

私程お前を愛する人はメツタに有りませんよ、ソレアね多勢の中には隨分可愛がつてくれる人も有るがねそれは珍らしいからなのよ、チツト目なれて來れば直ぐ打つちやつてしまひます。もしも惡垂れ小僧や腕白者に捕まつて御覽、忽ち悲慘な目に逢されて憂き目を見るのは分り切つてるぢやないかね。



どうしたつてお前は籠に入る運命を以つて居るんだもの。

それがイヤなら何故其んなに人目に立つ光つた翅を持つておいでなの？人を魅する樣な聲でお歌ひなのだ？

第一お前自身を安全に保護していけるとお思ひなのかい？

放浪の生活はお前にはとても出來やしないよ、

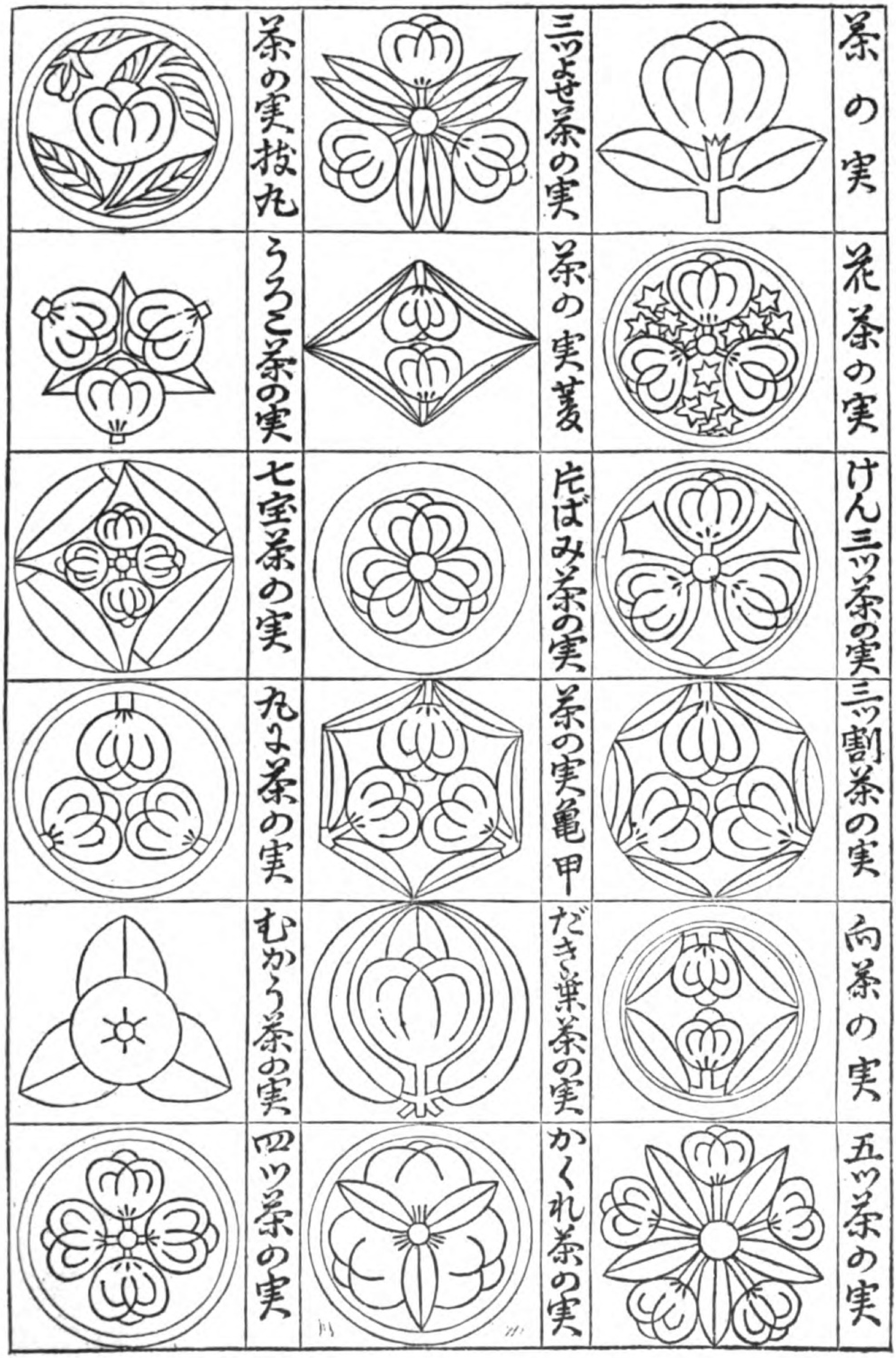
造花の神をお怨みなさい、醜い鳥や卑しい雀の樣だ

つたら誰れもお前を追ひはしませぬ。
夫れ未だ其屋根から飛び得まい！
あれ位で其んなに疲れる樣な貧弱な翅さで自由てふ目的の爲に奮鬪していけるとお思ひかい。
鳥屋へ行けばお前よりズット〳〵綺麗な鮮やかなもつといゝ媚音を持つた雛鳥が澤山有りますよ、イ、エ私はもうお前を捉まへはしません只チット行衛を眺めて居ませう。
私の心は今どんなに哀しいか知つてゝ？
どんなに失望したと思つて？
私もねいつかお前の樣な事をしたのよ
マアお聞き私を幸福にしてやらうとそれはそれは親切な方が自分の持つてる家庭と云ふ籠へ私を飼ふと思つてね優さしく云つて下すつたのでもね學校と云ふ溫室で育つて來た私はお前の樣に分別と云ふ翅さも調はず嘴も柔かくつて世間と云ふものを嚙み分け得なかつたのさ、で華やかな處女の生活をもつと續けたいと夢の樣な淡い憧憬に醉つてとう〳〵情深い人の好意を無にしてしまつたの、其時籠の主は定めて今私が感じた樣に哀愁の懐に胸を鎖されたで有らうそして憫然な奴とさぞお思ひなすつたでせうアヽ人並に教育受けた私でさへこうなんだもの。
無理はないお前はまだ小鳥なんだもの。
思ふ存分自由な空氣をお吸ひなさいそして飽きたら私の懐ろへ歸つてお出でよ
籠の戸はいつもお前の爲に開けて置きませう
早くおゆき希望の光りに滿々たる明るい花園へ！
さやうなら赤い鳥よ
私はこれから今日の義務の殘りをしなければなりません、足を洗つて來よう
さやうなら赤い鳥よ、健在なれ。

（特別懸賞文第四等入選）

右の外特別懸賞文に入選せしは
△第三者（松平饒子）――第二等
△理窟上手（夢の雫）――第四等

茶の實の意匠


茶の実
三ツよせ茶の実
茶の実抜丸
花茶の実
茶の実菱
うろこ茶の実
けん三ツ茶の実
片ばみ茶の実
七宝茶の実
三ツ割茶の実
茶の実亀甲
丸よ茶の実
向茶の実
だき葉茶の実
むかう茶の実
五ツ茶の実
かくれ茶の実
四ツ茶の実

玉藻前

物集梧水

天高く、地闊く、野州那須野が原は、今も尚ほ昔のまゝなる姿なり。断雲空に迷ひ、草莽地に茂りて、妖氣氛々、宛に四邊を鎖し了せんとする間に、一箇の怪石あり。人は指してぞ云ふ、是れ名高き那須野が原の殺生石なるよと。



古へは、此石、一種の毒氣を吐きて罷むことなく、飛鳥、天の高きにまかせて翔け、過ちて其上を過ぐれば忽ち落ちぬ。走獸、地の闊きにしたがひて走り、過ちて其傍を觸るれば忽ち斃れぬ。あはれ罪障不滅の惡業石なりしか。

傳へ云ふ、天地創造の時、正氣は發揚して、天となり、地となり、人間となり、鳥獸草木となり、各自其序をなしゝと雖ども、邪氣は停滯して、雨となり、風となり、洪水となり、惡狐惡蛇となり、三千世界を靡亂荒亡の渦中に捲込まんとはするなり、斯かる邪惡の使命を帶びて現世にあらはれたるもの即ち是れ白面金毛九尾狐——玉藻前——殺生石なりとぞ。荒唐無稽の譚の中におのづから一種の哲學的趣味を含みて、はなはだ面白からずや。

一　奇しき棄兒

頃は彌生の花月なり。翠柳なびけば、櫻花散り、更にや素性が歌の其れの如く、春の京都ぞ艶なりける。爰に坂部行綱といへる北面の武士、淸水寺詣での歸るさに音羽瀧の邊へ來かゝれば、落花迷りに飛んで行手を遮り、霞の裡に雉子ぞ鳴く。

『あはれ此上なき風情かな。東山の春の眺望こそ、何時も見まほしき景色なれ。』

行綱思はず立停りて、そこはかとなく眺め見わたせば、北は祇園の甍高く、南は歌の中山淸閑寺より今熊野へかけて一帶の靑巒、靄乎と春霞に裹まれて、宛に上﨟の靑黛を刷けるに似たり。

折しもあれ、其處等わたりに遊びゐたる垂髫兒等が、棄兒よく／＼と口々に罵りながら路の邊の荊棘の陰へ走りゆくかと思へば、悲しげなる嬰兒の泣聲幽かに聞えぬ。行綱たゞ何心なく、垂髫兒等が走りゆく跡に從ひて、路のべの叢中ふかく分けゆけば、生れて辛う間もなき女兒の、美しき衣に包まれて捨てられたるにぞありし。

『何人か棄てし。いみじう哀れなるに。』

と獨語ちつゝ抱きあげて懐中に推入れしに、女兒の泣聲頓に罷みて、母親の乳房欲しげに、小さき脣頭動かすもいぢらしや。

行綱が住居は、京都の片ほとり、山科の里なりければ、永き春日も何時しか西に傾きて、黄昏れ初むる宵闇に、燈火の灯影黄色く點るゝ頃、辛う我が家へ歸りぬ。

夫を迎へて出づる妻に對ひて、行綱は微笑みつゝ、

『淸水寺の邊にて、奇しき棄兒を拾ひけるよ。錦の衣もて裹まれたるを見れば、然こそは貴き人の女兒にやありなん。』

と云ひながら懐中より女兒を取出して見せぬれば、日來兒なきを憂ひし妻の、甚とゞ悅ばしげに、

『あな可愛のもの哉。眼大きう開きけるよ。』

と云ひつゝ己が手に受取りて、胸に掻抱けば、行綱笑みこぼれて、

『日來其許が嬰兒一人欲しと云ひたりしに、今日淸水寺詣での歸るさに此兒を得たるは、是れぞ正しく觀音菩薩より賜はりたるものとこそ覺え侍れ。然るにても斯かる愛でたき兒を捨てし親心こそ、實に心狂ほしきものなれ。』

と云へば、妻は只管女兒の衣を撫でながら、

『兒を棄てし親にも、能く〱詮なき事情の候はんずらん。あはれ〱。』

と呟きけり。兩人は迭みに其兒を抱きあひて、屢時は我れを忘れゐたり。

斯くて一日二日は過ぎぬ。抑や如何に名くべきか。あはれ親なき兒は水草の、水に浮べる藻のやうなればとて、軈て其名を藻とぞ命けぬる。

二　獨寢の別れ

この兒、生來驚くはかり眉目麗はしきが上に、學びの道さへをさ〱衆に秀れたれば、蝶よ花よと兩親の慈愛みは譬ふるに物なし。

藻が未だ七歲の幼少き頃なりけり。此度出されし和歌の勅題には少し難かしきものを選びて、獨寢の別れ

と云ふにぞありける。

或る夕暮れ、行綱は己が妻に對ひて、

「此度の勅題こそ、何に譬へんやうもなく甚とゞ難かしきものにて侍れ。獨りにては、爭で別るゝことのあるべき。」

と云へば、その妻點頭きて、

「然にて侍り。斯かる難題にても、秀歌を詠むべき人や有なむ。」

と太息吐きぬ。行綱も甚とゞ力なく、

「然れば、雲の上人まで、孰れも此題には惱み給ひぬとかや。斯かる折にこそ、他の詠み出てぬ秀歌をも吐きて、思はぬ恩賞にも與るならぬ。今更ながら己が淺學のほどぞ口惜しき。」

と歎息すれば、折柄その傍らに侍りぬる藻の、涼しげなる眼を睜りて、

「父君よ、その和歌をば詠み侍らなば、父君に祿をや賜はるべき。」

と、横より口を出してぞ問ひける。行綱は笑ひながら藻の頭を撫でゝ、

「祿のみかは。秀歌をだに詠み出でんには、忽ち位さへ陞らるべきに。」

と云ふ。藻は躍るが如く喜び勇みて、

「父君が御身の爲めとならば、妾は必ず佳き和歌をば詠み出でぬべし。必ず、必ず。」

とぞ繰返しける。行綱は尙ほも微笑みつゝ、

「其許は生來賢けれど、甚とゞ年齡の幼少ければ、此度の勅題のほど、誠に覺束なき業にこそ。憖じ拙く詠み出でんには、却々に恥しくて。」

と、遮りに止めんとすれば、藻は涙ぐみて、

「父君よ、然のみ危みな給ひぞ。妾は御佛に祈願を籠めて、必ず秀歌をば詠み出で侍らん。」

と、聲を催涙させてぞ申しける。

行綱は、如何ならんと、暫時思案に沈みたりしが、斯程にまで願ふからは、萬に一にも佳き和歌をば吐くこともあらんずらんと、能く〳〵藻を慰めて、扨てその趣きをば御歌所へまで申上げしに、程なく勅許の御

沙汰ありけり。
長治元年、春稍に更けて、花の梢に鶯の老けぬる頃、藻は父に伴はれて、大内の雲深きわたり。披講の御席にぞ列りける
玉座の御前には御簾打垂れて、その嚴めしさ云ふばかりなし。左右に並居る月卿雲客、扨ては女房達、孰れも晴れの装ひを凝して、其狀宛ら天上の星を仰ぐに似たり。
霎時ありて、藻は甚とど徐かに傍への柳箱引寄せて、硯に墨摺流して筆を染め、丹册推戴きてさ、、らさらと書下しぬれば、



軈て讀師のもの、甚とゞ高らかに詠みあげぬ。

夜は更けぬ闇の燈火いつか消え
　我が影にさへ別れてしがも

是れぞ正しく獨寐の別れなる。強ちに佳き和歌にもならねど、幼少き兒の、好くも詠み出でつるものかなと、聞く人皆な褒めぬはなかりき。

それが爲めに父行綱は、從五位左衛門尉に叙せられて、傳へ聞く人々に羨まれぬ。

斯くて藻は生立つまゝに、容色益〻麗はしく、才智愈〻秀れてけり。行綱夫妻は、今更ながら觀音菩薩より良き兒を賜はりぬと喜びあへりしが、藻が十七歳の時、苟且の病氣に伏したりしに、程なく夫妻ともに現世をば去りぬ。

孤兒の藻は、又もや孤兒になりぬ。聞く人甚とゞ憐れがりて、其趣きを朝廷へ奏上しければ、軈て勅諚下りて、九重の雲深きわたりに仕へまつる身とぞなりにし。

三　怪しき光

一度宮中殿裡の人となりてよりは、藻が才色は彌が上に輝きまして、主上の寵愛たゞ一身に鍾りぬれば、曩に口を極めて褒めし女房達まだ、流石は女性の、甚とゞ嫉みあひけり。

頃は鳥羽天皇の元永三年、秋の末つ方なり。皇子御降誕の御祝ひをば高陽殿にて催されけり。

時の攝政關白藤原忠實を首席として、堀河左大臣俊房、久我右大臣雅實、內大臣忠通以下の月卿雲客、實にや天上の星かとばかり居並びて詩歌管絃に興を扶けぬれば、數多の女房達その間に侍きて只管御宴の斡旋をぞ爲ける。

かくて短き秋の日は風雅やかなる御遊びの間に暮れて、月無き宵闇の、外面は少し打時雨れぬれば、冷かなる夜風折々通ひ來りて、御宴の燈火、はたはたと連りに搖めきけり。

「あはれ如何なる夜ぞ。斯くは吹く風の身に沁むばかり寒げくて。」

「今宵は昇る月さへ甚と遲くてなん。何となく心地よ

からぬ夜なるかな。」

「み空の雲のならずきまひさへ、云ひ知らず心狂ほしう覺えられてなん。」

など〻口々に罵りあひけるが、折こそあれ、一陣の凉風、颯と吹き來るよと見れば、殿內の燈火殘なく消えて、黑白もわかぬ闇なぞなりぬる。

「紙燭ともして參れ。」

「松明こそよけれ。雜色原に命さん。」

「餘りの暗さに足の踏む所も覺束なくて。」

など〻騷ぎながら、殿上人の、手探り足探りに迷ひぬる間に、忽ち藻の身より怪しき光を發して、望月の夜の如く四邊を照らせば、月卿雲客が立迷ふ姿のみかは屛風の紙門の繪模樣まで明白地に見えぬ。

「あはれ如何なることぞ。人の身より光を放つとは。」

「あれ〱、彼方を見て給へ。堀河の大臣も、久我の大臣も、明白地に見えはべるぞかし。」

「實に然なり。怪しきこと多き夜にてこそ。」

「こは抑も如何なる前兆ぞ。」

「そは陰陽師に問はずては。」

「明日安倍泰親大人を訪問たて、吉凶のほどをこそ尋ねはや。」

「然なり。然なり。」

など〻云ひあへる間は、雜色原、或は松明を點し、或は紙燭に明し〻て持ち來りぬれば、殿內再び元のやうに明くなりぬ。

今宵第一の勳功は、藻が身より光を放ちたるなりとて、主上の叡感斜ならず。此折ぞ、玉の一字を賜はりて、始めて玉藻前と始めて稱しけると。

四　現はれたる卦

玉藻前が始めて宮仕へしゐる頃より、主上の御心地兎角すぐれさせ給はざりしが、殊にも彼の怪異のことありける以後は、益〻重態はられて、夜每の御惱ぞ誠に憂たき極みなる。

典藥寮の人々、天脈を拜診して、樣々に手を盡しぬれども、些かの効驗だに見えず、日每に御容態のほど

ぞ喩しうなりまさる。

然れば諸山の寺院に仰せて、護摩を焚き讀經を勤めさせ、更に諸所の神社に奉幣しに、只管に御快癒のほどを祈らしめぬれど、何の靈驗もあらず。

然るほどに爰に安倍泰親と云ふものあり。陰陽博士安倍晴明より六代の裔孫に當りて、官位は低けれど、神筮の譽れ一世に高かりしが、或日私かに易室を浄め、齋戒沐浴して神算を立てしに、計らざりき、澤水困の卦を得たる。熟々この卦を考ふるに、九重の雲深き邊に異形の怪物潜みて、常に玉體に添ひまつるものから主上には夜毎の御惱あるなりとぞ悟られぬる。

然れば泰親、心底ひそかに愕きて、再度三度更に筮竹を執りてトひしが、卦の表の、些かだにも變ることなし。

此は抑も不思議なり。如何なる怪物ありてか、玉體に添ひまつたるぞと、少時瞑目沈思しけるが、矢庭に礑と膝を搏ちて、

「然なり、然なり。怪しきは彼の玉藻前よな。何時ぞや高陽殿に御宴ありし砌、一陣の怪風來りて燈火を滅し、黒白もわかぬ闇の中に身より光を放ちしこと、甚とゝ怪しき極みにこそ。思へば七歳にして、難題の和歌を詠みしと云ふも訝しく、噂に聞けば北面の武士行綱が清水寺わたりにて拾ひし兒なりと云ふも、是れ亦た疑はるゝ一節あり。然なり、然なり。」

と獨り點首きつゝ、その旨委しく勘文に認めて、關白藤原忠實の許にまで奉りけり。

五　問答

安倍泰親が勘文の披見ありてより、關白忠實、此は由々しき大事なりと、その旨主上へ奏上しぬれば、日ならず泰親に勅諚下りて、玉藻前と對決の上、その變化なることを看破せよとぞ仰せられける。

然らば殿上にては、其噂のあらぬ日とてはなく、若き殿上人などの打集へるまゝに、語りあひけり。

「玉藻前こそは、妖怪變化のものなりとよ。」

「いみじう神算に現れたるものかな。」



『流石に陰陽博士の家系なればこそ。』

『妖怪と云へば、天狗狐狸の類ひにや。』

『怪しき風の吹き〳〵を思へば、天狗の類にてもあらん。』

『然あれ、玉藻前が最初より妖怪なりしにや。將た妖怪の凴りうつりたるにや。

『彼の高陽殿の御宴の砌怪しき風諸共、妖怪の來りて、凴りうつりしにやあけけん。』

『早う泰親大人との問答をこそ聽かまほしけれ。』

斯くて定められし兆日

に至りぬれば、殿上にも公卿百官雲の如く列り、玉座の御簾少し掲げられたり。

玉藻前は頭に寶冠を戴き、綾羅錦繡の十二一重に緋の袴を着けて、稍や上座に着きぬれば、安倍泰親は少し下座に坐りて、首をうな垂れる。

並居る百官等、今日の問答如何にと堅唾を呑みながら見てあれば、玉藻前甚とゞ權高に問うて曰く、

『卿が此度獻りぬる勘文に依れば、主上が御惱のほど、自からの爲業なりとかや。如何なる故なるぞ。』

と爽かに詰問れば、泰親も此處ぞと頭を擡げて、

『某、主上の御惱をば偏へに憂ひまつりて、秘かに易を立てけるに、陰獸の長せしもの、玉體に添ひまゐらすこと、其卦に現れぬ。此をもて然奏上いたしゝなり。』

『陰獸とは、抑も自からを指して云ひけるよな。取るにも足らぬ戯言ぞかし。主上が御惱のほど、天地の理をもて說かんに、天に風雨あり、地に水火あり、時に怪しき業のあればこそ、古人も天變地異を戒め給ひしなれ。況して生ける人間の身に於て、などか異變の無かるべき。生、病、死は是れ皆な大なる異變ならずや。卿、易を立つとも、天地の理數に晦く、猥りに疎忽の擧動して、家系の譽れを汚すなかれ。』

と、宛ら急瀨の流るゝ如く說きけるに、泰親稍々上氣して、

『卜易は天地の理數を現すものなり。然りながら其は暫時措き、唯だ御身が怪異をもて遁べんに、去んぬる高陽殿の御宴の砌、燈火消えし闇の折柄、御身より光を放ちしは第一の不思議なり。抑も神の御末たる人間の身より、爭で光を放つべき。且つは御身は棄兒なりと云ふに、一向棄てし親の名も聞かざるは第二の不思議なり。』

と云はんとするを、玉藻前嫣然とはかり微笑みて、

『卿の申すこと、大概愚昧のことゞもなり。兒を棄てし親の、爭で自から名乘りて出づべき。又自からが身より光を發すればとて、左のみ驚くには足らぬぞかし昔允恭天皇の妃は甚とも麗はしく坐しましゝに、御

身の光衣の外まで通したればこそ、衣通姫とは名けまつりしなれ。又聖武天皇の皇后も、御身より光を放ち給ひしに依りて、光明皇后とは申しゝにあらずや。肉識ならぬ自からすら、斯かる例を聞くからには、才學博き人に問はずや、如何に多くを知りぬべき。夫れ身に行ひ堅きものは不思議を現はすこと世に珍らしからず。精しくは釋迦牟尼の事蹟を見ても知りねかし。」と疊みかけて説立つれば、泰親呆然として夢心地に唯だ首をうな垂れたり。玉藻前は稍々聲高に、「卿、尚ほ申すことあらば、疾く言へよかし。然らずば疾く〱退きてよ。」と浴びせかけて云ひぬれば、あはれ泰親、散々に面目を失ひてぞ退出しける。

六　蟇目の修法

一旦の問答に計らずも恥辱を蒙りて家に歸り、更に齋戒沐浴して易を立てしが、素より神易の變る筈なし。然れば如何にもして玉藻前の正體を看破さんと思ふ折柄、不圖思ひ出でしは蟇目の修法にぞありける。此昔直ちに關白の許へ言上しけるに、一度は却けられしも、再度三度強ひて請ひまつりしに、素より御惱平癒の祈禱なれば、程なく勅許の御諚ありき。

泰親更に卜筮を執りて吉日を考へ、愈々其日に至りぬれば、清涼殿の階下にいみじき祭壇をぞ拵らへける。先づ北方の中央には北斗七星を祭り、次に二十八宿の星を四方に分ちて、青龍、朱雀、白虎、玄武の旗を立廻らし、更に五色の旗、六十四卦に象りたる六十四本の小旗を立廻らしたる後、一盞の大燈、二百盞の小燈を列ね、伽羅香を薫らせて、天神地祇、八百萬の神をば悉く勸請しける。

斯くて祭壇を拵へ終りぬれば、泰親淨衣淨冠を着け、徐ろに壇上に登りて天地を拜し、蟇目の弓矢を左右に供へ、一七日が間、只管に御惱平癒の祈願を凝らしけり。

滿願の日に至りて、玉藻前にも祈願あらんことを奏請しければ、玉藻前は勅諚を蒙りて、餘儀なく數多の

女官に見せられながら、唐綾の五つ襲に萠え立つばかりの緋の袴を踏みしだきて、徐々と清涼殿の階下へぞ來りぬる。

祭壇の有様を見て、

『卿が祈願の形相は、御惱平癒の爲めならで、自からを呪ふなり。』

と、穩かならぬ顏色して詰問れば、泰親振向きて、

『縱や御身を呪ふとも、御身に邪まなることなくば、些かだに苦しかるまじきに。』

と答ふるを、玉藻前稍々周章てゝ、

『無益の祈禱をば、早や〳〵罷めよかし。何時ぞやの恥辱をば忘れたるにや。』

と云へば、泰親甚と冷やかに、

『主上が御惱だに平癒ましませば、某が恥辱などの、爭でか苦しかるべき。早や〳〵御身も共に御祈願せられよ。』

と、強ひて勸むれば、玉藻前不圖傍らなる蟇目の弓矢を見て、

『蟇目の御修法こそ、正しく自からを呪ふ證據なれ、御惱平癒の祈願などとは、實に虛僞なり。』

と云ひさま、其場を立去らんとすれば、泰親聲あらゝげて、

『御身を呪ふも、御惱平癒を祈るも、結局るところは同じことぞ。』

と云ひながら、傍らなる蟇目の弓を手に採れば、玉藻前凄じき形相して迯げ出でんとするにぞ。泰親その背後より、

『得逃ると思はゞ、逃れて見よや。八百萬の神々をば勸請し、乾坤總て玆に縮められたるぞ。』

と云ひも敢へず立上り、弓弦三度高鳴らすや、玉藻前俄かに戰々と顫へて斃れんとしては、仰いで東南の空に一息吹くよと見れば、晴天忽ち掻曇りて黑雲棚引き、霹靂一聲、豪雨車軸の如く降りそゝぎて、今まで美しかりし玉藻前の、忽焉として白面金毛九尾狐に變じ、雲か、霧か、宛ら煙らんやうなる物に打乘りて、遙かに東北の方へぞ逃げゆきける。

泰親、矢庭に四色の幣を把りて壇上に突立ち、妖狐の跡を目蒐けて擲げつくれば、赤、黒、白三色の幣は地に墜ちたれど、靑色の幣ばかりは、大空遠く何處までも追ひゆきけり。

七　妖狐の屍骸

靑色の幣は東方を司るが故に、必ず東方へ向つて逃れしならんと、朝廷より關東諸國に命じて、其幣の落ちたる所を搜さしめぬ。

　果せるかな、數日の後、下野國那須の豪族那須八



郎宗重より、那須野が原の西北の際涯に青色の幣の落ちたりし旨、上奏ありけり。

然れば白面金毛九尾狐も、必ず此原に止まりぬらんと皆く那須野が原を搜さしめけれど、掻暮れ其影だに見えず。

斯くて歳月は經ぬ。最初のほどは然して害も無かりしに、其後、旅人の一人二人と、行方も知れずなりにければ、扨ては彼の妖狐が所爲なるぞと、爰に勅諚下りて、三浦介義澄、上總介廣常の兩人は、安倍泰親と共に那須野が原へ下向してけり。

時に保延三年秋九月、那須野が原には野分連りに吹き荒みて白雲高く飛び、人頭を蔽ふばかりの雜草は其儘末枯れて、蕭殺の氣四方に漲れぬ。

三浦介義澄、上總介廣常、那須宗重等は、要所々々に假屋を構へ、勢子を分ちて狩立んとする用意をさ〱怠りなければ、安倍泰親は黒髮山の絶頂に祭壇を設けて、只管に祈願を籠め、妖狐の飛遁をば封じける。用意のほど既に整ひぬれば、二十人、三十人宛の勢子を一團として、貝を吹き、大鼓を打ち、一齊にどつと鬨の聲を擧げ、彼方此方の叢中を狩立て〱しけるに、最多の狐兎など迷ひ出でつれ、白面金毛九尾の狐は更にも見えず。斯くて夜に入れば、假屋々々に篝火を焚き、其光炎々として十里の外に連りぬ。

一日二日は其甲斐なかりしが、三日目の午下りに、不圖夥しく茂りあひたる叢中を狩立てしに、忽ち大さ小牛許りなる九尾の狐、一聲叫びて躍り出でたり。

『驚破現れたるぞ。』

『直だ突き殺せ。』

と云ふ間もあらせず、彼方へ逃げ、此方へ走り、當る勢子どもを蹴倒し、咬殺し、必死になりて荒れ狂ふを、三浦介弓に矢を番ひて、へうと放てば、狙ひ過たず頸筋を射貫き、折柄其處へ馳せつけし上總介、大身の槍を捻りてぐさと刺せば、流石の妖狐も撞とばかり横ざまに斃る。

勢子共犇々と集ひかゝりて、直突に突きければ、あら怪しや訝しや、煙のやうなる氣微かに立昇りて、數

十八の勢子共、礑々と皆な大地に倒れぬ。

見れば妖狐の死骸何時しか石に變りてけり。

八　殺生石

白面金毛九尾狐は那須野が原の石に化したれども、怨靈は盡きず、空に飛ぶ鳥、地に走る獸、此石の毒氣に觸るれば、礑々と斃れ死にけり。

然れば里人これを稱して殺生石とぞ云ひける。

あはれ如何にもして此の毒石を敎化せんとて、有德の僧侶達、故らに那須野が原へ來りしもの甚とゞ多かりしが、皆な其の毒氣に觸れて斃れ失せぬ。抑も何時の世にか、其怨靈を敎化すべき。

斯くて長き歲月は經ぬ。

後深草天皇の御代に至りて、播州法華寺の住僧に玄翁和尙と云へる者のありき殺生石敎化の勅諚を蒙りて京都を出で立ち、飄然として那須野が原へ赴きしが、右手に拂子を採り、左手に珠數爪繰りつゝ、遙かに殺生石に對ひて經文を誦し、漸々其れに近づかんとすれば、石の邊より俄かに妖風吹き起りて、却々に面をば向け難し。然れば身を横さまに反向けて、拂子を打振り打振り、尙ほも高らかに經文を誦しながら一歩々々と進みぬれば、法衣は荒布の如く裂けたれども、辛くも其石の側に至りぬ。

暫時大乘妙典を讀みたる後、軈て石に對ひて、

『木石心なしと雖ども、素より佛體具足せり。我れ今汝に一句を示さん――噫石靈石靈、魔則有レ法濟、執魂無レ所レ歸、即今我念底』

と一喝すれば、不思議や其石少し動きて、十二一重に緋の袴を着けし美しき女性の幽かに顯れぬ。玄翁和尙更に高らかに、

『汝、素より殺生石、迷ひを解かざる故に執着を離れず、佛性を具しながら何ぞ惡業を積んで百千刧の苦を求むるや。速かに去れ。』

と叫べば、彼の朧ろげなる女性の、甚とも悲しげに、

『善惡不二を聞くからは、無量刧も我が執念は爭で止むべき。』

と云ふを、和尚更に一喝して、

『煩惱即菩提、迷の故に三界狹く、悟る時は十方空し。再ひ一句を示さん、諦聽せよ――人畜悉皆宇宙塵、端的不レ逢ニ刧外春一 本來面目有ニ何所一無位心印磨不レ磷』

彼の女性は之を聽きて合掌しながら、

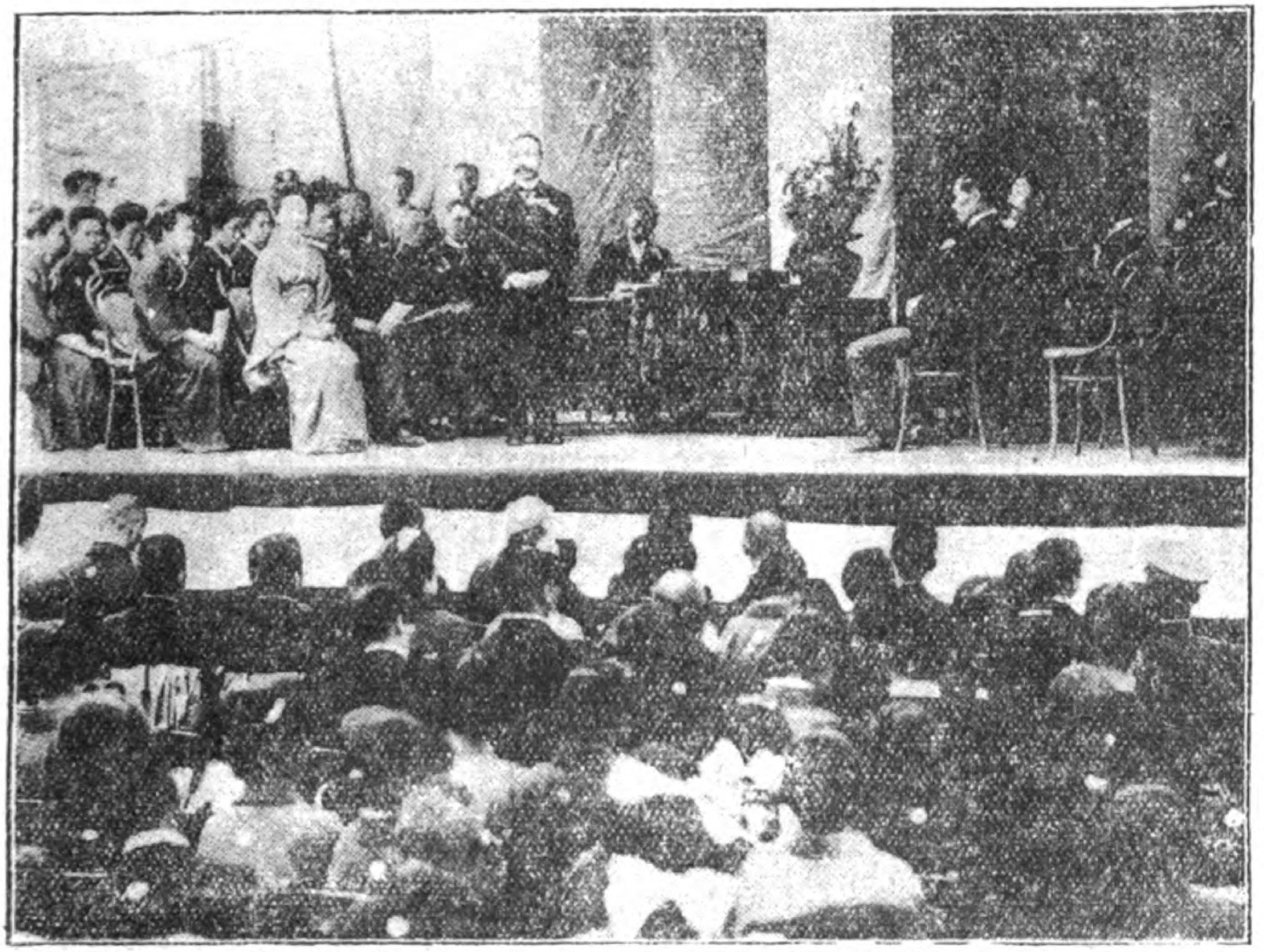
『我れ今まで生き代り死に代り三千世界を魔界に爲さんとなしたりしも、尊き僧の敎化を得て、幾星霜修羅の輪廻に浮ぶまじき大惡念も、玆に解脫することの嬉さよ。』

と云ふかと思へば、姿は煙の如くにぞ消えたる。和尚は珠數を振上げ、

『阿耨多羅三藐三菩提 石に精あり、水に音あり、喝。』

と叱して、發止と搏てば、綠苔滑らかなる殺生石は二つに割れて、一條の白氣濛々と空に昇り、西へ〳〵と消えて失せぬ。

跡には唯だ颯々として秋の風のみぞ吹く。（終）



東京裁縫女學校三十年記念會

手軽に出來る子供の洋服

和洋裁縫女子共立會

男女兒用三四歳上着

此れは、用布も少なく、仕立方も至つて容易う御座います。地質は夏ならば、麻、綿、絹麻冷紗、縞のポス類及びケンドン等、秋から冬へかけては、ネル、セル、カシミヤ、薄ラシヤ、眞冬ならば、ビロード類など愛らしう御座います。色合は、白、水色、クリーム色、紺、花色、鳶色、女兒ならば、此外に、時色、眞紅色など適當で御座います。飾りは、折襟の廻り、帶、袖口、などに、縫箔或は、宛てレースを宛てます。

尙、冬ならば、全體に、裏を付ける方が宜しう御座います。用布は、二尺巾、五尺五寸を要します。尙此裁方は、一尺四寸の出來上りにして置きましたから、若し三歳のお子さんならば身頃で五分、スカートで五分位短かく裁ちます。袖丈も同樣五分つめます。

△紙形の拵へ方

形紙を拵へるには、先づ左の印に、注意しなければなりません。

一、●●● かやうに、遠く三つの穴は、地の目縱の印

一、●●● 近く三つの穴はワナの印

一、●● 二つづゝ穴のあるのは、ギヤダ印

一、● 一つづゝ各所にあるのは、ヒダ、山等の印

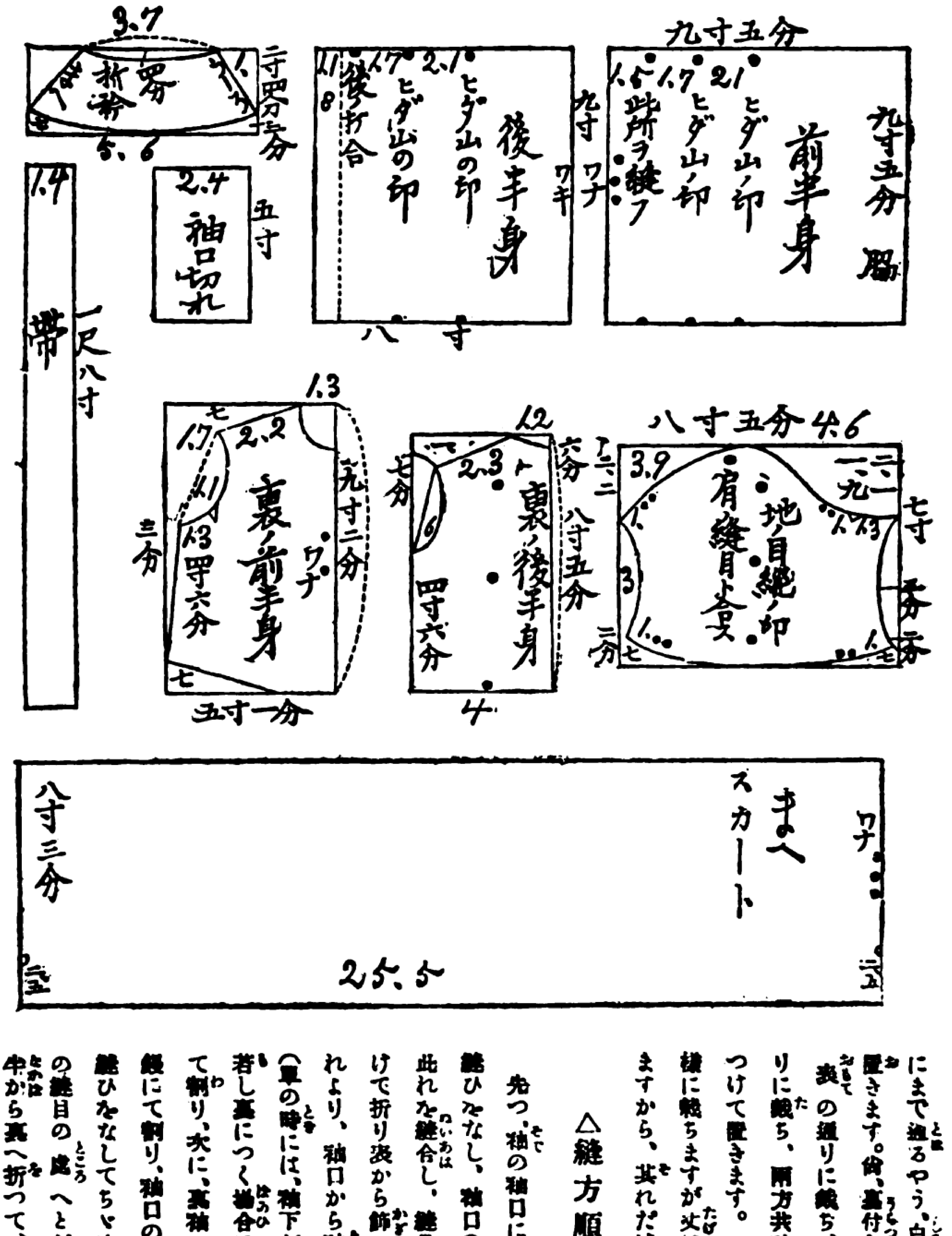
一、▼ 切込は、合印です。

右印の內、第一と第二、即ち、地の目縱の印と、ワナの印は切れ裁つまで、必要な印で、他の印、即ち、ギヤダヒダ合印等は縫ふ時に必要な印です。此れが解りましたら、形紙の拵へ方にかゝります。これは先づ左圖の通り寸法通りの四角な紙を拵へ、何れも、形を拵へぬ內に、一々、地の目たての印、及びワナの印を付けて置きます。夫れより。各所を寸法通りに拵へるので御座いますが、總て、圓味をつける處は、圖に、倣へて、無理のないやうに、自然に、致します。これが濟みましたら、次は、縫方に、必要な印、即ち袖に山の印、ギヤダ印、切込等身頃に、後のまん中の印、及びヒダの印、總て落ちのないやうに悉く穴をあけます。

△切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

先づ左圖の通り、二尺巾を擴げて、スカートの爲に、三布續けて取り、其の內から帶一本及び折襟二ツを取り、次に、前後身頃を、形紙通り、眞直ぐに切落し、次に、袖及び袖口切れを裁落します。若し殘り切れで、帶の裏及び折襟の裏が取れますなら、帶などは、はいでも宜しいから共で裁ちます。

右の通り、裁終りましたなら、針を拔かぬ內に、チヨーク或は白墨で、各所の印(但し地の目縱の印及びのワナ印は除け置き)を悉く切れに移し、これにて、形紙は、取りのけ。今チヨークで付けた印が、下の切れ



にまで通るやう、白糸二針で切躾をして置きます。尚、裏付きの場合には、袖裏は表の通りに裁ち、身頃は、裏身頃の形通りに裁ち、兩方共袖付けの切込みの印をつけて置きます。スカートは矢張り表と同様に裁ちますが丈は五分位短かく仕上げますから、其れだけつめて裁ちます。

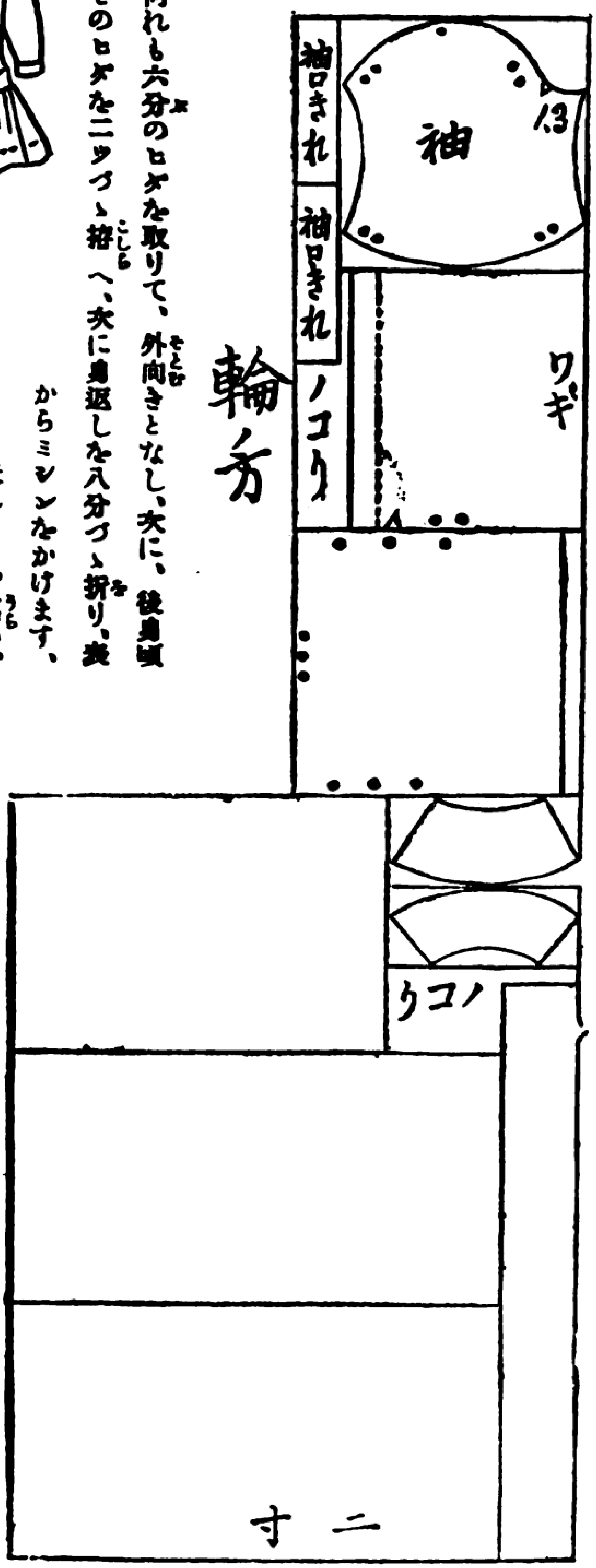
△縫方順序

先づ、袖の袖口に、印から印までギヤダ縫ひをなし、袖口の切れに合してちゞめ此れを縫合し、縫代は袖口切れの方に向けて折り表から飾ミシンをかけます、其れより、袖口から袖下まで續けて縫ひ、（單の時には、袖下だけ袋縫ひにする事）若し裏につく場合には、此の縫代を鏝にて割り、次に、裏袖の袖下を縫ひ、同じく鏝にて割り、袖口の方に、表と同樣ギヤダ縫ひをなしてちゞめ、表袖と袖口切れとの縫目の處へとぢつけ、次に、袖切れを中から裏へ折つて、まつりつけます。

次に、前身頃のまん中に・印通り・即ち山から一寸入つた處を縫ひ正しく巾着ヒダとなし、次に右左にある印を山に、何れも六分のヒダを取りて、外向きとなし、次に、後身頃も同様、外向きのヒダを二ツづゝ裄へ、次に身返しを八分づゝ折り、表からミシンをかけます、夫れより、裏の、後の端と、表の後の打合の印と合して針をうち、其他を正しく裏に合して綴ちます、次に、前身頃も表のまん中と、裏のまん中を合して針を打ち、肩、脇ぐり、其他、正しく裏通りに綴ち落します。其れより、後の裏は、端から三分折つて（即ち見返しだけ引くやうになす）見返しの處へまつりつけます。次に、表の肩と肩と縫合し、裏も同様になし（但し、後のゆるき分は前を出来得るだけ伸ばして合すやうにする事）次に、折襟をつけます、折襟は、裏表合して外廻り三方を縫ひ表へ返して飾ミシンをかけ、内廻りに、正散しつけをかけ別に、巾七分の斜目切れを裄へ、此れと身頃とにて折襟をはさみ（但し前後のまん中にて折襟がつき合せになるやうにする事、即ち、後は打合の印まで折襟をつけ







其れより殘りの處は、見返しだけをつけたる後ミシンをかけ此縫代は身頃の方へ折り、身返しは放し置きて中の處に、押へミシンをかける事、夫れより、脇を肩と同樣、夏ならば袋縫ひになし、裏付きならば、表と裏と別々に縫合し、何れも鏝にて割り、次に裾を合してしつけをかけ帶の裏表にて此れをはさみ縫ひ（帶の表に寒冷紗の裏打ちをする事）此れに、飾ミシンをかけ、次に袖を付ける事、袖は先ち袖付の方を、裏表合してとぢ合し、印から印までギヤゞ縫ひをなし、袖の印と身頃の脇の縫目と合し、身頃の印と袖下の縫目と合し、即ち袖下の縫目が一寸程前へまはるやうにして縫付け、此處は巾八分位の斜目切れで、包ます。夫よりスカートを縫ひます、スカートは、先づ二布半餘の切れをはぎ合し、縫代は鏝にて割り、裾を二寸五分位折りて、平ぐけをなし、次に前のまん中へ縫目のこぬやう一布のまん中をまへとなし、まうしろになる處を一寸五六分切あけて兩方へ、三ッ折りとなし、一寸重て、かたくとめます、夫れから、上部にぐるりと、ギヤゞ縫ひをなし、帶に合してちゞめ（但し此ギヤゞは、少し長めにちゞめ置き、帶と縫合す時に、帶の方をつけ、ギヤゞの方をゆるく付ける事 帶の表一枚縫合し、飾ミシンかけ次に、帶と兩端及び裏をまつりつけます、夫れより、ボタンの穴をあけてかゞる事、これは向つて右の方即ち上前に、上から二三分下つて一つあけ、夫れより、帶のまん中に、一つあけ、其の間に、三ッ位穴をあけて、かゞり下前にボタンをつけます。尚スカートに、裏をつける場合には、表と同樣、裾の平ぐけをなしたる後、後のあきの處へまつりつけ、上部のギヤゞ縫ひをする時に、裏表一緒になし帶と縫合せれば宜しいのです。

毎月課題 特別懸賞文募集 〆切九月十日

△虛榮心

△秋の美（寫生文）

一、寄稿者は右二種の内いづれを撰むも妨げなし。

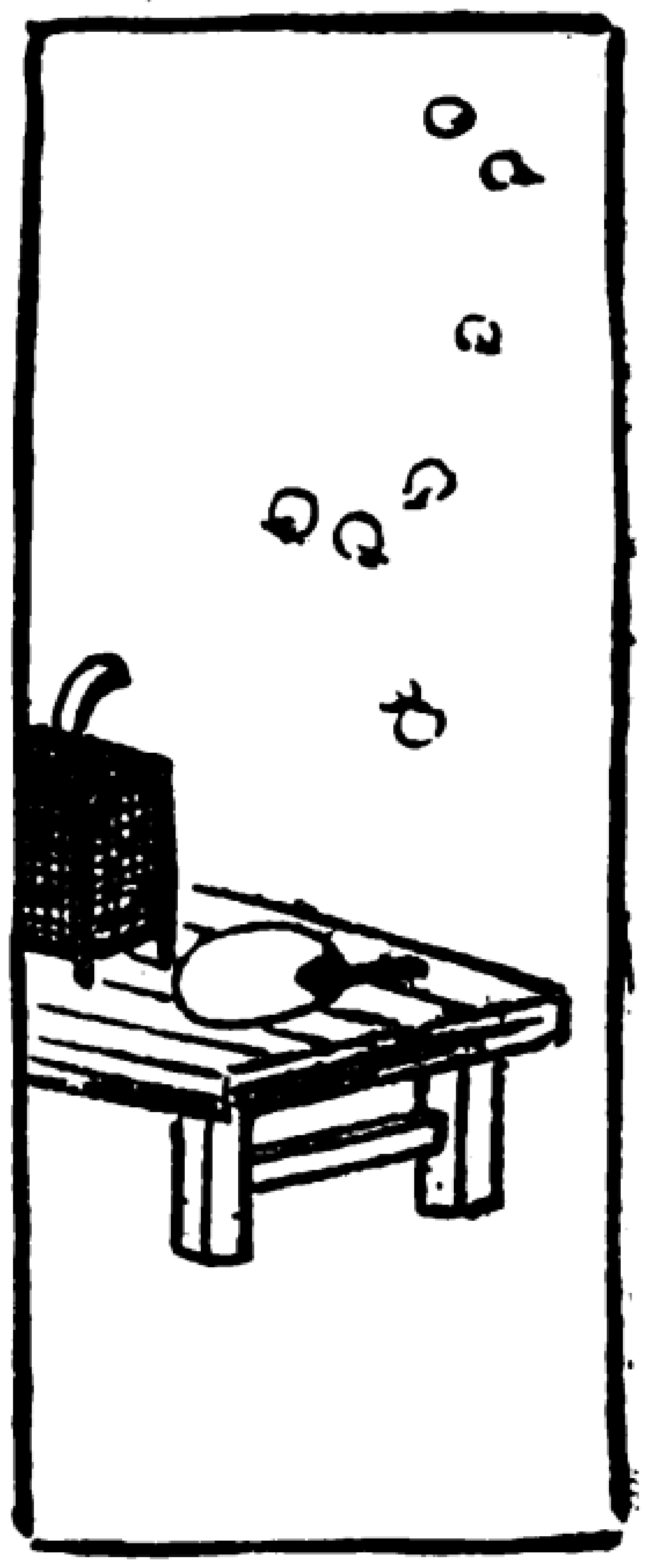
一、寄稿者は左の規程に注意さるべし。

一、紙數は半紙五枚以上の事。原稿は撰定の上、一等より四等までに別ち、都合十名を限り掲載の事。

一、掲載したる原稿には賞金として左の金額を送呈す。

一等　金拾五圓（一名）　二等　金拾圓（一名）

三等　金七圓（三名）　四等　金五圓（五名）



和歌

一等

○　京都　白桔梗

花賣が小笠にやどる露白し有明月夜大原の里

評、詩境詩思、共に麗はし。

二等

○　熊本　甲斐千枝子

つらさをば笑に包みて過さまし優しかるべき新妻の身は

評、新妻にふさはしき優しの歌也。奥床しく聞こゆ。

二等

○　大阪　金田はつ子

心にもなきいつはりをいひし時ひそかに詫びてこそと涙しぬ

評、前者と伯仲の間に在り。

三等

○　伊豫　渡邊梅子

朝顔の露も苔つそと取りて化粧の居間に妹は紅とく

評、婉娩可愛。

三等

○　大阪　奥野こま

春の日に只一人居てやすらかに人をし思ひ死なんとぞおもふ

評、花の下に春死なむと歌ひし圓位上人のそれにはあらねど、亦たけ高き歌也。

三等

○　奈良　中富よしみ

化粧してそゞろ笑まるゝ姿見のみづ〳〵しさや君まさば

評、末句千鈞の力あり。粧成て我ながら其みづ〳〵しさに笑まるるにつけ、想ふて阿耶に到りて、愁雲一點忽ちに鏡面を掩ふものある歟。

秀逸

○　兵庫　長谷やゑ子

愛でしたふ美しき君をたらちねは嫌ふといふを眼でいふ夕

評、未だ妻娶せざる大和撫子を歌ひて、よく悲で傷ぶらざるもの。

○　三重　くれなゐ

谷底は霧にうもれて白雲の我が身を乘せて走るかとぞ思ふ

評、碓氷峠途にて、往々此の實況に逢ふことあり。

○　江州　玉菊

高殿にすだれかゝぐる手弱女のおもはに涼し夕月の影

評、麗。

○　埼玉　大塚伊勢子

行き逢ひし狂女の顏のすごかりしよやみの小路にいな光りして

評、末下句殊に妙。

○　廣島　金谷朴子

廊下行く君がま裾のゆらめきに夕顏かをる宵月夜かな

評、詩境の面白きを取る。

○　赤坂　實子

伊豫すだれすこしみせたる玉簾のぬしは香なり鈴蟲の鳴く

評、繪の如し。

○　岩代　のわき

雨雲のさりもやらずにいざよふは名もなつかしき吾妻の山

評、殆ど優美の妙極壯を極む。

○　廣島　永井すみ子

しめやかに木の香流れて筆をもつ我頬なでつゝ淡く消え行く

評、清麗。

○　河內　緑若柳野子

夕月やとり殘されし身をなげく女のこども萩しをれ咲く

評、形容し得て奇。

○　下谷　松藤龍子

きり立てる峯すべりくる日のかげに虹吹きあぐる瀧のとゞろき

評、壯。

佳作

○　川越　村松ひさ子

今宵また泣くべきよひか別れ來し其夜に似たる雲の流れよ

○伊豆 土屋つれ子
窓あけて機織る少女歌ほそし萩の花さくやぶかげの家

○横濱 小豆澤しげ子
とり〴〵にことなる性に育ちゆく子等住む家のつる草の花

○神戸 原 鎮子
舞子なる濱松ヶ根に夕月をまちにし人の亡ぞかなしき

○川越 村松さだ子
慕ひたる君の文見てわれ泣きぬわれに泣けよとたまひし文か

○本郷 佐久間千代
水を行て船の灯のごとわが胸にうつりて消えし哀る歌かな

○中澁谷 岡谷曉雲
五畿内は山みなまろし南の大象ふせる野のすかたにして

○伊勢 有田百々代
白き帆と濡れたる松と藻の花と虹美しき夕暮の濱

○大阪 野村德子
海光る夏のまひるをま帆かた帆舞りゆくなりはま寺の里

○牛込 西村忍子
夏の夜を月見る宵の若き人隅田の十里風薫るなり

○横濱 中村芳子
今宵またいつはり云ふて家出てぬ戀の十八たゞ面白く〳〵

○千葉 青塚博子
白樺たけ延びそめし姉が子の髪にかざさむ葉月のあした

○大阪 とき子
夏深き緑の木立分けゆけば蟲の音ほのかに秋の氣迫る

○金澤 仲子
結ひ初めし丸髷うつす妻見の赤きてがらにほゝはほてりぬ

○大阪 荒木靜子
うらわかき誇りしのばせ瞳は笑めど紅き手柄のかなしからずや

○三島 遠山雪子
絹弓のいと淋し氣に鳴り響く小さき町の秋の夕暮

○高知 小西穫子
その日より友がき秩をいだきては夕雲ながむるが癖となりにき

○宮城 馥子
むし暑き正午の光りさけ乍ら百合の香さめつ老杉のかげ

○小石川 下田有喜子
忘るべき君の上をもまた泣きぬ南湖の院に病むと聞く時

○埼玉 高山多賀子
琴ひきて君をまつなりこすもすのしろき花散る夕ぐれの窓

○名古屋 川本はろゑ
やまとの國青葉が梢の草ふじの花より晴るゝ朝の雨かな

○信濃 前島節子
いとし子は面見しりしてひざのへにはひよるまでになしつきにけり

○大阪 田野しか子
をさな子に手を引かせつゝあはれなる目しひ行くなり露の松はら

○臺北 美されwait

○麹町 田部てふ子
泣きられ君が行く手や有明の月公かたむきてほとゝきすなく

○下關 杉山愛子
壯大の雲流れゆく此の夕紫ある夏と我は歌はん

○ 島根 咲子

曉の月いとまろやかに映れるを君石投げて碎きけるかな

○ 長崎 くれなゐ

二十てふ齢きく度にはづかしや世のあら波にもまれぬ身には

○ 京都 廣江正枝

又しても蟲の音しげき秋の夜をあづけ子と云ふ寂しさに泣く

○ 川越 吉田登廣子

なやみてわれ行く道のかたはらに少さくさびしき花のさくかな

○ 備中 渡邊那美子

松が枝に蟬の聲のみ聞ゆなる四邊靜けき山寺の晝

○ 名古屋 瀧本逸子

はかなくも二度袖をしぼる哉露と消えにしたま登らして

○ 横濱 杉山菊子

一歳をすぎし今宵のおとづれに思ひ出多き古郷のこと

○ 麻布 鈴木美代子

夕立ちの雨の八重重たるに降るしばらくは夏なかりけり

○ 福岡 原田つる子

日向神や雨に濡れたる白き雲きようにながれ洞窟を出づ

○ 大阪 木山須磨子

おもひ惓みおもひあまりて逢ふ時は爪噛むことを君にならへり

○ 常陸 鈴木わく子

ひろかほの花痩せて咲く眞夏日の野末はるかに煙吐く山

○ 名古屋 志歌子

萩の露の硯に受けて文書きぬとやさしき君の便りうれしき

○ 北千住 竹内ふみ子

羊追ふ牧の少女が額髮に白く匂へる秋草のはな

○ 本郷 ミスト

昨日まで我は濱の子なりしに今日は樂しき旅もする哉

○ 長野 六波羅千代子

人形に添乳してねる妹が夢涼しげにかをる白百合

○ 茨城 今泉義子

露に惱むいとしき花の多ければ袖も濕ほふ秋の野の旅

○ 横濱 志村こづゑ子

色黒き女の顏におしろいをぬるあはれさにしくものはなし

○ 福岡 西原千代子

橋の上涼み姿のさまざまの袖を吹くなり夏の川風

○ 宮城 白木ちとせ

初秋の風ふきそめて萩の花のさびしくさけど姉は歸らす

○ 北海道 吉田稲子

雁の聲淋しく更けて秋の夜は雲間にさゆる十六夜の月

○ 下谷 安藤君子

夕されはさの君います西の國のそらこひて泣く我主は病人

○ 下谷 小林しげ子

由比の濱朝の日させば網に居る鯛もくらげもくれなゐに見ゆ

○ 秋田 伊藤百合子

青くと澄み渡りたる初秋の空見て瞳しづにうるほふ

○ 川越 貝谷むら子

いふかしやうれしき夜中はよろこびのみちたる様にこほろぎ鳴くも

○ 備中 夏 斎

母にただに語りもかねる此聞え知らですごせし日は安かりき

俳句

天

立秋の佳氣凝て玉の男の子かな　下谷　大上菊子

地

孤棲安き雨讀の窓や散柳　京都　齋藤まさ子

人

朝の蚊や屏風の繪竹濃き暗に　大阪　本山須磨子

秀逸

蜩や飯早き子の庭遊び　伊豫　砂田つるゑ

晝顔や碧潭も下に温泉場河原　茨城　中林たけえ

カンテラによる蚊も侘びて旅寢哉　播磨　井口和子

月に興じて庭掃くや竹榻の主　大阪　金田はつ子

秋雨や草色うつる蜘蛛の絲　相模　野澤方ゆかり

造花屑亂す机や夕立てゐ　三河　小百合

宮島や鹿鳴て露とざす灘　新潟　東樹常子

野風呂烟這ふ垣草や天の川　舞鶴　淸川よし野

月落ちて松影低き庵哉　和歌山　谷美野

穂芒に月の出水や雁わたる　三河　今泉やす子

初秋や端居の窓に花白き　群馬　花形靜子

小流を覆ふ萩の盛りかな　滋賀　薗田こと子

洪水の跡狼藉や秋暑き　熊本　中山さと子

濡れ疊寄せ干す暗や蟲啼いて　福岡　池尻なる

秋風や蟲追ふて瀨に跳ろ魚　牛込　野口淸子

朝月も浮く薄雲や蘭の露　島根　咲子

炊煙と檣林と室の今朝の秋　長門　岡本艶子

蘭た刈て蚊の移りくる庵かな　備中　あい子

窓の風情露風に立つ佳人あり　盛岡　久保田花子

萩咲くや大宮人の玉の沓　大阪　田野しか子

弟の脊丈のびたる浴衣哉　美作　多美子

新秋や芭蕉のうへの北斗星　伊豫　有田百々代

秋近き葉廣木や尾長鷄の宿　長崎　隈部信代

百舌鳥なくや蕎麥畑颪棕櫚葉吹く　香川　大井裕子

菊束にちゝと蟲なく夜店かな　大阪　靑葉生

冷し西瓜あぐ寢起き訪友のあり　新潟　岩本芳子

薄ら灯に蚯蚓鳴くなり萩の寺　靜岡　鈴木よし子

狭庭に山蜘蛛這ふや秋の風　長崎　馬場みつ
庭の萩見て朝々の讀書哉　本郷　松原鶴子
水汲めば萩の花株亂れけり　同　塚越はるの
傘つゞく葬式淋し花卯つ木　小石川　虹園讃子
演武のこと上奏す憂國の秋　靜岡　大浦つや子
雪靄に眠り碁石に臥す　小石川　鳥越寛子
馬に舟に雲積む空や渡り鳥　香川　大井久子
空蟬の塵に落ちて今朝の秋　能登　向井萬子
綻れる籠手編網や秋晴るゝ　香川　大井裕子
源氏讀む灯もなつかしや蟲の聲　奈良　西田豐
快日和師の温容と花野來し　三河　美枝女
煙杳の沙汰會やます雲の峯　美作　少女子
庵の柱歪み這ふ蔓や秋更けて　香川　大西愛子
行水や簀圍ひもして水飼鳥　藤枝　山内登代子
兄の癈顔見る思出や金煙管　福岡　中村季子
雷の來て墓を圍みけり萩の月　本郷　城本美知子
波橋峽程に月涼し蛙音鳥波や　肥前　隈部ふじ代
秋風や芙蓉輝く檀林寺　伊豆　土屋つれ子
篠原や秋深き風の渡り筋　出雲　長崎百合子
繪屏風の撫子赤し子を憶ふ　横濱　尾形春子
朝露の牧草刈りに牛連れて　茨城　森山花子
蘭の香や月思ほへど詩もなし　群馬　新井冷花
病葉沈む桶水冷し鷄頭花　岩代　木内よし子
安産の便りに殘暑見舞ひけり　下谷　大上靜子
京はもの〻高下駄日和秋の立つ　三島　遠山雪子

砧打つ門邊柳や三輪近し　佐世保　森多津子
渡船上りて花野なつかし日傘哉　横濱　青柳登美子
茗談に更く清爽や月落ちて　伯耆　田中千代子
天の川低く流れぬ出水跡　大阪　青柳花子
冷やかや白粉注く掌　府下　赤羽はる子
秋水や夕日影落つ白堊館　根室　齋藤ふじ
青簾ひ子のアラ提灯や夕涼み　京橋　三溪女
夕日川渉る野人や夏の雲　芝　篠崎せい子
蜂やだまり女の暮炊ぎ　芝　大和田みつゑ
蚊柱や馬盥水に三日の月　近江　草場貴志
獸使ひ待つ夕舟や萩の風　京都　華子
夜涼みや一つ時落す仕掛瀧　下谷　小林しげ子
きりぎりす啼きすむや葡萄棚の雨　熊本　白石美子
青鷺や草雨煙る小川筋　小石川　中川暮子
母刀自の思出多し秋の雛　深川　山下文江
水飯や群山樹下に雲の峯　高岡　中川白雅子
螢花はらり散り浮くや鯉影水清き　三河　村林喜代
鯛や鱧煮る里流行唄　信州　六以羅千代子
涼しさやからりと霽れし雨後の月　栃木　渡邊花代
蔦葉垂る門の柱や初嵐　越後　東樹貫子
月見草咲く草叢や露下りて　備中　白百合
蝙蝠や朱雀の柳揺れ月夜　北千住　竹内ふみ子
塗りかへて赤き寺門や秋暑し　越後　東樹花子
茶袋に塗刷く秋の日和かな　新潟　東樹初子
讀人の島女娶りぬ秋の風　横濱　靜雨

誌友倶樂部

▲八月號の本誌相變らず面白く拜見いたしました、晶子樣の女子と社會的頭腦、ほんとうに文明國の女子はやさしいしとやかな内にも世界的智識は大切でございますれ、米國夫人の七變化には驚ろきました、玉露樣の擲木を拜見し、すでに家庭に入り給ひし御身をも、まだ文學に筆をとめてお出であそばさるゝ御幸福な方と……思ひました筑摩子樣のまれび物語り思はず吹き出してしまひましたよ、角帽も詩人もあなたのお筆にかゝつてはたりませんのれホヽヽヽ涓濃記讀み行く内をしまひになつて思はずホロリといたしました、夏の超然生活、おむつの滴が振つてますわ……、詩想ゆたかな若典樣永久にお榮えあそばせや、遠く名も床しき舞子の濱に病みませる濱千鳥の君、其後お胸のいたみはいかゞ月の夜毎にさまよひ給ふ細きみ姿まぼろしとこそ我瞳に浮かぶ、(北海道大沼湖畔の家にて、岡田波留子)

▲桐の一葉樣、私も群馬の者で御座いますが、桐生の御方でゐらつしやいますか、もしさうでしたら、この次に御住所をお知らせ下さいませな、私も桐生の方にお友達を澤山持つてをりますのですが、もしやS、S樣ではいらつしやいませんか、是非この次の本欄に御所を、(桐生の若葉)

▲夢見る花樣、八月號には御作見えませんのれ樂しんで〳〵開きましたものを、どんなにがつかりしましたでせう、なぜですか私君の御作がおなつかしくてたまりませんの、拜見する度にうつとりと引きつけられるやうになつて君の美しい御姿夢見ますのよ、れ龍子樣、來月はどうぞ御出しになつて下さいませんか、御願でございます、(東京、淡き花)

▲私は本年廿歳にて、學校はわずか高等女學校一年終業致したばかりで、ごく無教育にてこまりますが、我宅にて出來る仕事はありますまいか、又外へ通ふてもかまいません、何かありましたら誌上にてお知らせ下さいませ、どんな仕事でもかまひません、(札幌の、一愛讀女)

▲麻布谷間の百合子樣に御同情いたします、誠にふつゝかな者ですが、何卒以後御交際下さいませ、御手紙でいろ〳〵御話し申上げます、(和泉國泉北郡濱寺石神病院内、泉原瞳子)

▲伏見の成田てい子樣、あなたもしや板橋小學においでになつたのではありませんか、さうでしたら私と同級でございました、おなつかしゆうございます、私もクリスチヤンでございます(東京、露野)

▲皆樣の内に、本誌増刊嫁ぐ人、及び昨年の四月の本誌お持ち方は、御惠み下さいませんか、御禮は相當いたします、(三重縣一志郡七栗村中村、永口れい子)

▲海外の姉樣達、ゑはがきレターの交換を願ひます、きつと御返事いたします、(名古屋市中市場町三丁目、三浦久子)

▲前號で私にお言葉下さいました埼玉の姫松樣つていづこのどなた、私れ誌上で埼玉の二字を見出した時のうれしさ、まつたく埼玉はふるひませんのれ、(但し岩槻の野菊樣が明星でいらつしやるけど)、私今は、やたらの投書をゆるされませんけど、皆樣にどし〳〵投書していたゞいて、今に名にしおふ千代子女史もヘダシで逃げ出す樣な稀代の女文豪を出してほしいのです、實際かくれたる才媛はいくらもそこらにころがつて居りますもの。(小田卷にて、まがき女)

▲皆樣の内に女學世界増刊「驚く手紙」御所持の方は下名まで御送り下さい御禮は必ずいたしますから、(神戸市兵庫大開通二丁目九十ノ三十、樋上八重子内柏子)

▲私は白百合ゆるぐ山奥に女學世界を唯一の友として居りますの、どうぞ御交際下さい、(宇都宮市四條町、山縣はる子)

▲御懐かしき諸姉上樣の中で、實用に適當なる料理書物御座いましたら、一週間程御拜借願度御禮には美しき造花又は御望のもの何でも御送致しますそして永久御交際を願ます。(富士の裾野にて、千代子)

▲妾は信州の山深い善光寺に樂しき月日を送りつゝある者ですが繪葉書の交換を望みます。(長野府新町小山田照子)

▲妾は長州の片田舍に住む一少女で御座いますが、誠に恐入ますが、御地の繪葉書を送つて下さいませんか、御禮として當地のを差上げます(山口縣長府町黒門、伊藤みつ子)

▲本欄にお出しになつた函館の鵜尾檸子樣、福島萬子樣、私も貴女と同じ望みのもので、御手紙差上げたいと思ふのですが、お差閊がなくばどうぞ御住所御知らせ下さい(樺太にて、花子)

▲すみれ樣の「薄命佳人」くり返し／＼拜見致しました、くら子樣の「思出の記」も好う御座いますのね。(しのぶ)

▲皆樣の御内で「むのひみつ」と「書く手紙」等御不用の御方はおめぐみ下さいませんか、當方よりは一昨年の本誌増刊を御送り致します、又皆樣の内でパンジーとフロックスの種子御持ちの方は御めぐみ下さいませんか、御禮は繪端書にて致します。(本所區林町一丁目六番地、佐々木はる子)

▲前號の本誌の内、磯千鳥樣のお作、相變らず落着いたお筆つきれ、私大好きですワ、その外玉露樣、未央柳樣、撫子樣等のも、皆面白く拜見しました、而し千代子樣のがなくつて少なからず失望しました(三河西尾町、今村しづ子)

▲誠におそれ入りますが、増刊の「書く手紙」「嫁ぐ人」と云ふのをお持ちの方がありましたら左の所迄お送り下さいませんか、代りに印度の繪はがきや近江八景の繪はがきお送りいたします。(滋賀郡膳所町字中大手、本多のみ子)

▲與謝野晶子樣のおすまひいづれで御座います(尾張一少女)——麹町區中六番町三番地です。

▲何卒繪葉書交換をお願ひ致します。(熊本市米屋町朝日商會、松山としえ)

▲六月號の本誌欄に、渡米云々に就てお出しになつた中村樣、少々お伺ひしたい事があつてお手紙差上げたいのですが、お差支なくば失禮ですが誌上で御住所御知らせ下さいませんか(樺太光枝)

▲六月號の倶樂部に米國の樣子をお書きになりました中村樣、どうぞ下名まで御住所お名をお知らせ下ださいませ、私は渡米したい考へを持つて居る一少女です。(巖手縣江刺郡米谷室町、熱海はる子)

▲函館區の鵜尾檸子樣、四月の紙上にてお尋れの住所早速申上げます、誠に失禮いたしました(K. Nakata. Po Box, 41. Sammer, Wash, U. S. A.——日本字にては北米ワシントン州サムネ郵便函四十一番、中田)

▲清國上海の峯志樣とはどんな方ですか何んだか聞いた樣な氣がいたしますの、又上海虹口挽革昌申内の葉山倭文子樣おなつかしうございます、私も上海にしばらく居たものですおさしつかへなくば之を御縁に御交際を願ひます(東京市芝區神明町、中澤江天流子)

▲とつぴな事をと御驚きにもなりませうが、私は遠から婦人記者として一身を捧げ度いと存じて居りますが、元より大した學問とてもなく、文筆に達して居るわけでもなく、勿論常識とても備はつて居るといふでもなくといふ、誠にふつゝかなもので御座いますが、さう云ふ者を養成して下さる新聞社など御座いますまいか其外婦人記者を募集して居るやうな社は御座いませんか、もし御心あたりもおありでしたらどうぞ御世話を願度と存じまして、この確實なる誌上を拜借して一重に記者樣に御願ひ致します、(無樂女)履歴の大要に何か一文新作を添へて記者宛にお送り下さい、

▲私皆樣に深く／＼感謝致します、皆樣のお書

きの振つたお作を拜見して、不幸な運命におちいつた身を慰する事を得て居ります、私は今より四年前親戚に相續人が無くて私が行く事に成りました、行つて見ますと先方は大變な舊式家で、學問はいらぬから一切捨てゝ家庭見習として奉公をせよといふのですよ如何なる事にも堪へる覺悟で行きました私も、其時計りは泣きました、さうして私は終に老嬢と呼ばるゝ身となりました、七月號で菜櫻樣の「女敎師の尊き天職」を拜見致しました時は、そゞろ數年前が忍ばれて、露に袂を浸しました、終生を投ずべき尊き天職を中途にて捨てた罰で御座いませう（へせめて無花果に成りたき女）

▲始めて投書致します、お笑ひ遊ばしちやいやよ、これでもやはり廿世紀の二八少女ですよ、今は毛唐人の住むアメリカの山おくで、お尻ふつて歩いてるんですよ、アラおさんの樣だつて ひどいわ、なんぼ私だつて生れは Japan ですよオホヽヽ、平凡な田舍者ネエ、無邪氣な者と思召の御方よ御交り下され、けれど失禮ながら一時的の御方は御ことわり申ます、白人的に暮らすのも愉快ですよ、故に廣島縣の御方は永久に御交際を賴みます、（熊谷常子 Miss. T. Kumagai R. R. 1. Box 63, Bowles Fresno Cal, U, S. A.）

▲皆樣、私は淋しく田舍に暮らして居るものです、昨年の春女學校を出てより以來、友とするものはたゞ本誌のみです、クラスの方々はわづか一年たゝぬまに音信不通となりました、其の上に私の大事な〱母樣に逝かれましたので、人知れず泣いて居ります、誌上で御幸福な方の日記など拜見致しますと、たまらなくなります私と同じ境遇の方が皆樣の中に御あり遊ばすならば、親しく御交際して戴き度うございます。（姬路片田舍にて殘月）

▲何時も私がお母樣に、一體此家で誰れが一番幸福な人でせうと尋れますと、毎度御飯をお旨しくたべられる人が一番幸福だらうと仰いましたけれど、それが如何してもわからなかつたのですが、此頃漸く思當りました、然し其時私は決して幸福ではありませんでした。（熊本縣鹿本郡米田村大字長坂、内賀島吉子）

▲夢の浮橋さま、もしや節子樣ぢやございませんかほんとに暫らくお目にかゝりませんのね、貴女も例の無邪氣な本領を發揮して、談友の皆樣をあつといはして頂戴禾央柳さまの追懷記・ほんとに身にしみて拜見致しました、私も由香樣と同じやうな身の上、よんで行くうちにはらはらと淚がこぼれて胸が迫つてよめなくなりました、父は今明日をも知れぬ病床にふして居るのでムいますの、ほんとに學校時代は樂しかつた、高い希望を抱いて、もゆるやうな向上心をもつて勉めつゝあつたその時！　おなつかしい禾央柳さま！　まさきく在したまへ。（札幌にて末摘花）

▲諸姉樣方の中で樂器交換下さる方は御座いますまいか、私方は英國製のヴアイオリン最も優等品にて新しき品、オルガンと交換願ひたいと存じます、最も中古でも宜しい、御賣りなれば買受も致します、何卒次の誌上にて御住所委しく御記載願ひます。（橫濱春香）

▲夏の超然生活をおかき遊ばした撫子樣、お筆もお口もお達者な方のように思ひます、お禰祢が池とは振つて居りますネ。（村時雨）

▲春雨先生の、日本印象記は、いつも興深く拜見します、それから千代子さんの靑葉の蔭・筑摩子さんの淸風三千里など面白さうなのから、ひろひよみしては、郵便で屆いたその日に、あらましよんでしまひました、それからあの小式部樣とやらの、少女時代の日記を見た時分、おてんば娘日記を聯想してほゝゑみました。（常陸國稲敷郡馴柴村馴馬齋藤美津子）

▲虎之門御出身の村田悦子樣は、いまどこにいらつしやいせう御存じの方は誠に恐れ入りましたが誌上で御しらせ下さいませ、私は同君とは同

じクラスに居ましたもの、大變に御風にあづかつて御禮もせずそのまゝになつて居ます、やうやう此頃御洪恩にむくゆる時がまゐりましたから、ぜひ御たづね申上げたいと存じますが、御存じの方は御知らせ下さいまし、御禮はキツト致します。(まごころも)

▲諸姉樣の内に、新聞紙を交換して下さる方はありませんでせうか、若しお望みの方がありましたら、當地で發行する日米新聞一ヶ年間と東京で發行する報知新聞でも二六新聞でもよいから一ヶ年間とを引續いて交換を願ひたうございます。在米羅島千代子――R. D. 1, Box 91, San Jose, Cal)

▲山梨の御風樣、感謝致します、是非手紙差上度いので御座ますが、誌上では一寸困りますし貴女樣の御住所を伺ひますも失禮で御座ますしほんとに困りました、撫子樣御察申ますでも貴女は合はないだけならまだ御幸福ですわ、一樣の望みが御座いますもの、御住所御報らせ下さいませ、お互に慰め致しませう、白百合樣御親切樣に難有う御座ます、けども私の申ました事と貴女樣の仰らる事とは少し意味が違ひます夫妻の愛などは全然無いとは申されませんけど其樣な若やかな事を口にするさへ好まない人なのですから駄目で御座いますのよ、○女樣の御る樣な事は始から承知して居りますわ、ですからそれをどうしやうとも思ひませんの、只同じ境遇に泣て居る御方が有ましたらお互に慰藉仕ませうと思つたゞけなので御座います、貴女樣のやうな御家庭は實に羨しう御座ます、せめて御門をなりと拜て見度やうな氣がします。(麻布谷間の百合子)

▲未央柳樣　八月號の追憶記ほんとに身にしみました、御作によりますと師範出身で入らつしやる樣ですれ、私も當春卒業です、自ら申上ては失禮ですが、在學中奈良の女師に選拔もされましたが、家の事情から試驗に應ずることが出來ず、失望の中に母校を去つて就職して居ますが、思ひは常に彼の學府に螢雪の功を積む身となりたいとばかり私はかうして一生を終るのでせう(大谷川の邊のコスモス)

▲皆樣、去年の今頃、數ならぬ私の名が、誌上に出た時には、嬉しくて姉の許へ飛んでまゐりましたが、其の翌日から病ひを得て、待ちかまへて居た賞品を手にした時には、もううつゝの境地に居りました、そして私は病が一生不治の難症といふ宣告もうけたのです、然し私は恐れますまい、死ぬまで、この誌上に筆とつて、この誌上によつて慰安を得ませう。(濱町森枝)

▲麻布谷間の百合子樣、御同情申上げ升、併し貴女一人が御不幸なのではありません、私も同樣な境遇で、毎日人知ず泣て暮して居ります、私は夫に子供がありまして、私に子供が御座いません、それ故始終家の中に一寸しても小事が出來ます、又夫も子供の事に付きましては、私に對して丸で手のひらを返した樣な事觸をせられます、故に私は常に心の中にいくら泣くやら分りません、私は近所の御夫婦に子供のあるのを見ては、誠に羨しく私にも只獨りでも子供があればこんな悲しい思もせず暮せるであらうと神佛に祈りますけれども不幸な私には今に其喜びを得　事が出來ません、其れで居て夫の子供の母親は近くに居りますから、始終往復をいたしますの、百合子樣御察し下さい、どうか之から姉妹と思召して慰め合ひましよ、又此からは相談に御力添を御願いたします。(富山露子)

▲熱くなりましたのね、皆樣御變りございませんか、此の頃誌上にちよい〳〵御見えなさる百合香樣、もしや女子大學の附屬にいらしつた英子樣ぢやありませんか、今は涼しい信濃の國に御住ひなされて、たのしく暮していらつしやるよし、御うらやましうございます、私あなたが緋のたすき甲斐〴〵しく、ホワイトシユースにお納戸のはかまのすそをさばいて、選手競走に御出なすつた御容子が目に見えます、御なつかしうございます。どうぞこれからもおふるひ遊ばして下さい、百合香樣の御作を樂しみにして待つて居る者が目白臺には澤山ございます。([illegible]會中のよし子)

新刊紹介

△源氏物語大意

尾上柴舟氏夫人
尾上碧眞　著

國文の至寶と稱へられながらも、其文の古めかしくて、語の曉り難きより、讀み味はふに甚だ骨の折るゝ爲めに、世に敬遠されたるは光源氏の物語なり　この書は源氏の意を細かに嚼みくだきて、俗に譯へし、斯くして今日の讀者の頭腦に　容易に消化せしむる樣に工夫したるものなり、大意とはいへ、文情、詞勢、雰氣なども在るべく、原本のまゝを傳へんと苦心したるものなれば、書中の男女の面影も髣髴せしめて、人物、情景の活動原本を讀むに異らず、源氏物語の通俗本としては最も成功したるものといふべし卷頭に挿入したる　系圖幷に年表は單に本書の副として趣味あるのみならず、一般に源氏を讀むものにも亦當代のを知るためにも極めて有益なるものなり。價金壹圓四十錢神田表神保町大同館發行

△凡人非凡人

横山源之助著

二十年間江湖に放浪してあらゆる社會の裏面に出入し、幾多世間の不遇者、失脚者、變人、奇物、凡、非凡の種種人物に直接して具さに世路の偶奇に感じ人情の反覆を仔細に翫味し、自ら暗黑界の消息通を以て任ずる横山氏自身は、誠に現代稀有の數奇人物と稱すべし、今回多年の渉獵によつて得たる事實を述作し、題して凡人非凡人、といふ、錄するところ、富豪の事あり相場師の事あり、一種の宗教家あり、奇異なる文學者あり地方の政客あり、趣味の人あり、隱れたる聖人あり、無學文盲の學者あり、飄風の如き性格の人あり、一種不思議の畸形人物あり變幻出沒して其性行亦た端倪すべからざる、異樣の人物ありて、僅かに其經歷性情を繙る而して其文警拔にして又一種の鬼氣を帶び、異樣の印象を與ふ、著者も亦一種の奇人物なり、其書の又一種の奇書たることいふまでもなし、蓋し近時出版界の一異彩といふべし。價八十錢麴町區飯田町新潮社發行

△文藝地理東海道五十三次

横山健堂著

道中記に、名所圖會に、錦繪に歌人、俳人紀行文に、小說家の滑稽雜談に、五十三次が書かれたものは頗る多い、古くは鎌倉時代から、德川時代に、明治時代に又汽車時代の現今まで五十三次は幾度繰り返しても矢張り面白いのである、さてこの書は道中記でもなく、地理文學でもない、文藝、地理、政治、風俗、歷史、風景を汽車の窓から見た東海道の面白味を新らしい人に味はせんと試みたものである。名所古蹟歷史的の說明や評論を加へたところもあれば、その名所に新らしい關係を作つた政事家や文人や事業家の事も觀察され紹介されてゐる。著者は人物評論に於て隱れたる雷名のある人其の趣向の甘い事は靜岡の鯛飯のごとくその文の潑剌たるは長良川の鮎のごとしともいふべきである。價一圓六十錢京橋廣小路前川文榮閣發行

△小波お伽百話

巖谷小波著

本書は著者が去る二十四年より同三十七年迄の創作お伽噺の内で比較的短きもの一百篇を選抜し今度これをお伽噺創作二十年の記念として編纂したものである。最初は專ら教訓的にと心がけ、次に寓意的にと工夫し、ある時は滑稽を主とし、ある時は詩趣を加へ、曾ては小心に、時には放膽にと隨分苦心したつもりですが、要するに「此書には概して平易な教訓本位のものゝみが多く收められてゐる」との著者の斷り書もあるほどで、即ちその二十年間に如何にその書き方や主意、感想の上に少からぬ變遷のあることが分るであらう、裝釘頗る美、且つ當代の名畫伯二十四名の揮毫になる色刷口繪二十四頁を挿入して光彩を添へたり定價一圓八十錢本館發行

△新模式文範小品作法

水野葉舟著

小品は近代文藝の特色を最も多量に有してゐる明治文壇特産の最新藝術なりとの著者一家の見識を以て其の經驗を語り、作法を說きたるものにして著者得意の作例を示し、又附錄として大家の模範小品を集めたり定價六十錢神田錦町春秋社發行

△婦人禮法

下田歌子著

明治の新らしき文明に心醉したる人々の中には一時何事も西洋の風俗でなくてはならぬ樣に考へ、舊日本の風俗習慣に關するものは一切打破らうとした事がある、斯くして日本人民は一時凡ての點に亘りて途方に暮れ禮法の如きもその

還に洩れずして一時は支離滅裂に歸さんとしたる事あり云々とは世故に深き閲歷を有する著者の感慨にして、識者の首肯する處ろなり今や國力の進步と共に日本國民の偉大なる自覺心を惹起して日本固有の文物禮法をも尊重する樣になりたるが、必らずしもこの日本禮法を復活したるものにあらず、されぱとて和洋折衷的にもあらず、唯時勢の動搖の爲めに一時頽廢を極めし禮法に向いて一道の光明を注ぎ兼れて現今の過渡期に禮法の根據を失ひしもの、爲めに參考としたるものなり、前編に於ては專ら禮法の原理基礎を說き、後編に於てはその實習即ち應用法心得の個條を說きたり定價壹圓五十錢實業日本社發行

△少女美談　　渡邊泉著

日本固有の婦德たる、貞操、孝悌、節義、忠烈等の諸德を發揮して世道人心に裨益したる古來の名婦人の少女時代に遣せし美談をいともうるはしき感情もて書き著はしたる少女少說なり價六十錢實業日本社發行

△女子作文全書　　戸野みち𛂞子　近藤正一　共著

本書は女子をして各種の作文の大法に通じ且つ文章の組立法を曉り、容易に實用の文章を作ることに熟れしむる樣に工夫したるものなり、蓋し從來の女子の作文は動もすれは冗漫に流れて要領を失ふの弊あるを免かれず、本書はつとめてこの弊を矯め專ら現時の狀勢に適合せしめんと工夫したるもの丶如し、作例として示せし古今名家の記事文日記文の例は篇中無限の興味を齎らす、採擇宜しきを得たり價六十五錢博文館發行

△女子大學家政講義　　女子大學通信敎育會

家政科に於ては天下獨步の稱ある女子大學がその科目に準じて編纂せしものにて程度は高等女學校第四五年の學力を標準とし專ら家庭の實務に必要なる智識を網羅したり、その課目は實驗心理學、兒童研究、法制、經濟の大意、社會衛生、家庭理科、料理　裁縫、手藝園藝等にして講師はいづれも其方面の大家博士にして說明は乾燥なる理窟に陷らず、平易にして而かも趣味多く、婦人の頭腦に消化し易き樣に工夫されたるはこの講義錄の特色なり每月一回發行にして一ヶ月の會費五十錢にして二ヶ年の修業也發行所小石川久堅町精美堂

△婦人美談（上卷）　　松浦政泰編

歷史上著名なる婦人の逸話を蒐集して家庭の敎訓に供したるものなり、平安朝前後、鎌倉、室町、德川の各時代に亘つて貞烈、忠孝、節義の行爲を遣せし名婦人の美談、芳話は欝として林のごとく、秋の夜長のつれ〲にこれを讀まば古人と相對して音容を聞くがごとく、志操の涵養に資するところ大なるべし、執筆者は芳賀博士、驅根博士、鹽井、松浦諸氏なり定價一圓五十錢、小石川久堅町精美堂發行

△呂氏敎訓　　紀成虎一著

明代の醇儒呂氏が家庭訓を釋述したるものなり流石に道學先生の見識にして其の敎ゆるところ頗る周到親切、時にハイカラ者流に對する頂門の一針たる警句に乏しからず、金港堂發行、價四十錢。

△日常百珍拾錢叢書

輕便なる袖珍本にして、百人一首略解、神經衰弱の警戒、三百六十五日料理、婦人病の警戒、債權者の心得等既刊五篇に及べり、就中斷食療法の如きは尤も斬新奇拔の新說にして消化器病に對する一大福音といふべし、價各一册十錢京橋西紺屋町頁明堂發行。



女學世界
定期增刊

姿見かゞみ

九月十五日發行

善惡に形はなきも、その判斷は誰れにも出來る。醜美は實體のものなるも、見樣によつては樣々である。善人か惡人か、醜婦か美人か。古い習慣に囚はれず、狹い理想の影を踏まず。自由自在な思想で以て有の儘の人間の心の奥を描いたものはこれである。

目次概要

募集（九月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以內の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂したる書體は沒書とす　△名宛は博文館內女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
定刊數……十二册
內增刊四回：一、五、九、十一月價格同一

郵稅　一册　二錢

廣告料

	一行（四字詰）	四半頁	半頁（廿二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治四十四年八月廿三日印刷　本第拾壹卷第拾壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

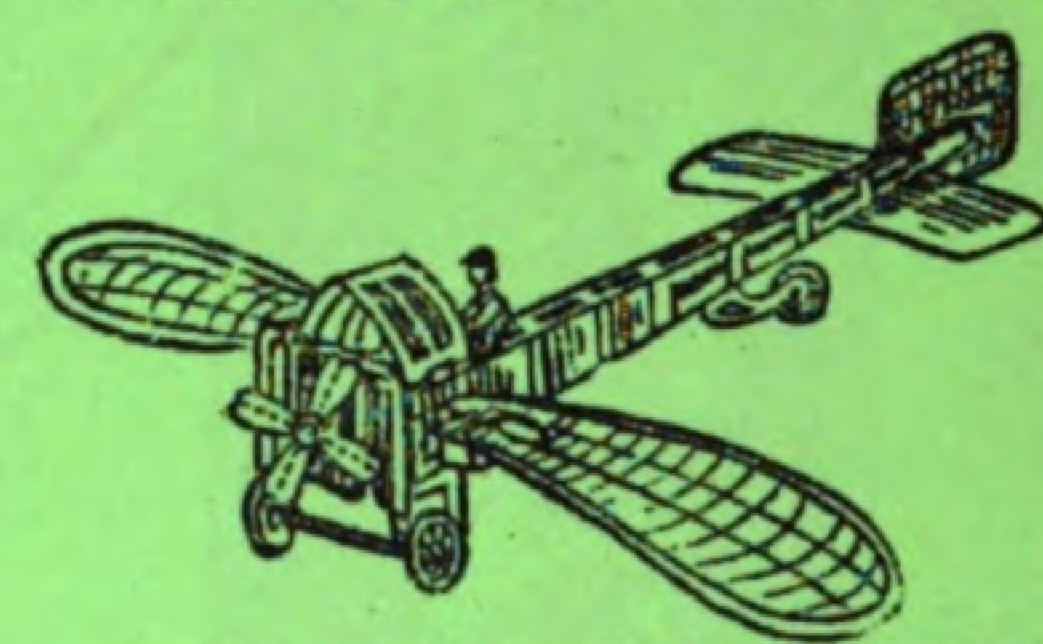
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千百三十八番、二千六百二十二番、三千二百二十九番

通信販賣 ㊕博 博通社特賣品

●安心の出来る買物は博通社に限る!!

組立智恵競



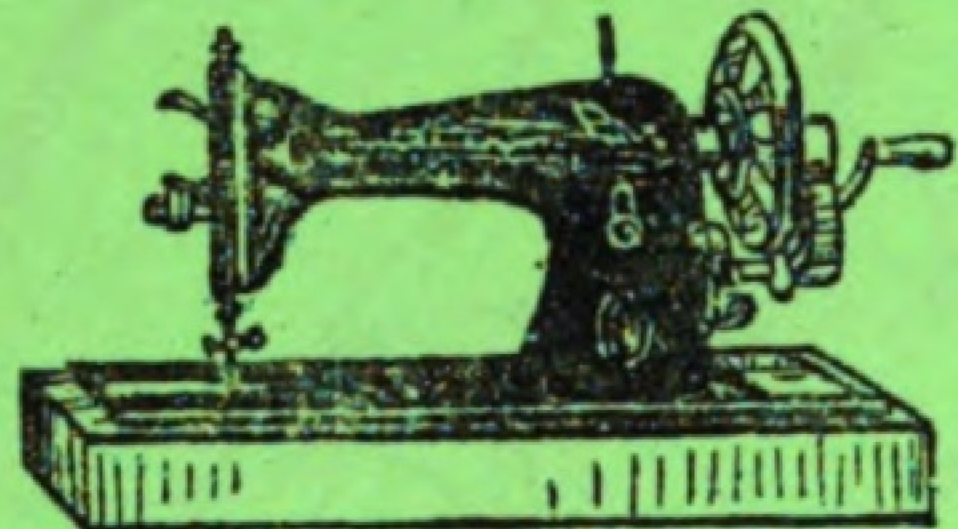
最近獨逸國に於て製造せる兒童教育に最も適切なる好仕組あり組立の上更に實物教育として興味を深からしめんには夫々彩色を施さば圖畫の練習にもなる頗る有益品なり

壹組　特價貳拾五錢

種類（汽車、水車、馬車、電車、自働車、風車、飛行機、ボート　其他廿種

▲送料市内、内地、海外共　金參錢

家庭用ミシン



本器は洋服は勿論和服裁縫用として非常に愛用せられつゝ有る優等品で社會に獨立を望まるゝ様な御婦人には本器を利用せらるゝときは多くの利益を得る事容易であります

●甲　種（壹臺　金四拾九圓

●乙　種　壹臺　金貳拾九圓

▲荷造費金貳拾五錢

▲運賃先拂の事

手風琴



ポケツト用手風琴にして形狀頗る小にして携帶に尤も便なり、體裁極めて優美然も音律の正確なるは本器の尤も特色とする處なり

◉小形手風琴壹個　特價八拾五錢

◉手風琴獨まなび壹部　特價拾八錢

▲送料市内五錢　内地拾五錢　海外卅五錢

古梅園製墨



三百年來の經營に係る古梅園製墨は世既に定評あり、當社は今回特に同店に於て尤も好評を博し居る新墨を撰み破格なる廉價を以つて提供せり

◉九玄大形　壹圓七拾錢

◉九玄中形　壹圓四拾錢

◉九玄小形　壹圓拾錢

◉紅花墨大形　七拾五錢

◉紅花墨中形　參拾貳錢

◉紅花墨小形　拾六錢

▲送料市内、内地、海外金五錢

●御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!

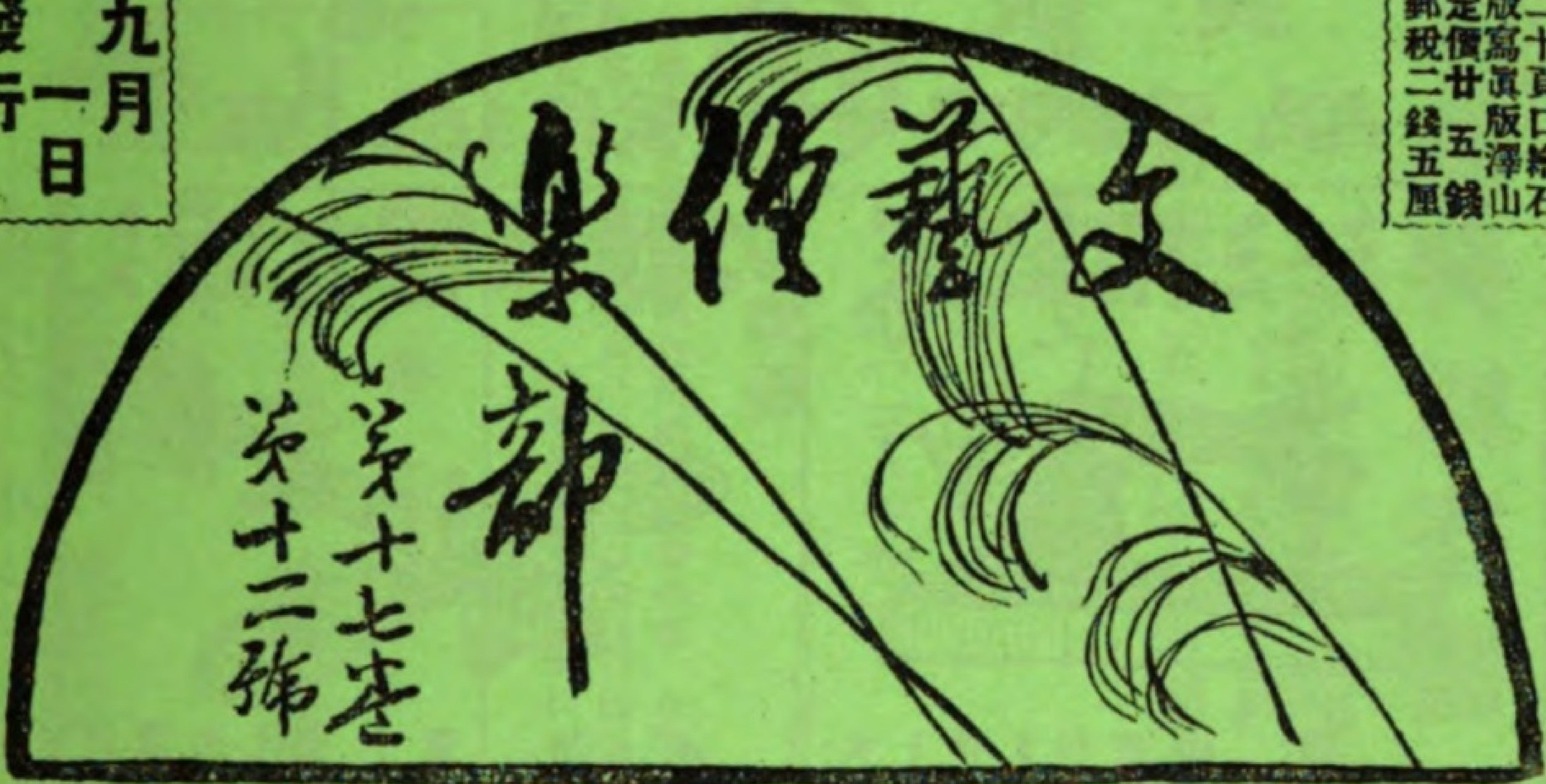
大橋メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目　**博通社**　電話本局六百十四番　振替口座東京五十番

（後付の一）

九月一日發行

菊判紙數三百二十頁口繪石版寫眞版澤山 定價廿五錢 郵税二錢五厘





時漸く盛夏を過ぎ涼風腋下に沸きて快いふべからず本誌また雄篇大作のみを選擇し讀者の快をして益快ならしめんことを努め巻頭に**田口掬汀氏**長篇小說『**結婚前後**』を收む。男に欺れたる女の現實的生活を活寫し、一讀巻を措く能はざらしむ。次ぎに**新田靜灣氏**の作『**敵國の友情**』を載す。無名の美術家が一躍大家の名を博す、血あり涙ある小說。第三に**小田春宵氏**作の史劇『**配所の正則**』を掲ぐ。古英雄の眞面目紙上に躍如たり。倘夫**新講談**に至りては**邑井貞吉氏**が得意の**燈籠玉菊**を口演す。妖艶なる美婦の俤は讀者の眼前に髣髴せん。**活社會**以下の各欄が愈〻本誌の特色を發揮するは今更めかして喋喋するまでもなからむ。**切**に**愛誦**を**祈**る!!!

東京本町 **博文館**

幼年畫報（第六卷第十二號）增刊

（九月十日發行）

よつちやんよい子

彩色美麗繪本
●石版極彩色十六頁
●活版二色刷十六頁
●光澤紙寫眞版四頁

正價拾錢　郵稅五厘

博文館

小波作・春汀畫

よい事をお聞かせ申しませう。よつちやんはよい子です。よつゝの春から幼稚園へ上りました。ようち園の先生はよい先生ばかりです。よい先生はよい事を教へて下さいます。よう年畫報はよい本です。よつちやんの事は幼年畫報に出て居ます。よい子の行ひを讀んでよつちやんのようにおなりなさい。

女（後付の三）

名譽の純金ブローチは誰の胸に飾られるか

第六卷第十二號　少女世界　九月一日發行

五周年紀念號

口繪
- ●花の香（三色版）満谷國四郎
- ●秋ばれ（石版）鏑木清方
- ●霞ケ浦（石版）岡野榮
- ●初秋の日（凸版）太田三郎

外に 二色刷 寫眞版 八面

▼五葉の松子……巖谷小波
▼滿五ケ年……沼田笠峰
▼心は花に……山脇高女校長 山脇房子
▼英國の女子中等教育……日本女子大學々監 麻布正藏
▼今日一日……文學士 三輪元道
▼ハイとイ、エ……成女高女校長 宮田脩
▼休暇後の學期……水戸高等女校 市毛保家
▼名譽の五少女……
▼冒險小說 音樂美人……押川春浪
▼長い小指……與謝野晶子
▲出雲大社參詣……坪谷水哉
▲富士山の歌……文學博士 佐々木信綱
▼赤城湖畔より……沼田笠峰
▼赤城の印象……登山少女

▼新月の宵……松井ゆり子
▼五年前……武田櫻桃
▼恐ろしき一夜……西村渚山
▼火中の少女……黑田湖山

▼五條の后……竹貫佳水
▼月の田舍……松美佐雄
▼手帳の中より……記者
▼ペン持つ手……畔花
▼誌上の友に……
▼誌友だより……なだまき

菊判二百五十六頁
（定期號の二倍）
口繪石版其他豐富
定價（本號に限）廿錢
郵稅二錢

少女會館

紙數を二倍に！文章、和歌、談話室等の盛觀を呈す

東京本町 博文館



女（後付の四）

おもしろい幼年世界の増刊

おはなしの會

第一巻　第拾二號

□九月十日發行□

□蜆の龍宮行……巖谷小波

尋常

▲一年生へのおはなし　受持　木村小舟

▲二年生へのおはなし　受持　武田櫻桃

▲三年生へのおはなし　受持　武田櫻桃

▲四年生へのおはなし　受持　竹貫佳水

□英雄幼物語……記者

○其他面白き記事澤山……

□正價八錢　郵税一錢□

菊判紙數八十頁　口繪石版畫一枚　光澤寫眞版二頁



女（後付の五）

女（後付の六）

中學世界 第十四卷第十二號 增刊

明治四十四年度

受驗界

附 官立諸學校入學試驗問題集

菊判紙數二百四十頁 口繪石版寫眞版豐富 正價二十錢 郵税二錢

九月十五日發行

内容の充實、而も便利至極、廉價無比、行き届きたる編輯法、嚴密なる校正、凡そ受驗に關する百般の緊要資料を滿載し、本年受驗界の經過を述べて、其趨勢を檢せしむると同時に、次年度受驗志願者の爲めに少なからざる參考と暗示を齎すもの、これわが中學世界の增刊「受驗界」にして、年々の好評學界に洽ねし。本年は更に紙質を改良し、紙數を增加し、またこれを刊行して學生諸君の急需に應ぜんとす、來十五日の發行を待ち玉へ。

記事要目

◎當年の受驗界總評
◎諸學校試驗官の講評
◎競爭試驗受驗記
◎試驗問題の諸研究
◎各學校入學志望者と入學者數
◎官立學校入學者氏名一覽

問題學校別

△各高等學校
△各高等工業學校
△陸軍經理學校
△海軍經理學校
△水產講習所
△駒場農科大學實科
△各高等農林學校
△東京外國語學校
△上田蠶絲專門學校
△各高等商業學校
△東京音樂學校
△東京高等師範學校
△陸軍士官學校
△海軍兵學校
△海軍機關學校
△商船學校
△札幌農科大學豫科實科
△各醫學專門學校
△各蠶業講習所
△東京美術學校
△秋田鑛山學校
△府立大阪高等醫學校等數十校



東京日本橋 本町 三丁目 **博文館** 振替口座 東京 二四〇番

女(後付の七)

英語世界（第五卷第十一號）秋期增刊

（九月十日發行）

イデオムの研究

洋裝菊判舶來紙六十八頁

定價拾錢 郵税一錢

發兌元 東京本町 博文館

英語の慣用語法、之を**イデオム**と云ふ。イデオムは文法以外の文法にして語法の生命は一にイデオムに存す。本書は是等**イデオム**の活用。イデオムの解說、文法とイデオム、日英イデオムの比較、英詩及び小說とイデオム、會話及び作文とイデオム、解釋及び翻譯とイデオム、誤解し易きイデオム等の諸點に就き、普通文典に洩れたる文法以上の文法を普く諸家の講話に依り詳密なる攻究を下したり。

執筆者氏名（ABC順）

秋山正議　阿保繼八郎　深澤由太郎
五味 赫　服部 保　日高只一
平田喜一　細川文五郎　井上十吉
今井信之　伊藤彌門　上條辰藏
神崎保太郎　片山義行　喜安璉太郎
增田藤之助　宮井安吾　村井知至
長井氏晸　大宮英之助　齋藤恒太郎
榊原 彌　笹岡民次郎　清水起正
武信由太郎　脇 豐藏　山崎 貞
山口造酒　横地良吉　其他數名

□□□□□□□□□□□

大懸賞＝英米名家署名判斷

□□□□□

女（後付の八）


柳清香油
瓊姿香油
フロラー香水
二十錢 一圓廿錢 一圓八十錢
美術小間物
化粧品
東京日本橋通二
柳屋本店
電話本局


佛國メルマン會社釀造
アルコール分少く滋養豐富なる葡萄酒
マルタン赤白葡萄酒
MEDOC SUPERIEUR
Merman & Co
BORDEAUX
R YAMADA-YA
星印マルタン葡萄酒
食卓用として又藥用として到る處の家庭に愛用せられつゝあり
横濱
東京
山田屋

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.

女學世界　第拾壹卷第拾壹號　（毎月一回廿三日 印刷納本）

明治四十四年八月廿三日　印刷納本

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

●腸胃患者續出の今

惡疫豫防に
下痢止めに
効力偉大なる
腸胃新藥
ヘルプの常備は
一家の衞生係たる
主婦の忘れて
ならぬ緊急要件

●この故にヘルプは
何れの家庭にも歡迎せらる

●ヘルプは、名醫柏村博士の指導に由る理想の腸胃藥にして、藥効の迅速を計る爲め最も進歩せし製劑術による錠劑なれば急救藥として遺憾なく、貴重藥を配劑して容量を僅少にせば小兒婦人にも飲み易く、夏季常に用ゆれば腸胃を健全にし惡疫を豫防す　平素虚弱の人も常に小量を用ゆれば腸の機能を整へ消化を助け滋養の吸收力を旺盛ならしむ、故に元氣盛んに、決して夏まけ、夏痩等の憂ひなし…………………

●ヘルプの効用如斯弘し故に何れの家庭にも歡迎せらる

効能

▼痢病　▼腸加答兒
▼中暑　▼寢冷腸痛
▼水傷　▼吐瀉霍亂
▼食傷　▼腸の瓦斯
▼溢腹等一切の下
腸胃弱き人朝夕

痢を止め腸胃を整へ便通を快よくす、二錠宛を用ひ置けば腸胃を健全にし惡疫を豫防す

